㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第267集

乗附長坂遺跡
乗附中原遺跡

主要地方道藤木高崎線単独別道路
改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 267 集

乗附長坂遺跡・乗附中原遺跡　　正 誤 表

ﾍﾟｰｼﾞ	行	誤り	正
5	21	鉄族	鉄鏃
128	12	これららの内、	これらの内、
129	13	定型	定形
第 108 図		1 号方形周溝墓土層	1 号方形周溝墓土層（B－B′）
同		周溝土層	周溝土層（A－A′）

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第267集

乗附長坂遺跡
乗附中原遺跡

主要地方道藤木高崎線単独別道路
改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

主要地方道藤木高崎線は、富岡市藤木から吉井町上奥平を経て高崎市連雀町に至る道路です。この道路は、古くから隣接する市町村を結ぶ重要な道路ですが、通称観音山丘陵上を通るため、高崎市乗附地区は見通しが悪く、狭い道路のため交通に支障を来しておりました。

平成元年に乗附地区の本路線の改良計画が県土木部から示され、その後、平成6年度に用地問題も解決し、事業が具体化することとなりました。群馬県教育委員会文化財保護課では、当初から改良予定地内に埋蔵文化財の存在を提示しておりましたが、丘陵上という地形的な問題もあり路線の変更は無理と判断し発掘調査を実施し記録保存の措置を講ずることとし、平成10年に財群馬県埋蔵文化財調査事業団が県土木部から委託を受けて発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書であり、「乗附長坂遺跡」「乗附中原遺跡」の調査結果が納められています。

両遺跡からは、縄文時代前期・中期の住居跡や、古墳時代前期の方形周溝墓のほか奈良時代の集落が、多くの遺物とともに発見されています。観音山丘陵上の発掘調査は、県立みやま養護学校建設に伴う「大平台遺跡」や、少林山達磨寺裏の地滑り対策に伴う古墳群などの「少林山台遺跡」ほか極めて少なく、丘陵上の遺跡のあり方や、丘陵下の低地に営まれたであろう水田との関係、特に奈良時代の集落の存在は、律令体制下の「郡郷制」を考える上で重要な遺跡であると考えています。

本報告書は、考古学研究者はもちろん、郷土の歴史に関心をお持ちの県民の皆様にも大いに役立つものと確信しております。

最後になりますが、発掘調査から報告書刊行まで一方ならぬご協力を賜りました、群馬県土木部道路建設課、高崎土木事務所、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、地元関係者の皆様には、衷心より感謝の意を表し、序といたします。

平成12年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　小　野　宇三郎

例　言

1．本書は、平成10年度主要地方道藤木高崎線単独特別道路改良工事に伴い事前調査された、「乗附長坂遺跡・乗附中原遺跡」の発掘調査報告書である。遺跡の立地等から二遺跡とし、遺跡名については、当該地区の大字名（町名）と小字名を組ませた名称を用いた。

2．遺跡は、群馬県高崎市乗附町字長坂、字中原に所在する。

3．事業主体　群馬県土木部

4．調査主体　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

5．調査期間　平成10年6月15日～平成10年11月30日

6．調査組織　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長	小寺弘之（6月22日迄）、菅野　清（6月23日から）
常務理事	菅野　清（6月22日迄）、赤山容造（6月23日から）
事務局長	赤山容造
管理部長	渡辺　謙
調査研究第2部長	神保侑史
総務課長	坂本敏夫
調査研究第6課長	佐藤明人
調査担当職員	谷藤保彦、壁　伸明
発掘嘱託員	村上義章
事務担当	笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、宮崎忠司、岡島伸昌
嘱託員	大澤友治
補助員	吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、本地友美、北原かおり、狩野真子、若田誠、松下次男、浅見宣記、吉田　茂

7．整理主体　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

8．整理期間　平成11年4月1日～平成12年3月31日

9．整理組織　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長	菅野　清（5月31日迄）、小野宇三郎（6月1日から）
常務理事	赤山容造
事務局長	赤山容造
管理部長	住谷　進
調査研究第2部長	水田　稔
総務課長	坂本敏夫
調査研究第6課長	佐藤明人
整理担当職員	谷藤保彦
補助員	宇佐美征子、増田政子、金子ミツ子、大島　緑、伊東悦子、湯浅美枝子、新井加寿恵
事務担当	笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、岡島伸昌、片岡徳雄

嘱　託　員　大澤友治
補　助　員　吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、若田誠、松下次男、浅見宣記、吉田　茂

10. 写真撮影は、調査時の遺構写真は調査担当者が行い、整理時の遺物写真は佐藤元彦（技師）による。
11. 本書の執筆は、第１章１と追録を佐藤明人が行い、それ以外の執筆および編集は、谷藤が行った。
12. 石材の鑑定は、飯島静男氏（群馬地質研究会）にお願いした。
13. 基準測量および遺構実測の一部を、株式会社横田調査設計に委託し、空中写真撮影は株式会社測研に委託した。また、遺構・遺物トレースの一部を、技研測量設計株式会社に委託した。
14. 厳しい自然条件の中、発掘調査に従事して下さった方々のお名前を記して感謝したい。
新井美代、飯塚静枝、飯出すみ江、岩田乾吉、江泉悦郎、大頭　登、大畠春雄、大前希世子、小野田成孝、石井　緑、石崎澄枝、怜田忠男、加藤敏子、鹿子木舳子、川浦純子、木村昌子、黒沢利次、小見せい子、斉藤文子、桜井康弘、島田てつ、清水近江、清水正男、須藤泰利、須藤利夫、須藤はるの、高橋弘、竹内昭子、田中恵子、田村仁平、登坂和久江、富沢幸子、西島明江、貫井フサ江、治田あやの、堀越みな子、槇田久雄、吉田美津子、村社　弘、村社歌子、森　鉄、綿貫梅子
15. 発掘調査から報告書作成に至るまで、次の諸機関及び諸氏のご指導・協力を頂いた。記して感謝したい。
高崎市教育委員会、高崎市史編纂室、大竹憲治、金子直行、木下哲夫、黒坂禎二、佐藤雅一、鈴木慈雄、渋谷昌彦、田中耕作、大工原　豊、塚本師也、寺崎裕助、戸田哲也、贄田　明、芳賀英一、細田　勝、本田秀生、山下歳信、山本正敏、綿田弘美
16. 本遺跡の出土遺物及び図面・写真等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡　例

1．遺構図の方位記号は国家座標の北を表している。座標系は国家座標第IX系である。

2．遺構断面図、等高線に付した数字は標高を表す。

3．遺構の位置を示すグリッドの表記は、その遺構が面積的に最も多く掛かるグリッド名を示した。

4．遺構実測図の縮尺は基本的に次の通りである。

住居1/60（一部1/30）、カマド1/30、土坑1/20・1/60、方形周溝墓1/80（一部1/40）

これら以外についても、図中に縮尺を記した。

5．遺物実測図の縮尺は次の通りである。

土器1/3・1/4、石器4/5・1/2・1/3・1/4・1/6、石製品1/2、土器の拓影図1/3

これら以外についても、図中に縮尺を記した。

6．縄文土器のうち、図中の繊維土器と無繊維土器の区分については、土器断面に●を付してあるものが繊維土器を表す。

7．出土遺物のうち、縄文時代の土器・石器については、その出土量が多く、紙面等の都合により代表的なものを掲載した。

また、本文中に掲載した遺物は、必ずしも写真図版に掲載されてはいない。特に、遺構外遺物については、その一部を代表させている。

8．遺物の観察については、縄文・弥生時代のものは文章による記述を行い、古墳時代以降の遺物は遺物観察表を用いて記した。石器・石製品等については、各計測表を用いて記した。

9．遺構出土の石器と遺構外出土の石器計測表とでは、記載項目に差がある。また、遺構外出土の石器計測表では、出土したグリッド等の記載はしていない。

目　　次

序
例　言
凡　例

第1章　発掘調査の経過……1
1．発掘調査に至る経過……1
2．発掘調査の方法と経過……1

第2章　遺跡の位置と環境……4
1．遺跡の位置と地形……4
2．周辺遺跡の分布……4
3．基本土層……7

第3章　乗附長坂遺跡……8
1．遺跡の概要……8
2．縄文時代の遺構と遺物……13
(1)　竪穴住居跡……13
(2)　埋　　甕……77
(3)　土　　坑……79
(4)　遺構外出土遺物……107
3．弥生時代の遺構と遺物……155
4．古墳時代の遺構と遺物……156
5．奈良時代の遺構と遺物……161

第4章　乗附中原遺跡……190
1．遺跡の概要……190
2．奈良・平安時代の遺構と遺物……190

第5章　ま と め……200

追　録　向荒久1号墳……203

抄　録

挿図目次

第 1 図　調査範囲及びグリッド設定図 …… 2
第 2 図　遺跡位置及び周辺遺跡図 …… 6
第 3 図　基本土層模式図 …… 7
第 4 図　長坂遺跡全体図（縄文・古墳時代） … 9
第 5 図　長坂遺跡全体図（歴史時代） ……11
第 6 図　J 1 号住居跡遺物分布図 ……15
第 7 図　J 1 号住居跡平面図 ……16
第 8 図　J 1 号住居跡出土遺物(1) ……17
第 9 図　J 1 号住居跡出土遺物(2) ……18
第 10 図　J 1 号住居跡出土遺物(3) ……19
第 11 図　J 1 号住居跡出土遺物(4) ……20
第 12 図　J 1 号住居跡出土遺物(5) ……21
第 13 図　J 1 号住居跡出土遺物(6) ……22
第 14 図　J 1 号住居跡出土遺物(7) ……23
第 15 図　J 1 号住居跡出土遺物(8) ……24
第 16 図　J 1 号住居跡出土遺物(9) ……25
第 17 図　J 2 号住居跡遺物分布・平面図 ……27
第 18 図　J 2 号住居跡出土遺物(1) ……28
第 19 図　J 2 号住居跡出土遺物(2) ……29
第 20 図　J 3 号住居跡遺物分布図 ……32
第 21 図　J 3 号住居跡出土遺物微細図 ……33
第 22 図　J 3 号住居跡平面図 ……34
第 23 図　J 3 号住居跡出土遺物(1) ……35
第 24 図　J 3 号住居跡出土遺物(2) ……36
第 25 図　J 3 号住居跡出土遺物(3) ……37
第 26 図　J 3 号住居跡出土遺物(4) ……38
第 27 図　J 3 号住居跡出土遺物(5) ……39
第 28 図　J 3 号住居跡出土遺物(6) ……40
第 29 図　J 3 号住居跡出土遺物(7) ……41
第 30 図　J 3 号住居跡出土遺物(8) ……42
第 31 図　J 3 号住居跡出土遺物(9) ……43
第 32 図　J 3 号住居跡出土遺物(10) ……44
第 33 図　J 3 号住居跡出土遺物(11) ……45
第 34 図　J 3 号住居跡出土遺物(12) ……46
第 35 図　J 3 号住居跡出土遺物(13) ……47
第 36 図　J 4 号住居跡遺物分布図 ……52
第 37 図　J 4 号住居跡出土遺物(1) ……53
第 38 図　J 4 号住居跡出土遺物(2) ……54
第 39 図　J 4 号住居跡出土遺物(3) ……55
第 40 図　J 4 号住居跡出土遺物(4) ……56
第 41 図　J 4 号住居跡出土遺物(5) ……57
第 42 図　J 4 号住居跡出土遺物(6) ……58
第 43 図　J 5 号住居跡遺物分布図・出土遺物(1)…60
第 44 図　J 5 号住居跡出土遺物(2) ……61
第 45 図　J 6 号住居跡遺物分布図 ……64
第 46 図　J 6 号住居跡平面図 ……65
第 47 図　J 6 号住居跡出土遺物(1) ……66
第 48 図　J 6 号住居跡出土遺物(2) ……67
第 49 図　J 6 号住居跡出土遺物(3) ……68
第 50 図　J 6 号住居跡出土遺物(4) ……69
第 51 図　J 6 号住居跡出土遺物(5) ……70
第 52 図　J 6 号住居跡出土遺物(6) ……71
第 53 図　J 6 号住居跡出土遺物(7) ……72
第 54 図　J 9 号住居跡平面図 ……74
第 55 図　J 9 号住居跡出土遺物(1) ……75
第 56 図　J 9 号住居跡出土遺物(2) ……76
第 57 図　堀塹平面図・出土遺物 ……78
第 58 図　土坑平面図(1) ……91
第 59 図　土坑平面図(2) ……92
第 60 図　土坑平面図(3) ……93
第 61 図　土坑平面図(4) ……94
第 62 図　土坑平面図(5) ……95
第 63 図　土坑出土土器(1) ……96
第 64 図　土坑出土土器(2) ……97
第 65 図　土坑出土土器(3) ……98
第 66 図　土坑出土土器(4) ……99
第 67 図　土坑出土土器(5) ……100
第 68 図　土坑出土土器(6) ……101
第 69 図　土坑出土土器(7) ……102
第 70 図　土坑出土土器(8) ……103

第 71 図　土坑出土石器(1)……104
第 72 図　土坑出土石器(2)……105
第 73 図　遺構外出土土器(1)……112
第 74 図　遺構外出土土器(2)……113
第 75 図　遺構外出土土器(3)……114
第 76 図　遺構外出土土器(4)……115
第 77 図　遺構外出土土器(5)……116
第 78 図　遺構外出土土器(6)……117
第 79 図　遺構外出土土器(7)……118
第 80 図　遺構外出土土器(8)……119
第 81 図　遺構外出土土器(9)……120
第 82 図　遺構外出土土器(10)……122
第 83 図　遺構外出土土器(11)……123
第 84 図　遺構外出土土器(12)……124
第 85 図　遺構外出土土器(13)……125
第 86 図　遺構外出土土器(14)……127
第 87 図　遺構外出土土器(15)……128
第 88 図　遺構外出土石器(1)……131
第 89 図　遺構外出土石器(2)……132
第 90 図　遺構外出土石器(3)……133
第 91 図　遺構外出土石器(4)……134
第 92 図　遺構外出土石器(5)……135
第 93 図　遺構外出土石器(6)……136
第 94 図　遺構外出土石器(7)……137
第 95 図　遺構外出土石器(8)……138
第 96 図　遺構外出土石器(9)……139
第 97 図　遺構外出土石器(10)……140
第 98 図　遺構外出土石器(11)……141
第 99 図　遺構外出土石器(12)……142
第100図　遺構外出土石器(13)……143
第101図　遺構外出土石器(14)……144
第102図　遺構外出土石器(15)……145
第103図　遺構外出土石器(16)……146
第104図　遺構外出土石器(17)……147
第105図　遺構外出土石器(18)……148
第106図　遺構外出土　土・石製品……149
第107図　遺構外出土遺物……155
第108図　1 号方形周溝墓平面図・出土遺物……157
第109図　2 号方形周溝墓平面図・出土遺物……160
第110図　1 号住居跡平面図……162
第111図　1 号住居跡出土遺物(1)……163
第112図　1 号住居跡出土遺物(2)……164
第113図　2 号住居跡平面図……167
第114図　2 号住居跡出土遺物……168
第115図　3 号住居跡平面図……169
第116図　3 号住居跡出土遺物……170
第117図　4 号住居跡平面図……172
第118図　5 号住居跡平面図・出土遺物……173
第119図　6 号住居跡平面図……175
第120図　6 号住居跡出土遺物……176
第121図　7 号住居跡平面図……177
第122図　7 号住居跡出土遺物……178
第123図　8 号住居跡平面図・出土遺物……179
第124図　9 号住居跡平面図……181
第125図　9 号住居跡出土遺物……182
第126図　10号住居跡平面図・出土遺物……185
第127図　11号住居跡平面図……186
第128図　12号住居跡平面図……187
第129図　13号住居跡平面図・出土遺物……189
第130図　中原遺跡全体図……191
第131図　1 号住居跡平面図……193
第132図　1 号住居跡カマド平面図……194
第133図　1 号住居跡出土遺物……195
第134図　2 号住居跡平面図・出土遺物……197
第135図　3 号住居跡平面図・出土遺物……199

表目次

表1　周辺の主要遺跡……5
表2　J1号住居跡出土石器計測表……22
表3　J2号住居跡出土石器計測表……26
表4　J3号住居跡出土石器計測表……48
表5　J4号住居跡出土石器計測表……59
表6　J5号住居跡出土石器計測表……62
表7　J6号住居跡出土石器計測表……69
表8　J9号住居跡出土石器計測表……76
表9　10号土坑出土石器計測表……106
表10　11号土坑出土石器計測表……106
表11　12号土坑出土石器計測表……106
表12　16号土坑出土石器計測表……106
表13　23号土坑出土石器計測表……106
表14　24号土坑出土石器計測表……106
表15　27号土坑出土石器計測表……106
表16　29号土坑出土石器計測表……106
表17　30号土坑出土石器計測表……106
表18　31号土坑出土石器計測表……106
表19　33号土坑出土石器計測表……106
表20　34号土坑出土石器計測表……106
表21　40号土坑出土石器計測表……106
表22　42号土坑出土石器計測表……106
表23　遺構外出土石器計測表　石鏃……150
表24　遺構外出土石器計測表　石錐……150
表25　遺構外出土石器計測表　石匙……150
表26　遺構外出土石器計測表　スクレイパー……150
表27　遺構外出土石器計測表　打製石斧……151
表28　遺構外出土石器計測表　磨製石斧……151
表29　遺構外出土石器計測表　石核……151
表30　遺構外出土石器計測表　敲石……152
表31　遺構外出土石器計測表　磨石……152
表32　遺構外出土石器計測表　凹石……152
表33　遺構外出土石器計測表　多孔石……153
表34　遺構外出土石器計測表　石皿……153
表35　遺構外出土石器計測表　石棒……153
表36　遺構外出土石器計測表　垂飾り……153
表37　遺構外出土石器計測表　石製品……153
表38　遺構外出土石器計測表……155
表39　1号方形周溝墓出土遺物観察表……159
表40　2号方形周溝墓出土遺物観察表……159
表41　1号住居跡出土遺物観察表……161
表42　2号住居跡出土遺物観察表……166
表43　3号住居跡出土遺物観察表……168
表44　5号住居跡出土遺物観察表……174
表45　6号住居跡出土遺物観察表……176
表46　7号住居跡出土遺物観察表……178
表47　8号住居跡出土遺物観察表……180
表48　9号住居跡出土遺物観察表……183
表49　10号住居跡出土遺物観察表……185
表50　13号住居跡出土遺物観察表……188
表51　1号住居跡出土遺物観察表……196
表52　2号住居跡出土遺物観察表……198
表53　3号住居跡出土遺物観察表……199

写真図版目次

PL1　遺跡遠景
PL2　遺跡遠景
　　遺跡遠景
PL3　乗附長坂遺跡歴史時代全景
　　乗附長坂遺跡縄文時代全景
PL4　乗附長坂遺跡縄文時代全景
　　J1・3・4号住居跡遺物出土状態全景
PL5　J1号住居跡全景
　　J1号住居跡遺物出土状態全景
　　J1号住居跡遺物出土状態
　　J2号住居跡全景
　　J2号住居跡遺物出土状態
　　J2号住居跡遺物出土状態
　　J3号住居跡全景
　　J3号住居跡遺物出土状態全景
PL6　J3号住居跡遺物出土状態
　　J3号住居跡遺物出土状態
　　J1・3・4号住居跡遺物出土状態全景
　　J4号住居跡遺物出土状態全景
　　J5号住居跡遺物出土状態全景
　　J6号住居跡全景
　　J6号住居跡遺物出土状態全景
　　J9号住居跡全景
PL7　堰甕出土状態
　　堰甕出土状態
　　2～7号土坑
PL8　8～15号土坑
PL9　16～22号土坑
PL10　23～30号土坑
PL11　31～41号土坑
PL12　42～45号土坑
　　1号方形周溝墓全景
　　1号方形周溝墓土層断面
　　2号方形周溝墓全景
　　1号住居跡全景
PL13　1号住居跡遺物出土状態全景
　　1号住居跡カマド
　　1号住居跡カマド遺物出土状態
　　2号住居跡全景
　　2号住居跡遺物出土状態全景
　　2号住居跡カマド遺物出土状態
　　3号住居跡全景
　　3号住居跡遺物出土状態全景
PL14　3号住居跡カマド
　　4号住居跡全景
　　4号住居跡カマド
　　5号住居跡全景
　　5号住居跡遺物出土状態全景
　　6号住居跡全景
　　6号住居跡遺物出土状態全景
　　6号住居跡カマド
PL15　7号住居跡全景
　　7号住居跡遺物出土状態全景
　　7号住居跡カマド
　　8号住居跡遺物出土状態全景
　　9号住居跡全景
　　9号住居跡東カマド
　　9号住居跡北カマド
　　10号住居跡全景
PL16　10号住居跡全景
　　10号住居跡カマド
　　11号住居跡全景
　　12号住居跡全景
　　12号住居跡遺物出土状態全景
　　13号住居跡全景
　　13号住居跡遺物出土状態全景
　　13号住居跡カマド
PL17　J1～3号住居跡出土土器
PL18　J3～4号住居跡出土土器
PL19　J6号住居跡出土土器

埋甕
11・13・22・29号土坑出土土器
ＰＬ20　Ｊ１号住居跡出土土器
ＰＬ21　Ｊ１号住居跡出土石器
ＰＬ22　Ｊ２号住居跡出土土器・石器
ＰＬ23　Ｊ３号住居跡出土土器
ＰＬ24　Ｊ３号住居跡出土土器・石器
ＰＬ25　Ｊ３号住居跡出土石器
Ｊ４号住居跡出土土器
ＰＬ26　Ｊ４号住居跡出土土器・石器
ＰＬ27　Ｊ４号住居跡出土石器
ＰＬ28　Ｊ５号住居跡出土土器・石器
ＰＬ29　Ｊ６号住居跡出土土器
ＰＬ30　Ｊ６号住居跡出土石器
ＰＬ31　Ｊ９号住居跡出土土器・石器
ＰＬ32　土坑出土土器
ＰＬ33　土坑出土土器
ＰＬ34　土坑出土土器
ＰＬ35　土坑出土土器
ＰＬ36　土坑出土石器
ＰＬ37　土坑出土石器
ＰＬ38　遺構外出土土器
ＰＬ39　遺構外出土土器
ＰＬ40　遺構外出土土器
ＰＬ41　遺構外出土土器
ＰＬ42　遺構外出土石器
ＰＬ43　遺構外出土石器
ＰＬ44　遺構外出土石器
ＰＬ45　遺構外出土石器
ＰＬ46　遺構外出土　土・石製品
１号方形周溝墓出土土器
ＰＬ47　１～３号住居跡出土土器
ＰＬ48　３～13号住居跡出土土器
ＰＬ49　乗附中原遺跡全景
乗附中原遺跡現県道拡幅部
ＰＬ50　１号住居跡遺物出土状態全景
１号住居跡カマド
１号住居跡全景
２号住居跡全景
３号住居跡遺物出土状態全景
ピット群全景
ＰＬ51　１～３号住居跡出土土器
向荒久１号墳　東より
向荒久１号墳　北より
向荒久１号墳　茸石根石

第１章　発掘調査の経過

１．発掘調査に至る経過

主要地方道藤木高崎線は富岡市藤木から多野郡吉井町上奥平を経て高崎市連雀町に至る延長約15.4kmの幹線道路であり、地域内の交通確保はもとより、隣接する都市との交流を担うとともに、西毛地区の生活、産業、観光を支えている重要な道路である。しかしながら、高崎市乗附地区内の現道は線形不良、幅員も狭く、一般車両の交通に支障をきたしているため、交通の安全及び円滑な交通体系の確保を目的として当地区における路線の改良工事が計画された。

本改良事業への文化財に関する対応は、平成元年度、同地区の文化財状況について土木部から県教育委員会文化財保護課への照会に始まる。この照会を受けて文化財保護課は現地踏査を行い、踏査に基づく状況調査の結果を土木部に、計画地は古墳群及び埋蔵文化財包蔵地が存在するので計画が具体化した段階で協議が必要であると回答した。

本改良工事計画はその後用地問題等によりしばらくの間進展がなかったが、平成６年度になって工事の実施が一部具体化した。この連絡を受け群馬県教育委員会文化財保護課で当該工事予定区間を確認したところ、乗附町字向荒久地内に所在する上毛古墳総覧掲載の高崎市64号墳の一部が盛土工事部分にかかることが分かった。平成６年２月９日～２月10日文化財保護課はこの古墳の発掘調査を向荒久１号墳として実施した。発掘調査では調査区域内に葺石及び周堀の一部を確認したので、記録保存の措置を講じることとした。

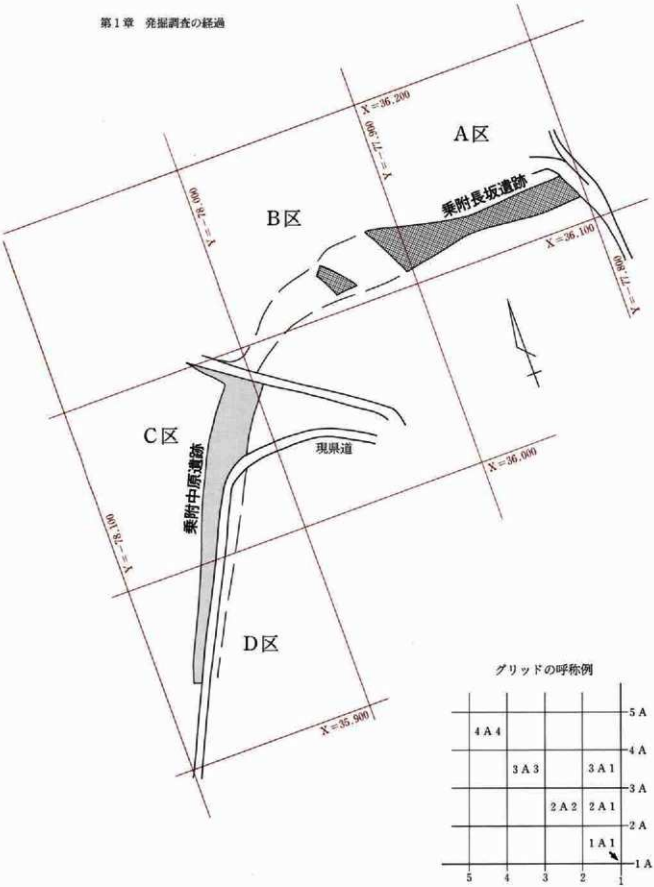
平成８年度になって、乗附町長坂地区の用地取得に進展があり、平成８年２月７日から２月９日にかけて県文化財保護課が当該地区において試掘調査を実施した。試掘の結果、東京電力高崎開閉所南側台地には縄文時代から古代の遺跡であることが確認され、工事に先立ち発掘調査が必要であると土木部に伝えられた。その後、工事計画と発掘調査の日程等の調整が整い、平成10年６月15日から（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が県土木部より委託を受け、乗附長坂遺跡として発掘調査を実施することとなった。

乗附町中原地区については一部用地問題で路線幅の確定が遅れたため、試掘調査は乗附長坂遺跡の発掘調査着手後に実施された。試掘の結果、現道拡幅部の西半部は遺跡と認められなかったが、東半部、現道拡幅部からバイパス状に分岐する区間が遺跡地と確認された。当地区についても長坂遺跡に引き続き（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団により乗附中原遺跡として発掘調査が行われた。

２．発掘調査の方法と経過

(1)　調査の方法（第１図参照）

調査の対象地は、隣り合う二つの台地で、乗附長坂遺跡と乗附中原遺跡の２遺跡にまたがっており、さらに路線は大きくカーブする予定となっていた。このため、両遺跡を国家座標Ⅸ系の基に、１つの区を100m四方として、A～D区の４区を便宜的に設定した。各区は、X＝36.100・Y＝－77.800を原点としたA区、X＝36.100・Y＝－77.900を原点としたB区、X＝36.000・Y＝－78.000を原点としたC区、X＝35.900・Y＝－78.000を原点としたD区となっており、各区に２m×２mのグリッドを設定した。グリッドは、各原点を１として北方向へ１～49、西方向へ１～49とし、表記方法としては北方向と西方向との間に区名を挟む形を



第１図　調査範囲及びグリッド設定図

とった（例：北方向A西方向）。また、グリッドの呼称については、南東角のポイントを代表させて称した。

なお、グリッドおよび水準点の設定に当たっては、高崎土木事務所よりデーターの提供を受け、（株）横田調査設計に委託して行った。

調査対象地全面の表土除去には重機（桜井建材）を使用し、遺構確認作業および覆土除去は人力で行った。個別遺構の調査では、竪穴住居跡・土坑等は覆土の土層断面観察用ベルトを残して掘り下げた。特に、縄文時代の調査にあっては、遺構覆土の土質差異の判別が困難を極めたことと、遺物包含層が厚く堆積していたこと等から、10m毎の土層観察用ベルトを設け、遺物の集中して出土する状況を個別に平面図化しながら、人力による掘削を続けた。また、旧石器時代を対象とした試掘調査では、2m×2mのグリッドをそのままに、人力で掘り下げた。密度の差はあるが、全体に約7％前後を調査した。

実測図は、遺構の種類と状況に応じて20分の1を基本としながら、40分の1、10分の1等の縮尺で図化した。平面図は、平板測量で作成した。図面記録の作成は、調査担当者および発掘作業員が主に行ったが、一部を（株）横田調査設計に委託した。

写真は、35mmモノクロ・カラーリバーサル写真と、6×7モノクロ写真とをその都度使い分け、調査担当者が撮影した。遺跡全体および俯瞰写真撮影には、（株）測研による航空写真撮影を適宜行った。

(2) 調査の経過

年度当初の予定通り、6月上旬に調査事務所の設置準備に取りかかり、6月15日より発掘調査が開始された。調査は、県教育委員会による試掘調査結果から、範囲の確定している乗附長坂遺跡から着手した。重機による表土除去の後、歴史時代の遺構確認が行われ、全面に点在する住居跡の存在を確認した。その後、古墳時代初頭の遺構調査を継続させながら、縄文時代の調査へと移行していく。縄文時代の調査は、9月上旬以降に行われた。

また、調査途中で、遺跡範囲が西側のB区へ拡大する可能性が高くなった点と、乗附中原遺跡の調査範囲確定を併せて、県教育委員会による試掘調査が行われた。試掘調査は、路線の設計変更を待って行われた。その結果、乗附長坂遺跡の縄文時代の調査と併行して、B区の拡張部分、および乗附中原遺跡の調査を着手することとなった。10月中旬のことである。

両遺跡の調査は、12月中旬に終了の予定であったが、旧石器時代の試掘調査を終了したのは11月末で、旧石器時代の遺構・遺物の検出をみなかったことから、11月末をもって調査を終了した。

第２章　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置と地形

乗附長坂遺跡および乗附中原遺跡は、高崎市の市街地から約４km西方の乗附町字長坂および中原に所在する。この乗附町は、高崎市内の北西部に当たり、安中市岩井地区に接する高崎市鼻高町の東側に隣接し、高崎市街地の烏川を隔てた西側の片岡町・八千代町に接している。ＪＲ信越本線群馬八幡駅からは、南方1.5kmの距離に有り、国道18号・碓氷川を挟んだ丘陵上に位置する。

高崎市は、関東平野の最奥部に位置し、市域の東南部には前橋台地と呼ばれる低台地が広がる。標高100m付近を境に、それよりも高位部は榛名山東南麓の裾野地形の端部に当たる。一方、市域の西部には、岩野谷丘陵（通称「観音山」）と呼ばれる標高200～300m程の低丘陵が連なり、碓氷川を挟み松井田（秋間）丘陵へと続いている。

岩野谷丘陵は、その丘体を流下する雁行川や荒久沢川、岩井川等の小河川による解析が進行し、小規模な沖積地や浸食谷が奥深くまで延び、複雑で入り組んだ地形を呈している。そのような急峻な地形の中にも、比較的平坦な頂部や緩斜面が形成されている。本遺跡の位置する辺りは、丘陵の頂部に当たり、鼻高町南鼻高地区から乗附町中原地区にかけては、標高250m前後の幅広い原形面が広がり、大平台遺跡（現、県立みやま養護学校）を初めとした縄文時代の遺跡や古墳が広範囲に点在している。丘陵の北端には、長野県との県境近くを源とする碓氷川が東流し、その碓氷川の浸食を受けた急峻な崖線が形成されている。

なお、この丘陵は、第三紀中新世から鮮新世の堆積を基盤として、その上にローム層が累重し、丘体を成している。その中の凝灰岩層は、現在も数ヵ所で露頭を観察することができる。

本遺跡の立地について、もう少し微細に観察してみる。

長坂遺跡は、丘陵頂部の東側に位置し、中原遺跡の所在する広い平坦面の東端の深い浸食谷を隔てた東側台地上にある。台地は、丘陵の尾根部から北へ延び、北側ほど平坦な面が広がる地形を呈している。調査地は、この台地の付け根付近に当たり、幅100m程の西緩斜面地に遺構が検出されたが、東側は急傾斜地となっている。この西緩斜面には、現況では識別が困難な微弱な埋没谷が存在し、粘質気味な黒褐色土や暗褐色土が堆積していることが調査から解った。なお、調査地の北側には、現在使用されていない東京電力高崎開閉所が隣接している。

中原遺跡は、丘陵頂部の平坦面にあり、北側へ解析する浸食谷によって複雑に入り組む。平坦面の南側は急峻な傾斜をもち、平坦面は北西方向への緩斜面となっている。調査地は、平坦面の東端から、南寄りの尾根付近を貫くように通じる県道高崎藤木線際を対象とした。一部には、長坂遺跡と同様の埋没谷が存在し、黒褐色土が堆積している状況があった。

２．周辺遺跡の分布

本遺跡地の周辺には、数多くの周知された遺跡が点在している。特に、『上毛古墳綜覧』からも古墳の存在が目につく。本遺跡の所在する岩野谷丘陵もそうであるが、碓氷川を挟んだ対岸の八幡丘陵上にも、観音塚古墳をはじめとする多くの古墳が知られている地域である。以下、各時代ごとに概観する。

旧石器時代の遺跡には、碓氷川対岸の八幡丘陵上に所在する安中市古城遺跡があり、ＡＴ層（姶良Ｔｎ火山灰層）下位からナイフ形石器等が出土している。周辺から採集された旧石器時代の石器は、幾例か知られてはいるが、調査例では古城遺跡の１例のみである。本遺跡でも、旧石器の試掘調査の結果、遺構・遺物は検出されていない。

縄文時代の遺跡には、八幡丘陵に所在する高崎市若田遺跡があり、八幡霊園の造成に伴い調査され、前期から後期にかけての住居跡27軒、土坑等が検出されている。岩野谷丘陵上では、昭和47・48年に県立みやま養護学校建設に伴う大平台遺跡が調査され、中期を中心とした住居跡42軒、土坑216基が検出され、早期から後期までの遺物が出土している。この大平台遺跡は、長坂遺跡の南西約１km程に位置している。やはり、調査例が少ない。

弥生時代の遺跡には、高崎市北部環状線に伴い引間遺跡が、住宅団地造成に伴う八幡遺跡が調査されており、弥生時代後期の集落が検出されている。また、岩野谷丘陵での弥生時代の集落は、長坂遺跡の東側約500m程に位置する御部入古墳群の調査時に確認されているが、部分的な調査であったため全貌は明らかにされていない。長坂遺跡の北側約250m程に位置する少林山台遺跡の調査からは、後期の集落として住居跡28軒と方形周溝墓・礫床墓等９基が検出されている。

古墳時代の遺跡には、大平台遺跡において方形周溝墓が２基検出されている。県内における方形周溝墓調査の、初期の調査である。本調査でも、乗附長坂遺跡で２基検出されている。昭和42・43年に調査された御部入古墳では、６世紀中葉から８世紀初頭にかけての22基の古墳が調査されている。また、姥山古墳では、凝灰岩製割竹形石棺が露出していることが知られている。少林山台遺跡の調査では、５世紀中葉から６世紀後半にかけての20基の古墳が調査されている。これらの古墳には、竪穴系埋葬施設をもつもの、横穴式石室をもつもの、袖無型横穴式石室をもつもの、片袖型横穴式石室をもつもの、両袖型横穴式石室をもつものがあり、石室内からは圭頭太刀をはじめとした直刀・鉄族・金銅製馬具・ガラス玉等が出土している。この内の１基は、調査地内に移築保存されている。安中市岩野谷村57号墳からは、鏡・刀・甲・滑石製盤等の出土が伝えられている。さらに、碓氷川を挟んだ八幡丘陵上には、承台付き銅鋺を出土させた前方後円墳の観音塚古墳をはじめとする八幡古墳群等の数多くの古墳が存在する。近年では、高崎市剣崎町に所在する剣崎長瀞西古墳の調査が行われ、金製亜飾付き耳飾り・韓式系土器・初期馬具等が出土し、注目を集めている。

奈良・平安時代には、岩野谷丘陵に須恵器・瓦窯等の生産遺跡が営まれ、本遺跡地の東方には乗附廃寺の存在も知られている。しかし、その全貌は明らかとなっていない。また、本遺跡地の東方に位置する高崎市片岡町は、古代の「片岡郡」に由来する地名であり、八幡丘陵上にある高崎市若田町は「片岡郡」中の「若田」（和加太）であるとも推考されている。

表１　周辺の主要遺跡

1	乗附長坂遺跡	11	観音塚古墳	21	高崎市109号古墳
2	乗附中原遺跡	12	八幡中原遺跡	22	清水下遺跡
3	向荒久１号墳	13	台遺跡	23	根岸古墳群
4	大平台遺跡	14	引間遺跡		
5	坂上遺跡	15	上並榎南遺跡		
6	少林山台遺跡	16	虚空蔵山古墳		
7	拾弐遺跡	17	幅遺跡		
8	稲荷山遺跡	18	御部入古墳群		
9	八幡古墳群	19	蛇塚遺跡		
10	後原遺跡	20	乗附廃寺		

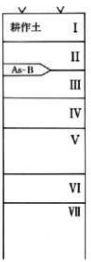
第２図　遺跡位置及び周辺遺跡図

3．基本土層

本遺跡地の基本土層は、下記の通りである。しかし、遺跡が傾斜地にあることや、乗附長坂遺跡と乗附中原遺跡の台地が異なることから、土層の堆積状況が異なる点もある。第３図に示した基本土層の模式図は、Ａ区を主体とする乗附長坂遺跡の堆積状況を示したものである。Ａ区とした西緩斜面となる乗附長坂遺跡では、表土下20～30cmほどで台地の高位となる東側および低位となる西側でローム面が確認された。台地中央部では暗褐色土が堆積し、第Ⅲ層下位が歴史時代の遺構確認面となる。その下の第Ⅳ層が、方形周溝墓を覆う粘質気味な褐色土として堆積する。さらに、縄文時代の包含層となる粘質な黒色土の第Ⅴ層が、70～80cmほど厚く堆積しており、縄文時代中・後期の遺物を包含する上位と、前期の遺物を包含する下位に分かれる状況にあった。以下、ローム層となっている。また、第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に、As-B 軽石層が一部で確認されている地点もある。Ｂ区とした東斜面では、表土下30～40cmほどでローム面となっている。Ｃ・Ｄ区に当たる乗附中原遺跡の内、Ｃ区となる地点では大半が開削を受けており、表土下10～20cm前後でローム面となる。また、一部では盛り土がみられる。Ｄ区では、現耕作土は近年の盛り土であり、その下に旧耕作土がある。この旧耕作土下は、Ａ区の乗附長坂遺跡とほぼ同様な堆積となっている。

なお、遺跡周辺は地滑り地帯であり、大平台遺跡（現、県立みやま養護学校）の調査では、縄文時代中期以降とされる東西に蛇行して走行する断層が確認されている。また、少林山台遺跡の調査でも地滑りに伴う断層が確認されている。本調査では、両遺跡共に地滑りに関する断層等は確認されていない。

第Ⅰ層	暗褐色土	耕作土。As-A 軽石を多く含む。
第Ⅱ層	暗褐色土	As-B 軽石を全体に含む。
第Ⅲ層	暗褐色土	やや粘質気味となり、土師器片を包含する。
第Ⅳ層	褐 色 土	やや粘質な土で、古墳時代初頭の方形周溝墓を覆う。
第Ⅴ層	黒褐色土	粘性が強く、淡黄色軽石を含み、縄文土器を包含する。
第Ⅵ層	黄褐色土	黄色軽石を多く含むローム土。
第Ⅶ層	黄 色 土	ローム土であり、As-BP（板鼻褐色軽石）を含む。



第３図　基本土層模式図

第３章　乗附長坂遺跡

１．遺跡の概要

乗附長坂遺跡は、高崎市乗附町字長坂に所在する遺跡である。本遺跡は、高崎市教育委員会による高崎市文化財調査報告書第80集「観音山丘陵遺跡分布図遺跡一覧表―観音山丘陵遺跡詳細分布調査報告―」(1987)に記載された中原遺跡の東側に隣接する台地上にあり、台地上には古墳が点在している。

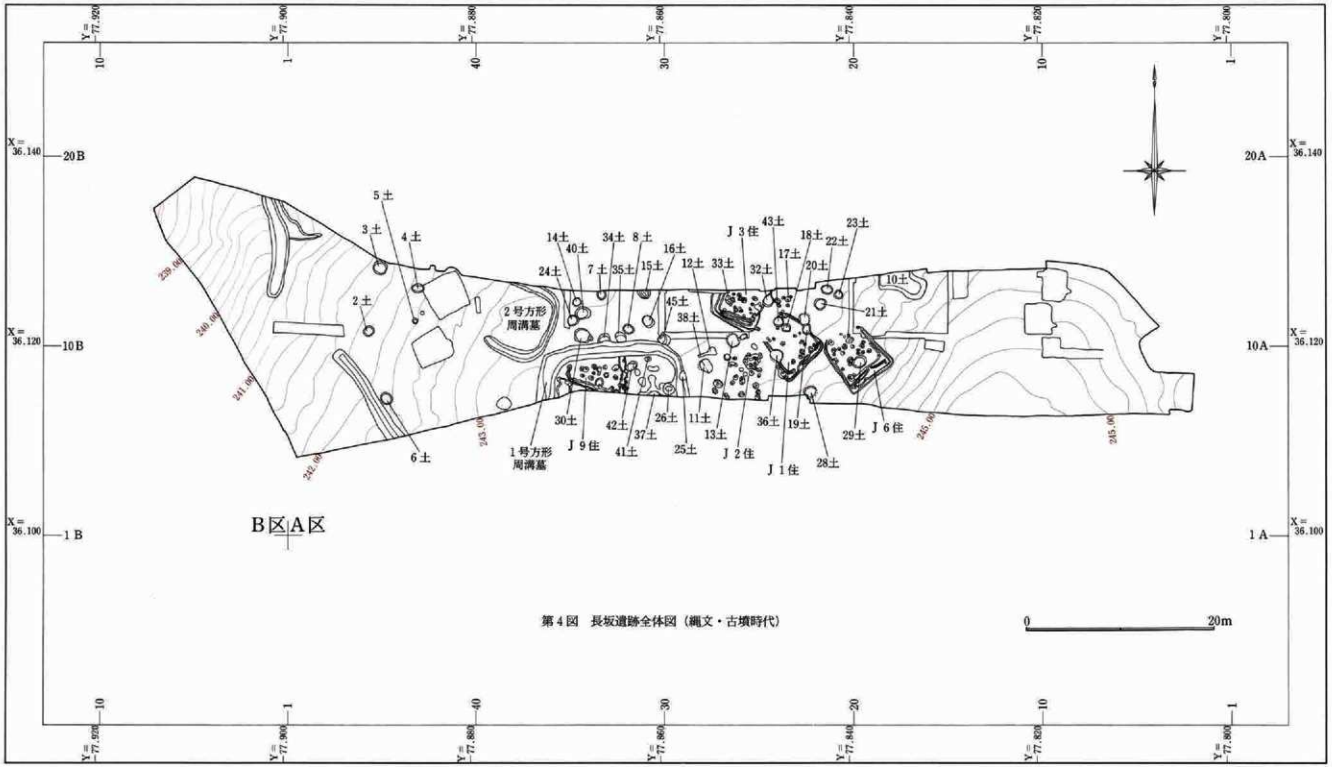
調査地は、高崎方面から延びる県道の改良工事終了地点から、中原遺跡のある西側の台地までのカーブの連続する間を、新規に改良工事が行われる予定地であり、東京電力高崎開閉所の南側に隣接した辺りである。調査当初は、台地の西緩斜面となる東京電力高崎開閉所の南側部分だけが調査範囲とされていたが、その後の調査の結果から、さらに西側へ遺跡範囲が広がる可能性が高くなった。このため、県教育委員会による再度の試掘調査の結果、西側へ調査範囲が拡大した。

調査の結果、縄文時代、弥生時代、古墳時代初頭、奈良時代の遺構や遺物が出土した。縄文時代の遺構は、前期の住居跡が５軒、中期の住居跡が２軒、後期の埋甕が１基、前期から中期の土坑45基が検出されている(第４図参照)。また、包含層からは、早期から前期・中期・後期の土器や石器等の遺物が多量に出土している。この縄文時代の調査では、対象となった包含層が60～80cmと厚く堆積しており、中期・後期の遺構や遺物は上層から出土し、下層から前期の遺構や遺物が出土している。包含層は粘性の強い黒色土であったことから、縄文時代の遺構確認は困難を極め、遺物の出土のあり方を記録にとどめながら、最終段階まで遺構の確認を行った。弥生時代の遺構は検出されていないが、包含層中より遺物が出土している。古墳時代初頭の遺構には、方形周溝墓が２基検出されている(第４図参照)。奈良時代の遺構にあっては、表土下20～40cmほどの面で遺構確認ができ、竪穴住居跡が計13軒検出することができた(第５図参照)。この内の11軒がＡ区となる西緩斜面に検出され、２軒がＢ区となる東斜面から検出されている。各住居跡は、比較的に残存状況の良好なものであった。

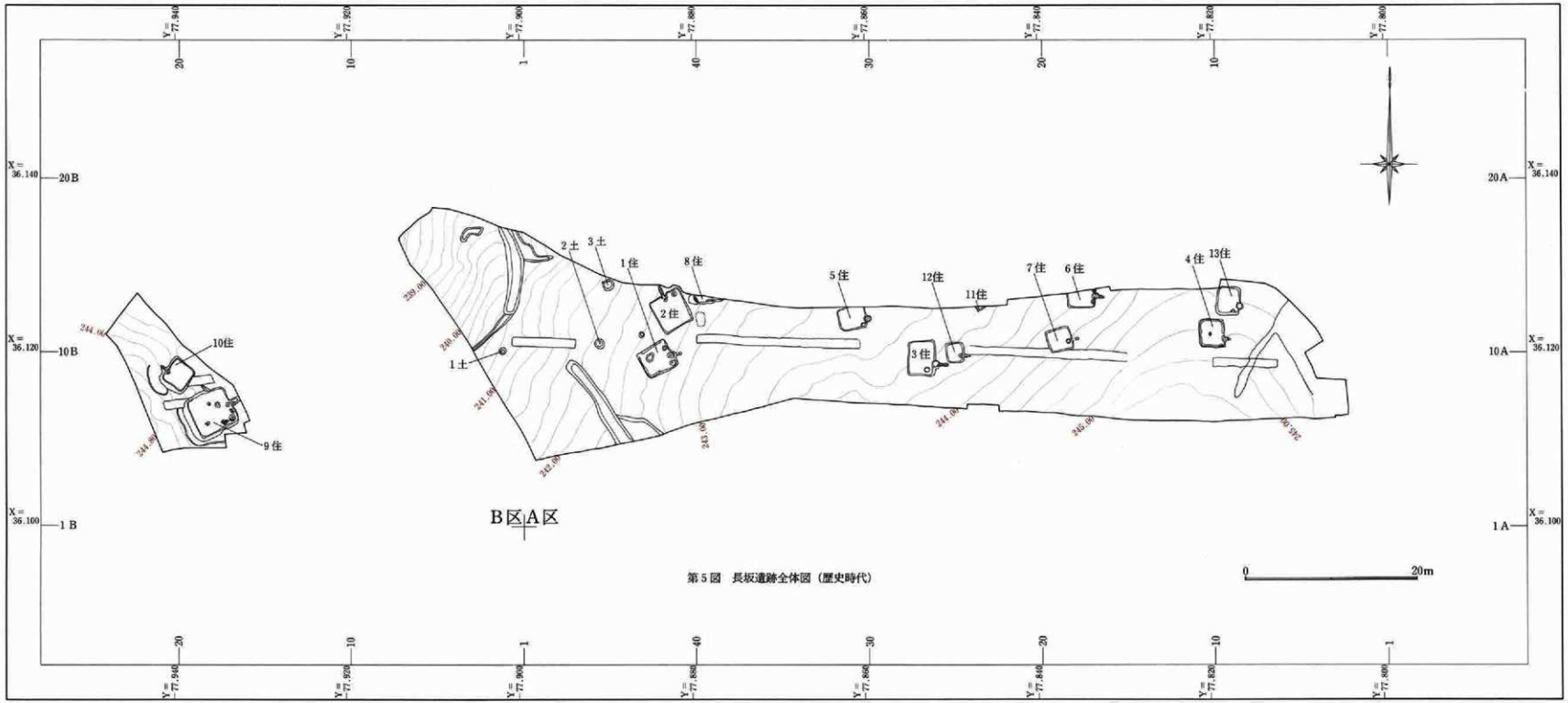
出土した遺物は、遺物収納箱で90箱余を数え、調査面積に比べかなり出土量が多い。

さらに、調査範囲内はローム台地であることから、旧石器時代の遺構・遺物の確認のための試掘調査を行った。試掘調査は、２×２ｍを基本とした。その結果、旧石器時代の遺構・遺物は検出されず、調査を終了させた。

なお、本調査では古墳の検出はなかったが、周囲に点在する古墳については、高崎市第71号古墳とされた円墳が東京電力高崎開閉所内に所在していたようで、1968年に発掘されている。主体部に横穴石室をもち、鏡、勾玉、管玉、鈴、土器が出土しているという。現存していない。また、調査範囲の南側には、同市第72号古墳とされる円墳が存在したようであるが、これも現在では確認できない。こうした状況から、今調査範囲周辺にも、各時代の遺構が存在するものと考えられる。



第4図　長坂遺跡全体図（縄文・古墳時代）



第5図　長坂遺跡全体図（歴史時代）

2．縄文時代の遺構と遺物

先に行われた試掘調査の段階で、本遺跡での縄文時代の遺物が確認されていたことから、調査当初から縄文時代の遺構が検出されるものと予測されていた。今調査では、住居跡7軒、土坑45基の遺構と、遺構外の包含層より多量の土器・石器等の遺物が出土した。

本調査区内での縄文時代の調査は、縄文時代の遺構遺物が包含される基本土層Ⅴ層の黒褐色土が西緩斜面中央部で厚く堆積し、遺構覆土の判別が非常に難しく、遺構確認は困難を極めた。一方、遺物の出土状況は、数箇所に集中して出土する様子を呈し、住居跡等の遺構の存在が予測された。中・後期の遺物は基本土層のⅤ層上位より出土し、Ⅴ層の中位から下位にかけて前期の遺物が主体に出土する事から、遺物の集中する状況を便宜的に遺物集中1から遺物集中9として記録に残しながら、10m四方の中グリッド毎に人力で掘削した。ローム層上面まで調査が進んだ段階で、前期の住居跡となる壁周溝が確認され、縄文時代の住居跡の存在が裏付けられた。このことから、基本土層Ⅴ層下位で出土した遺物集中1・9はＪ1号住居跡に伴う遺物であり、遺物集中2はＪ2号住居跡に伴う遺物、遺物集中3・7はＪ3号住居跡に伴う遺物、遺物集中6・8はＪ6号住居跡に伴う遺物であることが判明した。さらに、同様の状況を基本土層Ⅴ層上位で出土した遺物集中に当てはめると、遺物集中4はＪ4号住居跡に伴う遺物で、遺物集中5はＪ5号住居跡に伴う遺物であると考えられる。

結果、前期の住居跡が5軒、中期の住居跡が2軒、後期の埋甕1基、土坑45基が存在したものと考えられる。

(1) 竪穴住居跡

Ｊ1号住居跡（第6～16図、表2）

位置 本住居跡は、台地のほぼ中央部の平坦面にあり、8～10A22・23グリッドに位置する。本住居跡の東側にはＪ6号住居跡が隣接し、西側にはＪ2・3号住居跡が隣接する。また、18～20・36・45号土坑と重複する。

概要 本住居跡の上位には、縄文時代中期の住居跡であるＪ4号住居跡（遺物集中4）が存在し、その下位に出土した遺物集中1と遺物集中9の分布範囲が、ローム層上面で検出された本住居跡の壁周溝の範囲とちょうど重なる。このことから、本住居に伴う遺物は遺物集中1・9であると判断された。遺構確認及び調査途中での住居プランは不明確で、ローム層上面での周溝検出まで判別できなかった。ただ、遺物の出土のあり方は、10Aラインのベルトを挟んだ南北両側に集中し、下位ほどその集中の度合いが限定される状況を呈する等、住居跡の存在を予測させていた。これらの遺物集中範囲内での住居覆土は、粘質な黒褐色土であり、住居の床面の確認はできなかった。また、炉跡も確認されていない。ローム層上面で検出された壁周溝は、南西側、南東側、北東側の三方向でコ字状を呈し、北西側では検出されていない。周溝内部には数基のピットが検出されているが、主柱穴は判然としない。さらに、本住居と重複する18～20・36・45号土坑との新旧関係は、その覆土の状況から36号土坑が本住居跡より古く、19号土坑が本住居跡より新しい。他の土坑との関係は、不明である。

構造 壁周溝はローム層に達しているが、住居の床面は確認されていない。炉跡も同様である。ピットは検出されているが、柱穴は判然としない。壁周溝はローム層まで掘り込まれ、南西側、南東側、北東側の三方向に検出されコ字状を呈し、掘り込みの浅くなる北西側では検出されていない。なお、南東側

では壁周溝が二重となっている。

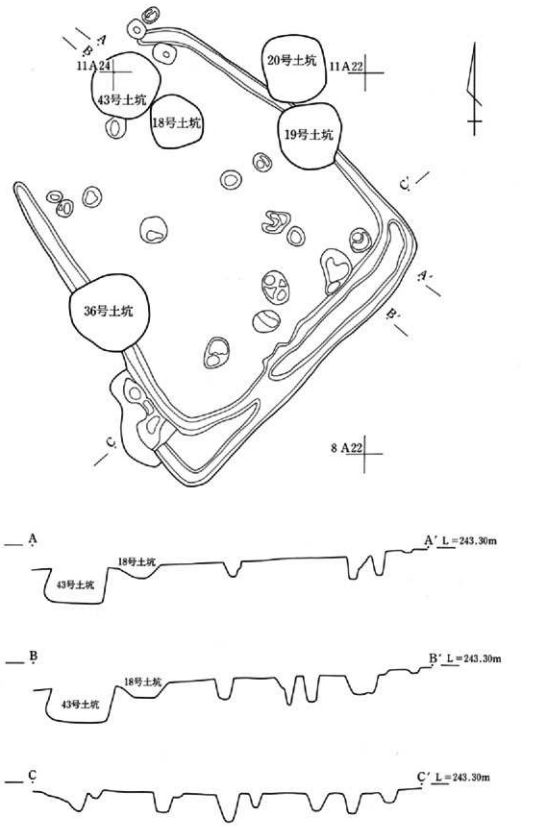
規模　住居は北西方向に長軸をもつ長方形を呈するが、南東側の辺より北西側の辺の方がやや短くなる台形状となる。壁周溝から計測した住居規模は、長軸となる南東方向で5.8mを測り、短軸側の南東側辺で4.9m、北西側辺で3.8mを測る。周溝は幅20cm前後で巡り、深さは最も深い部分で20cmを測ることができ、北西側ほど浅くなる。ピットは径30～40cmで、30cm前後の深さを測る。

遺物　本住居跡から出土した遺物には、遺物集中１・９としたものが伴う。出土状況は、比較的に住居の中央に集中する傾向にあり、遺物量はかなり多い。以下、個別に説明する。

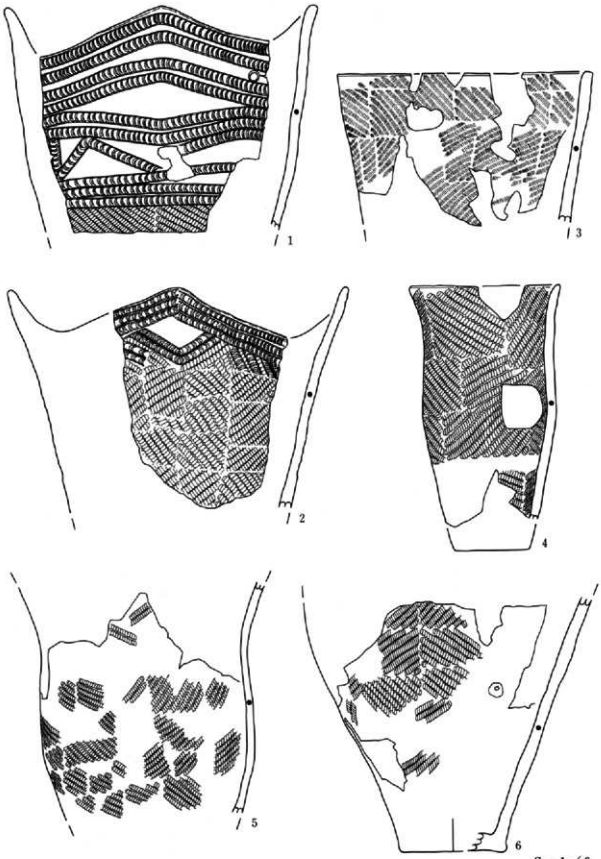
〈土器〉

１～78・81～83の胎土には繊維が含まれている。１は波状口縁となる深鉢土器で、口縁下と胴部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文を主に鋸歯状の文様を描いている。なお、波底下の口縁部には、補修孔がみられる。胴部にはＲＬの縄文が施されている。２は波状口縁となる深鉢土器で、口縁下に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条巡らせ、波頂下には小さく菱形状の文様を描く。口縁文様以下にはＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。３は平口縁となる深鉢土器で、口縁以下にＬとＲによる羽状縄文が施される。４は平口縁の小型の深鉢土器で、口縁以下にＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。５は深鉢土器の胴部で、ＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。６は深鉢土器の胴部下半で、ＬＲ（０段多条）とＲＬによる羽状縄文が施されている。７も６と同様で、胴部にＬＲ（０段多条）とＲＬによる羽状縄文が施されている。８は平口縁の深鉢土器であるが、他の深鉢土器とはやや器形が異なる。また、繊維の含有量も少ない。口縁以下には、ＬとＲによる羽状縄文が施されている。９は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突を施した土器。10は櫛歯状工具による連点状刺突で文様帯区画をし、口縁部文様に連点状刺突での菱形文等が描かれ、胴部にはＬＲに細いＲを１本付加させた付加条縄が施されている。11は平口縁となる口縁下に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文を描くもので、胴部には縄文が施されている。12は波状口縁となる波底部に小突起をもち、口縁部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様帯区画し、口縁部文様に菱形文を描き、胴部には縄文が施されている。13～16は波状口縁となる口縁部に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の口縁部文様を描くもの。17は波状口縁となる口縁下にＬＲによる縄文帯をもち、その下に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の口縁部文様を描くもの。18～22は口縁部文様に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の口縁部文様を描くもので、20～22の胴部にはＲＬの縄文が施されている。23～26は波状口縁となる口縁部に、半裁竹管による平行沈線で菱形文等の口縁部文様を描くもの。27～42は平口縁となり、口縁以下に縄文が施される土器である。27・32は０段多条によるＬＲとＲＬで、羽状縄文が施されるもの。28は０段多条のＲＬとＬで、羽状縄文が施されているもの。29～31・33・34はＬＲとＲＬで羽状縄文が施されるもの。35はＬＲの縄文が施されている。37はＲＬの縄文が施されている。38はＲＬにＬを２本付加させた付加条縄を施した土器。39・40はＬの縄文が施されたもので、41・42はＲの縄文が施されたものである。36は波状口縁となる口縁下にＲＬの縄文が施され、補修孔を有する。43～64は胴部に羽状縄文を施すものであり、43～45・48・52・53・56～58はＬＲとＲＬによる羽状縄文、46・47はＲＬとＬによる羽状縄文、49・55は０段多条によるＬＲとＲＬでの羽状縄文、50はＬＲ（０段多条）とＲＬによる羽状縄文、51はＬＲとＲによる羽状縄文、54はＬＲにＬ・Ｌを付加させた

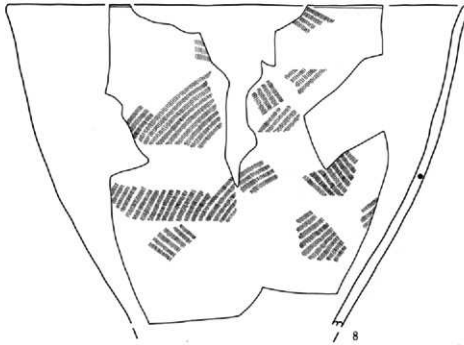
第６図　Ｊ１号住居跡遺物分布図



第７図　Ｊ１号住居跡平面図

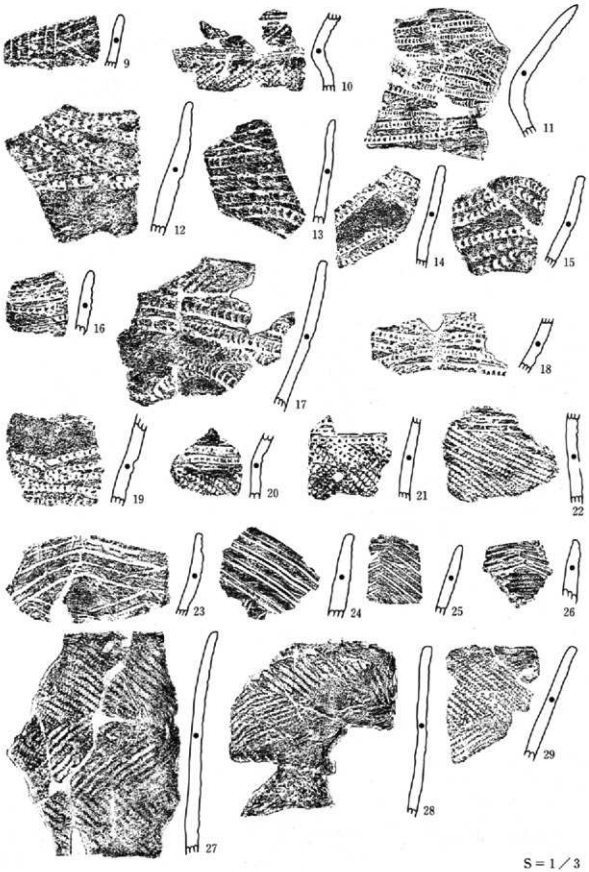


第８図　Ｊ１号住居跡出土遺物(1)



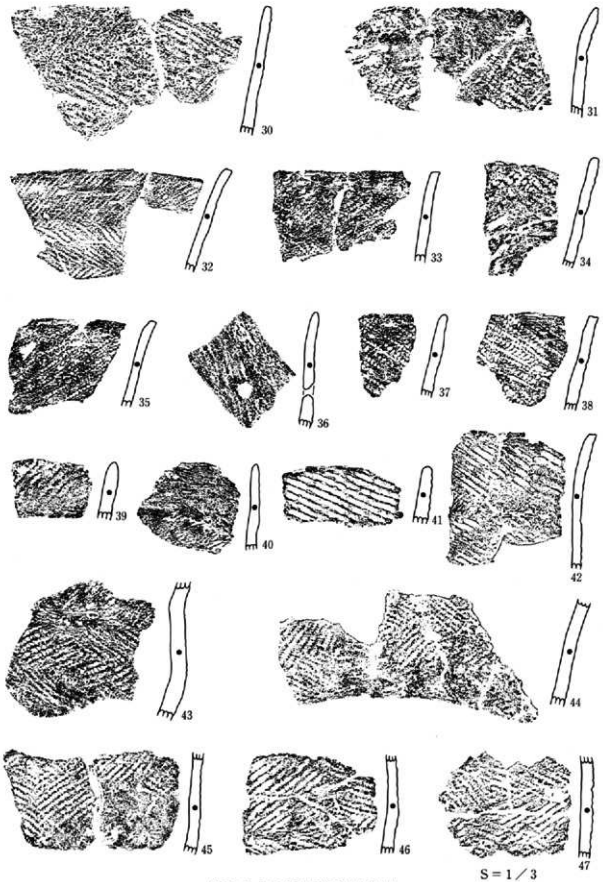
S＝1／3

第９図　Ｊ１号住居跡出土遺物(2)



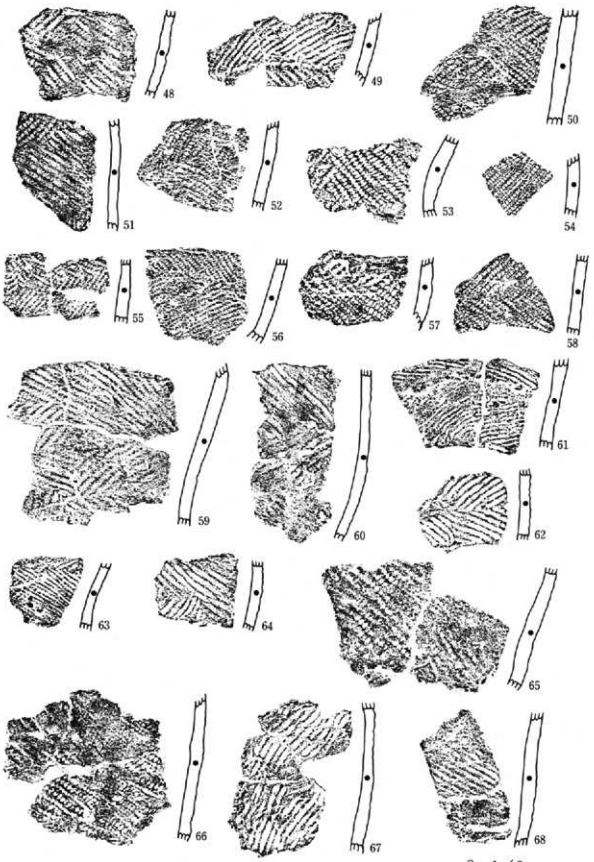
S＝1／3

第10図　Ｊ１号住居跡出土遺物(3)

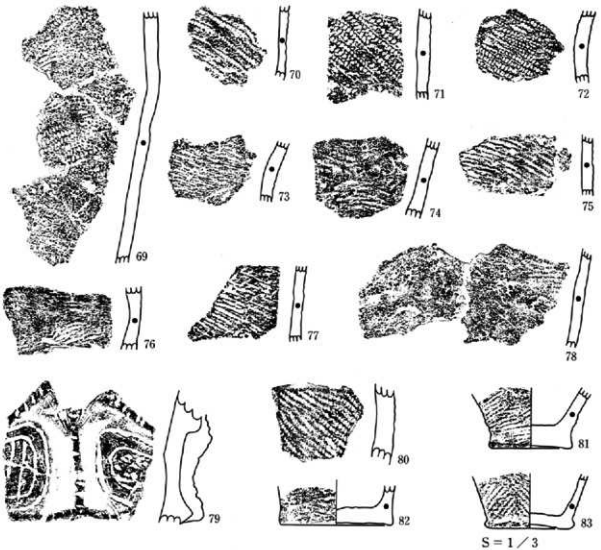


S＝1／3

第11図　Ｊ１号住居跡出土遺物(4)



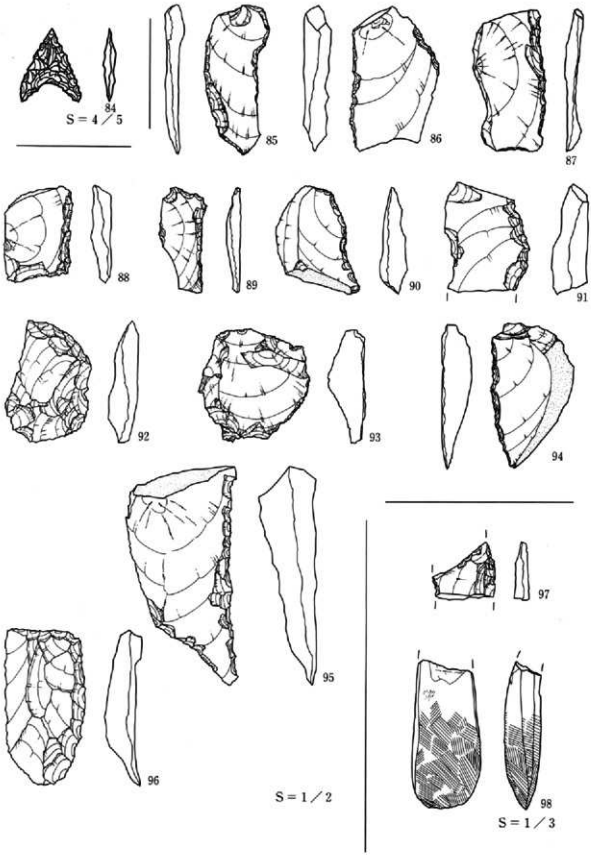
第12図　Ｊ１号住居跡出土遺物(5)



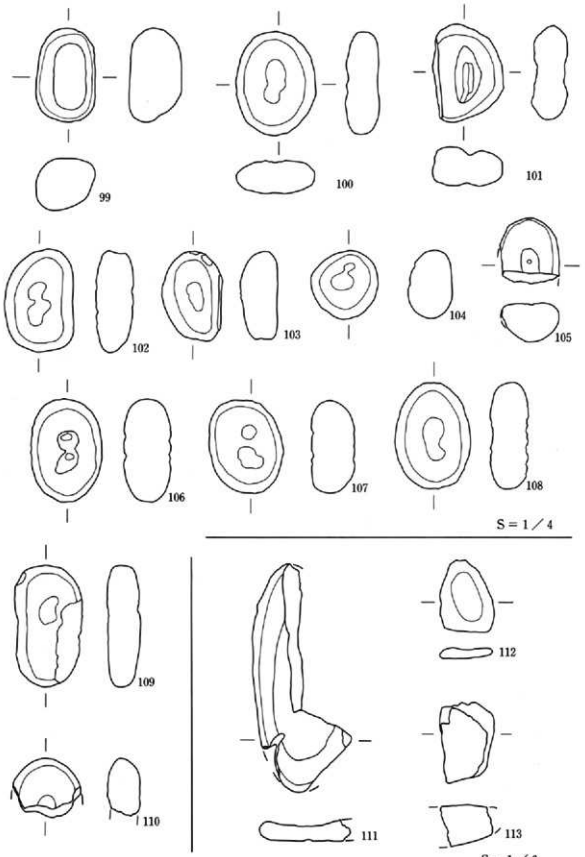
第13図　Ｊ１号住居跡出土遺物(6)

表２　Ｊ１号住居跡出土石器計測表

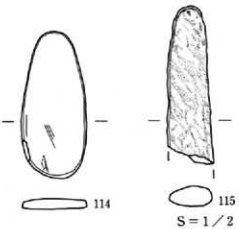
遺物No	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	遺物No	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
84	石鏃	黒曜石	2.4	2.1	1.0	100	凹石	粗粒輝石安山岩	11.0	8.6	450.0
85	スクレイパー	黒色頁岩	8.4	3.4	28.0	101	凹石	粗粒輝石安山岩	10.3	(7.5)	360.0
86	スクレイパー	黒色頁岩	7.7	4.7	52.7	102	凹石	粗粒輝石安山岩	10.8	7.4	520.0
87	スクレイパー	黒色頁岩	7.4	3.8	24.8	103	凹石	粗粒輝石安山岩	9.4	6.4	400.0
88	スクレイパー	黒色頁岩	3.7	5.0	21.7	104	凹石	粗粒輝石安山岩	7.3	7.2	350.0
89	スクレイパー	黒色頁岩	5.5	2.5	10.0	105	凹石	粗粒輝石安山岩	(7.0)	(6.4)	250.0
90	スクレイパー	黒色頁岩	5.7	4.5	30.1	106	凹石	粗粒輝石安山岩	10.8	7.6	630.0
91	スクレイパー	黒色頁岩	(5.8)	4.5	48.5	107	凹石	粗粒輝石安山岩	9.8	7.9	570.0
92	スクレイパー	珪質頁岩	6.3	4.5	43.3	108	凹石	粗粒輝石安山岩	11.2	8.0	490.0
93	スクレイパー	褐色碧玉	6.0	5.9	53.3	109	凹石	閃緑岩	12.8	7.2	520.0
94	スクレイパー	黒色頁岩	7.6	4.4	44.5	110	凹石	粗粒輝石安山岩	(6.2)	(7.2)	190.0
95	スクレイパー	粗粒輝石安山岩	11.6	5.9	159.1	111	石皿	緑色片岩	(36.4)	(16.1)	1490.0
96	スクレイパー	砂岩	8.2	4.3	66.0	112	石皿	午伏砂岩	(11.5)	8.8	200.0
97	打製石斧	珪質頁岩	(4.6)	4.9	26.7	113	石皿	粗粒輝石安山岩	(12.9)	(8.6)	1190.0
98	磨製石斧	変玄武岩	(11.7)	5.4	306.9	114	石製品	砂岩	7.8	3.5	22.8
99	磨石	粗粒輝石安山岩	9.9	6.3	330.0	115	石製品	緑色片岩	(8.3)	2.4	36.7



第14図　Ｊ１号住居跡出土遺物(7)



第15図　Ｊ１号住居跡出土遺物(8)



第16図　Ｊ１号住居跡出土遺物(9)

付加条縄とＲＬにＲ・Ｒを付加させた付加条縄による羽状縄文、59～64はＬとＲによる羽状縄文である。66～78は胴部に斜行縄文が施されているものであり、66・70～72はＲＬの縄文、67はＬの縄文、68・73～77はＲの縄文、69・78はＬＲの縄文が施されている。79は胎土に雲母を含み、波状口縁となる口縁部に隆帯で口縁部文様帯を区画し、波頂下に隆帯を垂下させる。隆帯上には刻みを有し、区画された文様帯内には結節沈線で楕円状の文様を描き、楕円内に縦位の結節沈線や刺突を施している。80は胴部に縄文が施されている。81～83は底部で、胴部下半にまで縄文が施されている土器。これらの土器は、その大方が前期の有尾式土器であり、79は中期の阿玉台式土器、80は中期の加曽利Ｅ式土器である。

〈石器〉

出土した石器には、石鏃が１点、スクレイパーが12点、打製石斧が１点、磨製石斧が１点、磨石が１点、凹石が11点、石皿が３点ある。これらの石器に使用される石材には、石鏃に黒曜石、スクレイパーに黒色頁岩・珪質頁岩・褐色碧玉・粗粒輝石安山岩・砂岩、打製石斧に珪質頁岩、磨製石斧に変玄武岩、磨石に粗粒輝石安山岩、凹石に粗粒輝石安山岩・閃緑岩、石皿に緑色片岩・牛伏砂岩・粗粒輝石安山岩が使用されている。なお、第15図111の石皿は、Ｊ３号住居跡出土の石皿と接合関係にある。

〈石製品〉

２点の石製品が出土している。114の石材には砂岩が使用され、扁平な楕円状の形状を呈し、側縁を含めた全体を丁寧に研磨している。115は石材に緑色片岩が使用され、細い棒状の形状を呈し、粗く研磨されている。

Ｊ２号住居跡（第17～19図、表３）

位置　本住居跡は、台地のほぼ中央部の平坦面にあり、７・８Ａ24～26グリッドに位置する。本住居跡の北側にはＪ３号住居跡が隣接し、東側にはＪ１号住居跡が隣接する。

概要　本住居跡は、他の住居跡で検出された壁周溝は確認されていない。しかし、ローム層上面には数多くのピットが集中している点、さらにこの位置の上部で出土した遺物集中２の分布範囲と重複する点等から、住居跡と判断した。Ｊ１・６号住居跡の形状から、本住居跡も長方形状の形状を呈すると考えられ、その南側部分は調査区外に存在するものと考えられる。遺構確認及び調査途中での住居プランは不明確で、ローム層上面でのピット群検出まで判別できなかった。遺物の出土のあり方は、少ないながらも完形品に近い土器の出土等、土器の集中しない場所との違いは明白で、住居跡の存在を予測させていた。これらの遺物集中範囲内での住居覆土は、粘質な黒褐色土であり、住居の床面の確認はできなかった。また、炉跡も確認されていない。ローム層上面でピットが集中して検出されているが、主柱穴は判然としない。

構造　住居の床面は、確認されていない。炉跡も同様である。ピットは検出されているが、柱穴は判然としない。また、壁周溝等も検出されていないことから、その詳細は不明である。

規模　住居は長方形状の形状を呈すると考えられるが、長軸方向や規模等の詳細は不明。ピットは径30～40㎝で、30㎝前後の深さを測り、50㎝の深さのピットもある。

遺物　本住居跡から出土した遺物は、遺物集中２としたものが伴う。出土状況は、比較的に住居の西側に散漫に分布するが、調査初段階で遺構外遺物として取り上げたこともあり、その詳細は不明である。以下、個別に説明する。

〈土器〉

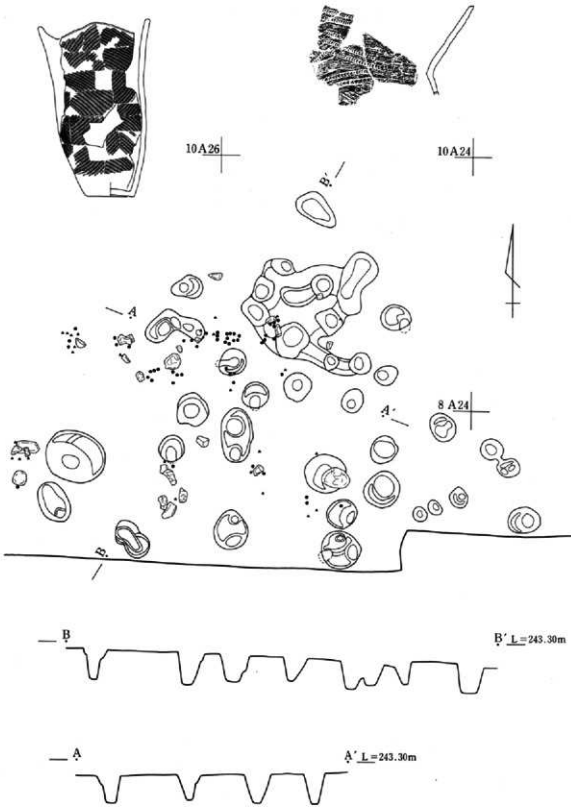
１～26の胎土には繊維が含まれている。１は波状口縁となる深鉢土器で、口縁以下に０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文を施す土器である。２は波状口縁となる口縁下に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文を描くもので、胴部には縄文が施されている。３は波状口縁となる口縁下に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の口縁部文様を描くもの。４は口縁下に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で口縁部文様を描くもの。５～７は口縁部文様に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の文様を描くものであり、７の胴部には縄文が施されている。８は波状口縁となる口縁下に、地文として０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文を施し、半裁竹管による平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文等の文様を描くもの。９は緩やかな小波状ないしは平口縁となる口縁以下に、０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文を施すもので、口縁下に補修孔を有する。10は平口縁となる口縁以下に、ＬＲ（０段多条）とＲによる羽状縄文が施されている。11は胴部にＬＲ（０段多条）とＲによる羽状縄文が施されている。12・14・17・21・22は胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。13は胴部にＬＲ（０段多条）とＲＬによる羽状縄文が施されている。15は胴部にＲＬ（０段多条）とＬによる羽状縄文が施されている。16は胴部に０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文を施すもの。18は胴部にＲＬとＬによる羽状縄文が施されている。19は胴部に繊維束の粗いＬとＲによる羽状縄文が施されている。20は胴部にＬとＲによる羽状縄文が施されている。23は胴部に０段多条のＬＲの縄文が施されている。24は胴部に羽状縄文が施されたもの。25・26は底部で、26は小型土器の底部と考えられる。これらは、全て前期の有尾式土器と考えられるが、８の縄文を地文とする土器は有尾式土器とは異なる可能性がある。

〈石器〉

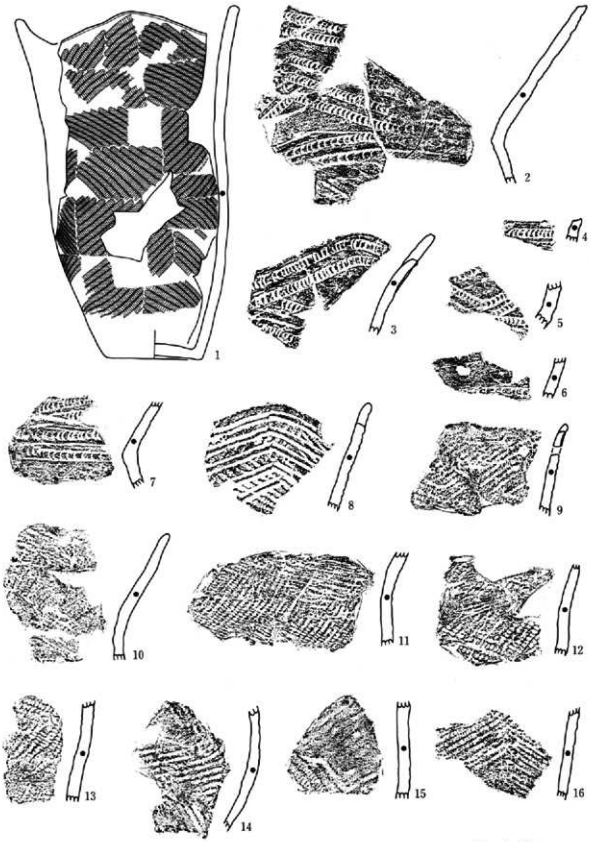
出土した石器には、石匙が１点、スクレイパーが２点、磨石が２点、凹石が３点ある。これらの石器に使用される石材には、石匙にチャート、スクレイパーに黒色頁岩、磨石に粗粒輝石安山岩、凹石に

表３　Ｊ２号住居跡出土石器計測表

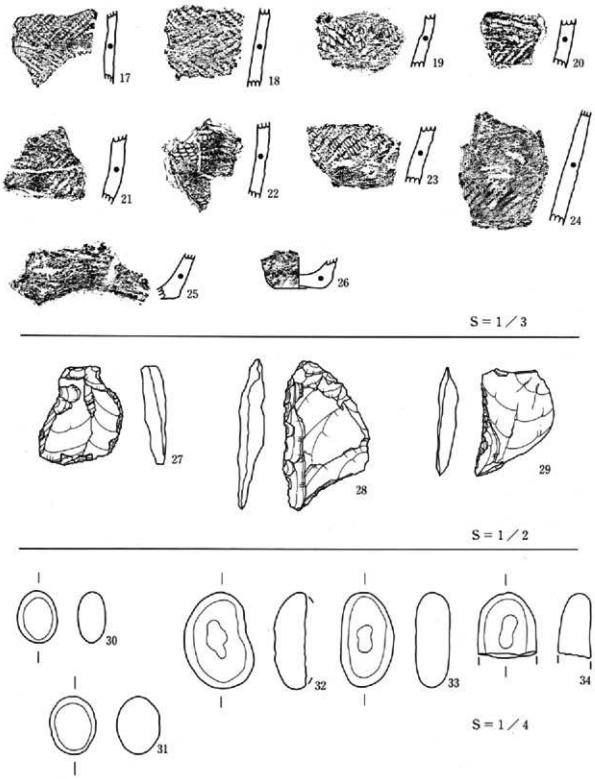
遺物No	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
27	石匙	チャート	5.2	4.4	26.3
28	スクレイパー	黒色頁岩	7.9	4.5	44.4
29	スクレイパー	黒色頁岩	4.1	5.6	20.9
30	磨石	粗粒輝石安山岩	5.5	4.2	70.0
31	磨石	粗粒輝石安山岩	6.1	4.8	180.0
32	凹石	粗粒輝石安山岩	10.2	7.3	350.0
33	凹石	粗粒輝石安山岩	10.0	5.7	320.0
34	凹石	粗粒輝石安山岩	(6.9)	6.1	220.0



第17図　J 2号住居跡遺物分布・平面図



第18図　Ｊ２号住居跡出土遺物(1)



第19図　Ｊ２号住居跡出土遺物(2)

粗粒輝石安山岩が使用されている。

Ｊ３号住居跡（第20～35図、表４）

位置　本住居跡は、台地のほぼ中央部の平坦面にあり、10～12Ａ24～26グリッドに位置する。本住居跡の南側にはＪ２号住居跡が隣接し、南東側にはＪ１号住居跡が隣接する。また、32･33号土坑と重複する。

概要　本住居跡の上位には、縄文時代中期の住居跡であるＪ４号住居跡（遺物集中４）、後期の埋甕が存在し、その下位に出土した遺物集中３と遺物集中７の分布範囲が、ローム層上面で検出された本住居跡の壁周溝の範囲とちょうど重なる。このことから、本住居に伴う遺物は遺物集中３・７であると判断された。遺構確認及び調査途中での住居プランは不明確で、ローム層上面での周溝検出まで判別できなかった。ただ、遺物の出土のあり方は、Ａ25ラインのベルトを挟んだ南北両側に集中し、下位はどその集中の度合いが限定される状況を呈する等、住居跡の存在を予測させていた。これらの遺物集中範囲内での住居覆土は、粘質な黒褐色土であり、住居の床面の確認はできなかったが、第21図に示した土器の出土状況から床面の可能性が考えられた。炉跡は確認されていない。ローム層上面で検出された壁周溝は、北西側、南西側、南東側の三辺でコ字状を呈し、その状況から住居の北側は調査区外にあるものと思われる。周溝内部には数基のピットが検出されているが、主柱穴は判然としない。さらに、本住居と重複する32・33号土坑との新旧関係は、不明である。

構造　壁周溝はローム層に達しているが、明確な住居の床面は確認されていない。炉跡も同様である。しかし、第21図に示した遺物出土状況から、その直下面が床面と考えられる可能性が高く、床面は黒褐色土であると考えられる。ピットは検出されているが、柱穴は判然としない。壁周溝はローム層まで掘り込まれ、北西側、南西側、南東側、北東側の三辺が検出されコ字状を呈し、北側は調査区外のため不明。なお、北西側、南西側では壁周溝が二重となっている。

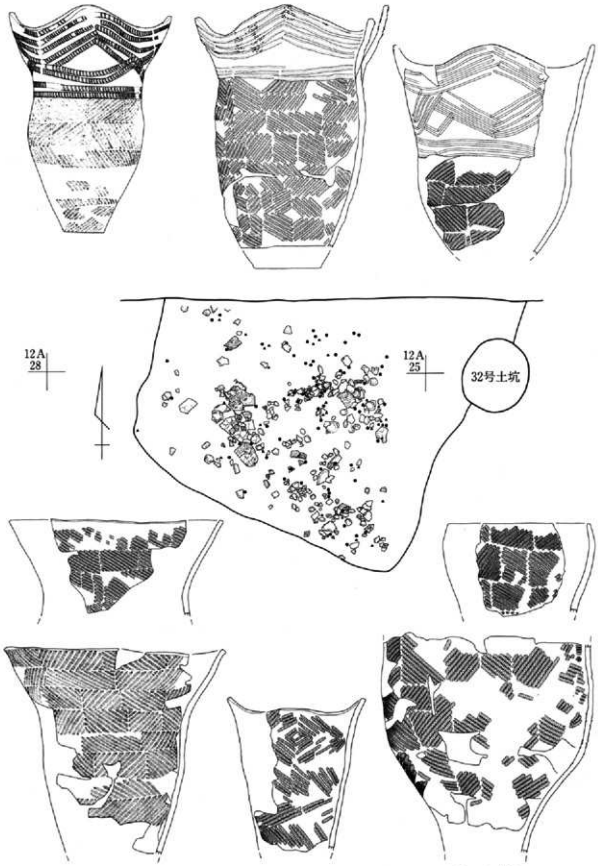
規模　住居は北東方向に長軸をもつ長方形を呈するが、南西側の辺の方がやや短くなる台形状となることが予測される。壁周溝から計測した住居規模は、長軸方向となる南東側の辺で4.8mを測り、短軸方向となる南西側の辺で4.7mを測ることができる。周溝は幅25～35cm前後で巡り、深さは20cmを測ることができ、内側の周溝の方がやや狭く深い傾向にある。ピットは径30～40cmで、30cm前後の深さを測る。

遺物　本住居跡から出土した遺物には、遺物集中３・７としたものが伴う。出土状況は、住居全体に多量の遺物が出土し、特に床と考えられる面には第21図に示したごとく完形土器が多く潰れた状態で出土している。以下、個別に説明する。

〈土器〉

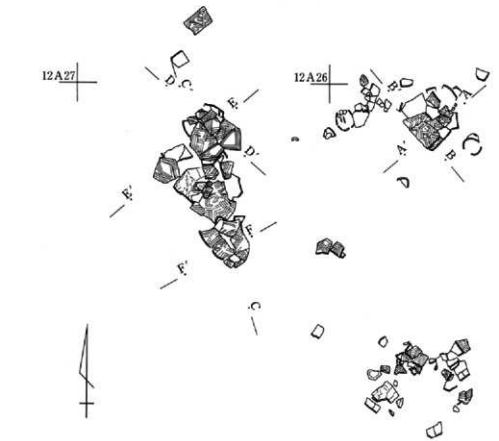
１～153の胎土には繊維が含まれている。１は口縁が朝顔状に開く波状口縁となり頸部がくびれる深鉢土器で、口縁下と胴部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文を口縁部文様として描いている。胴部にはＲとＬによる羽状縄文が施されている。２は波状口縁となり頸部がややくびれる深鉢土器で、口縁下と胴部に半裁竹管による平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文を口縁部文様として描いている。胴部には０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文が施されている。３は波状口縁となり口縁部が比較的短く頸部がくびれる深鉢土器で、口縁下と胴部に半裁竹管による平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に鋸歯状の文様を描いている。胴部にはＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。４は大小２対の異なる波状口縁をもつ深鉢土器で、口縁以下にＬＲとＲＬによる羽状縄文を施した土器。５は胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文を施したもの。６は朝顔状に開く平口縁となり頸部がやや

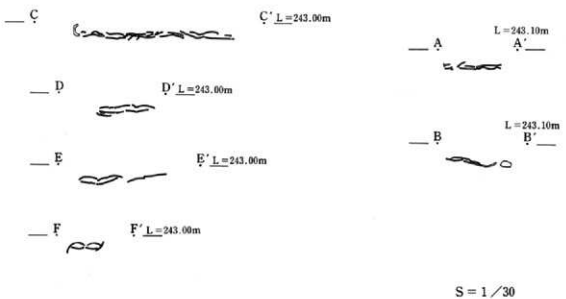
くびれる深鉢土器で、口縁以下にＬとＲによる羽状縄文を施している。７は朝顔状に開く平口縁となり頸部がくびれる深鉢土器で、口縁以下にＲＬの縄文を施された土器。８は内反する平口縁となり頸部がくびれる深鉢土器で、口縁以下にＬＲ（０段多条）とＲＬによる羽状縄文が施されている。９は胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文が施された土器である。10は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突で口縁直下の文様帯を構成し、その下に半裁竹管による平行沈線および爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文を主に鋸歯文で口縁部文様を描いたもの。11は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突を施すと共に、同工具で菱形文等の口縁部文様を描いたもの。12・13は同一個体の土器で、波状口縁となる口縁直下にＲＬによる縄文帯をもち、その下に半裁竹管による平行沈線で菱形文等の口縁部文様を描いたもの。14～22は波状口縁となる口縁下に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の口縁部文様を描くもの。23～35は口縁部文様に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の文様を描くものである。36～39は頸部のくびれ部に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で口縁部文様帯を区画する沈線を巡らせ、胴部に縄文を施すものである。36・37は同一個体の土器で、胴部に０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文を施すもの。38は胴部に０段多条によるＬＲの縄文を施すもの。39は胴部にＲＬの縄文を施すものである。40～53は波状口縁となる口縁下に、半裁竹管による平行沈線で菱形文等の口縁部文様を描くもので、49には地文に縄文が施されているものである。54は平口縁となる口縁下に、半裁竹管による平行沈線で菱形文等の口縁部文様を描くもの。55～70は口縁部文様に、半裁竹管による平行沈線で菱形文や鋸歯状等の文様を描くものであり、64～66には地文に縄文が施されている。なお、64・65は同一個体の土器である。71・72は頸部のくびれ部に、半裁竹管による平行沈線で口縁部文様帯を区画する沈線を巡らせ、胴部に縄文を施すものである。71は胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文を施すもの。72は胴部に０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文を施すもの。73は大きな瘤状の突起（隆帯）をもつもので、頸部から口縁部に至る部分と考えられる。74・78は波状口縁となる土器で、口縁以下に縄文が施されている。74はＲＬによる斜行縄文が施されている。78はＬＲ（０段多条）とＲＬにより、羽状縄文が施されている。75～77・79～94は平口縁となる土器で、口縁以下に縄文が施されている。75は０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文が施されており、口縁下には補修孔を有する。76・77は０段多条によるＬＲとＲＬで、羽状縄文が施されている。79～81・83はＬＲとＲＬにより、羽状縄文が施されているもの。82はＲＬとＬにより、羽状縄文が施された土器である。84はＲの縄文をまばらに施したもの。85・92・94は０段多条によるＬＲの縄文が施されている。86は０段多条によるＲＬの縄文が施されている。87はＬＲの縄文が施されている。88はＲの縄文が施されている。89・90はＲＬの縄文が施されている。91はＬの縄文が施されている。95は口縁に小突起をもつものであり、口縁以下にＬの縄文が施されている。99～139はくびれる頸部以下の胴部ないし胴部に、縄文が施されているものである。99は頸部下に０段多条によるＲＬの縄文が施されている。100は頸部下に０段多条によるＬＲの縄文が施されている。101は頸部下にＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。102は頸部下に０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文が施されている。103・105・108・111・118・122・132は胴部に０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文が施されている。104は胴部にＲＬの縄文が施されている。106・109・112・114～116・119・124～126・129・130は胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。107・117・120は胴部にＬＲ（０段多条）とＲＬによる羽状縄文が施されている。110は胴部にＬＲとＲＬ（０段多条）による羽状縄文が施されている。113は胴部にＲＬ（０段多条）とＬによる羽状縄文が施されている。123は胴部



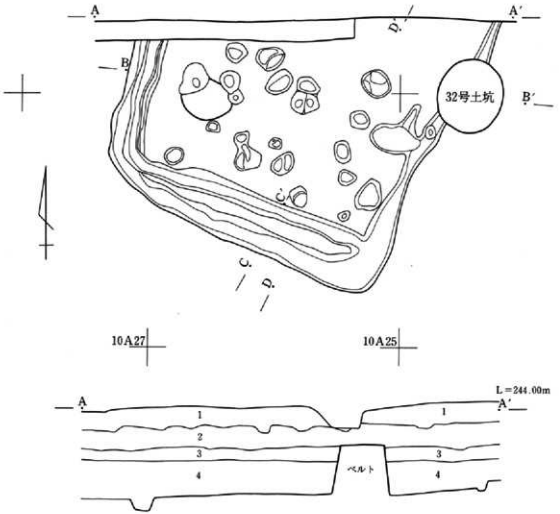
S＝1／60

第20図　Ｊ３号住居跡遺物分布図





第21図　J 3号住居跡出土遺物微細図

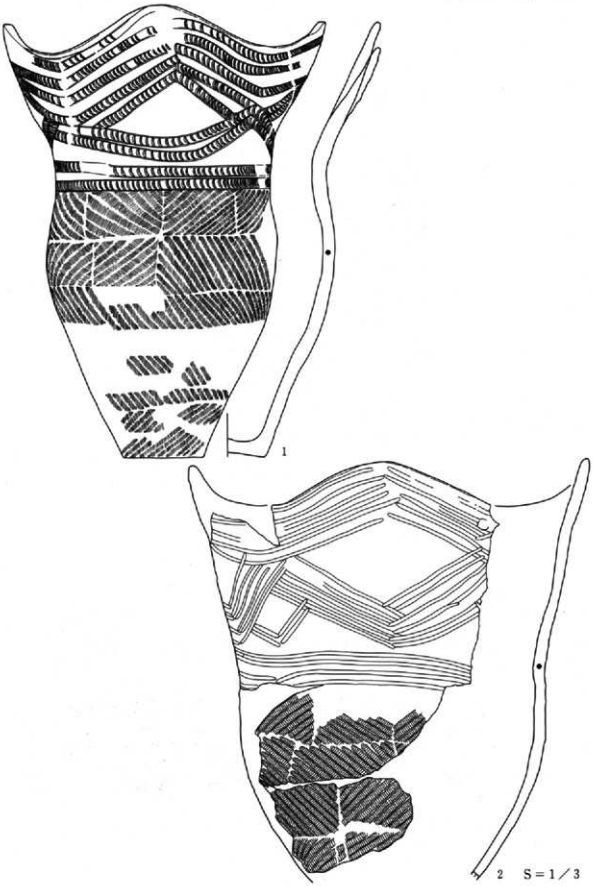


Ｊ３号住居跡土層

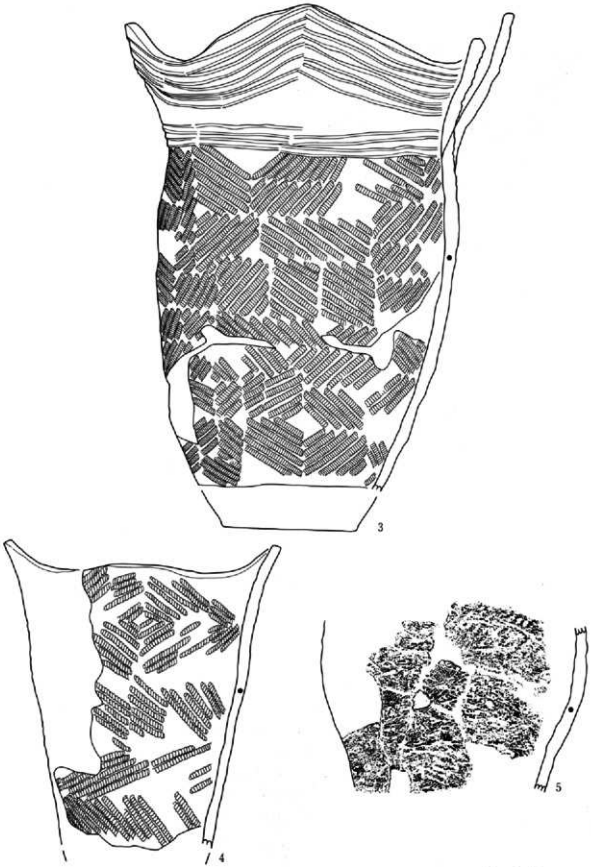
1　暗褐色土　耕作土。As-A 軽石を多く含む。
2　暗褐色土　白色軽石を少量混入し、本層の下面が歴史時代の遺構確認面となる。
3　褐色土　　やや粘質な褐色土を主体とする。
4　黒褐色土　粘質で、黄色軽石を微量に混入し、遺構覆土との区別が難しい。

S＝1／60

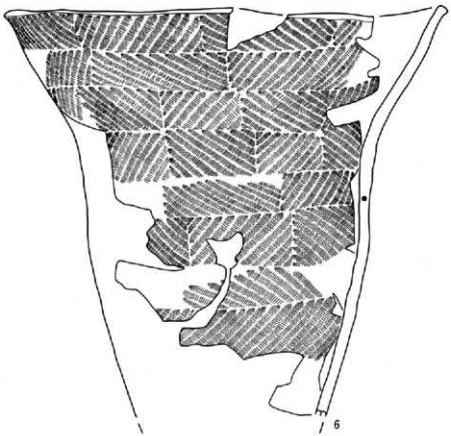
第22図　Ｊ３号住居跡平面図

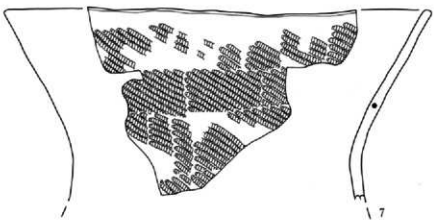


第23図　Ｊ３号住居跡出土遺物(1)



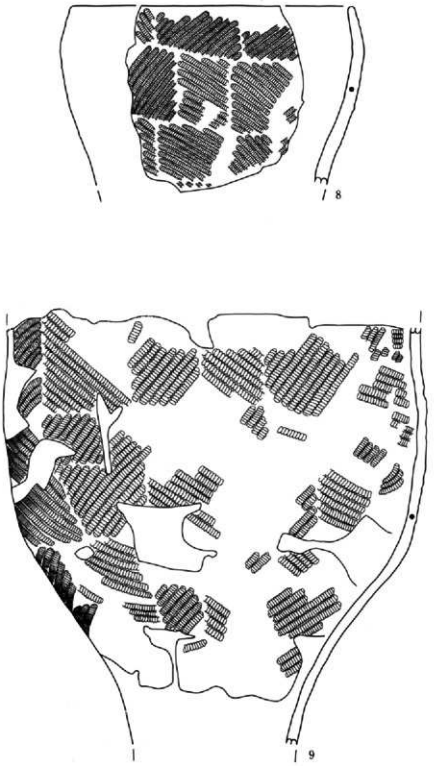
第24図　Ｊ３号住居跡出土遺物(2)





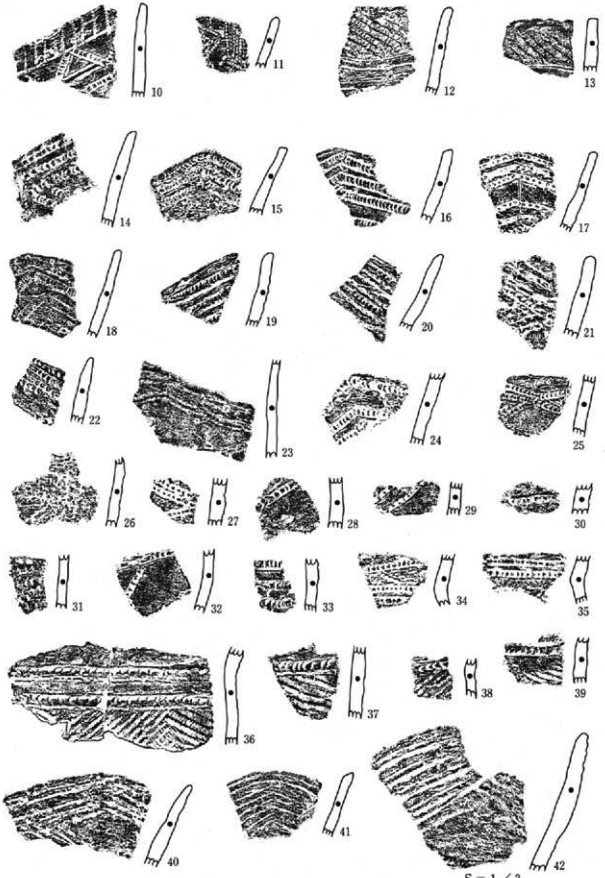
S＝1／3

第25図　J３号住居跡出土遺物(3)

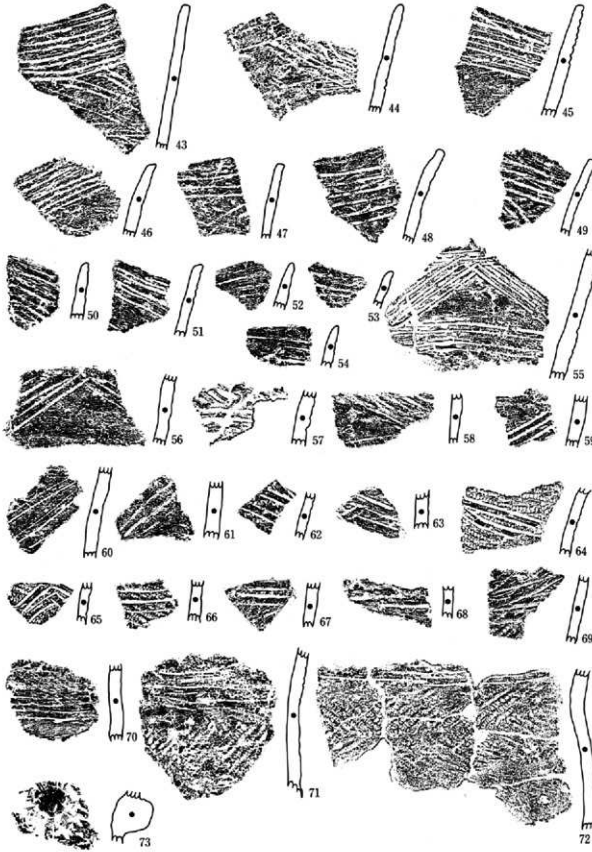


S＝1／3

第26図　Ｊ３号住居跡出土遺物(4)

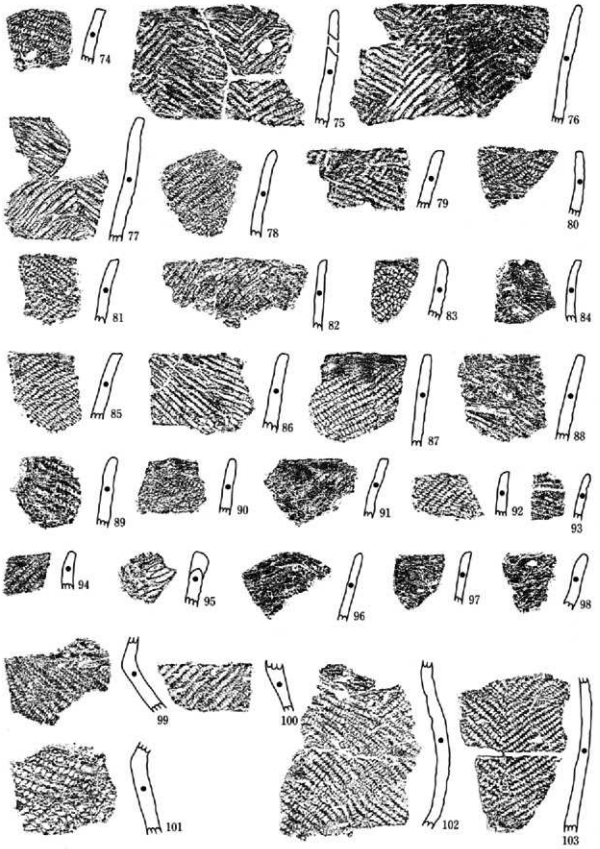


第27図　Ｊ３号住居跡出土遺物5)



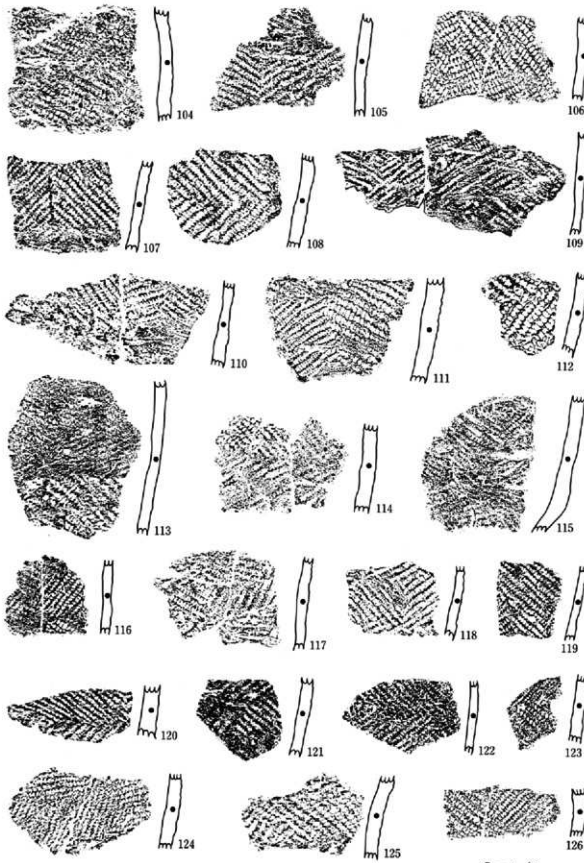
S＝１／３

第28図　Ｊ３号住居跡出土遺物(6)

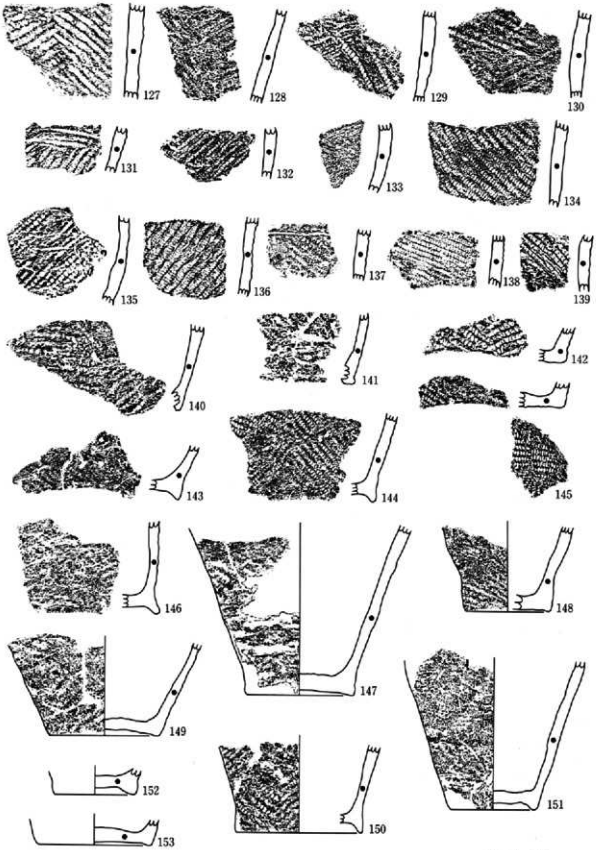


S＝1／3

第29図　Ｊ３号住居跡出土遺物(7)

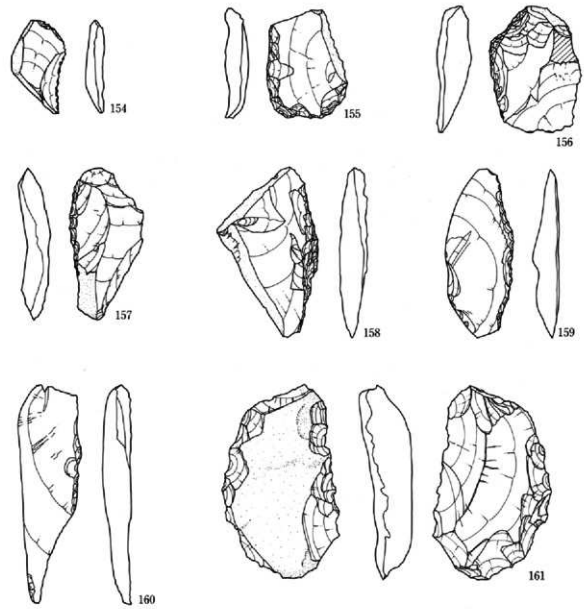


第30図　Ｊ３号住居跡出土遺物(8)

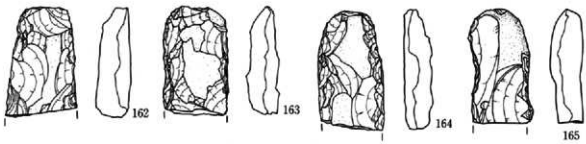


S＝1／3

第31図　Ｊ３号住居跡出土遺物(9)

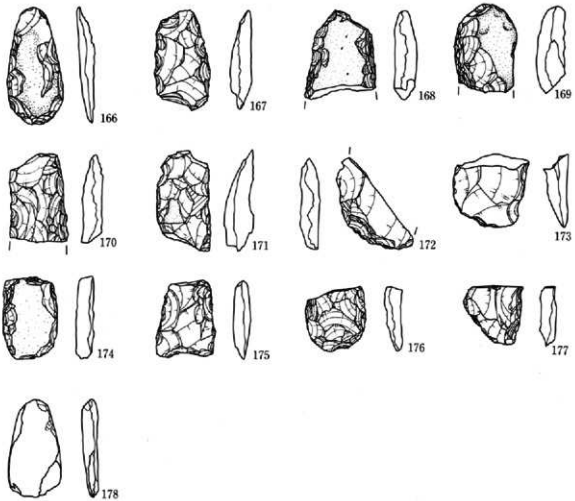


S＝１／２

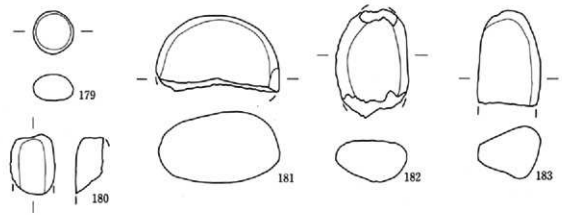


S＝１／３

第32図　Ｊ３号住居跡出土遺物(4)

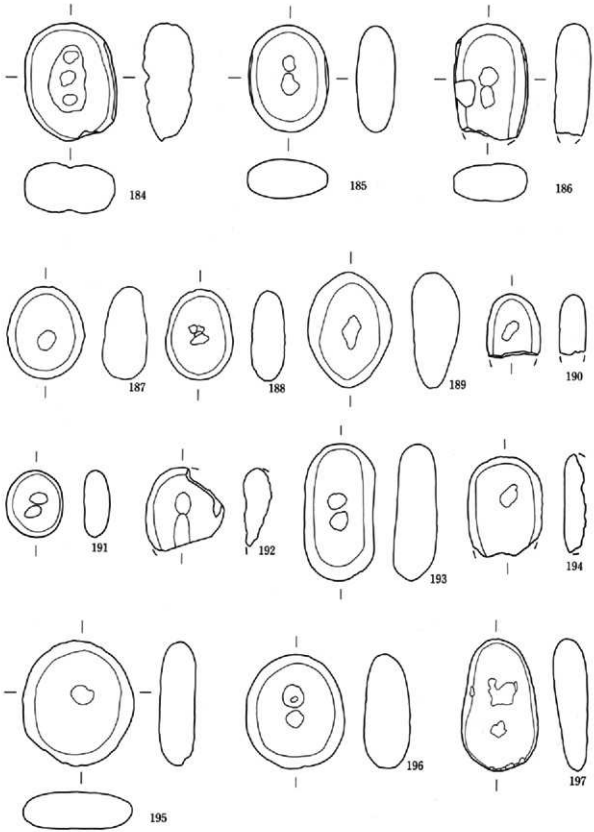


S＝1／3



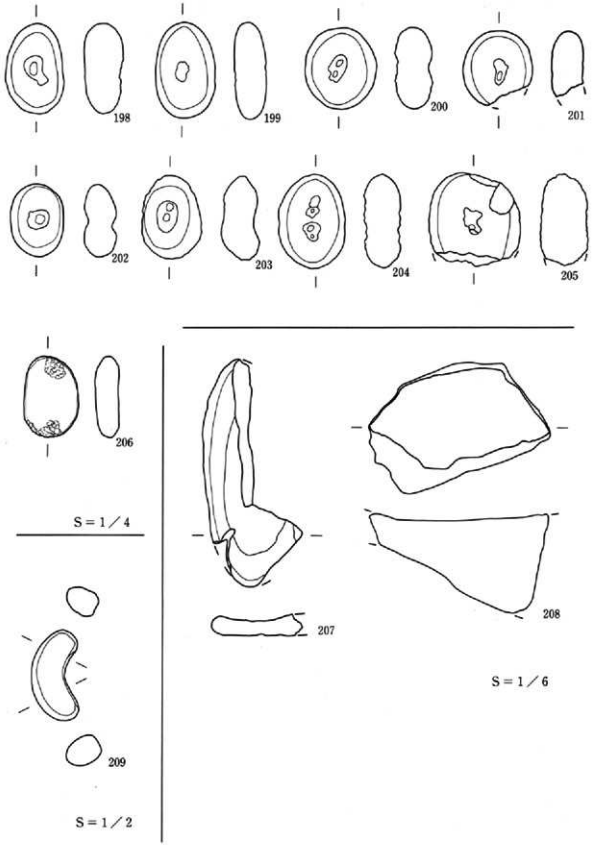
S＝1／4

第33図　J 3号住居跡出土遺物(1)



S＝1／4

第34図　Ｊ３号住居跡出土遺物(12)



第35図　Ｊ３号住居跡出土遺物(13)

表４　Ｊ３号住居跡出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
154	スクレイパー	黒色頁岩	4.9	2.8	12.7
155	スクレイパー	黒色頁岩	5.8	4.3	33.3
156	スクレイパー	頁岩	6.7	4.7	55.9
157	スクレイパー	黒色頁岩	8.0	3.7	36.5
158	スクレイパー	黒色頁岩	9.0	5.3	53.2
159	スクレイパー	珪質頁岩	9.9	3.6	37.2
160	スクレイパー	黒色頁岩	11.7	3.3	51.4
161	スクレイパー	硬質泥岩	10.2	6.2	152.0
162	打製石斧	粗粒輝石安山岩	(8.5)	5.5	153.7
163	打製石斧	硬質泥岩	(8.6)	5.1	132.6
164	打製石斧	粗粒輝石安山岩	(9.4)	5.1	147.7
165	打製石斧	硬質泥岩	(8.9)	5.1	129.3
166	打製石斧	カンラン岩	9.2	4.4	58.9
167	打製石斧	ホルンフェルス	(7.8)	4.4	67.1
168	打製石斧	砂岩	(7.0)	5.7	87.5
169	打製石斧	硬質泥岩	(6.8)	2.2	96.7
170	打製石斧	硬質泥岩	(7.0)	4.7	57.9
171	打製石斧	硬質泥岩	(8.0)	4.2	68.0
172	打製石斧	黒色頁岩	(7.2)	(6.0)	50.4
173	打製石斧	珪質頁岩	(5.7)	5.9	54.2
174	打製石斧	細粒輝石安山岩	(6.5)	4.2	49.7
175	打製石斧	黒色安山岩	(6.2)	4.8	40.8
176	打製石斧	珪質頁岩	(5.1)	(4.8)	36.4
177	打製石斧	硬質泥岩	(4.7)	4.6	30.3
178	磨製石斧	変玄武岩	7.7	4.1	54.2
179	磨石	粗粒輝石安山岩	4.5	4.2	70.0
180	磨石	粗粒輝石安山岩	(6.4)	4.7	130.0
181	磨石	粗粒輝石安山岩	(8.1)	13.0	1090.0
182	磨石	ヒン岩	(11.4)	7.6	500.0
183	磨石	粗粒輝石安山岩	(10.1)	6.6	500.0
184	磨石	粗粒輝石安山岩	12.4	9.7	840.0
185	磨石	砂岩	11.2	8.5	600.0
186	凹石	粗粒輝石安山岩	(12.2)	7.7	660.0
187	凹石	粗粒輝石安山岩	9.7	8.1	520.0
188	凹石	粗粒輝石安山岩	9.5	7.1	340.0
189	凹石	砂岩	12.2	8.5	660.0
190	凹石	粗粒輝石安山岩	(6.6)	5.6	150.0
191	凹石	粗粒輝石安山岩	7.1	6.0	180.0
192	凹石	粗粒輝石安山岩	(8.8)	(8.3)	240.0
193	凹石	粗粒輝石安山岩	14.5	7.5	840.0
194	凹石	閃緑岩	(10.5)	7.8	250.0
195	凹石	粗粒輝石安山岩	13.2	11.8	930.0
196	凹石	粗粒輝石安山岩	12.0	10.5	940.0
197	凹石	粗粒輝石安山岩	13.8	8.1	588.0
198	凹石	粗粒輝石安山岩	9.6	6.1	330.0
199	凹石	粗粒輝石安山岩	10.1	6.3	320.0
200	凹石	粗粒輝石安山岩	8.5	7.5	310.0
201	凹石	粗粒輝石安山岩	(8.0)	7.4	290.0
202	凹石	粗粒輝石安山岩	7.7	5.7	200.0
203	凹石	粗粒輝石安山岩	8.9	6.4	330.0
204	凹石	粗粒輝石安山岩	9.8	7.1	360.0
205	凹石	粗粒輝石安山岩	(9.9)	9.6	610.0
206	敲石	粗粒輝石安山岩	8.5	5.8	195.0
207	石皿	緑色片岩	36.4	(16.1)	1490.0
208	石皿	粗粒輝石安山岩	(28.4)	(20.9)	6700.0
209	石製品	蛇紋岩	4.8	2.4	20.2

にＲＬとＬによる羽状縄文が施されている。127・131は胴部にＬＲとＲによる羽状縄文が施されている。128は胴部にＬとＲによる羽状縄文が施されている。134・138は胴部に０段多条によるＲＬの縄文が施されている。136は胴部に０段多条によるＬＲの縄文が施されている。135は胴部にＬＲの縄文が施されている。137・139は胴部にＲＬの縄文が施されている。140～153は底部片であるが、胴部には羽状縄文等の縄文が施されている。また、145の底面には、０段多条の縄文が施されている。なお、底部形状には、143・144・146・150・151・152のように明らかに上げ底となるものや、147・149のように上げ底気味となる底部もみられる。これらは、全て前期の有尾式土器と考えられるが、64～66のような縄文を地文とする土器は有尾式土器とは異なる可能性がある。

〈石器〉

出土した石器には、スクレイパーが８点、打製石斧が16点、磨製石斧が１点、磨石が７点、凹石が20点、敲石が１点、石皿が２点の計55点がある。これらの石器に使用される石材には、スクレイパーに黒色頁岩・珪質頁岩・頁岩・硬質泥岩、打製石斧に黒色頁岩・珪質頁岩・硬質泥岩・カンラン岩・ホルンフェルス・砂岩・黒色安山岩・粗粒輝石安山岩・細粒輝石安山岩、磨製石斧に変玄武岩、磨石に粗粒輝石安山岩・砂岩・ヒン岩、凹石に粗粒輝石安山岩・閃緑岩・砂岩、敲石に粗粒輝石安山岩、石皿に緑色片岩・粗粒輝石安山岩が使用されている。なお、第35図207の石皿は、Ｊ１号住居跡出土の石皿と接合関係にある。また、184～186の凹石には、側面に磨り面を有している。197の凹石の下端部には、敲打痕を有しており、敲石としての使用もなされていたようである。208の石皿の皿面は、よく研磨されている。

〈石製品〉

石製品が１点出土している。出土した石製品は、勾玉状の形状を呈し、長さ4.8㎝、厚さ1.4㎝、重さ20.2ｇを計り、やや大きめである。石材には、蛇紋岩が使用されている。孔を有していないことから、垂れ飾りにはならないと判断される。石製品全体を、丁寧に研磨している。なお、出土位置は土器の完形品が潰れて出土した付近で、土器と同様に床面直上からの出土と考えられる。

Ｊ４号住居跡（第36～42図、表５）

位置　本住居跡は、台地のほぼ中央部の平坦面にあり、10～12Ａ22～24グリッドに位置する。本住居跡の東側にはＪ５号住居跡が隣接する。また、後期の埋甕および17号土坑と重複する。

概要　本住居跡は、縄文時代中・後期の遺物を主体に出土させる基本土層Ｖ層の上位から出土した遺物集中４を指す。本住居遺物となる遺物集中４の下位に遺物集中１・３・７・９が存在するが、その集中範囲がずれる点や、層序的に上位と下位という相違点、さらには下位の遺物集中をなす時期が前期中葉であることから、明らかに区分できる。遺構確認および調査途中での住居プランは不明確で、最後まで住居プランは確認できなかった。しかし、遺物集中４での出土状況のあり方から、集中４を住居跡と判断した。また、住居範囲は、遺物集中４の分布範囲を想定できるものと考えられる。床面、炉跡等の施設は確認されていない。本住居跡と重複する埋甕とは、その土器が後期の堀之内式土器であることから埋甕の方が新しい時期のものであり、33号土坑との関係は不明である。33号土坑出土の土器と本住居内出土の土器が接合して完形品となった第37図１からすれば、33号土坑が本住居に付属する施設とも考えられ、判然としない。

構造　詳細は不明。

規模　詳細は不明であるが、遺物の出土範囲から径５ｍ前後の円形を呈するものと思われる。

遺物　本住居跡から出土した遺物には、遺物集中４としたものが伴う。出土状況は、比較的に住居の中央に集中する傾向にあり、遺物には礫がかなり多い。以下、個別に説明する。

〈土器〉

１は平口縁の口縁に４単位の突起をもつ深鉢形を呈する土器で、口縁下を無文帯として太い沈線を１条巡らせて区画し、突起部に渦巻き状の沈線を有する。胴部には、地文に縦位回転のＬＲの縄文を施し、沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、さらにＵ字状の文様を加えている。２はキャリパー状となる深鉢形土器の胴部下半で、２本単位の直線的な懸垂文を垂下させて文様区画し、区画内に縦位回転のＬＲの縄文を施す区画と無文となる区画からなる。３は６の口縁部と同一個体となる深鉢形土器の胴部下半で、胴部に直線的な懸垂文を垂下させて文様区画をすると共に、Ｕ字状および逆Ｕ字状の文様を沈線で描く。さらに、区画内には縦位回転のＬＲの縄文を施し、蛇行する沈線を部分的に垂下させている。４・16は胎土に雲母を含む土器で、４は口縁部に隆帯を巡らせて文様帯区画し、区画内に押し引き沈線による鋸歯状の文様を描くものである。16は胴部に隆帯と押し引き沈線で、曲線的な文様を描くもの。５は内反する平口縁で、口縁下を無文帯とし、その下に太い沈線で逆Ｕ字状等の文様を描き、地文にＲＬの縄文を斜位・縦位回転させている。６は内反する平口縁で、先の３と同一個体となる口縁部である。口縁以下に縦位回転のＬＲの縄文を地文として施し、逆Ｕ字状の文様を太い沈線で描き、蛇行する沈線を部分的に垂下させている。７・８は内反する平口縁で、口縁下を無文帯とし、その下に沈線で逆Ｕ字状等の文様を描くものであり、７には地文に縄文が施されている。９は内反する平口縁で、口縁下を無文帯とし、低い隆帯で文様帯を区画すると共に垂下させ、縄文が施されている。10は平口縁となる口縁部に太い沈線を巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に縄文を施すもの。11は平口縁となる口縁部に太い沈線を巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に隆帯と沈線で渦巻き等の文様を描くもの。12は内反する平口縁の口縁下に沈線を巡らせ、以下に縄文を施したもの。13は内反する波状口縁の口縁下に沈線を巡らせ、波頂下に沈線を垂下させて区画し、区画内に縄文を施したもの。14は隆帯で区画された口縁部文様帯内に、沈線で楕円等の文様を描き、内部に縄文を施したもの。15は口縁部文様帯を隆帯で区画し、口縁部文様帯内に渦巻き等の文様を描き、胴部には地文に縄文を施し、２本の懸垂文を垂下させて内部を無文とするもの。17は内反する口縁部下が無文帯となり、隆帯を巡らせて文様帯区画を行った下にＲＬの縄文を縦位に施し、蛇行する沈線を垂下させている。また、欠損してはいるが、橋状となる把手が付くようであり、双耳壺の可能性がある。18は口縁部文様に沈線で渦巻き等の文様を描き、懸垂文を垂下させるもので、地文に縄文が施されている。19・20は胴部に直線的な沈線の懸垂文で区画され、区画内にＲＬの縄文を縦位に施したもの。21は胴部に直線的な低い隆帯の懸垂文で区画され、区画内にＬＲの縄文を縦位に施したもの。22・27・28は同一個体となる土器で、胴部に直線的な懸垂文を垂下させて文様区画をすると共に、Ｕ字状および逆Ｕ字状の文様を沈線で描く。さらに、区画内には縦位回転のＬＲの縄文を施したもの。23・25・26は胴部に直線的な沈線の懸垂文で区画され、区画内にＲＬの縄文を縦位に施したもの。24は胴部に直線的な沈線の懸垂文で区画され、区画内にＬＲの縄文を縦位に施したもの。29は口縁部文様に隆帯で渦巻き等の文様を描き、その下に細い沈線を斜位に施すもの。30・31は胴部に細い沈線を縦位に施すもの。32は胴部に沈線で懸垂文を垂下させて区画し、区画内に刺突状の短沈線を充填するもの。33は胴部に刺突を施したもので、34は底部の底面に刺突が施されたものである。35は胴部に２条の沈線が巡るも

の。36は胴部に幾何学的な文様等を沈線で描き、区画された内部に縄文が施されたもの。37は胴部に幾何学的・渦巻き状の文様等を沈線で描き、区画された内部に縄文が施されたもの。これらの内、4・16は中期の阿玉台式土器、1～3・5～15・17～34は中期の加曽利E式土器であるが、33はその特徴から三十稲葉式土器の可能性が高い。35～37は後期の堀之内式土器である。

〈石器〉

出土した石器には、石匙が1点、スクレイパーが3点、打製石斧が11点、磨製石斧が1点、石核が2点、敲石が1点、磨石が9点、凹石が13点、多孔石が1点、石棒が1点の計43点ある。これらの石器に使用される石材には、石匙に珪質頁岩が使用され、スクレイパーに珪質頁岩・細粒輝石安山岩の2種類が使用されている。打製石斧には硬質泥岩が8点と最も多く、次いで珪質頁岩・黒色頁岩・粗粒輝石安山岩が1点づつ使用されている。磨製石斧には変玄武岩が使用されている。石核には硬質泥岩と細粒輝石安山岩の2種類がある。敲石には粗粒輝石安山岩が使用されている。磨石は全て粗粒輝石安山岩によるものである。凹石も磨石と同様に粗粒輝石安山岩を多用するが、1点だけ牛伏砂岩を使用しているものがある。多孔石には粗粒輝石安山岩が使用されている。石棒にも粗粒輝石安山岩が使用されている。石匙を除くスクレイパーは不定型なものが主で、打製・磨製石斧では欠損品が多い。54・55の石核は、その形状があたかも船底形石器を思わせるが、剥片剥離の状態は全く異なる。56の敲石では、下端部に顕著な敲打痕がみられる。磨石としたものの内、60～62・64の側面には顕著な磨面を有する。また、凹石とした65～67の側面にも、顕著な磨面を有している。79の多孔石は、片面だけに孔を有する。石棒とした80は、部分的な破片である。

〈石製品〉

石製品が3点ほど出土している。81の石材には緑色片岩が使用され、扁平な楕円状の形状を呈し、側縁を含めた全体を丁寧に研磨している。82も81と同様で、石材には緑色片岩が使用され、扁平な楕円状の形状を呈し、側縁を含めた全体を丁寧に研磨しているが、81よりやや研磨が粗い。83は石材に黒色片岩が使用され、断面が楕円となる棒状に近い形状を呈し、全体に粗く研磨されているが、両端部が潰れている。

Ｊ５号住居跡（第43・44図、表6）

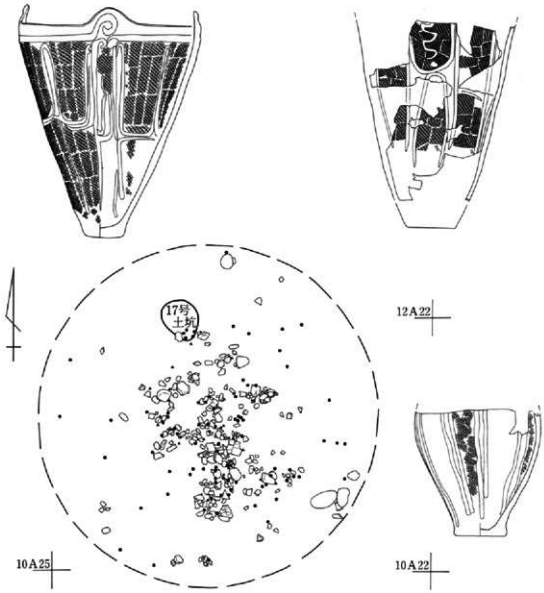
位置　本住居跡は、台地のほぼ中央部の平坦面にあり、10・11A22グリッドに位置する。本住居跡の西側にはＪ４号住居跡が隣接する。

概要　本住居跡は、縄文時代中・後期の遺物を主体に出土させる基本土層Ⅴ層の上位から出土した遺物集中５を指す。本住居遺物となる遺物集中５の下位に遺物集中８が存在するが、層序的に上位と下位という点や、下位の遺物集中をなす時期が前期中葉であることから区分できる。遺構確認および調査途中での住居プランは不明確で、最後まで住居プランは確認できなかった。遺物の出土量は少なく散漫であるが、Ｊ４号住居跡と同様に考え、集中５を住居跡と判断した。また、住居範囲は、遺物集中５の分布範囲を想定できるものと考えられるが、遺物集中５の東側についてはグリッド取り上げしてしまったことから詳細は不明。床面、炉跡等の施設は確認されていない。

構造　詳細は不明。

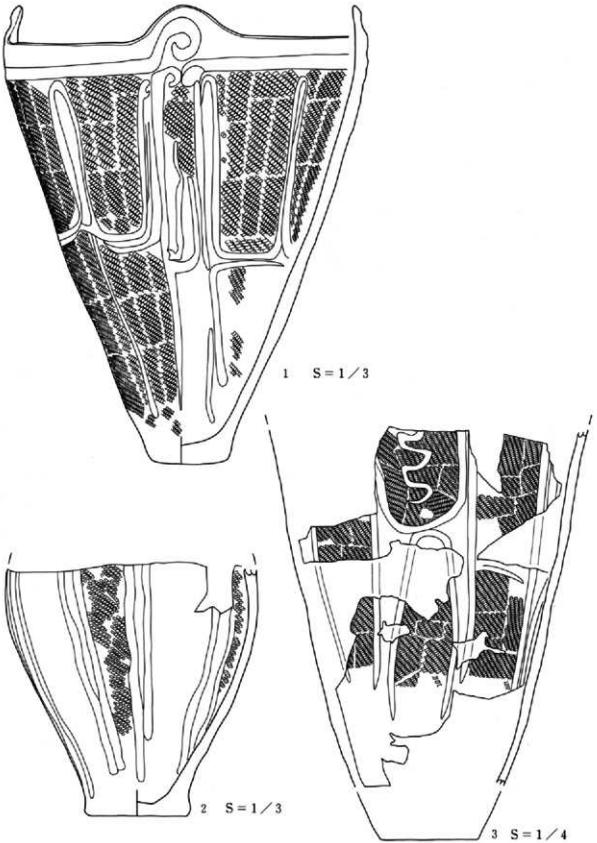
規模　詳細は不明であるが、第43図に示した遺物分布を含めた東側に想定できる。

遺物　本住居跡から出土した遺物には、遺物集中５としたものが伴う。出土状況は、散漫で出土量は少ない。

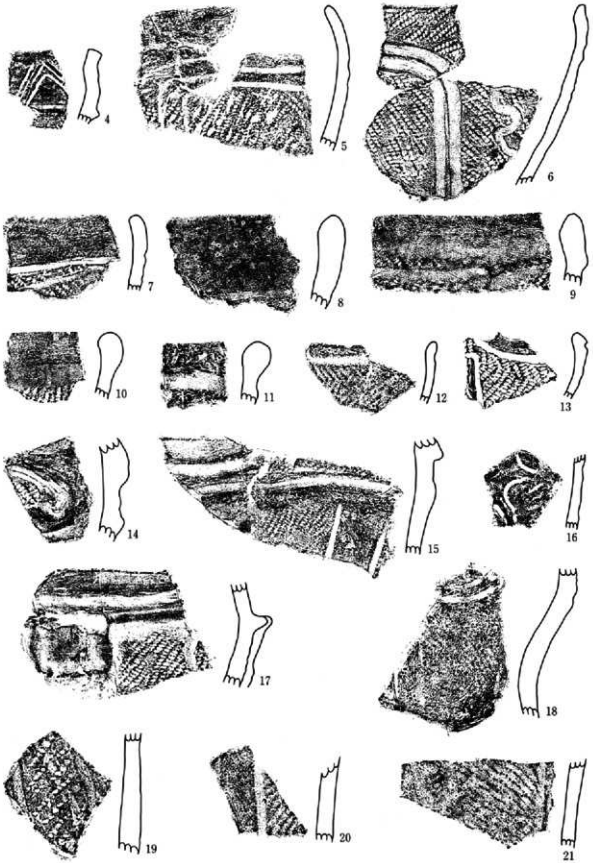


S＝1／60

第36図　Ｊ４号住居跡遺物分布図

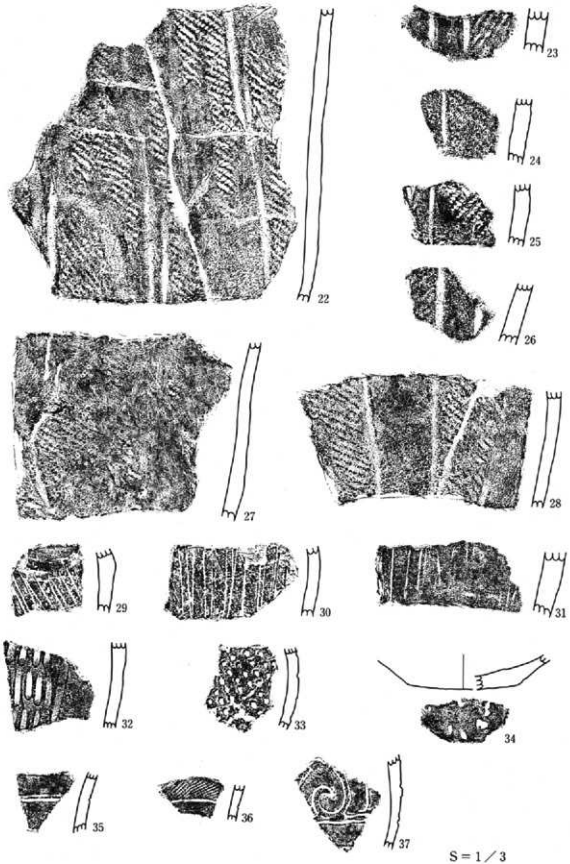


第37図　J 4 号住居跡出土遺物(1)

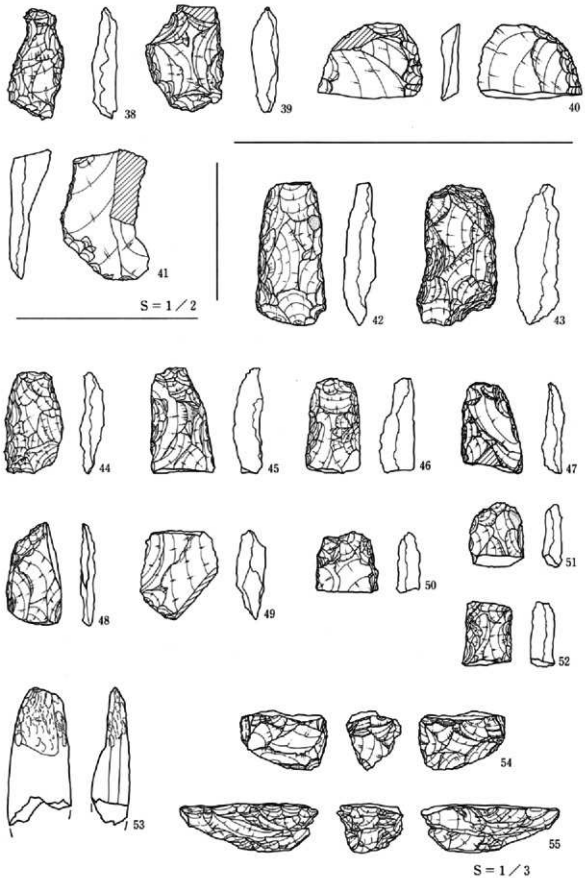


S＝1／3

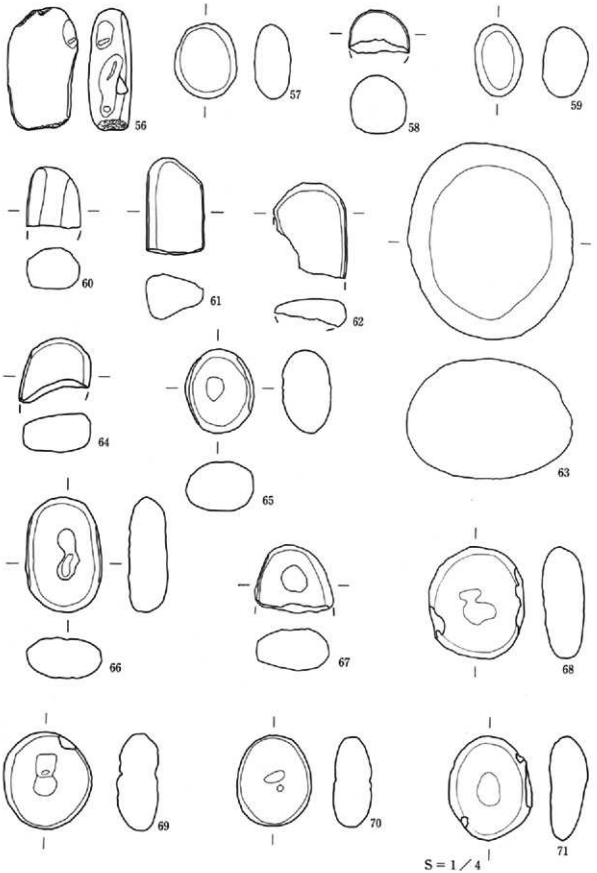
第38図　Ｊ４号住居跡出土遺物(2)



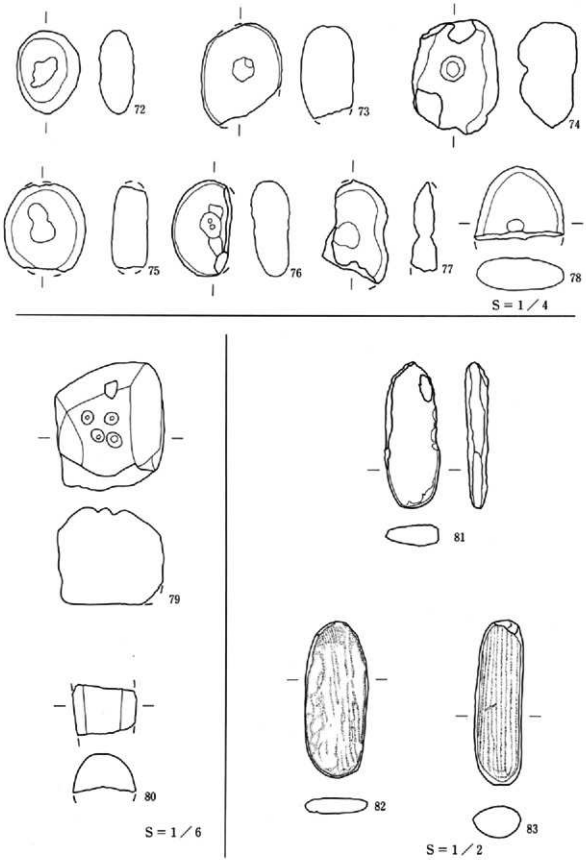
第39図　Ｊ４号住居跡出土遺物(3)



第40図　Ｊ４号住居跡出土遺物(4)



第41図　Ｊ４号住居跡出土遺物5)



第42図　Ｊ４号住居跡出土遺物(6)

表5　J4号住居跡出土石器計測表

遺物No	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	遺物No	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
38	石匙	珪質頁岩	5.9	3.1	20.5	61	磨石	粗粒輝石安山岩	(10.2)	6.1	440.0
39	スクレイパー	細粒輝石安山岩	5.6	4.1	32.6	62	磨石	粗粒輝石安山岩	(10.1)	(7.8)	240.0
40	スクレイパー	珪質頁岩	4.0	5.5	23.2	63	磨石	粗粒輝石安山岩	20.5	17.5	6600.0
41	スクレイパー	珪質頁岩	6.8	4.7	42.1	64	磨石	粗粒輝石安山岩	(6.8)	7.5	250.0
42	打製石斧	硬質泥岩	11.2	5.6	182.1	65	磨石	粗粒輝石安山岩	8.9	7.2	460.0
43	打製石斧	硬質泥岩	9.0	6.4	277.9	66	凹石	粗粒輝石安山岩	12.2	8.1	700.0
44	打製石斧	硬質泥岩	8.0	4.6	62.5	67	凹石	粗粒輝石安山岩	(7.3)	8.3	360.0
45	打製石斧	硬質泥岩	(8.3)	5.1	86.0	68	凹石	粗粒輝石安山岩	11.9	10.0	820.0
46	打製石斧	黒色頁岩	7.4	4.3	107.6	69	凹石	粗粒輝石安山岩	10.3	9.4	510.0
47	打製石斧	硬質泥岩	(7.2)	4.7	63.0	70	凹石	粗粒輝石安山岩	9.6	8.0	500.0
48	打製石斧	硬質泥岩	8.1	4.3	49.2	71	凹石	粗粒輝石安山岩	11.1	8.8	480.0
49	打製石斧	珪質頁岩	7.0	6.1	99.6	72	凹石	粗粒輝石安山岩	8.8	6.7	290.0
50	打製石斧	硬質泥岩	(4.8)	4.9	58.7	73	凹石	粗粒輝石安山岩	(10.7)	8.5	720.0
51	打製石斧	硬質泥岩	5.0	4.3	34.1	74	凹石	粗粒輝石安山岩	12.2	9.2	820.0
52	打製石斧	粗粒輝石安山岩	(5.1)	3.9	52.9	75	凹石	粗粒輝石安山岩	(9.3)	8.6	500.0
53	磨製石斧	変玄武岩	(10.8)	5.0	207.7	76	凹石	粗粒輝石安山岩	10.2	(6.4)	370.0
54	石核	硬質泥岩	4.6	6.8	141.9	77	凹石	牛伏砂岩	(9.9)	(6.9)	170.0
55	石核	細粒輝石安山岩	10.9	3.8	214.8	78	凹石	粗粒輝石安山岩	(7.8)	9.5	340.0
56	敲石	粗粒輝石安山岩	12.9	7.3	710.0	79	多孔石	粗粒輝石安山岩	20.0	17.5	8000.0
57	磨石	粗粒輝石安山岩	7.9	6.5	290.0	80	石棒	粗粒輝石安山岩	(8.0)	(10.0)	550.0
58	磨石	粗粒輝石安山岩	(4.5)	6.4	240.0	81	石棒	緑色片岩	7.7	3.0	39.8
59	磨石	粗粒輝石安山岩	7.6	5.1	260.0	82	石製品	緑色片岩	8.2	3.4	39.7
60	磨石	粗粒輝石安山岩	(6.5)	5.7	230.0	83	石製品	黒色片岩	7.7	2.5	57.0

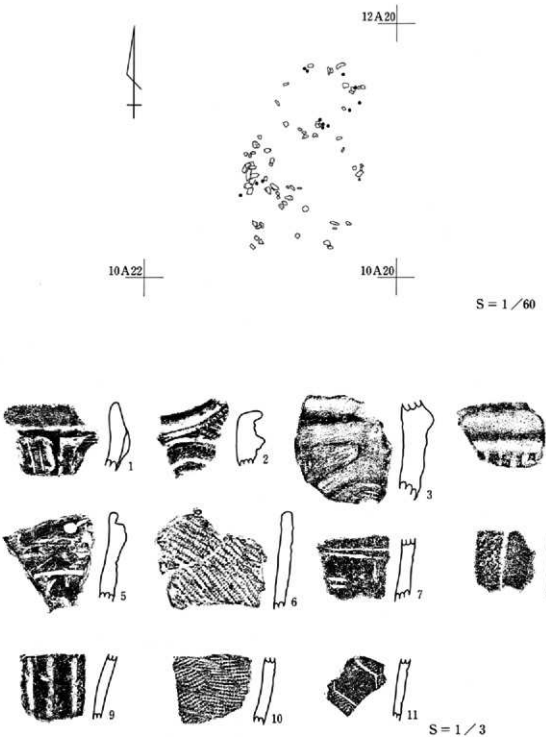
以下、個別に説明する。

〈土器〉

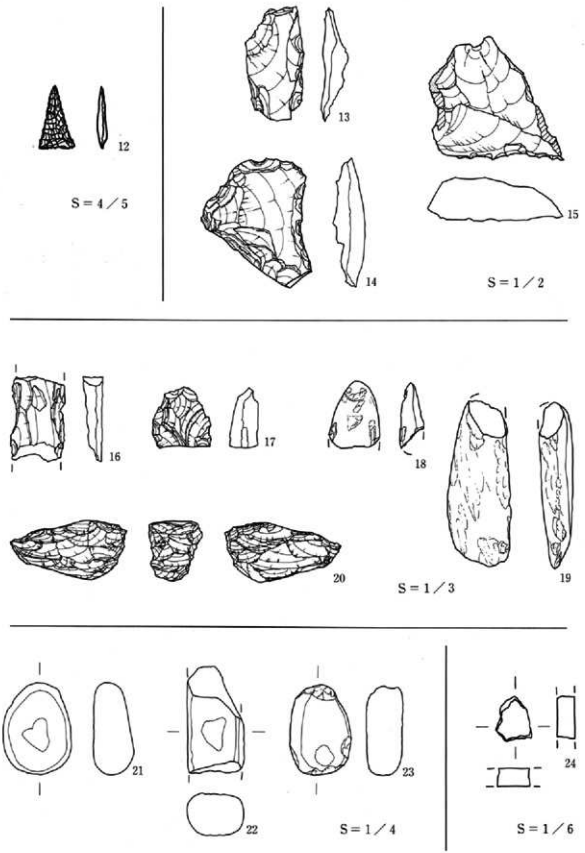
1は平口縁となる口縁部に、隆帯で口縁部文様帯を区画し、区画内に隆帯で渦巻き等の文様を描くと共に、縦位の沈線を施すもの。2は波状口縁となる口縁部に、隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、隆帯間に押し引き沈線による文様を描くもの。3は口縁部に隆帯を巡らせて区画し、その下に微粒帯で曲線的な文様を描くもの。4は平口縁となる口縁下に隆帯で区画し、区画内に縦位の沈線を施すもの。5は平口縁となる口縁に突起をもち、突起部に刺突を有する。口縁下には、沈線を1条巡らせている。6は胎土に繊維を含む土器で、口縁下に0段多条によるRLの縄文を施したもの。7は胴部に2本単位の沈線を巡らせるもの。8は胴部に直線的な沈線の懸垂文を垂下させ、区画内にRLの縄文を縦位に施したもの。9は胴部に直線的な懸垂文を3本垂下させたもの。10は胴部にLRの縄文を施すものである。11は胴部に沈線で幾何学的な文様を描き、区画内に縄文を施した土器である。これらの内、6は前期の有尾式土器、2は中期の勝坂式土器、1・3・4・8・9は中期の加曽利E式土器、11は後期の堀之内式土器である。

〈石器〉

出土した石器には、石鏃が1点、スクレイパーが3点、打製石斧が2点、磨製石斧が2点、石核が1点、敲石が1点、凹石が2点、石皿が1点の計13点ある。これらの石器に使用される石材には、石鏃にチャートが使用され、スクレイパーに珪質頁岩・黒色頁岩の2種類が使用されている。打製石斧には珪質頁岩・黒色頁岩が使用されている。磨製石斧には変玄武岩が使用されている。石核には黒色頁岩が使用され、敲石には粗粒輝石安山岩が使用されている。凹石は2点共に粗粒輝石安山岩を使用している。石皿にも粗粒輝石安山岩が使用されている。スクレイパーは不定型なものが主で、打製・磨



第43図　Ｊ５号住居跡遺物分布図・出土遺物(1)



第44図　J 5号住居跡出土遺物(2)

表6　Ｊ５号住居跡出土石器計測表

遺物No	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
12	石鏃	チャート	2.0	1.2	0.4
13	スクレイパー	珪質頁岩	6.0	3.1	22.7
14	スクレイパー	黒色頁岩	6.8	5.8	55.6
15	スクレイパー	珪質頁岩	4.6	7.1	90.1
16	打製石斧	珪質頁岩	(6.6)	4.3	47.9
17	打製石斧	黒色頁岩	(4.8)	4.7	51.9
18	磨製石斧	変玄武岩	(5.2)	(4.1)	46.7
19	磨製石斧	変玄武岩	(13.0)	5.0	238.1
20	石核	黒色頁岩	9.2	4.6	199.8
21	凹石	粗粒輝石安山岩	9.7	7.2	420.0
22	凹石	粗粒輝石安山岩	(11.3)	6.0	460.0
23	敲石	粗粒輝石安山岩	9.5	6.5	366.0
24	石皿	粗粒輝石安山岩	(7.3)	(5.8)	190.0

製石斧では欠損品のみである。石核とした20は、先のＪ４号住居跡で出土している第40図54・55と同様の石核で、その形状があたかも船底形石器を思わせるが、剝片剝離の状態は全く異なる。23の敲石では、上下の両端部に顕著な敲打痕がみられる。石皿とした24は、皿面の部分的な破片である。

Ｊ６号住居跡（第45～53図、表７）

位置　本住居跡は、台地のほぼ中央部の平坦面東側にあり、７～10Ａ18～21グリッドに位置する。本住居跡の西側にはＪ１号住居跡が隣接する。また、29号土坑と重複する。

概要　本住居跡の北側上位には、縄文時代中期の住居跡であるＪ５号住居跡（遺物集中５）が存在し、その下位に出土した遺物集中６と遺物集中８の分布範囲が、ローム層上面で検出された本住居跡の壁周溝の範囲と丁度重なる。このことから、本住居に伴う遺物は遺物集中６・８であると判断された。遺構確認及び調査途中での住居プランは不明確で、ローム層上面での周溝検出まで判別できなかった。ただ、遺物の出土のあり方は、Ａ20ラインのベルトを挟んだ東西両側に集中し、下位ほどその集中の度合いが限定される状況を呈する等、住居跡の存在を予測させていた。これらの遺物集中範囲内での住居覆土は、粘質な黒褐色土であり、住居の床面の確認はできなかった。また、炉跡も確認されていない。ローム層上面で検出された壁周溝は、南西側、南東側、北東側の三辺でコ字状を呈し、北西側では検出されていない。周溝内部には数基のピットが検出されているが、主柱穴は判然としない。さらに、本住居と重複する29号土坑との新旧関係は、不明である。

構造　壁周溝はローム層に達しているが、住居の床面は確認されていない。炉跡も同様である。ピットは検出されているが、柱穴は判然としない。壁周溝はローム層まで掘り込まれ、南西側、南東側、北東側の三方向に検出されコ字状を呈し、掘り込みの浅くなる北西側の辺は検出されていない。なお、南東側では壁周溝が三重となり、北東側では一部が二重となっている。

規模　住居は北西方向に長軸をもつ長方形を呈するが、南東側の辺より北西側の辺の方がやや短くなる台形状となる。壁周溝から計測した住居規模は、長軸となる南東方向で6.2mを測り、短軸側の南東側辺で5.5m、北西側辺で4.7mを測る。周溝は幅20cm前後で巡り、深さは最も深い部分で30cmを測ることができ、北西側ほど浅くなる。ピットは径30～40cmで、40cm前後の深さを測る。

遺物　本住居跡から出土した遺物には、遺物集中６・８としたものが伴う。遺物は住居全体に分布し、比較的に下位（床面に近い位置）に大形片が多く出土した。遺物量は多い。以下、個別に説明する。

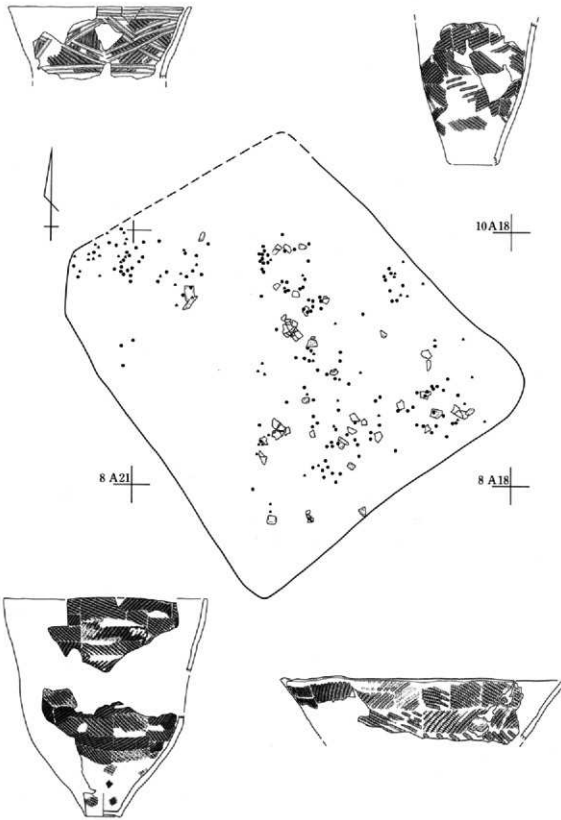
〈土器〉

１～59は胎土に繊維が含まれている土器である。１は口縁が朝顔状に開く平口縁となり頸部がくびれる深鉢土器の口縁部で、口縁以下にＬＲとＲＬによる羽状縄文が施された土器。２は平口縁となる頸

部のくびれが弱い深鉢土器で、口縁以下にＬＲ（０段多条）とＲＬによる羽状縄文が施されているもの。３は深鉢土器の胴部下半で、胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。４は平口縁となり頸部がくびれる深鉢土器の口縁部で、口縁下と胴部に半裁竹管による平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文を口縁部文様として描いている。なお、口縁部には地文としてＬＲとＲＬ（０段多条）による羽状縄文が施されている。５は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突で口縁直下の文様帯を構成し、その下に半裁竹管による平行沈線および爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文を主に鋸歯文で口縁部文様を描いたもので、Ｊ３号住居跡出土の第27図10と同一個体の可能性が高い。６～９は波状口縁となる口縁下に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の口縁部文様を描くもので、７の波頂下には小さな菱形文も付加されている。10は平口縁となる口縁下に、半裁竹管による平行沈線で菱形文等の口縁部文様を描くもの。11と12は同一個体と思われる土器で、波状口縁の波底ないし平口縁の口縁に小突起をもつものであり、口縁以下にＬＲ（０段多条）とＲによる羽状縄文が施されている。13は波状口縁となる口縁以下に、ＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。14・15は平口縁となる口縁以下に、ＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。16は平口縁となる口縁以下に、Ｒの縄文が施されている。17は平口縁となる口縁以下に、ＲＬ（０段多条）とＬによる羽状縄文が施されている。18は口縁部文様に、櫛歯状工具による連点状刺突と条線で菱形等の文様を描くもの。19は口縁部文様に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形等の文様を描くもの。20～25は頸部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせて文様帯区画し、胴部に縄文を施す。20・23の胴部には、０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文を施したもの。22・24の胴部には、ＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。25の胴部には、ＬとＲによる羽状縄文が施されている。26・27・29・34・35・39は、胴部にＬＲ（０段多条）とＲＬによる羽状縄文が施されているもの。28・30・31・33・38・41・44・46は、胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されているもの。32・45の胴部には、ＬＲとＲによる羽状縄文が施されている。36は胴部にＲＬ（０段多条）とＬによる羽状縄文が施されている。37は胴部にＬとＲによる羽状縄文が施されている。42の胴部には、ＬＲ（０段多条）へ細いｌを２本１単位として２本付加させた付加条縄とＲＬ（０段多条）へ細いｒを２本１単位として２本付加させた付加条縄による羽状縄文が施されている。43は胴部にＲＬ（０段多条）とＬＲによる羽状縄文が施されている。47は胴部に０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文が施されている。48・49は胴部にＲＬの縄文を施したもの。50は胴部にＬＲの縄文を施したもの。51は胴部にＬの縄文を施している。52は胴部に０段多条によるＲＬの前々段反撚り縄を施している。53は胴部にＬＲ（０段多条）へ細いｌを２本１単位として２本付加させた付加条縄を施している。54は口縁部文様に、櫛歯状工具による連点状刺突と条線で菱形等の文様を描くもの。55～59は底部であるが、55・56のように上げ底気味となるものもある。これらは前期の有尾式土器と考えられるが、４のような縄文を地文とする土器は有尾式土器とは異なる可能性がある。

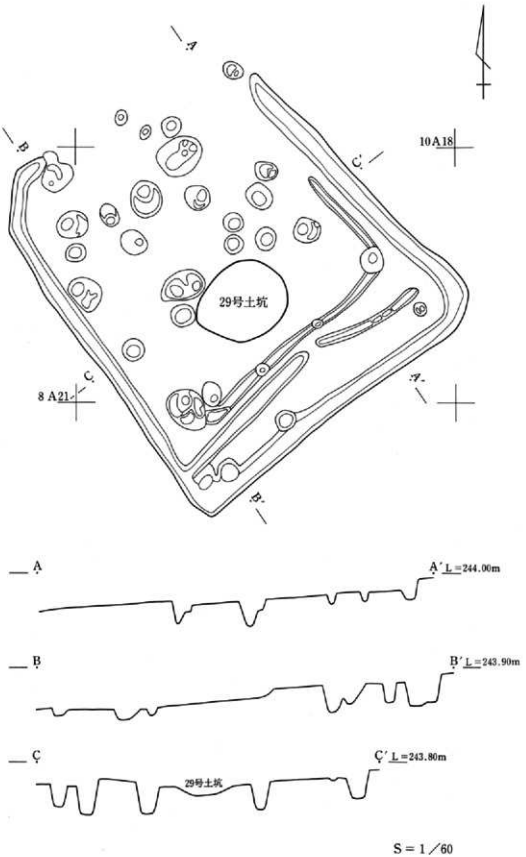
〈石器〉

出土した石器には、石鏃が１点、スクレイパーが６点、打製石斧が３点、磨製石斧が２点、磨石が２点、凹石が14点、石皿が１点の計29点ある。これらの石器に使用される石材には、石鏃にチャートが使用され、スクレイパーには黒色頁岩が５点と珪質頁岩１点の２種類が使用されている。打製石斧には硬質泥岩が２点と珪質頁岩が１点使用されている。磨製石斧には変玄武岩と蛇紋岩の２種類の石材が使用されている。磨石は緑色片岩と粗粒輝石安山岩が使用されている。凹石には粗粒輝石安山岩を

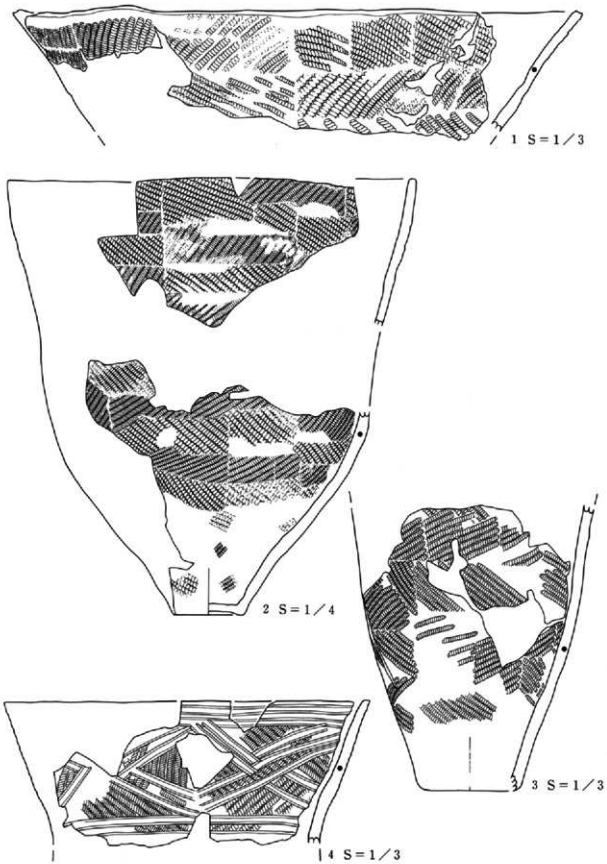


S＝1／60

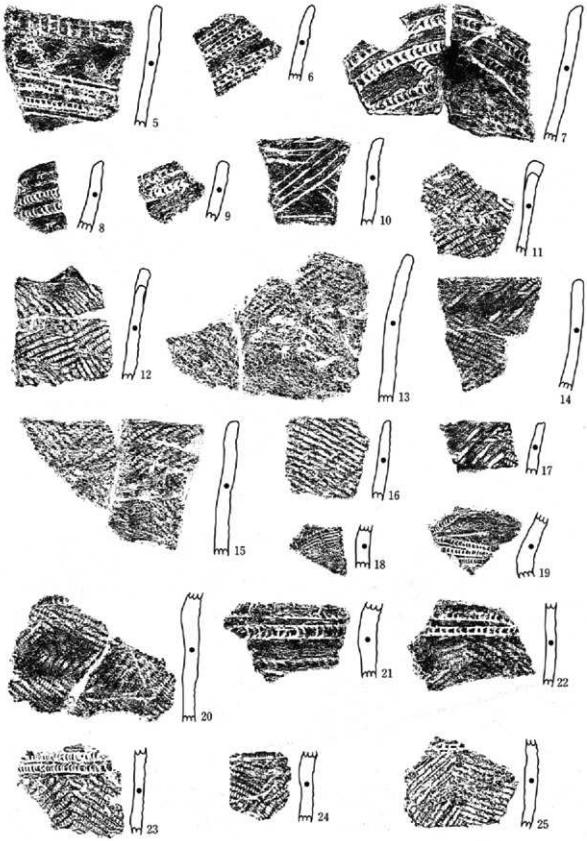
第45図　Ｊ６号住居跡遺物分布図



第46図　Ｊ６号住居跡平面図

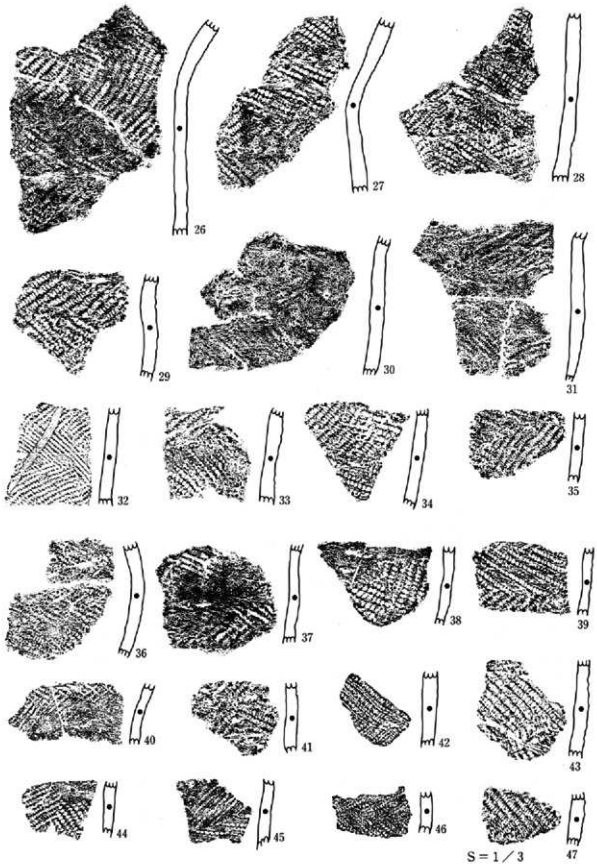


第47図　Ｊ６号住居跡出土遺物(1)

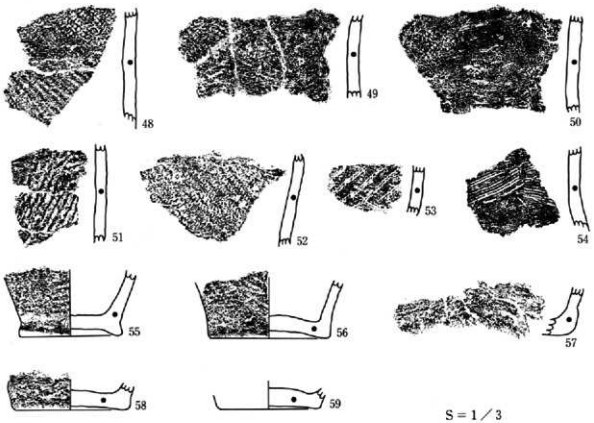


S＝1／3

第48図　Ｊ６号住居跡出土遺物(2)



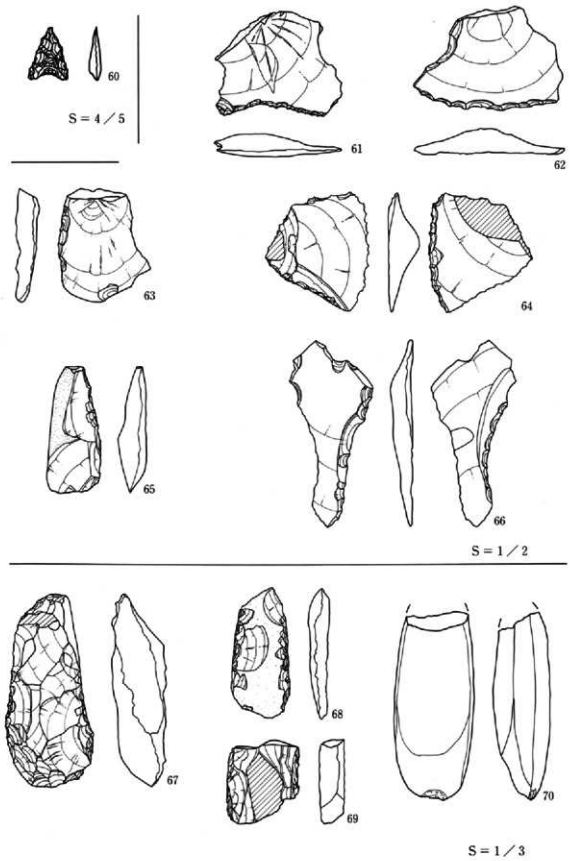
第49図　Ｊ６号住居跡出土遺物(3)



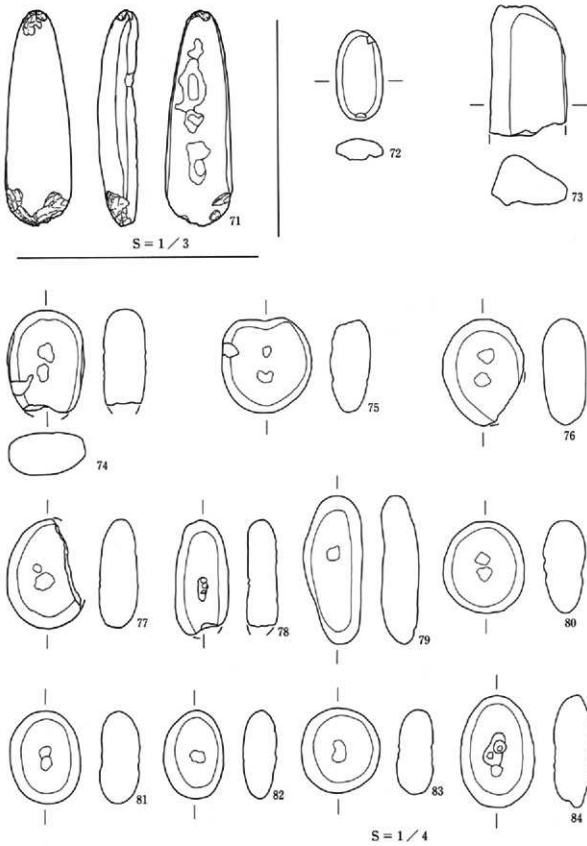
第50図　Ｊ６号住居跡出土遺物(4)

表７　Ｊ６号住居跡出土石器計測表

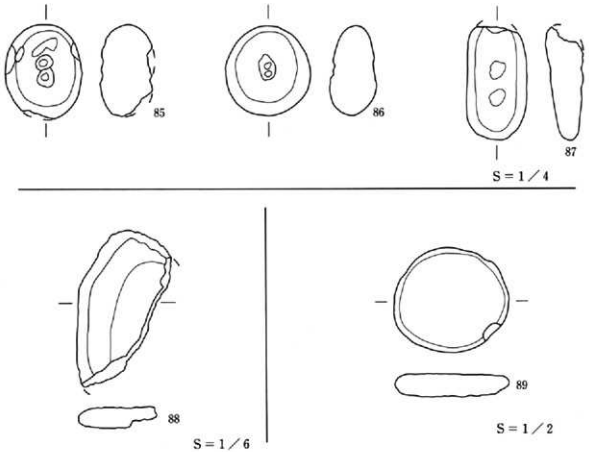
遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
60	石鏃	チャート	1.8	1.3	0.7	75	凹石	粗粒輝石安山岩	10.0	9.5	560.0
61	スクレイパー	黒色頁岩	5.5	6.7	32.1	76	凹石	粗粒輝石安山岩	11.2	8.6	590.0
62	スクレイパー	黒色頁岩	5.5	7.9	47.3	77	凹石	粗粒輝石安山岩	11.6	(7.7)	540.0
63	スクレイパー	黒色頁岩	6.0	4.9	28.5	78	凹石	粗粒輝石安山岩	(12.1)	5.6	340.0
64	スクレイパー	珪質頁岩	6.2	5.5	31.8	79	凹石	粗粒輝石安山岩	15.6	6.3	550.0
65	スクレイパー	黒色頁岩	6.8	2.8	32.1	80	凹石	粗粒輝石安山岩	9.7	8.6	570.0
66	スクレイパー	黒色頁岩	9.8	4.5	34.1	81	凹石	粗粒輝石安山岩	9.8	7.5	460.0
67	打製石斧	硬質泥岩	15.1	7.0	477.3	82	凹石	デイサイト	9.3	6.4	290.0
68	打製石斧	硬質泥岩	10.2	4.7	90.8	83	凹石	粗粒輝石安山岩	9.0	8.4	460.0
69	打製石斧	珪質頁岩	(7.6)	5.7	101.1	84	凹石	粗粒輝石安山岩	11.8	7.7	480.0
70	磨製石斧	変玄武岩	(14.8)	6.3	693.1	85	凹石	粗粒輝石安山岩	(9.9)	8.1	550.0
71	磨製石斧	蛇紋岩	16.9	5.3	417.9	86	凹石	粗粒輝石安山岩	9.5	9.1	570.0
72	磨石	緑色片岩	9.6	5.0	170.0	87	凹石	粗粒輝石安山岩	(11.8)	6.2	420.0
73	磨石	粗粒輝石安山岩	(13.7)	8.2	850.0	88	石皿	緑色片岩	(24.8)	(15.0)	1700.0
74	凹石	粗粒輝石安山岩	(10.7)	8.1	670.0	89	石製円盤	黒色片岩	6.1	5.6	63.4



第51図　Ｊ６号住居跡出土遺物(5)



第52図　Ｊ６号住居跡出土遺物(6)



第53図　Ｊ６号住居跡出土遺物(7)

多用するが、１点だけデイサイトを使用しているものがある。石皿には緑色片岩が使用されている。スクレイパーは不定型なものが主で、磨製石斧の71では刃部に剥離をもつ。また、71の裏面には数カ所の孔を有し、凹石としての使用の跡がみられる。磨石とした72･73の側面には顕著な磨面を有する。また、凹石とした74の側面にも、顕著な磨面を有している。88の石皿の皿面は、よく研磨されている。

〈石製品〉

石製品には、89の石製円盤が１点出土している。石材には黒色片岩が使用され、扁平な円形を呈している。側縁を含めた全体を、丁寧に研磨している。

Ｊ９号住居跡（第54～56図、表８）

位置　本住居跡は、台地のほぼ中央部の平坦面西側にあり、７・８Ａ32～34グリッドに位置する。本住居跡の東方にはＪ２号住居跡がある。

概要　本住居跡の位置は、１号方形周溝墓の内側にあり、住居の北側を１号方形周溝墓の周溝で壊されている。ローム層上面での遺構確認の際に壁周溝状の溝が検出されたことから住居跡と判断した。しかし、本住居跡に伴う遺物は、他での遺物集中といった出土状況は見られず、そのためグリッド遺物としての取り上げを行ったことにより平面分布は不明である。なお、本住居遺物として図示したものは、７～９Ａ30～34グリッド内に出土した遺物を掲載した。住居の床面・炉跡は、確認されていない。ローム層上面で検出された壁周溝は、西側、南側、東側の三辺でコ字状を呈し、北側は１号方形周溝墓の周溝内のため検出されていない。周溝内部には数基のピットが検出されているが、主柱穴は判然としない。

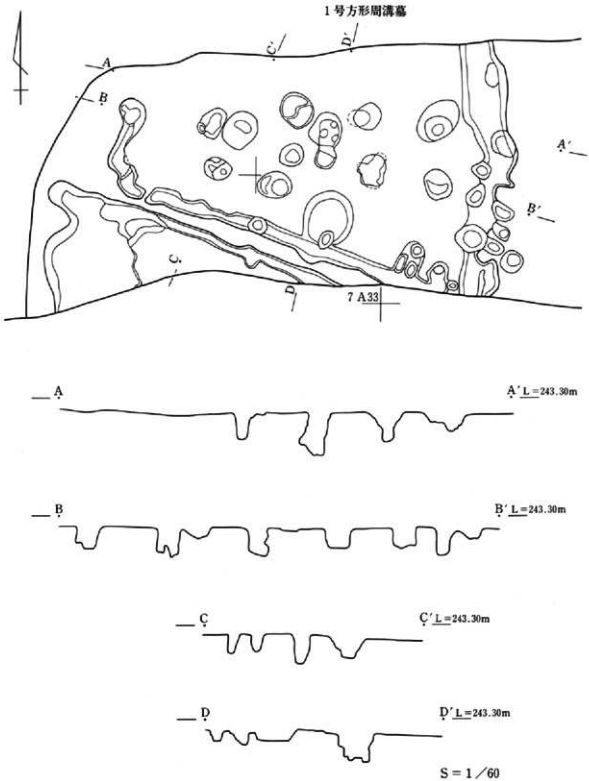
構造　壁周溝はローム層に達しているが、住居の床面は確認されていない。炉跡も同様である。ピットは検出されているが、柱穴は判然としない。なお、南辺の南側にも壁周溝状の溝が検出されており、本住居に伴う可能性もあるが、本住居の南側に隣接する別な住居の可能性もある。

規模　住居は東西方向に長軸をもつ長方形を呈するが、西側の辺の方がやや短くなる台形状となる。壁周溝から計測した住居規模は、長軸となる東西方向で6.5ｍを測り、短軸側の東側辺で最長４ｍを測ることができる。周溝は幅20～50cm前後で巡り、深さは15cmを測る。ピットは径30～40cmで、30～50cm前後の深さを測る。

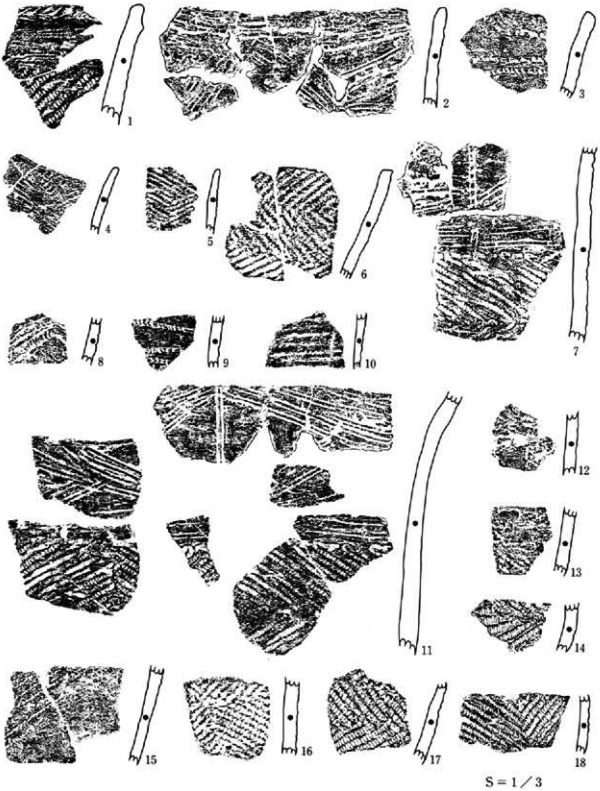
遺物　本住居跡から出土した遺物は明確ではないが、７～９Ａ30～34グリッド内に出土した遺物を最も可能性のある遺物として第55・56図に掲載した。以下、個別に説明する。

〈土器〉

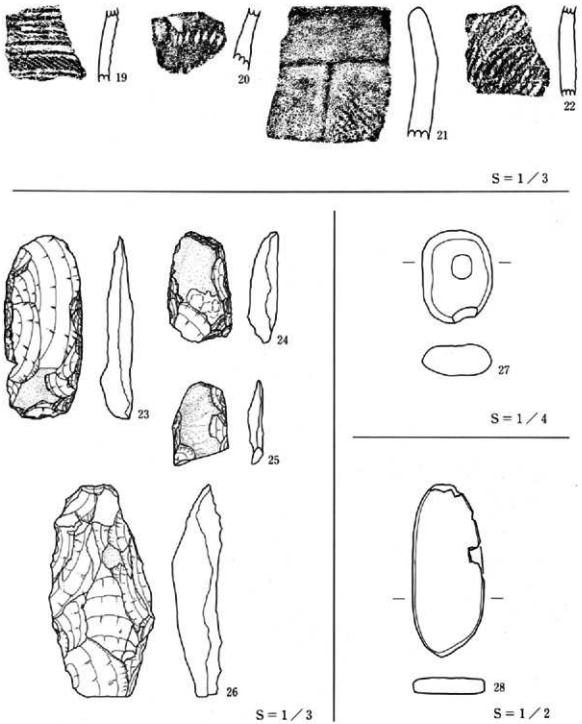
１～18は胎土に繊維が含まれている土器である。１は平口縁となる口縁下に隆帯を巡らせて文様区画し、口縁直下には横位に矢羽根状の短沈線を施すと共に円形刺突をもつ。隆帯下にはＲの縄を３本１組とした撚糸側面圧痕を横位に数条施して口縁部文様とし、胴部には０段多条によるＬＲの縄文が施されている。２は波状口縁の波底部であり、口縁下に半裁竹管による平行沈線を数条巡らせ、菱形ないし鋸歯状等の口縁部文様を描くもの。なお、この２は11と同一個体となる可能性もある。３は平口縁となる口縁下に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の口縁部文様を描くもの。４・５は同一個体となる土器で、波状口縁となる口縁以下にＬとＲによる羽状縄文が施されている。６は平口縁となる口縁以下に、ＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。７は口縁部文様に半裁竹管による平行沈線で菱形文を描き、菱形文の中央に爪形刺突をもつ平行沈線を縦位に描いている。胴部には０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文が施され、一部に原体端部もみられる。なお、この７も11と同一個体となる土器であるが、口縁部文様に爪形刺突を加えるという差異がある。８～10・15は口縁部文様に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形等の文様を描くもの。11は口縁部文様に半裁竹管による平行沈線で菱形文を描き、菱形文の中央に平行沈線を縦位に垂下させている。胴部には０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文が施され、一部に原体端部もみられる。なお、11は７と同一個体となる土器で、菱形文内の縦位沈線に爪形刺突をもたない波頂下文様と考えられる。12は口縁部文様に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形等の文様を描き、胴部に縄文を施すもの。13・14・16～18は胴部に縄文が施される土器である。13にはＲＬの縄文が施されている。14にはＬＲ（０



第54図　Ｊ９号住居跡平面図



第55図　Ｊ９号住居跡出土遺物(1)



第56図　Ｊ９号住居跡出土遺物(2)

表８　Ｊ９号住居跡出土石器計測表

遺物No	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	遺物No	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
23	打製石斧	硬質泥岩	14.4	6.1	234.6	26	打製石斧	細粒輝石安山岩	16.7	8.4	530.8
24	打製石斧	硬質泥岩	8.7	5.1	122.2	27	凹石	粗粒輝石安山岩	9.8	7.4	350.0
25	打製石斧	硬質泥岩	(6.6)	4.4	37.2	28	石製品	緑色片岩	(9.1)	(3.8)	57.3

段多条）とＲＬによる羽状縄文が施されている。16にはＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。17・18には０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文が施されている。19は胴部に地文としてＲＬの縄文が施され、胴部文様に刻みをもつ浮線文（細い隆帯）が数条巡らされている。20は胎土に雲母を含み、胴部に爪形刺突と曲線的な隆帯で文様を描くもの。21は平口縁となる口縁下を無文帯とし、微隆帯で口縁部文様体を区画すると共に垂下させて胴部文様を区画する。区画内には縦位回転のＬＲの縄文が施されている。22は胴部にＬの縄文が施される土器である。これらの土器は、１が前期の花積下層式土器、２～18が前期の有尾式土器、19が前期の諸磯式土器、20が中期の阿玉台式土器、21が中期の加曽利Ｅ式土器である。

〈石器〉

出土した石器には、打製石斧が４点、凹石が１点の計５点と少ない。これらの石器に使用される石材には、打製石斧に硬質泥岩が３点と粗粒輝石安山岩が１点使用されている。凹石には粗粒輝石安山岩を使用している。打製石斧とした26は、全体に剝離が粗く、刃部の作出も明確ではないことから、打製石斧の未製品であろうと考えられる。

〈石製品〉

28の石製品が１点出土している。石材には緑色片岩が使用され、扁平な楕円状の形状を呈し、側縁を含めた全体を丁寧に研磨している。

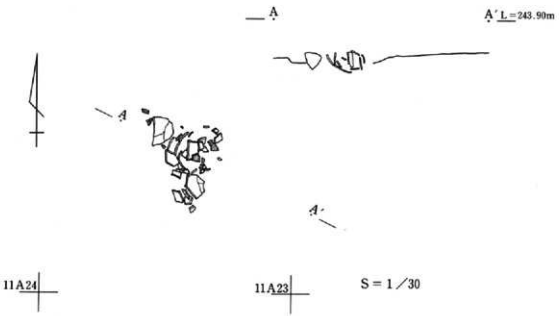
⑵ 埋　甕

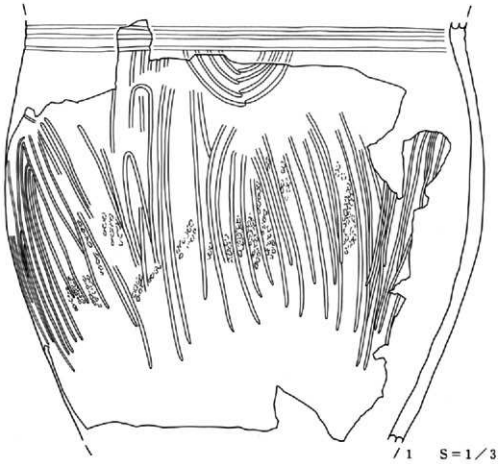
埋甕（第57図）

位置　台地のほぼ中央の平坦面にあり、11Ａ23グリッドに位置する。

概要　Ｊ４号住居跡ないに重複して存在するが、出土した土器から本埋甕は後期の堀之内Ｉ式土器であり、中期の加曽利Ｅ３式期のＪ４号住居跡とは時期が明らかに異なる。この埋甕と時期を共にする遺物は、埋甕の周辺にはほとんどみられず、僅かに包含層からの出土であることから、本埋甕を伴う遺構の存在は考え難い。

遺物　口縁部と底部を欠損する深鉢形土器である。現存部では、頸部がややくびれ、胴部が張る器形を呈している。文様は、頸部に３条の沈線が巡り、胴部文様に４条からなる半円状の文様を基点に下端が開放する弧状沈線が数条単位で描かれている。また、地文に縄文が施されているようであるが、磨り消されているため、僅かに痕跡が観察される。この土器は、文様の特徴から後期の堀之内Ｉ式土器と考えられる。





第57図　埋甕平面図・出土遺物

⑶ 土　坑

1号土坑

位置　10A51グリッドに位置する。

規模　径70cmほどの円形を呈し、底面までの深さは15cmを測る。

概要　覆土には多量の炭化粒・焼土粒を含み、時期は特定できない。

遺物　出土していない。

2号土坑（第61図）

位置　10A45グリッドに位置する。

規模　径1.2m前後のほぼ円形を呈し、底面までの深さは37cmを測る。

概要　時期の特定はできない。

遺物　出土していない。

3号土坑（第61図）

位置　13A44・45グリッドに位置する。

規模　径1.3m前後の不整な円形を呈し、底面までの深さは30cmを測る。

概要　時期の特定はできない。

遺物　出土していない。

4号土坑（第61図）

位置　12A42・43グリッドに位置する。

規模　長軸1.3m、短軸90cmを測る楕円形を呈し、長軸方向を東西にもつ。底面までの深さは39cmを測る。

概要　東側の一部を2号住居跡と重複するが、その新旧関係は堆積した土層から2号住居跡の方が新しい。

遺物　出土していない。

5号土坑（第61図）

位置　10・11A43グリッドに位置する。

規模　径60cm前後の円形を呈し、底面までの深さは24cmを測る。

概要　出土した遺物から、古墳時代初頭期のものと考えられる。

遺物　覆土中より、球胴形となる壺の大形胴部片が1点出土している。

6号土坑（第61図）

位置　6A44グリッドに位置する。

規模　径1.2m前後のほぼ円形を呈し、底面までの深さは19cmを測り、浅い。

概要　時期の特定はできない。

遺物　出土していない。

7号土坑（第61図）

位置　12Ａ33グリッドに位置する。

規模　径90cm前後の円形を呈し、底面までの深さは23cmを測る。

概要　土坑の一部は、調査区外となる。時期の特定はできないが、縄文時代のものと考えられる。

遺物　出土していない。

８号土坑（第61・63図）

位置　10Ａ31グリッドに位置する。

規模　長軸1.2m、短軸１ｍを測るやや楕円形気味な形状を呈し、長軸方向を東西にもつ。底面までの深さは58cmを測る。

概要　試掘トレンチ内で検出されたため、残存状態は悪い。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は少ない。

〈土器〉

１～４の土器の胎土には繊維を含み、１・２は胴部に羽状縄文を施したもの。３は無文地に半裁竹管による爪形刺突が施されたもの。４は胴部に斜行縄文が施された土器である。

９号土坑（第61図）

位置　11Ａ42グリッドに位置する。

規模　径40cm前後の円形を呈し、底面までの深さは39cmを測る。

概要　時期の特定はできないが、縄文時代のものと考えられる。

遺物　出土していない。

10号土坑（第61・63・71図）

位置　12Ａ16グリッドに位置する。

規模　長軸2.7m、短軸2.3mを測る楕円形気味な形状を呈し、長軸方向を北東にもつ。底面までの深さは58cmを測る。

概要　西側の一部を６号住居跡と重複するが、本土坑の方が古い。出土した遺物から、縄文時代のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第63図に示した土器と、第71図に示した石器とがある。

〈土器〉

１～５の胎土には繊維が含まれ、１は口縁部に半裁竹管による平行沈線が巡らされている。２は口縁部以下にＲＬの縄文が施されている。３は頸部に半裁竹管による平行沈線が巡らされ、４は胴部にＲＬの縄文が施され、５は胴部にＲＬとＬＲで羽状縄文が施される土器である。６は地文縄文の胴部に、半裁竹管による平行沈線を数条単位として数段巡らせている。７は口縁部に突起をもち、沈線で楕円状の文様を描く土器である。１～５は前期の有尾式土器、６は前期の諸磯ｂ式土器、７は中期の加曽利Ｅ式土器である。

〈石器〉

打製石斧が２点出土している。２点共に欠損している。

11号土坑（第58・63・64・71図）

位置　8 A27グリッドに位置する。

規模　長軸1.4m、短軸1.0mを測る不整楕円形を呈し、長軸方向を北西にもつ。底面までの深さは71cmを測る。

概要　土坑の西側では底面が広くなる袋状となり、断面形がフラスコ状を呈している。覆土の上位から中位にかけて、多くの遺物が出土している。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第63・64図に示した土器と、第71図に示した石器とがある。

〈土器〉

2は早期の押型文土器で、胴部に山形押型文を縦位施文している。1・3～8の胎土には繊維が含まれる。1は平口縁の深鉢土器で、口径より胴部がやや膨らむ器形を呈し、口縁から胴部にかけて半裁竹管による平行沈線を数条巡らせ、区画された文様帯内に菱形文様を描く。なお、平行沈線は爪形刺突を伴う上半と、沈線のみの下半に分かれ、口縁部文様と胴部文様の差を意識しているものと考えられる。3は波状口縁となる口縁以下にＲＬの縄文を施したもので、4は平口縁の口縁以下にＲＬとＬＲで羽状縄文を施している。5～8は胴部にＲＬとＬＲで羽状縄文を施す土器であり、0段多条の縄が用いられている。これら1・3～8は前期の有尾式土器である。

〈石器〉

凹石が2点、石皿が4点出土している。石皿は全て破損品であるが、4と5は同一個体と考えられる。

12号土坑（第58・64・71図）

位置　9 A27グリッドに位置する。

規模　径76cmほどの不整な円形を呈し、底面までの深さは46cmを測る。

概要　西側に一部を38号土坑と重複するが、その新旧関係は不明。覆土中の上位から中位にかけて、多くの遺物が出土している。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第64図に示した土器と、第71図に示した石器とがある。

〈土器〉

1～8の胎土には繊維が含まれる。1は口縁以下にＲＬとＬＲで羽状縄文を施している。5は半裁竹管による平行沈線を施している。2・6は胴部にＲＬの縄文が施されたものであり、3は直前段合い撚り（太・太・細・細の4本）によるＲＬの縄文が施された土器。4は胴部に0段多条のＲＬとＬＲで羽状縄文を施した土器。7・8は底部片である。これらは前期の有尾式土器である。

〈石器〉

凹石が1点出土している。

13号土坑（第58・64・65図）

位置　9 A24グリッドに位置する。

規模　長軸1.34m、短軸1.0mを測る不整楕円形を呈し、長軸方向を北西にもつ。底面までの深さは52cmを測る。

概要　底面が広くなる袋状となり、断面形はフラスコ状を呈している。覆土の中位から下位にかけて、多くの遺物が出土している。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第64・65図に示した土器である。

〈土器〉

１～12の胎土には繊維が含まれる。１は波状口縁となる口縁部に、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突を施し、口縁部文様に連点状刺突での菱形文等が描かれるものと考えられる。２・３・４は波状口縁となる口縁部の口縁下に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条巡らせるもので、２には波頂下に垂下する文様が見られ、４は菱形文様が描かれるようである。５は口縁部文様に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもの。６は平口縁となる口縁以下にＲＬの縄文を施す土器。７・11は胴部にＬＲの縄文を施し、８・10の胴部にはＲＬとＬＲによる羽状縄文が施されている。９は平口縁の小型土器で、口縁以下にＬの縄文が施されている。12は６単位の波状口縁となる深鉢土器で、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文様を描く。胴部にはＬＲとＲによる羽状縄文が施されている。これらは前期の有尾式土器である。

14号土坑（第61図）

位置　11Ａ36グリッドに位置する。

規模　径80cmほどの円形を呈し、底面までの深さは47cmを測る。

概要　時期の特定はできないが、縄文時代のものと考えられる。

遺物　出土していない。

15号土坑（第61・65図）

位置　12Ａ31グリッドに位置する。

規模　長軸1.41m、短軸1.0mを測ることができ、長軸方向を北西にもつ楕円形を呈すると考えられる。底面までの深さは53cmを測る。

概要　土坑の北側は、調査区外にある。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第65図に示した土器である。

〈土器〉

１～３の胎土には繊維が含まれる。１は口縁部文様に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の文様を描くもの。２は口縁部文様に半裁竹管による平行沈線で文様を描くもの。３は胴部に縄文を施すものである。４は平口縁となる口縁が短く外反し、口縁下は無文で８字状の貼付文をもち、胴部には曲線的な弧状の沈線文が描かれ、縄文が施されている。１～３は前期の有尾式土器であり、４は後期の堀之内Ｉ式土器である。

16号土坑（第59・65・71図）

位置　10Ａ30グリッドに位置する。

規模　径1.1mほどの円形を呈し、底面までの深さは70cmを測る。

概要　断面形がややフラスコ状気味を呈している。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第65図に示した土器と、第71図に示した石器とがある。

〈土器〉

１～５の胎土には繊維が含まれる。１・２は波状口縁となる口縁部に、半裁竹管による爪形刺突をも

つ平行沈線で菱形文等の文様を描くもの。3は胴部にＲＬとＬＲによる羽状縄文が施されている。4は胴部にＬＲの縄文を施した土器。5は底部である。これらは前期の有尾式土器である。

〈石器〉

磨製石斧が1点と、凹石が1点出土している。磨製石斧には孔があり、凹石からの転用ないし、磨製石斧としての欠損後に凹石への転用が考えられる。

17号土坑（第59・65図）

位置　11A23グリッドに位置する。

規模　径70cmほどの円形を呈し、底面までの深さは25cmを測る。

概要　Ｊ4号住居跡と重複し、出土した土器はＪ4号住居跡出土の土器と接合するなど、Ｊ4号住居跡の施設の一つとも考えられる。

遺物　出土した遺物は、第65図に示した土器である。なお、Ｊ4号住居跡出土の土器と接合した土器は、第37図1とした土器の下半部である。

〈土器〉

1の胎土には雲母を含み、胴部に圧痕を巡らす。2は胴部に沈線による懸垂文で区画し、区画内に縄文を施したもの。3は胴部に微隆起で区画し、区画内に縄文を施している。4は無文の胴部である。1は中期の阿玉台式土器で、2～4は中期の加曽利Ｅ式土器である。

18号土坑（第61・66図）

位置　10A23グリッドに位置する。

規模　径90cmほどの円形を呈し、底面までの深さは20cmを測る。

概要　Ｊ1号住居跡の内部にあるが、その新旧関係は不明。出土した遺物から、Ｊ1号住居跡と同じ縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第66図に示した土器である。

〈土器〉

1～7の胎土には繊維が含まれる。1は2単位の大波状口縁となる口縁の波底部に小突起をもち、口縁部文様に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の文様を描くもの。2は波状口縁となる口縁部に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の文様を描くもの。3～6は胴部に0段多条のＬＲとＲＬによる羽状縄文を施すもので、6ではＬＲのみが0段多条が用いられている。7は胴部に0段多条のＲＬが施されている。これらは前期の有尾式土器である。

19号土坑（第61・66図）

位置　10A22グリッドに位置する。

規模　径1.1mほどの円形を呈し、底面までの深さは43cmを測る。

概要　Ｊ1号住居跡の壁周溝と重複するが、土層の堆積状況から本土坑の方が新しく、Ｊ1号住居跡が古い。出土した遺物から、Ｊ1号住居跡と同じ縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第66図に示した土器である。

〈土器〉

１は胎土に繊維を含み、縄文を施したもの。前期の有尾式土器である。

20号土坑（第61・66図）

位置　11A22グリッドに位置する。

規模　径1.1mほどの円形を呈し、底面までの深さは53cmを測る。

概要　Ｊ１号住居跡の壁周溝と僅かに重複するが、その新旧関係は不明。底面が広くなる袋状となり、断面形はフラスコ状を呈している。出土した遺物から、縄文時代のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第66図に示した土器である。

〈土器〉

１～６の胎土には繊維が含まれる。１は口縁以下に縄文が施されるもの。２は口縁部文様に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の文様を描くもの。３・５・６は胴部に羽状縄文を施すものであり、４は胴部に縄文を施すものである。７は胴部に２条の沈線を施すものである。これらの内、１～６は前期の有尾式土器である。７は中期ないし後期の土器と考えられる。

21号土坑（第59・66図）

位置　12A21グリッドに位置する。

規模　径1.2mほどの円形を呈し、底面までの深さは30cmを測る。

概要　覆土中の上位から中位にかけて、遺物が出土している。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第66図に示した土器である。

〈土器〉

１～５の胎土には繊維が含まれる。１は平口縁の小型土器で、口縁以下にＬとＲによる羽状縄文が施されている。２は波状口縁となる口縁部に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の文様を描くもの。３は平口縁となる口縁以下にＬＲの縄文を施し、４は平口縁の口縁以下にＬＲとＲＬによる羽状縄文を施したものである。５は波状口縁となる口縁以下にＬＲとＲＬによる羽状縄文を施したものである。これらは前期の有尾式土器である。

22号土坑（第59・67図）

位置　12A21グリッドに位置する。

規模　径1.2mほどの円形を呈し、底面までの深さは41cmを測る。

概要　覆土の中位から下位にかけて、多くの遺物が出土している。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第67図に示した土器である。

〈土器〉

１～５の胎土には繊維が含まれる。１は２単位の大波状口縁となる口縁の波底部に小突起をもち、口縁部文様に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の文様を描く。胴部にはＬＲの縄文を施している。２は波状口縁となる口縁部に、半裁竹管による平行沈線で菱形文等の文様を描くもので、部分的に爪形刺突をもち、胴部にＬＲの縄文を施している。３は口縁部文様に半裁竹管による爪形刺

突をもつ平行沈線で文様を描くもの。4・5は底部であり、5の胴部にはＬＲとＲによる羽状縄文が施されている。これらは前期の有尾式土器である。

23号土坑（第61・67・71図）

位置　12A20グリッドに位置する。

規模　径1.0mほどの円形を呈し、底面までの深さは34cmを測る。

概要　出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第67図に示した土器と、第71図に示した石器とがある。

〈土器〉

1～7の胎土には繊維が含まれる。1は平口縁の口縁以下に縄文が施されているもの。2は平口縁の口縁以下にＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。3は胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されたもの。4～7は胴部に縄文を施すものであり、7には直前段反撚りの縄が施されている。これらは前期の有尾式土器である。

〈石器〉

凹石の1点が出土している。

24号土坑（第60・67・68・71図）

位置　10A34グリッドに位置する。

規模　径1.2mほどのほぼ円形を呈し、底面までの深さは59cmを測る。

概要　北東壁の一部を僅かに40号土坑と重複するが、その新旧関係は不明。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第67・68図に示した土器と、第71図に示した石器とがある。

〈土器〉

1～5の胎土には繊維が含まれる。1は平口縁の小型土器で、口縁以下にＬとＲによる羽状縄文が施されている。2は波状口縁となる口縁部に半裁竹管による平行沈線で菱形文等の文様を描くもの。3・4は胴部に縄文を施すものであり、5は底部である。これらは前期の有尾式土器である。

〈石器〉

凹石の1点と、敲石の1点が出土している。敲石は、その両端に敲打痕が顕著にみられる。

25号土坑（第62・68図）

位置　7A28グリッドに位置する。

規模　長軸1.28m、短軸1.0mを測る不整楕円形を呈するが、底面形は円形であることから径1.0mほどの円形を呈していたものと考えられる。底面までの深さは61cmを測る。

概要　底面が広くなる袋状となり、断面形はフラスコ状を呈している。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第68図に示した土器である。

〈土器〉

1・2は胎土に繊維を含み、胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文が施される土器で、前期の有尾式土器

である。

26号土坑（第62図）

位置　７Ａ29グリッドに位置する。

規模　径1.2mほどのほぼ円形を呈し、底面までの深さは51cmを測る。

概要　時期の特定はできないが、縄文時代のものと考えられる。

遺物　出土していない。

28号土坑（第62図）

位置　７Ａ21グリッドに位置する。

規模　径1.3mほどのほぼ円形を呈し、底面までの深さは43cmを測る。

概要　時期の特定はできないが、縄文時代のものと考えられる。

遺物　出土していない。

29号土坑（第60・68・72図）

位置　８Ａ19グリッドに位置する。

規模　長軸1.53m、短軸1.2mを測る不整楕円形を呈し、長軸方向を北東にもつ。底面までの深さは32cmを測る。

概要　Ｊ６号住居跡の内部にあるが、その新旧関係は不明。出土した遺物から、Ｊ６号住居跡と同じ縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第68図に示した土器と、第72図に示した石器とがある。

〈土器〉

１は波状口縁となる深鉢土器で、胎土に繊維を含む。口縁以下にＲＬ（０段多条）とＬによる羽状縄文を施している。前期の有尾式土器である。

〈石器〉

凹石が２点出土している。１の凹石は、全体に磨きが施されている。

30号土坑（第62・68・72図）

位置　10Ａ34グリッドに位置する。

規模　長軸2.07m、短軸1.4mを測る不整楕円形を呈し、長軸方向を東西方向にもつ。底面形がほぼ円形に近いことから、円形を呈する土坑とも考えられる。底面までの深さは42cmを測る。

概要　出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第68図に示した土器と、第72図に示した石器とがある。

〈土器〉

１～10の胎土には繊維が含まれる。１・２は波状口縁となる口縁以下に縄文が施されるもの。３は平口縁の口縁下が無文となるものである。４は口縁部文様に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の文様を描くもの。５～10の胴部にはＬＲとＲＬによる羽状縄文が施され、０段多条を用いる縄もある。これらは前期の有尾式土器である。

〈石器〉

石核が１点出土している。

31号土坑（第60・69・72図）

位置　10A34グリッドに位置する。

規模　長軸1.02m、短軸0.7mを測る不整楕円形を呈し、長軸方向を北西にもつ。底面形がほぼ円形に近いことから、円形を呈する土坑とも考えられる。底面までの深さは56cmを測る。

概要　底面が広くなる袋状となり、断面形はフラスコ状を呈している。覆土の中位から１個体の土器が出土している。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第69図に示した土器と、第72図に示した石器とがある。

〈土器〉

１は平口縁となる深鉢土器で、胎土に繊維を含む。口縁以下にＲＬとＬＲによる羽状縄文を施している。前期の有尾式土器である。

〈石器〉

スクレイパーが１点出土している。

32号土坑

位置　11A24グリッドに位置する。

規模　径1.1mほどのほぼ円形を呈し、底面までの深さは31cmを測る。

概要　Ｊ３号住居跡の壁周溝と重複するが、その新旧関係は不明。時期の特定はできないが、縄文時代のものと考えられる。

遺物　出土していない。

33号土坑（第62・69・72図）

位置　11A24グリッドに位置する。

規模　長軸92cm、短軸63cmを測る楕円形を呈し、長軸方向を北西にもつ。底面までの深さは23cmを測る。

概要　Ｊ３号住居跡の内部にあり、住居跡の施設の一つとも考えられる。出土した遺物から、Ｊ３号住居跡と同じ縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第69図に示した土器と、第72図に示した石器とがある。

〈土器〉

１・２の胎土には繊維を含み、１は胴部に羽状縄文を施し、２は胴部に縄文を施している。前期の有尾式土器と考えられる。

〈石器〉

黒曜石の原石が１点出土している。

34号土坑（第62・69・72図）

位置　10A33グリッドに位置する。

規模　径1.2mほどの円形を呈するものと考えられる。底面までの深さは38cmを測る。

概要　土坑の南側半分を、古墳時代初頭の１号方形周溝墓に壊されている。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第69図に示した土器と、第72図に示した石器とがある。

〈土器〉

１は胎土に繊維を含み、波状口縁となる口縁下に櫛歯状工具による縦位の連点状刺突を施して口縁部文様とし、以下に０段多条のＬＲとＲＬによる羽状縄文を施した土器である。前期の有尾式土器である。

〈石器〉

石製品が１点出土している。表裏面および側縁をも磨いて成形した石製品である。

35号土坑（第62・69図）

位置　10Ａ33グリッドに位置する。

規模　径1.1mほどの円形を呈するものと考えられる。底面までの深さは47cmを測る。

概要　断面形はややフラスコ状を呈している。土坑の南側半分を、古墳時代初頭の１号方形周溝墓に壊されている。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第69図に示した土器である。

〈土器〉

１～９の胎土には繊維が含まれる。１は口縁下に半裁竹管による縦位の沈線をもち、口縁部文様に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもの。２・３は胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文を施す土器であり、５～９の胴部には縄文が施されている。これらは前期の有尾式土器である。

36号土坑（第62・69図）

位置　８Ａ24グリッドに位置する。

規模　径1.2mほどの円形を呈し、底面までの深さは32cmを測る。

概要　Ｊ１号住居跡の壁周溝と重複するが、土層の堆積状況から本土坑の方が古く、Ｊ１号住居跡が新しい。出土した遺物から、Ｊ１号住居跡と同じ縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第69図に示した土器である。

〈土器〉

１は胎土に繊維を含み、胴部に縄文が施されている。

37号土坑（第62・69・70図）

位置　７Ａ30グリッドに位置する。

規模　径1.4mほどの円形を呈するものと考えられる。底面までの深さは41cmを測る。

概要　断面形はややフラスコ状を呈している。土坑の南側半分は、調査区外となる。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第69・70図に示した土器である。

〈土器〉

１～18の胎土には繊維が含まれている。１～５・７～10は同一個体の土器で、波状口縁となる口縁部

に半裁竹管による平行沈線で菱形等の文様を描くもので、波頂下には縦位の沈線を有する。また、平行沈線には爪形文を伴わせる部分もある。胴部にはＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。６は口縁部文様に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもの。11～14は胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文が施され、15～18の胴部にはＬＲないしＲＬの縄文が施されている。これらは前期の有尾式土器である。

38号土坑（第58図）

位置　９Ａ27グリッドに位置する。

規模　径1.0mほどの不整な円形を呈するものと考えられる。底面までの深さは76cmを測る。

概要　東側の一部を12号土坑と重複するが、その新旧関係は不明。底面は、本土坑の方が低い。時期の特定はできないが、縄文時代のものと考えられる。

遺物　出土していない。

40号土坑（第62・70・72図）

位置　11Ａ36グリッドに位置する。

規模　長軸1.68m、短軸1.27mを測る楕円形を呈し、長軸方向を東西方向にもつ。底面までの深さは55cmを測る。

概要　壁の一部を僅かに24号土坑と重複するが、その新旧関係は不明。出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第70図に示した土器と、第72図に示した石器とがある。

〈土器〉

１～９の胎土には繊維が含まれている。１・２は平口縁となる口縁以下に羽状縄文が施されている。３・４は胴部に羽状縄文を施すものであり、５～９は胴部にＬないしＲの縄文が施されている。これらは前期の有尾式土器である。

〈石器〉

石製品が１点と、石皿１点が出土している。石製品は全面を丁寧に研磨している。石皿は小型のもので、表面が大きく凹められている。

41号土坑（第62図）

位置　８Ａ30グリッドに位置する。

規模　長軸71cm、短軸54cmを測る楕円形を呈し、長軸方向を東西方向にもつ。底面までの深さは20cmを測る。

概要　時期の特定はできないが、縄文時代のものと考えられる。

遺物　出土していない。

42号土坑（第62・70・72図）

位置　８Ａ31グリッドに位置する。

規模　長軸1.04m、短軸0.97mを測る不整形を呈するが、底面形がほぼ円形に近いことから、円形を呈する土坑とも考えられる。底面までの深さは42cmを測る。

概要　出土した遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第70図に示した土器と、第72図に示した石器とがある。

〈土器〉

１～４の胎土には繊維が含まれている。１は波状口縁となる口縁部に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等の文様を描くもの。２は平口縁の口縁以下にＬＲとＲＬによる羽状縄文を施し、３は平口縁となる口縁以下にＬＲの縄文を施したものである。４は底部。これらは前期の有尾式土器である。

〈石器〉

磨製石斧が１点と、磨石が１点出土している。

43号土坑（第62・70図）

位置　11A23グリッドに位置する。

規模　径1.0mほどの円形を呈し、底面までの深さは63cmを測る。

概要　Ｊ１号住居跡の壁周溝と重複するが、その新旧関係は不明。出土した遺物から、Ｊ１号住居跡と同じ縄文時代前期のものと考えられる。

遺物　出土した遺物は、第70図に示した土器である。

〈土器〉

１は胎土に繊維を含み、胴部にＬＲとＲＬによる羽状縄文を施した土器である。前期の有尾式土器と考えられる。

45号土坑（第62図）

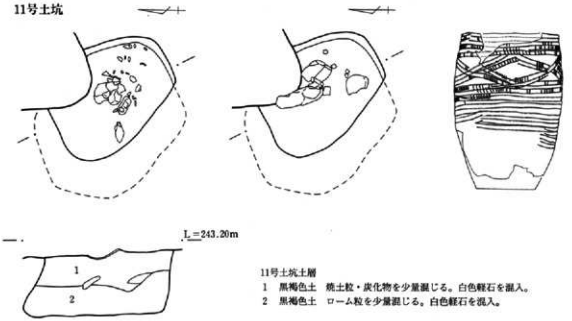
位置　11A23グリッドに位置する。

規模　径1.0mほどを測る不整な形状を呈し、底面までの深さは32cmを測る。

概要　土坑の南側を、古墳時代初頭の１号方形周溝墓に壊されている。時期の特定はできないが、縄文時代のものと考えられる。

遺物　出土していない。

11号土坑



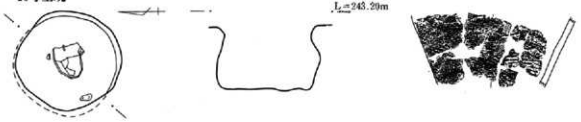
11号土坑土層
1　黒褐色土　焼土粒・炭化物を少量混じる。白色軽石を混入。
2　黒褐色土　ローム粒を少量混じる。白色軽石を混入。

12・38号土坑土層
1　暗黒褐色土　焼土粒を少量含み粘質。白色軽石を混入。
2　暗黒褐色土　やや粘質で、白色軽石を混入。

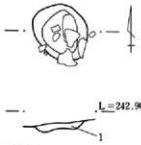
S＝1／40

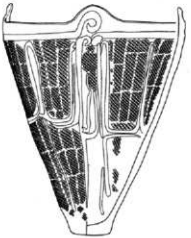
第58図　土坑平面図(1)

16号土坑



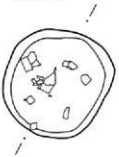
17号土坑

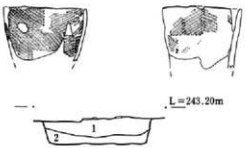




17号土坑土層
1　暗黒褐色土　ローム粒を少量混じる。白色軽石を混入。

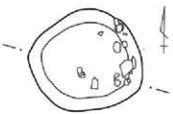
21号土坑

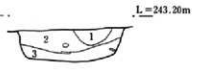




21号土坑土層
1　暗黒褐色土　焼土粒・炭化物を少量混じる。白色軽石を混入。
2　暗黒褐色土　白色軽石を混入。混入物少ない。

22号土坑





22号土坑土層
1　暗黒褐色土　焼土粒・炭化物を多く混じる。白色軽石を混入。
2　暗黒褐色土　焼土粒・炭化物を少量混じる。白色軽石を混入。
3　暗黒褐色土　白色軽石を混入。混入物少なく粘質。

S＝1／40

第59図　土坑平面図(2)

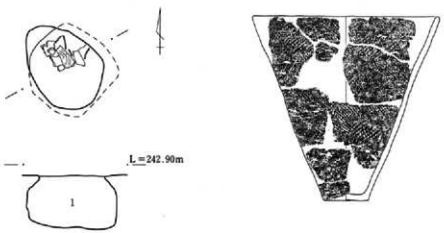
24号土坑

24号土坑土層
1　暗黒褐色土　焼土粒・炭化物を少量混じる。白色軽石を混入。
2　黒褐色土　ローム粒を少量混じる。白色軽石を混入。
3　黄褐色土　粘質でロームブロックを多量に混入。

29号土坑

29号土坑土層
1　暗黒褐色土　やや粘質で、白色軽石を混入。
2　黒褐色土　ローム粒を多量混じる。白色軽石を少量混入。

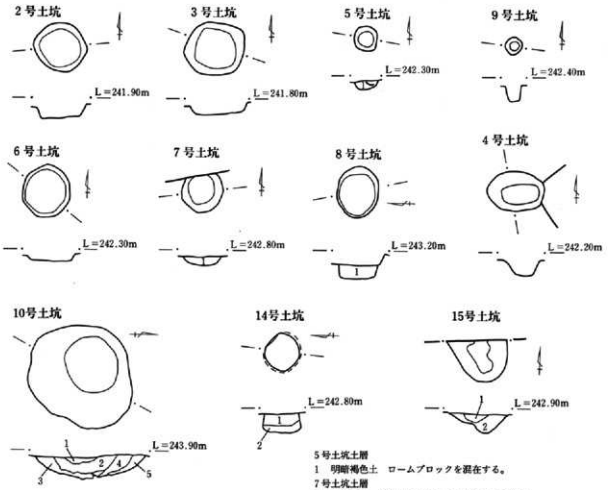
31号土坑



31号土坑土層
1　暗褐色土　やや粘質で、炭化物・白色軽石を含む。

S＝1／40

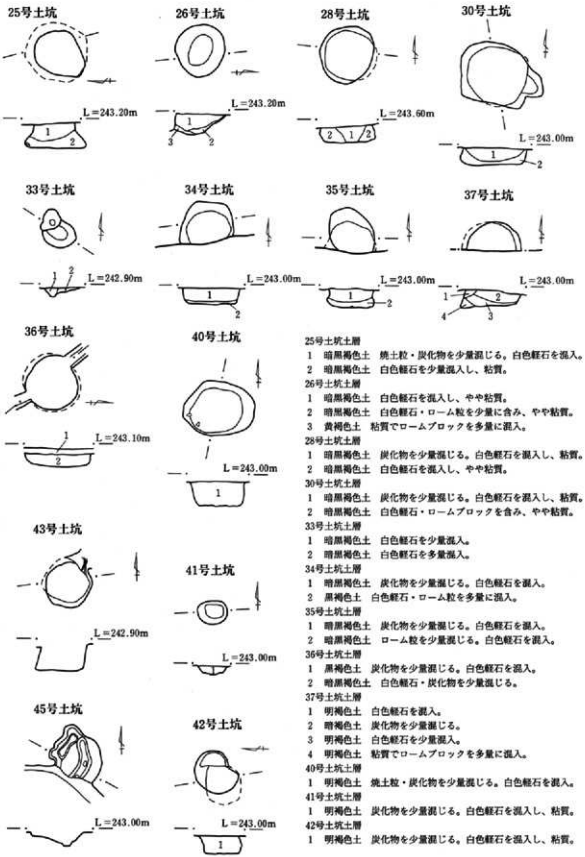
第60図　土坑平面図(3)



5号土坑土層
1　明暗褐色土　ロームブロックを混在する。
7号土坑土層
1　暗褐色土　白色軽石を混入。混入物少なく粘質。
8号土坑土層
1　暗褐色土　白色軽石を混入。混入物少なく粘質。
10号土坑土層
1　明褐色土　混入物少なく粘質気味。
2　暗褐色土　白色軽石を少量混入。
3　暗褐色土　白色軽石を少量混入。黒褐色土ブロックを混在。
4　黒褐色土　やや粘質で、白色軽石を混入。
5　明褐色土　黄色軽石を混入。ロームブロックを混在する。
14号土坑土層
1　暗褐色土　白色軽石を少量混入し、粘質気味。
2　暗褐色土　白色軽石を混入。
15号土坑土層
1　褐色土　明灰色土粒子を含む。
2　暗褐色土　白色軽石を少量混入。
18号土坑土層
1　暗黒褐色土　ローム粒を少量混じる。白色軽石を混入。
19号土坑土層
1　暗黒褐色土　白色軽石を少量混入し、粘質気味。
2　暗黒褐色土　白色軽石・ローム粒を多量に含み、粘質。
20号土坑土層
1　暗黒褐色土　焼土粒・炭化物を少量混じる。白色軽石を混入。
2　暗黒褐色土　白色軽石を少量混入。
23号土坑土層
1　暗黒褐色土　焼土粒を少量混じる。白色軽石を混入。

S＝1／60

第61図　土坑平面図(4)

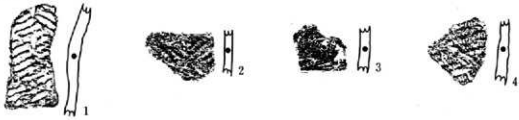


25号土坑土層
1　暗黒褐色土　焼土粒・炭化物を少量混じる。白色軽石を混入。
2　暗黒褐色土　白色軽石を少量混入し、粘質。
26号土坑土層
1　暗黒褐色土　白色軽石を混入し、やや粘質。
2　暗黒褐色土　白色軽石・ローム粒を少量に含み、やや粘質。
3　黄褐色土　粘質でロームブロックを多量に混入。
28号土坑土層
1　暗黒褐色土　炭化物を少量混じる。白色軽石を混入し、粘質。
2　暗黒褐色土　白色軽石を混入し、やや粘質。
30号土坑土層
1　暗黒褐色土　炭化物を少量混じる。白色軽石を混入し、粘質。
2　暗黒褐色土　白色軽石・ロームブロックを含み、やや粘質。
33号土坑土層
1　暗黒褐色土　白色軽石を少量混入。
2　暗黒褐色土　白色軽石を多量混入。
34号土坑土層
1　暗黒褐色土　炭化物を少量混じる。白色軽石を混入。
2　黒褐色土　白色軽石・ローム粒を多量に混入。
35号土坑土層
1　暗黒褐色土　炭化物を少量混じる。白色軽石を混入。
2　暗黒褐色土　ローム粒を少量混じる。白色軽石を混入。
36号土坑土層
1　黒褐色土　炭化物を少量混じる。白色軽石を混入。
2　暗黒褐色土　白色軽石・炭化物を少量混じる。
37号土坑土層
1　明褐色土　白色軽石を混入。
2　暗褐色土　炭化物を少量混じる。
3　明褐色土　白色軽石を少量混入。
4　明褐色土　粘質でロームブロックを多量に混入。
40号土坑土層
1　明褐色土　焼土粒・炭化物を少量混じる。白色軽石を混入。
41号土坑土層
1　明褐色土　炭化物を少量混じる。白色軽石を混入し、粘質。
42号土坑土層
1　明褐色土　炭化物を少量混じる。白色軽石を混入し、粘質。

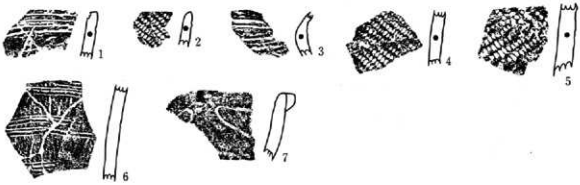
S＝1／60

第62図　土坑平面図(5)

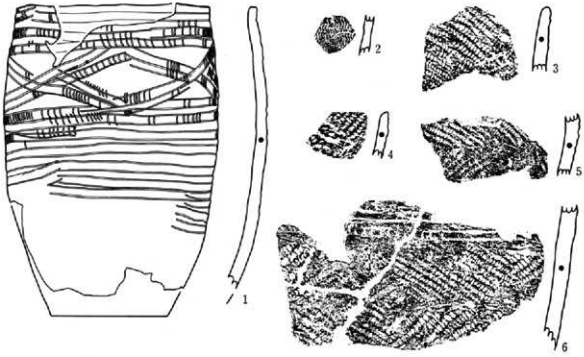
8号土坑



10号土坑



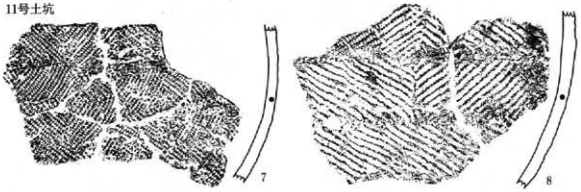
11号土坑



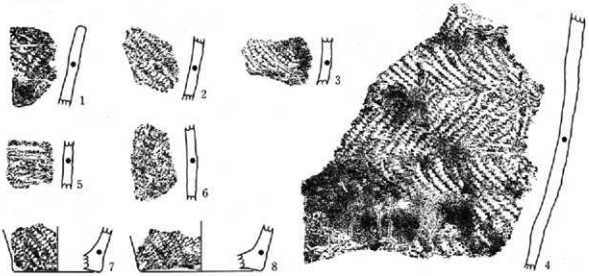
S＝1／3

第63図　土坑出土土器(1)

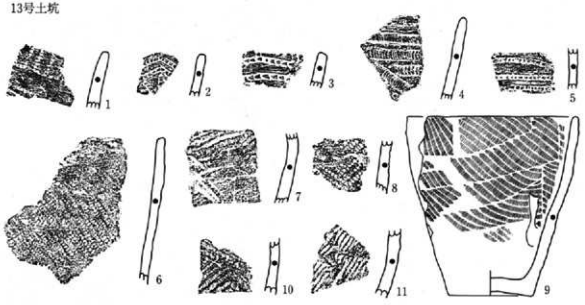
11号土坑



12号土坑



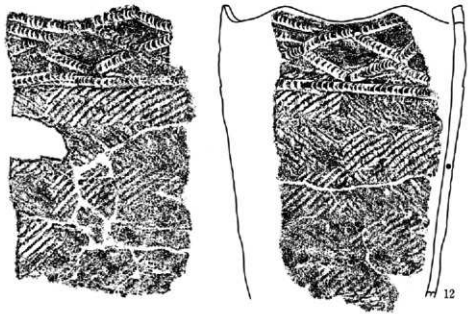
13号土坑



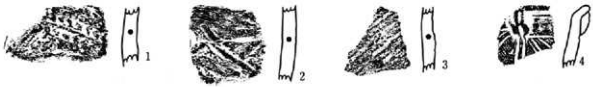
S＝1／3

第64図　土坑出土土器(2)

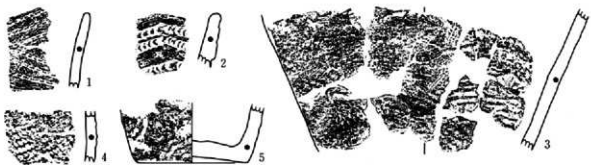
13号土坑



15号土坑



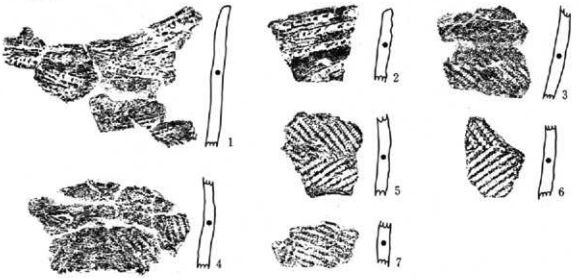
16号土坑



17号土坑

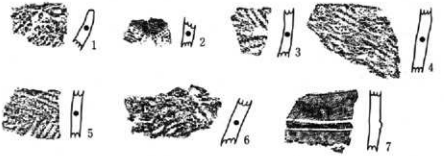
第65図　土坑出土土器(3)　　S＝1／3

18号土坑

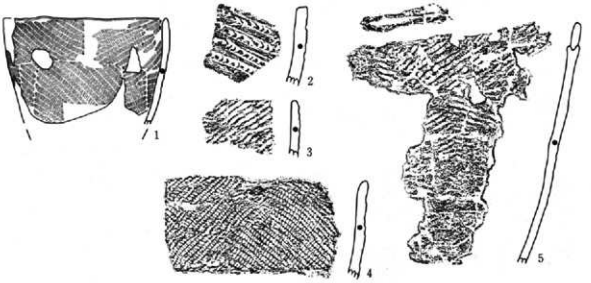


19号土坑

20号土坑



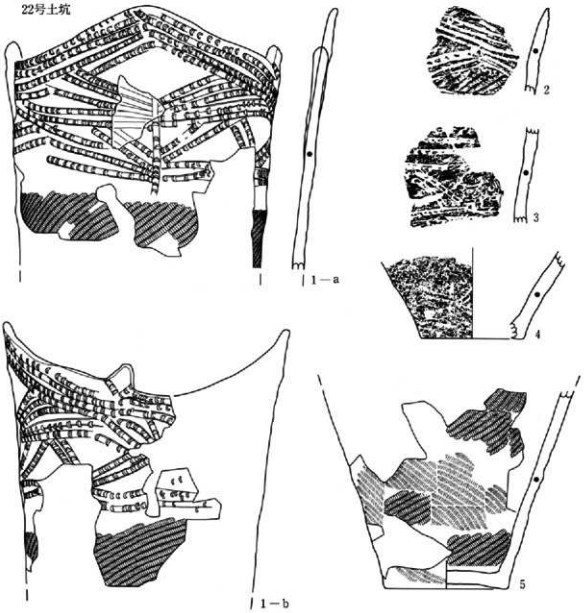
21号土坑



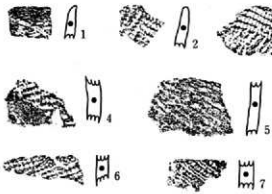
S＝1／3

第66図　土坑出土土器(4)

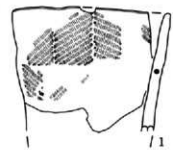
22号土坑



23号土坑



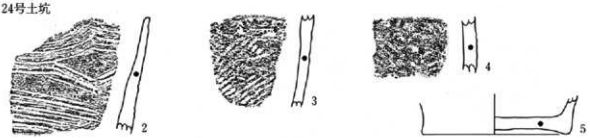
24号土坑



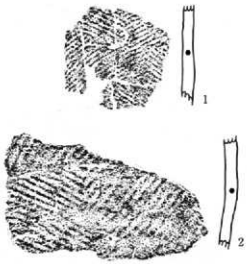
S＝1／3

第67図　土坑出土土器(5)

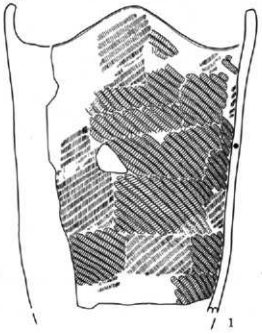
24号土坑



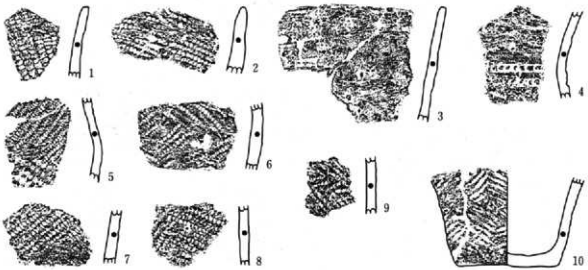
25号土坑



29号土坑



30号土坑

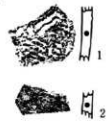


S＝1／3

第68図　土坑出土土器(6)

31号土坑

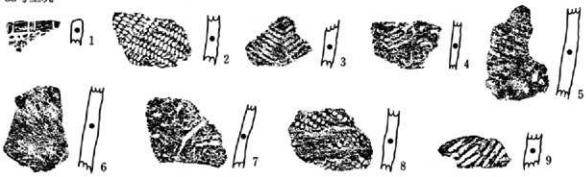
33号土坑



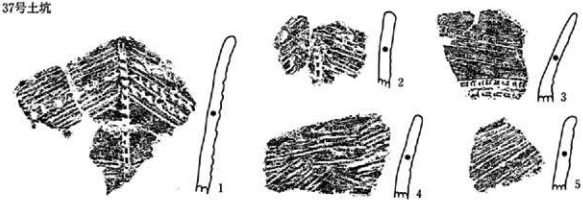
34号土坑

36号土坑

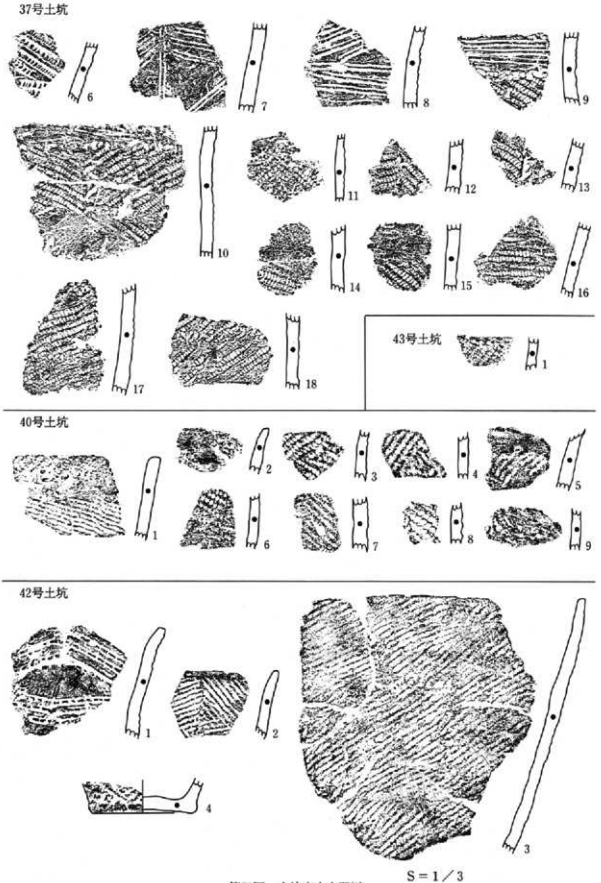
35号土坑



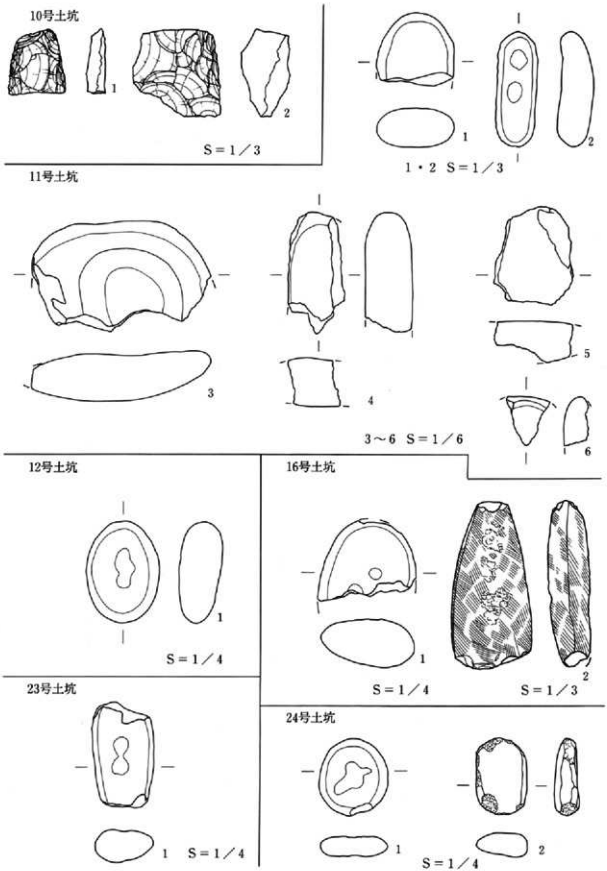
37号土坑



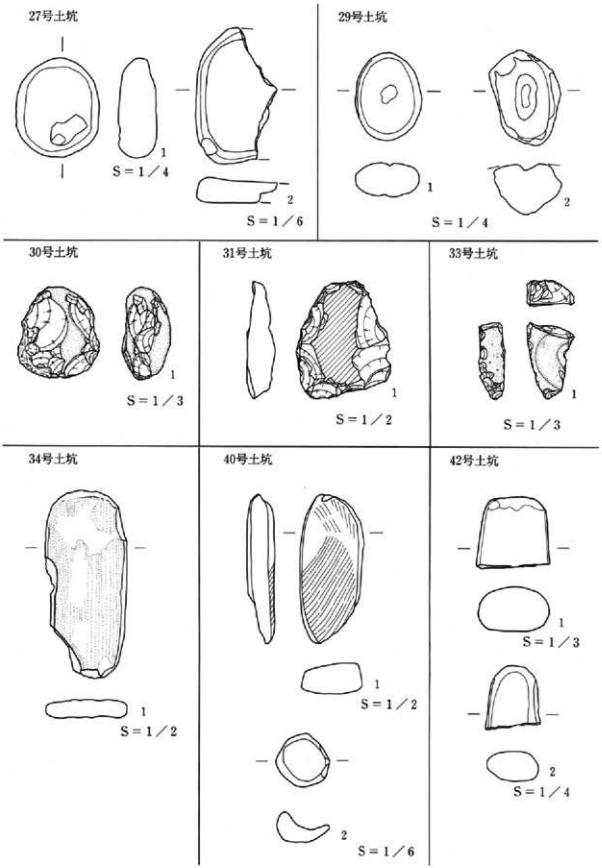
第69図　土坑出土土器(7)　　S＝1／3



第70図　土坑出土土器(8)



第71図　土坑出土石器(1)



第72図　土坑出土石器(2)

表9　10号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	打製石斧	粗粒輝石安山岩	5.1	4.5	40.7
2	打製石斧	珪質頁岩	6.9	6.9	200.3

表10　11号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	凹石	粗粒輝石安山岩	(7.6)	8.2	340.0
2	凹石	粗粒輝石安山岩	12.1	4.4	290.0
3	石皿	粗粒輝石安山岩	(28.8)	(16.5)	5850.0
4	石皿	粗粒輝石安山岩	(19.5)	(9.0)	1930.0
5	石皿	粗粒輝石安山岩	(15.3)	(12.8)	1860.0
6	石皿	粗粒輝石安山岩	(7.8)	(7.0)	200.0

表11　12号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	凹石	粗粒輝石安山岩	10.8	7.8	550.0

表12　16号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	凹石	粗粒輝石安山岩	(8.5)	(10.4)	550.0
2	磨製石斧	変玄武岩	(13.2)	6.4	459.0

表13　23号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	凹石	粗粒輝石安山岩	(11.1)	6.5	420.0

表14　24号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	凹石	粗粒輝石安山岩	(8.2)	7.3	170.0
2	敲石	粗粒輝石安山岩	8.1	5.4	174.0

表15　27号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	凹石	粗粒輝石安山岩	10.6	8.9	640.0
2	石皿	粗粒輝石安山岩	21.7	(13.0)	1550.0

表16　29号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	凹石	粗粒輝石安山岩	9.2	7.1	300.0
2	凹石	粗粒輝石安山岩	(10.1)	(7.6)	380.0

表17　30号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	石核	硬質泥岩	7.2	6.4	206.9

表18　31号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	スクレイパー	珪質頁岩	6.2	5.0	44.2

表19　33号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	石核	黒曜石	6.1	3.7	39.5

表20　34号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	石製品	黒色片岩	9.9	4.3	66.7

表21　40号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	石製品	変玄武岩	(7.8)	(3.4)	63.4
2	石皿	粗粒輝石安山岩	8.6	8.5	310.0

表22　42号土坑出土石器計測表

遺物No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
1	磨製石斧	蛇紋岩	(5.6)	5.8	213.6
2	磨石	粗粒輝石安山岩	(6.7)	5.8	188.6

(4) 遺構外出土遺物

遺構外からの遺物の出土量は、比較的に多い。台地の西緩斜面中央部からの出土遺物が、そのほとんどを占めている。これは、旧地形に起因することで、ローム面が台地の東側が高く、西側へ急傾斜し、台地中央付近から平坦面を経て、さらに西傾斜することから、台地中央部での黒色土の堆積が厚くなっている。その結果、縄文時代の生活面が、この黒色土中に存在することから、黒色土の厚く堆積する台地中央部に遺物が集中して出土したものである。ちなみに、縄文時代の遺構が検出されているのも、この黒色土が堆積した辺りからである。出土した遺物には、土器や石器も多くみられるが、土偶等の土・石製品類の遺物も少ないが出土している。

土器（第73～87図）

出土した土器の量は、遺物収納箱で40箱余りである。これらの土器は、先にも述べたように、台地中央部の黒色土を主体とする縄文時代の包含層から出土したものである。出土した土器は、縄文時代早期、前期、中期、後期の資料であり、前期中葉土器が最も多く、次いで中期後半の資料が他よりやや多い。早期の資料は、僅かである。

記述するにあたり、次のように各土器群を大別し、観察を行う。

第Ⅰ期	早期	第Ⅰ群	押し型文土器
		第Ⅱ群	条痕文系土器
第Ⅱ期	前期	第Ⅰ群	前期初頭土器群（花積下層式土器）
		第Ⅱ群	前期中葉土器群（有尾式土器）
		第Ⅲ群	前期後葉土器群（諸磯式土器）
第Ⅲ期	中期	第Ⅰ群	中期初頭土器群（五領ガ台式土器）
		第Ⅱ群	中期中葉土器群（阿玉台・勝坂式土器）
		第Ⅲ群	中期後葉土器群（加曽利Ｅ式土器）
第Ⅳ期	後期	第Ⅰ群	後期初頭土器群（称名寺式土器）
		第Ⅱ群	後期前葉土器群（堀之内式土器）

第Ⅰ期

本調査で検出された早期の遺構はないが、包含層中より僅かに土器が出土している。出土した土器には、押し型文土器、条痕文系土器が存在し、以下に記す。

第Ⅰ群（第73図１～８）

本群は、押し型文土器をまとめた。出土した押し型文土器は、施文された押し型文様から、１・２類に分類される。

１類（第73図１～６）

山形の押し型文様をもつ類である。１は胎土に砂粒を多量に含み、胴部に山形の押し型文を縦位回転により施文したもので、工具幅が4.5cmほどである。２は胴部に山形の押し型文を縦位回転により施文したものであるが、文様間に若干の隙間がみられる。３・４・６は胴部に山形の押し型文を縦位回転により施文したもの。５は胴部に山形の押し型文を縦位回転により施文したもので、文様幅が短く、文様間に無文帯がみられる。

２類（第73図７）

楕円の押し型文様をもつ類である。７の１片だけである。胴部に楕円の押し型文を、横位異回転により施文した土器。

３類（第73図８）

押し型文土器に伴うと考えられる底部で、尖底となっている。

第Ⅱ群（第73図９・10）

本群は、僅かに出土した条痕文系土器をまとめた。施文された文様から、１・２類に分類される。

１類（第73図９）

９の１片のみ出土している。胴部に微隆帯で文様を区画し、区画内に沈線を施している。また、文様の交点となる位置に、円形刺突を併せ施文されている。裏面には、条痕は施されていない。文様の特徴から、鵜ヶ島台式土器である。

２類（第73図10）

10の１片のみ出土している。胎土に若干の繊維を含み、胴部に貝殻条痕が縦位ないし斜位方向に施されている。また、裏面にも同様な条痕が施されている。

第Ⅱ期

本調査で検出された前期の遺構には、先に述べてきたように前期中葉の有尾式土器を伴う時期の住居跡や土坑がある。包含層中から出土した土器には、前期初頭に位置ずけられる土器群や、中葉の土器群、さらに後葉の土器群がある。これらの土器群の内、最も出土量の多いのは中葉の土器群であり、初頭の土器は極僅かである。以下に、各土器群の説明を記す。

第Ⅰ群

本群は、僅かに出土した前期初頭に位置付けられる土器群である。第55図１に掲載した１片のみである。胎土に繊維を含み、平口縁となる口縁下に隆帯を巡らせて文様区画し、口縁直下には横位に矢羽根状の短沈線を施すと共に円形刺突をもつ。隆帯下にはＲの縄を３本１組とした撚糸側面圧痕を横位に数条施して口縁部文様とし、胴部には０段多条によるＬＲの縄文が施されている。花積下層式土器である。

第Ⅱ群（第73図11～第79図）

本群は、前期中葉に位置付けられる土器群で、有尾式土器を主体とする。今回の調査で検出された遺構主体をなし、包含層から出土した土器の量が最も多い。これらの土器は胎土に繊維を含み、施文された文様から、次の１～５類に分類される。

1類（第73図11・第74図33～35）

口縁部文様に、櫛歯状工具による連点状刺突等で文様を描くもの。11は波状口縁の底部ないし平口縁に小突起をもち、口縁直下に櫛歯状工具による縦位の連点状刺突を施す文様帯を構成させ、その下に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で菱形・鋸歯状等の口縁部文様を描くもの。この11と同様な文様を施す土器に、Ｊ１号住居跡出土の第27図10や、Ｊ３号住居跡出土の第48図５がある。口縁直下に櫛歯状工具による縦位の連点状刺突を施す文様帯を構成させる土器は、第10図９や第27図11、第64図13号土坑１、第69図34号土坑１がある。33は口縁部文様に、櫛歯状工具による条線と連点状刺突で菱形等の文様を描き、胴部に０段多条のＬＲの縄文を施すもの。34は口縁部文様に、櫛歯状工具による条線と連点状刺突で菱形等の文様を描いている。35は口縁部文様に、櫛歯状工具による条線と連点状刺突で菱形等の文様を描くもので、条線の上に縦位の連点状刺突をもつ。胴部には、ＲＬの縄文が施されている。

2類（第73図12～第74図32・36～第75図59）

口縁部文様に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもの。12は口縁が朝顔状に開く波状口縁となり頸部がくびれる深鉢土器の口縁部で、口縁下に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文を口縁部文様として描いている。さらに、菱形文内には渦巻き文が描かれ、その他に鋸歯状等の文様が付加されている。16は12と同様な器形を呈する口縁部で、口縁下と胴部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文を口縁部文様として描いている。なお、爪形刺突の施文は、爪形刺突文間に空白部を有する施文法で、一見すると相互刺突文的な雰囲気を思わせる。19は波状口縁となる口縁直下に、半裁竹管による縦位の平行沈線で文様帯を構成し、その下の口縁部文様は半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に三角文ないし鋸歯状の文様を描いている。この19と同様な口縁直下に縦位沈線帯をもつ土器に、第69図35号土坑１がある。なお、口縁直下に縦位沈線帯ではなく、縄文帯をもつ土器として、Ｊ１号住居跡第10図17や、Ｊ３号住居跡第27図12・13がある。13～15・17・20～31は波状口縁となる口縁下に、口縁部文様として半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文等の文様を描いているもの。18・32は平口縁となる口縁下に、口縁部文様として半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文ないし鋸歯状等の文様を描いているもの。36～59は口縁部文様として半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文ないし鋸歯状等の文様を描いているもので、36の鋸歯状文様の頂下には縦位の爪形刺突をもつ平行沈線が付加されている。また、46・51・53・54では、爪形刺突をもつ平行沈線と爪形刺突をもたない平行沈線で文様が描かれている。51の胴部にはＬＲの縄文が施されている。55の胴部にはＬとＲによる羽状縄文が施されている。56・57の胴部には０段多条のＬＲの縄文が施されている。58の胴部には０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文が施されている。59の胴部には太いＬＲの縄文が施されている。

3類（第75図60～72）

口縁部文様に、半裁竹管による平行沈線で文様を描くもの。60～63は波状口縁となる口縁下に、口縁部文様として半裁竹管による平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文等の文様を描いているもの。64は波状口縁となる口縁下に、口縁部文様として半裁竹管による平行沈線で菱形文等の文様を描くものであり、地文にＬＲの縄文が施されている。65は平口縁となる口縁下に、口縁部文様として半裁竹管による平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文等の文様を描くもので、地

文にＬの縄文が施されている。66・67は口縁部文様として半裁竹管による平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文等の文様を描いているもの。68は口縁部文様に、半裁竹管による平行沈線で菱形文等の文様を描き、瘤状の突起をもつもの。69〜71は口縁部文様に、半裁竹管による平行沈線で菱形文等の文様を描くもので、地文に縄文が施されているもの。69にはＬＲ（０段多条）とＲＬによる羽状縄文が施されている。70と71は同一個体となる土器で、地文に０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文が施されている。72は口縁部文様として半裁竹管による平行沈線を数条づつ巡らせて口縁部文様帯を区画し、区画内に菱形文等の文様を描き、胴部にＬＲの縄文が施されている。

４類（第76図）

口縁以下に、縄文を施すもの。73・79は波状口縁となる口縁以下に、０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文が施されているもの。74は平口縁となる口縁に小突起をもち、口縁以下にＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されたもの。75〜77は平口縁となる口縁以下に、ＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されたもの。78・83・85は平口縁となる口縁以下に、ＬＲ（０段多条）とＲＬによる羽状縄文が施されたもの。80は平口縁となる口縁以下に、ＬとＲによる羽状縄文が施されたもの。81・84は平口縁となる口縁以下に、ＬＲとＲＬ（０段多条）による羽状縄文が施されたもの。82は平口縁となる口縁以下に、０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文が施されているもの。86は波状口縁となる口縁以下に、羽状縄文が施されているが、原体は不明。87は平口縁となる口縁以下に、羽状縄文が施されているが、原体は不明。88は平口縁となる口縁以下に、ＬＲの縄文が施されたもの。89・90は平口縁となる口縁以下に、Ｌの縄文が施されたもの。91は波状口縁となる口縁以下に、ＲＬの縄文が施されているが、細い縄２本を加えて直前段合い撚りとした縄で、一見すると付加条的な縄文にもみえる。92・94は平口縁となる口縁以下に、ＲＬの縄文が施されたもの。93は平口縁となる口縁以下に、０段多条によるＲＬの縄文が施されたもの。95は平口縁となる口縁以下に、Ｒの縄文が施されたものである。

５類（第77〜79図）

胴部に、縄文が施されたもの。96〜128の胴部には、羽状縄文が施される土器で、96〜98・102・104・108・111・113・115・124には０段多条によるＬＲとＲＬで羽状縄文が施されている。99・106・114・118にはＬＲ（０段多条）とＲＬによる羽状縄文が施されている。100・101にはＬＲとＲＬ（０段多条）による羽状縄文が施されている。103・112・126〜128にはＬとＲによる羽状縄文が施されている。105・107・117・119にはＬＲとＲＬによる羽状縄文が施されている。116にはＬとＲＬ（０段多条）による羽状縄文が施されている。121〜123にはＬＲの付加条縄（１本付加）とＲＬの付加条縄（１本付加）による羽状縄文が施されている。129〜131にはＬの縄文が施されている。132には０段多条のＬＲの縄文が施され、補修孔を有する。133・135・137にはＲＬの縄文が施されている。134・136にはＲの縄文が施されている。138〜146は底部であり、胴部に羽状縄文等の縄文が施されている。これらの底部には、142・143・146のように上げ底気味となるものもある。

第Ⅲ群（第80・81図）

本群は、前期後葉に位置付けられる土器群で、諸磯式土器を主体とする。今回の調査で検出された遺構は無く、包含層から出土した土器の量もあまり多くはない。土器に施文された文様等から、次の１〜４類に分類される。

１類（147〜180）

諸磯ｂ式土器を本類とした。施文される文様から、以下のように分類することができる。

A種

細い半截竹管の平行沈線により格子状の文様を描くもので、147の1片のみ出土している。口縁部に平行沈線で文様区画し、区画内に格子状の平行沈線を施している。

B種

幅広な爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもので、148の1片のみ出土している。胴部に曲線的な文様を描くもので、「の」字状の文様もみられる。

C種

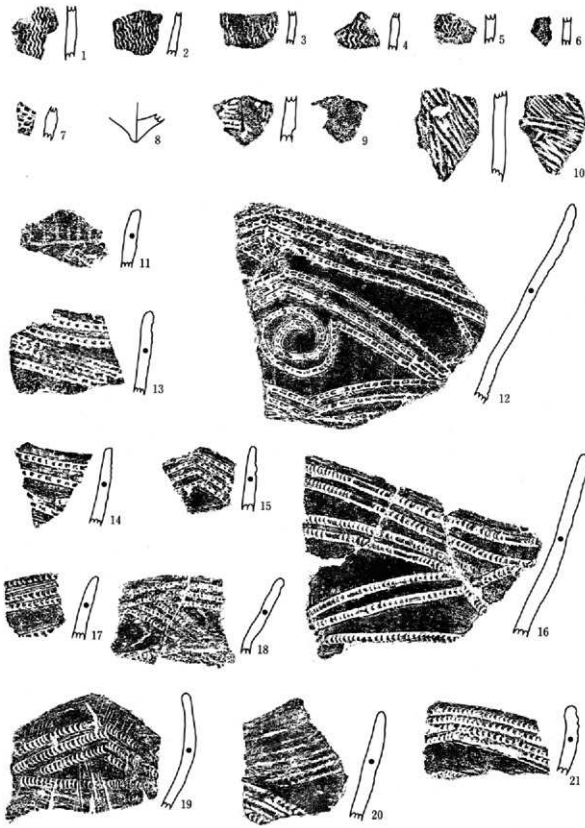
浮線文により文様が描かれるもので、149・150・152～157がある。149は波状口縁となる波頂部に獣面突起をもつもので、口縁下には刻みをもつ浮線文により曲線的な文様が描かれるもの。150は波状口縁となる波頂下に貼付による獣面をもつもので、口縁下には刻みをもつ浮線文により曲線的な文様が描かれている。152は胴部に刻みをもつ浮線文を数条巡らせ、その間に曲線的な文様を浮線文で描き、地文に縄文が施されている。153は胴部に刻みをもつ浮線文を数条巡らせ、その間に縦位の浮線文を施している。154～157は胴部に刻みをもつ浮線文を数条単位で数段巡らせ、地文にＲＬの縄文が施されているものである。

D種

半裁竹管による平行沈線で文様が描かれる土器で、151・158～180がある。151は大きく内反する平口縁となり、口縁下に平行沈線を数条巡らせて文様区画し、区画内に曲線的な文様を描くもの。158・159は頸部が大きく開き、「く」字状に屈曲して口縁が内反する波状口縁を呈するもので、口縁下に集合沈線状となる数条の平行沈線を巡らせ、波頂下の三角状の隙間に弧状ないし曲線的な文様を沈線で描くもの。屈曲部以下の頸部にも、集合沈線状となる数条の平行沈線を数段巡らせている。160は口縁が屈曲して内反するもので、口縁下に集合沈線状となる数条の平行沈線を巡らせ、屈曲部以下にも集合沈線状となる数条の平行沈線を巡らせている。地文に縄文が施されている。161は内反する口縁が短く立ち上がる平口縁で、口縁下に数条の平行沈線を巡らせ、以下に波状の沈線を施し、ボタン状の貼付文をもつ。162は大きく外反する平口縁で、口縁下に集合沈線を巡らせるもの。163・164は屈曲部以下の頸部に、集合沈線状となる数条の平行沈線を数段巡らせるもの。165は胴部に集合沈線状となる数条の平行沈線を巡らせ、その間に横位の矢羽根状等の文様をもつもの。166・171・175・177は数条の平行沈線を数段巡らせているもの。167は胴部に平行沈線で曲線的な文様を描いているもの。168は胴部に数条の平行沈線を数段巡らせ、その間に縦位の沈線を施している。169は頸部下に曲線的な文様を平行沈線で描き、胴部に数条の平行沈線を数段巡らせるもの。170も169と同様に曲線的な文様を描き、胴部に数条の平行沈線を数段巡らせているが、地文にＬＲの縄文を施している。172・173・176・178・179は胴部に数条の平行沈線を数段巡らせ、地文にＬＲの縄文を施している。178は胴部に数条の平行沈線を数段巡らせ、地文にＲＬの縄文を施している。180は胴部に横位の矢羽根状となる平行沈線をもち、地文に縄文を施す土器である。

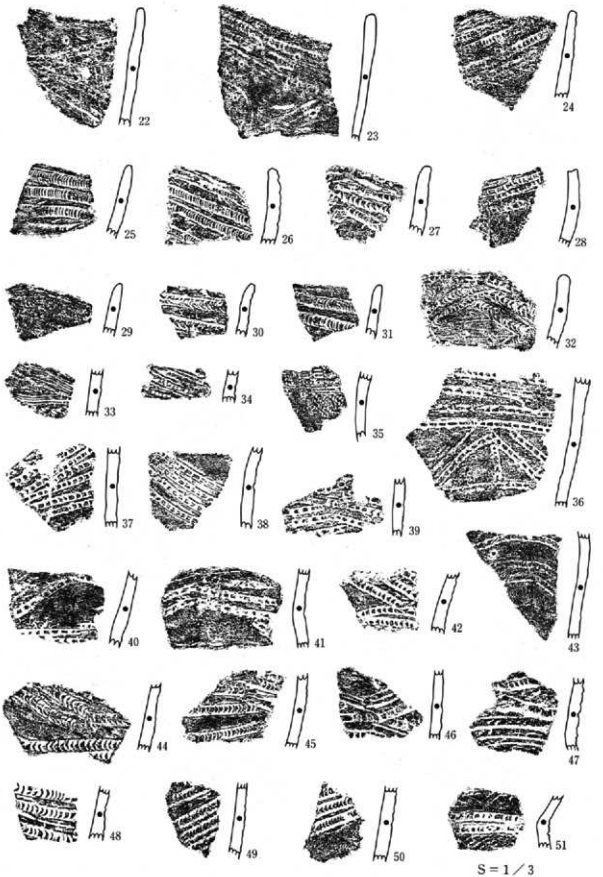
2類（181～189）

諸磯ｃ式土器を本類とした。181～184は口縁部に貼付文をもつ土器で、181は平口縁となる口舌部に刻みをもち、口縁下に横位の集合沈線が施され、ボタン状貼付文を有する。182は平口縁となる口縁下に、横位の矢羽根状の集合沈線が施され、ボタン状貼付文を有するもの。183は口縁部に横位の集合沈線が施され、ボタン状貼付文を有するもの。184は口縁部に横位の集合沈線が施され、ボタン状貼付文や縦位の短い貼付文を有するものである。185～189は胴部に縦位の集合沈線で文様区画し、区画内に斜位やレンズ状等の文様を描く土器。

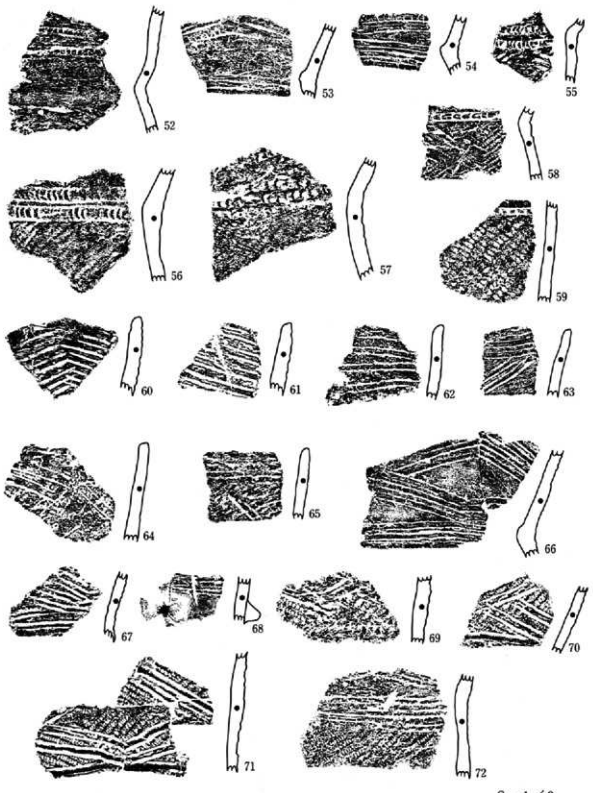


S＝1／3

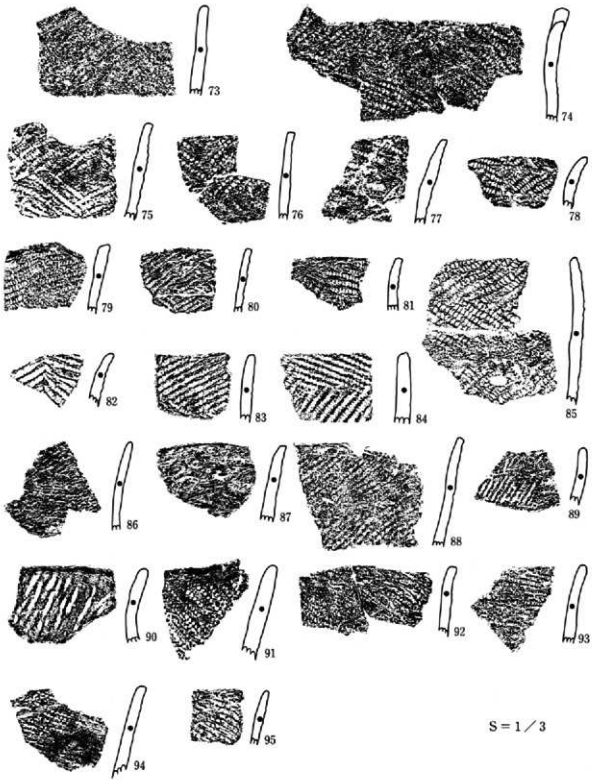
第73図　遺構外出土土器(1)



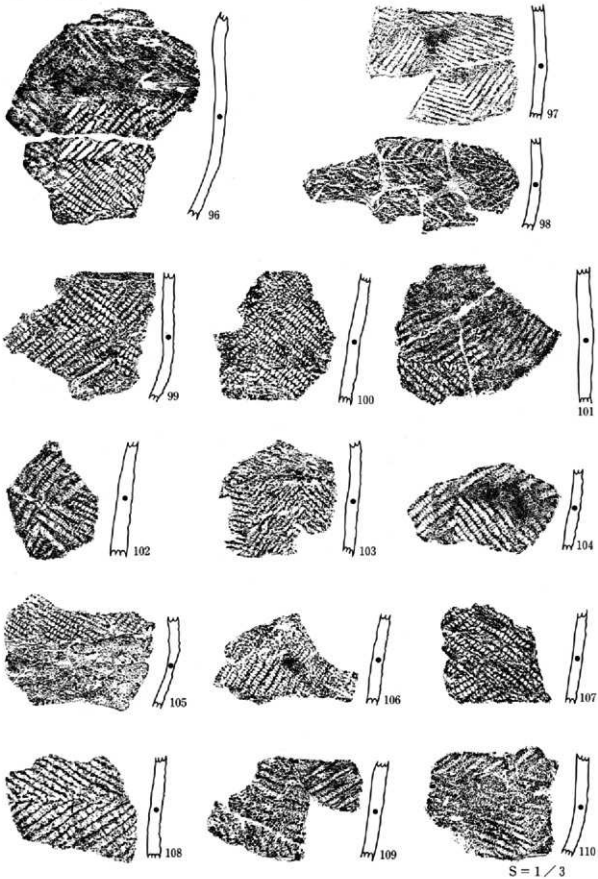
第74図　遺構外出土土器2)



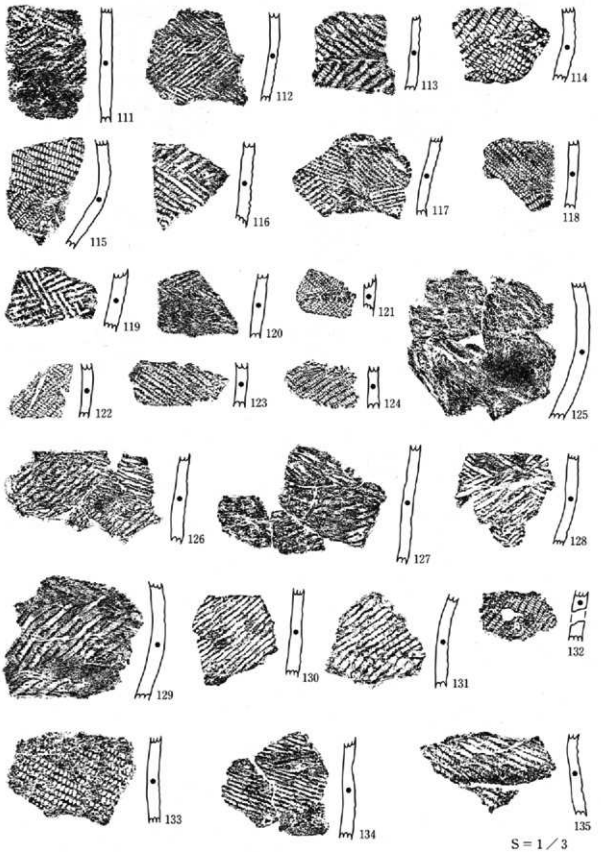
第75図　遺構外出土土器(3)



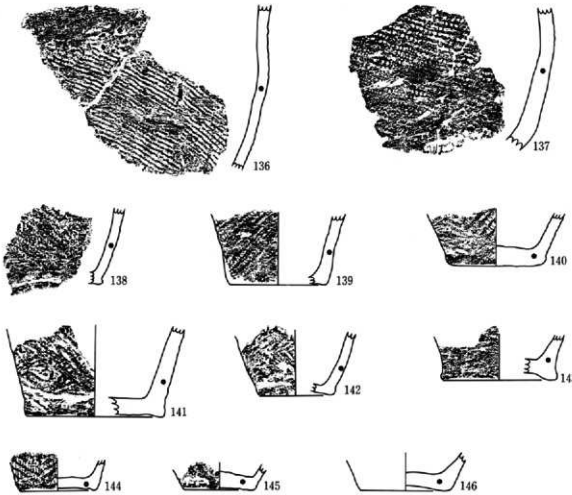
第76図　遺構外出土土器(4)



第77図　遺構外出土土器(5)

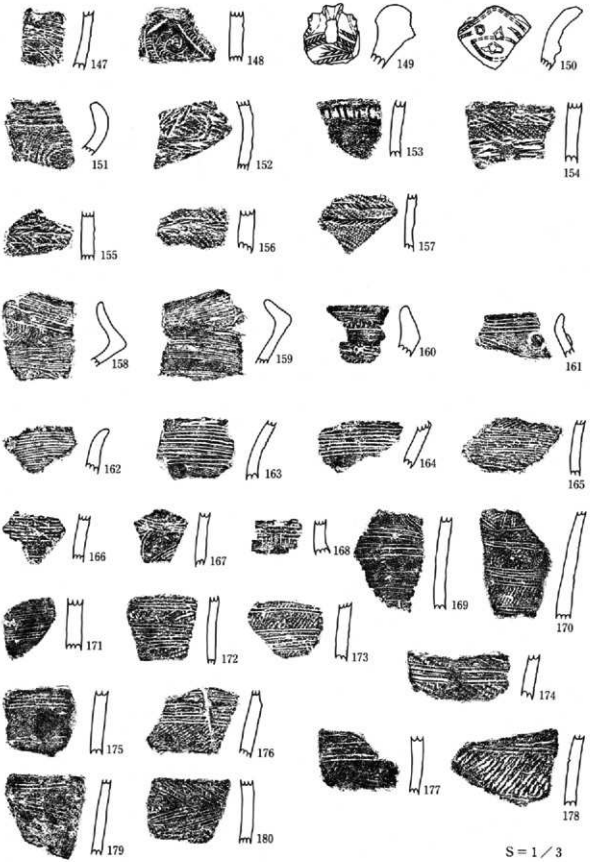


第78図　遺構外出土土器(6)

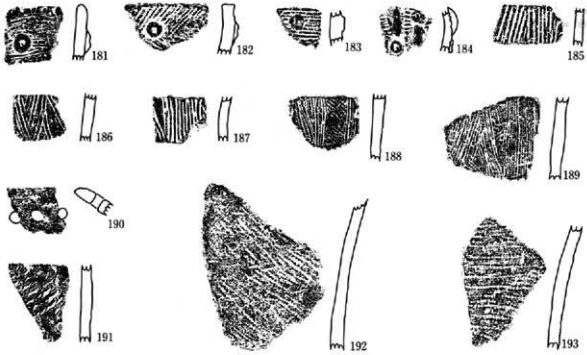


S＝1／3

第79図　遺構外出土土器(7)



第80図　遺構外出土土器(8)



S＝1／3

第81図　遺構外出土土器(9)

３類（190）

有孔浅鉢形土器を本類とした。190の１片のみ出土している。内反する平口縁で、口縁下に孔が連続して巡るものである。

４類（191～193）

縄文施文土器を本類とした。出土量は少ない。119は胴部に繊維束の粗いＬＲの縄文が施されるもの。192は胴部にＲＬの縄文が施されるもので、原体端部の結節痕がみられる。193は胴部にＲＬの縄文が施されている土器である。

第Ⅲ期

本調査で検出された中期の遺構には、先に述べてきたように中期後葉の加曽利Ｅ式土器を伴う時期の住居跡や土坑がある。包含層中から出土した土器には、中期初頭に位置ずけられる土器群や、中葉の土器群、さらに後葉の土器群がある。全体的には余り多い量とは言えないが、これらの土器群の内、中・後葉の土器群が多く、初頭の土器は極僅かである。以下に、各土器群の説明を記す。

第Ⅰ群（第82図194～197）

本群は、僅かに出土した中期初頭に位置付けられる土器群で、五領ガ台式土器である。194は波状口縁となる波頂部を欠くが、口縁下に半裁竹管による断面蒲鉾状の平行沈線を数条巡らせ、地文にＲＬの縄文が施されている。195は平口縁となる口縁に突起をもち、口縁部文様を隆帯で区画し、区画内に横位の平行沈線や楕円状の沈線を描いている。196は平口縁となる口縁下に縦位の沈線文帯をもち、その下に押し引き状の刺突列で文様を描くもの。197は胴部に押し引き状の刺突列を縦位にもち、地文にＬＲの縄文を施している土器である。

第Ⅱ群（第82図198～第83図230）

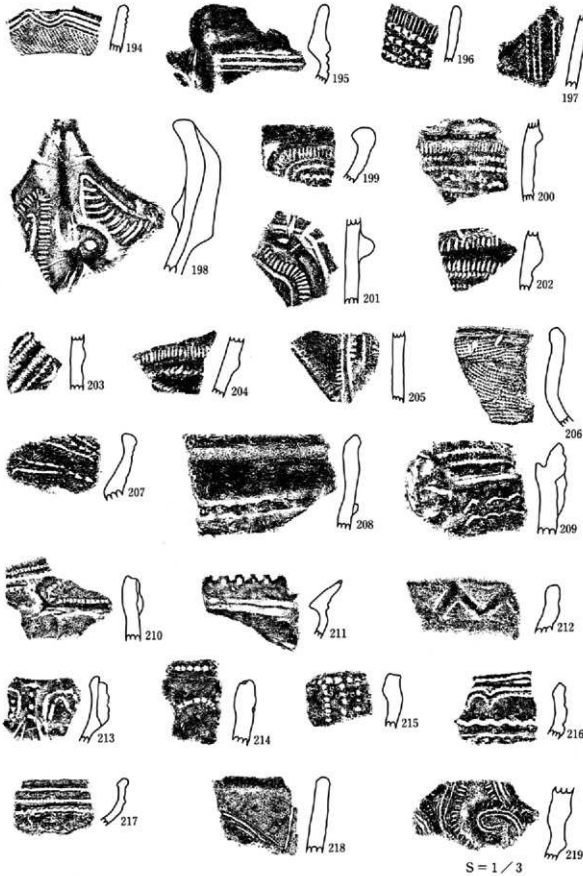
本群は、中期中葉に位置付けられる土器群で、勝坂式・阿玉台式土器を主体とする。これらの土器は、１類を勝坂式土器、２類を阿玉台式土器として分類した。

１類（198～206・209・211～219）

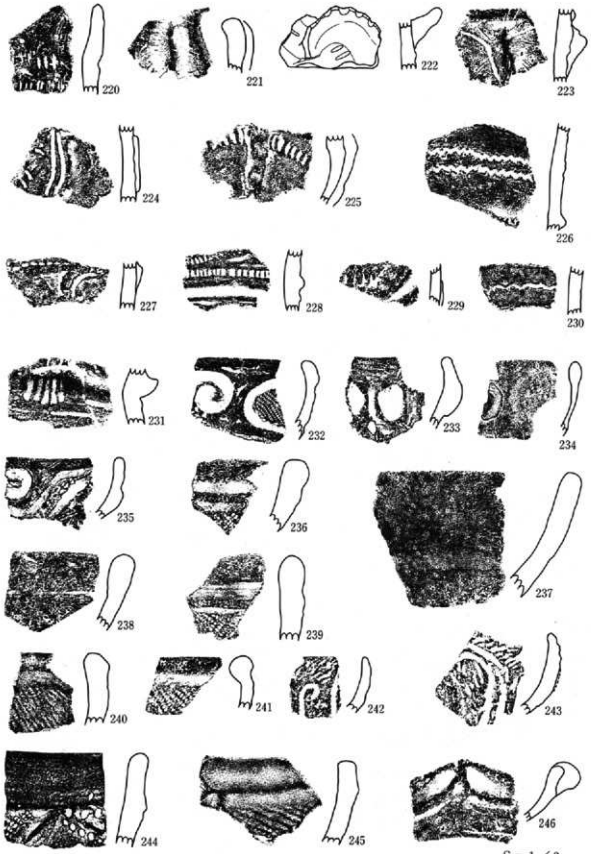
勝坂式土器を本類とした。198は波状口縁となる波頂部が大きく尖り、波頂下に隆帯を垂下させ、途中に吸盤状の円形隆帯をもつ。口縁部には沈線で文様区画し、区画内に沈線を充填する文様や、押し引きによる角押し文で文様区画を行っている。219も198と同様な器形となり、波頂下の口縁部に隆帯と角押し文や沈線で曲線的な文様を描いている。199は平口縁となる口縁下に、隆帯と角押し文・沈線により楕円状の文様が区画され、区画内に鋸歯状の沈線を施している。200は胴部に隆帯で区画し、角押し文やペン先状刺突で文様が描かれるもの。201・205は胴部に隆帯と、角押し文・沈線で文様を描くもの。202～204は胴部に隆帯と、角押し文・ペン先状刺突で文様が描かれている。また、203には三叉文もみられる。206は平口縁の口縁以下に、ＬＲの縄文を施している。209は平口縁となる口舌部に刻みをもち、口縁部に隆帯とペン先状刺突で文様区画し、区画内に押し引き沈線で鋸歯状の文様を描く。211は平口縁となる口縁の口舌部に刻みをもち、口縁部に押し引き沈線で文様が描かれているもの。212は平口縁となる口縁部に、隆帯で鋸歯状の文様が描かれているもの。213は平口縁となる口縁下に刻みをもつ隆帯で文様区画し、区画内に押し引き沈線やペン先状刺突で文様を描くもの。214は平口縁の口舌部に刺突列をもち、口縁部に隆帯と押し引き沈線で文様を描くもの。215は平口縁となる口縁部に、押し引き状の刺突列を縦位等に描いて文様とするもの。216は平口縁となる口縁部に、ペン先状刺突等で文様を描くもの。218は平口縁となる口縁部に、隆帯と沈線で文様を描くもの。

２類（207・208・210・220～230）

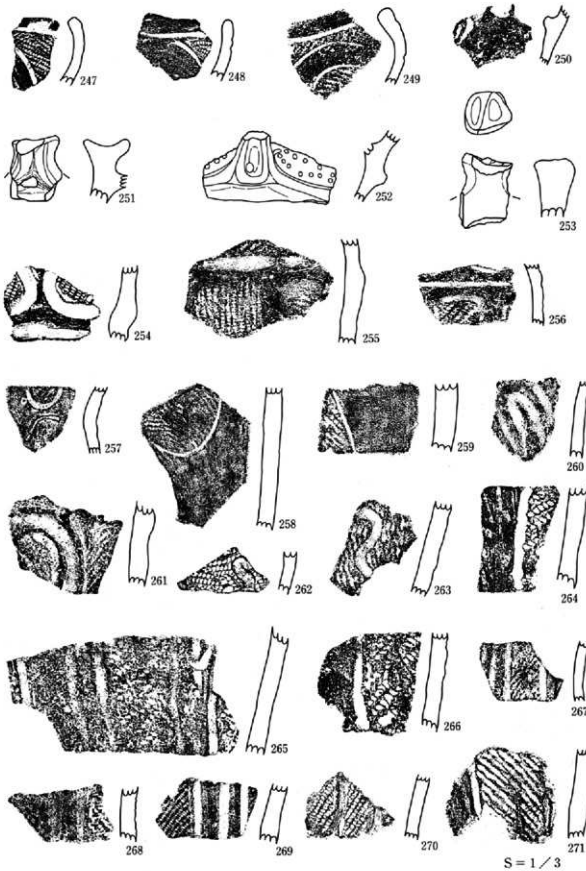
阿玉台式土器を本類とした。これらの土器の胎土には、雲母が混入している。207は平口縁の口縁下に、隆帯とペン先状刺突で楕円状の文様を描くもの。208は平口縁の口縁下が無文帯となり、口縁部に刻みをもつ隆帯を巡らせている。210は平口縁となる口縁に突起を有するが欠き、口舌部に押し引き沈線をもつ。口縁部には隆帯と押し引き沈線で文様が描かれている。220は波状口縁となる波頂下に隆帯で文様を描き、縦位の刻み状刺突を巡らせるもの。221は波状口縁となる波頂下に、隆帯を垂下させて文様を描くもの。222は口縁部ないし胴部に花びら状の大きい隆帯をもつもので、隆帯上には刻みを有する。223は胴部に隆帯を垂下させると共に、沈線で文様を描くもの。224は胴部に隆帯通し引き沈線で文様を描くもの。225は胴部に隆帯を垂下させて、縦位の刻み条沈線を巡らせるもの。226・230は胴部に押し引き沈線による鋸歯状の文様を描くもの。227～229は胴部に隆帯と押し引き沈線等で、楕円等の文様を描くもの。



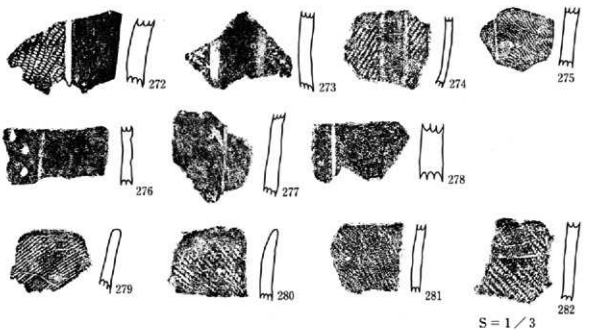
第82図　遺構外出土土器(1)



第83図　遺構外出土土器(1)



第84図　遺構外出土土器(12)



第85図　遺構外出土土器(3)

第Ⅲ群（第83図231～第85図）

本群は、中期後葉に位置付けられる土器群で、加曽利E式土器である。今回の調査で検出された、中期の遺構の主体をなす。231は頸部のくびれ部に隆帯を巡らせ、隆帯を突起状とした部分に５本の沈線を施したものである。232は平口縁となる口縁部に、太い沈線で渦巻き状の文様を描き、また楕円状の文様を区画する。区画内にはＲＬの縄文が施されている。233は平口縁となる口縁部に、隆帯で円形ないし楕円状の文様を描くもの。234は平口縁となる口縁部に、太い沈線や隆帯で渦巻き状・楕円状等の文様を描くもの。235は平口縁となる口縁部に、太い沈線や隆帯で渦巻き状・楕円状等の文様を描くもので、地文に縄文が施されている。236は平口縁の口縁下に太い沈線で文様が描かれ、区画された文様内にＲＬの縄文が施されている。237･238は平口縁の口縁下が無文帯となり、太い沈線を巡らせて文様帯区画し、胴部に逆Ｕ字状等の文様を描き、縄文を施すもの。239は平口縁の口縁下に太い沈線で文様が描かれ、区画された文様内にＬＲの縄文が施されている。240・241は平口縁の口縁下に隆帯と沈線で文様が描かれ、区画された文様内にＲＬの縄文が施されている。242は平口縁の口縁下に、縣手状懸垂文や逆Ｕ字状等の文様が描かれ、地文に縄文が施されたもの。243は内反する波状口縁となる口縁下に、楕円ないし逆Ｕ字状等の文様が描かれ、地文に縄文が施されている。244は平口縁となる口縁下が無文帯となり、微隆帯を巡らせて文様帯区画し、胴部に微隆帯で文様を描き、区画された文様内にＲＬの縄文が施される。また、刺突をも併せ施文されている。245は平口縁となる口縁下に幅狭な無文帯をもち、微隆帯を巡らせて文様帯区画し、胴部に微隆帯を垂下させて文様を描き、区画された文様内に縄文が施されている。246は波状口縁となる口縁下に、隆帯を巡らせて波頂部の突起を造り、以下の胴部には沈線で曲線的な文様が描かれている。247～249は波状口縁となる口縁下に沈線を巡らせて区画し、胴部に沈線で曲線的な文様を描き、文様間に縄文を充塡する。250～253は口縁に把手をもつもので、252は隆

帯で区画された文様内に刺突を充塡している。254・255は口縁部に隆帯と沈線で楕円等の文様を描き、文様内にＬＲないしＬＲＬの縄文を施すもの。256～259は胴部に縦長な楕円等の文様を沈線で描き、文様内に縄文を施すもの。261は胴部に微隆帯で曲線的な文様を描くもので、文様内に縄文を施している。262・263は胴部に縄文が施され、蛇行する懸垂文が描かれているもの。264～275は胴部に直線的な懸垂文が描かれ、区画内に縦位回転のＬＲないしＲＬの縄文を施すもの。276は胴部に直線的な懸垂文が描かれ、区画内に刺突を充塡するもの。277・278は胴部に直線的な懸垂文が描かれている。279～282は口縁以下および胴部に縄文が施されている土器である。

第Ⅳ期

本調査で検出された後期の遺構には、先に述べたように後期前葉の堀之内Ⅰ式土器による埋甕がある。包含層中から出土した土器には、後期初頭に位置ずけられる土器群や、前葉の土器群がある。全体的には、余り多い量とは言えない。以下に、各土器群の説明を記す。

第Ⅰ群（第86図283～289）

本群は、後期初頭に位置付けられる土器群で、称名寺式土器である。７片と量は少ない。283・284は胴部に沈線で剣先文等の文様を描くもの。285・286は胴部に沈線で曲線的な文様を描くもの。287は胴部に沈線でＪ字状の文様を描くもの。288・289は胴部に沈線で文様を描き、文様内に刺突を充塡させている土器である。

第Ⅱ群（第86図290～第87図）

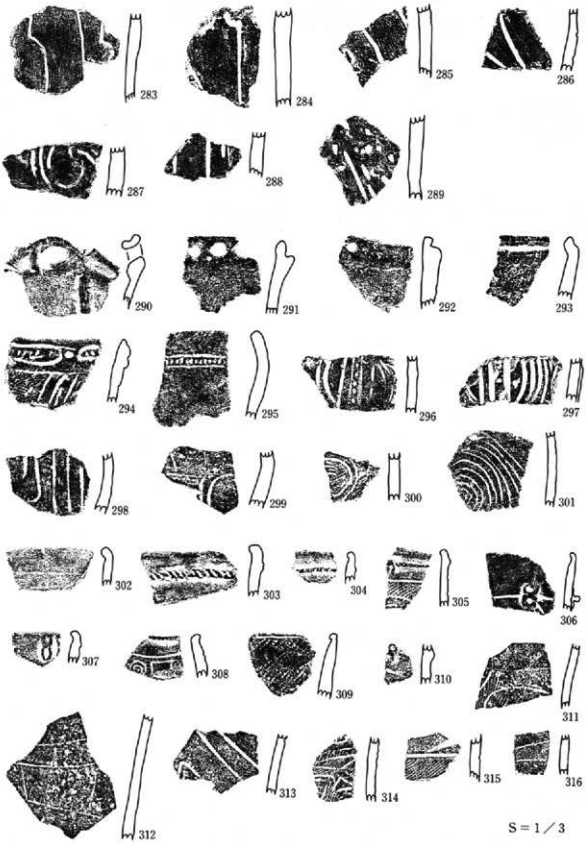
本群は、後期前葉に位置付けられる土器群で、堀之内式土器である。これらの土器は、施文される文様等から１類を堀之内Ⅰ式土器、２類を堀之内Ⅱ式土器として分類した。

１類（290～301）

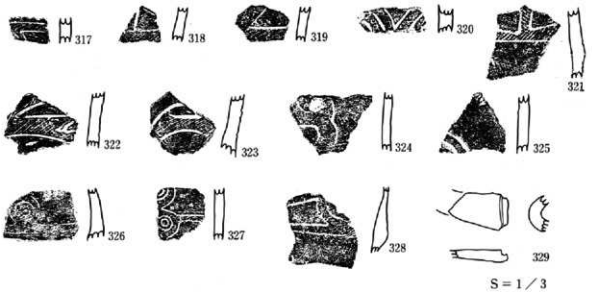
堀之内Ⅰ式土器を本類とした。290は平口縁となる口縁に突起をもち、突起の口舌部に沈線と突起部に孔を有する。口縁下の頸部は無文帯となるが、隆帯が垂下されている。291・292は平口縁となる口縁部に円形刺突が配され、頸部は無文帯となっている。293は平口縁となる口縁部に沈線が１条巡り、頸部は無文帯となっている。294は平口縁となる口縁部が肥圧し、口縁部に円形刺突と沈線で楕円の文様が描かれ、楕円文内に刻み状の沈線が施される。胴部には数条の縦長な弧状沈線で文様が描かれ、文様間に縄文が充塡されている。295は平口縁となる口縁下に２条の沈線を巡らせ、沈線間に刺突を有する。296は胴部に刺突をもつ縦位沈線と、その両側に沈線で重弧状の文様を描くもの。297は胴部に刻みをもつ縦位隆帯と、その両側に沈線で重弧状の文様を描くもの。298は胴部に縦位沈線等で文様を描くもので、文様間に縄文がみられる。299・300は胴部に沈線で曲線的な文様を描くもの。301は胴部に沈線で重弧状ないし同心円状の円形文様を描いている土器である。

２類（302～328）

堀之内Ⅱ式土器を本類とした。302は平口縁となる口縁下に、間隔の空く２条の沈線が巡るもの。303・304は平口縁となる口縁下に、刻みをもつ細い隆帯を巡らせている。 305は平口縁となる口縁下に、刻みをもつ細い隆帯を巡らせ、８字状貼付文を有して文様帯区画する。胴部に沈線で文様を描くと共に、文様内には縄文が充塡されている。306は平口縁となる口縁下に沈線を巡らせ、８字状貼付文を有して文様帯区画するもの。307は平口縁となる口縁下に８字状貼付文を有している。308は胴部に円形等の幾何学的な文様が描かれ、文



第86図　遺構外出土土器(4)



第87図　遺構外出土土器(5)

様内に縄文を充塡するもの。309は平口縁となる口縁直下に１条の沈線が巡り、以下にＬＲの縄文が施されているもの。310は口縁部に８字状貼付文を配しているもの。311・312は胴部に沈線で曲線的な文様を描き、区画された文様内に縄文を充塡するもの。313・314は胴部に沈線で三角形等の幾何学的な文様を描くもので、区画された文様内に縄文を充塡している。315・316は胴部に沈線で文様を描き、区画された文様内に縄文を充塡している。317～319・321・322は胴部に沈線で幾何学的な文様を描くもので、区画された文様内に縄文を充塡している。320・323～325は胴部に沈線で曲線的な文様を描くもので、区画された文様内に縄文を充塡している。326～328は胴部に沈線で円形等の幾何学的な文様を描くもので、区画された文様内に縄文を充塡している土器である。

なお、329は注口土器の注口部である。

石器（第88～105図、表23～35）

出土した石器は、遺物収納箱で40箱余を数える。これらの内、定型石器として認められるものは767点を数える。本書に掲載した石器はその一部であり、剥片類については掲載していない。出土した石器の多くは、縄文の包含層中よりのものであるが、古墳時代以降の遺構から出土した縄文時代の石器は本項で扱っている。石器の器種でみると、凹石が220点と最も多く、次いで打製石斧の207点、スクレイパーの116点と続く。打製石斧には欠損品が多く、スクレイパーには黒曜石の細片を素材とした細かい加工を加えたものも含まれている。

石鏃

出土した石鏃は、24点である。使用される石材には、黒曜石が最も多く主体を占め、チャートが２点、黒色頁岩が１点、黒色安山岩が１点みられる。また、無茎のものが主体を占め、有茎石鏃は24の１点だけである。これらの石鏃の中には、欠損しているものも認められ、製作途中に置ける欠損や、製作途中のものと考

えられるものも含まれている。こうした欠損品や未製品、および黒曜石のフレイク・チップ類、さらには黒曜石の原石や石核等が出土していることからすると、本遺跡内で石鏃製作が行われたことを示しているものと考えられる。

石錐

出土した石錐は、4点である。使用される石材には、黒曜石が3点と、チャートが1点みられる。これらの形状は一定していない。素材の剥片形状をあまり変えずに先端部加工を施すものであり、4のように素材の剥片形状をそのままとどめているものもある。

石匙

出土した石匙は、3点である。使用される石材には、黒色頁岩が2点と、チャートが1点使用されている。これらの石匙には、横型のもの1・2と、縦型のもの3が存在し、片面ないし両面加工を施すものとがある。また、3は摘み部の抉入が弱い。

スクレイパー

出土した中から56点を掲載した。ここに示したスクレイパーには、定型・不定形を問わずに、剥片の側縁部に調整加工を施したものを扱った。大きさ等により、次のように分類した。

Ⅰ類（1～23）

比較的小型のものをこの類とする。用いられる石材には、黒曜石によるものが主体を占め、チャートが僅かに1点加わり、石鏃の石材比率に類似する。使用される素材には、比較的小型の縦長剥片が用いられ、側縁部に裏面側から平坦剥離を連続的に施し、鋭利な刃部を作り出しているもの。また、鈍角な刃部を作り出しているものとがある。

Ⅱ類（24～56）

大型のものをこの類とする。用いられる石材には、黒色頁岩が12点、硬質泥岩が11点、珪質頁岩が7点で、黒色安山岩・黒曜石・輝緑岩が1点づつとなる。使用される素材には、やや大きめな縦長剥片ないしは横長剥片が用いられ、側縁部に片面あるいは両面から比較的平坦な剥離を連続的に施し、鋭利な刃部を作り出している。縦長剥片素材のものには、24・25・38・40が代表され、横長剥片素材のものには27・50・51が代表される。

打製石斧

出土した打製石斧は、207点を数えるが、ここに掲載したものは比較的残存状態の良い79点である。使用される石材には、硬質泥岩が最も多く37点、粗・細粒輝石安山岩が13点、変玄武岩が8点、珪質頁岩・黒色頁岩が5点、ホルンフェルス・雲母石英片岩・砂岩が2点、珪質変質岩・角閃石片岩・泥岩が1点づつあり、硬質泥岩の使用頻度が最も高いのが解る。これら打製石斧の形状には、短冊形・撥形、分銅形等のものがあるが、石材による形状差は認められない。また、剥片素材のものも認められる。

磨製石斧

出土した磨製石斧は32点あるが、その内の20点を掲載した。使用される石材には、変玄武岩が主体を占め、

硬質泥岩と変ハンレイ岩が１点づつある。素材となる石を荒割により形を整え、その後敲打により器体全体を調整し、さらに研磨により磨製石斧を完成させるという製作工程が窺える。このことは、１～３等に荒割段階の剥離痕が残され、６や13等に敲打痕を残しながらも研磨されていることから理解できる。

石核

出土した石核は数多くあるが、ここに掲載するものは、その中の代表的なものである。１はその形状があたかも船底形石器を思わせるが、剥片剥離の状態は全く異なるもので、先のＪ４・５号住居跡出土の第40図54・55、第44図20と同様な形態をとり、縄文中期の可能性が高い。２も同様な石核である。３の形態をとる石核が最も多い。なお、黒曜石製の小型な石核もみられる。

敲石

ここで敲石としたものは、端部に敲打痕のみを有するものである。１は下端部のみに敲打痕が認められるもので、２・３は上下の両端部に敲打痕が認められる。

磨石

出土した磨石は77点あるが、ここではその内の38点を掲載した。使用される石材には、粗粒輝石安山岩が主体を占め、輝緑岩・牛伏砂岩が１点づつ用いられている。これらは形状等から、器体が平面形および断面形が共に丸く球状を呈するものと、卵状ないしは楕円状を呈するものとがある。いずれも、丁寧に磨かれている。また、器体を磨いた他に、凹状の孔を有するものもある。さらに、側面を平坦に磨いたものもある。

凹石

この凹石は、本遺跡で出土した石器の中にあって最も量が多く、220点を数える。掲載した79点の石材には、粗粒輝石安山岩が主体を占め、砂岩・牛伏砂岩・緑色片岩・変玄武岩等が僅かに使用されている。こうした凹石は、片面ないし両面に凹孔を一つもつもの、凹孔を二つもつもの等がある。

多孔石

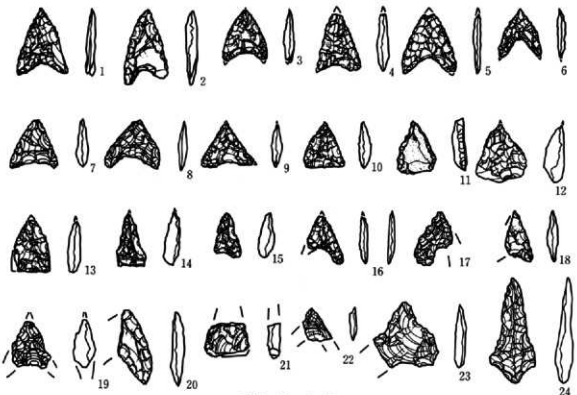
出土した多孔石の石材は、全て粗粒輝石安山岩によるものである。なお、ここに掲載したものは、出土したものの一部であり、破片を避けた比較的に遺存状態の良好なものを掲載した。

石皿

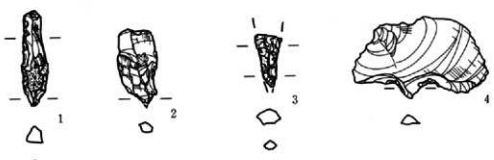
出土した石皿は、18点を数える。これらの石材には、粗粒輝石安山岩が主体を占め、緑色片岩が３点用いられている。石皿には、多孔石の要素と石皿の要素を併せもつものと、石皿のみの要素をもつものの２種類が認められる。

石棒

出土した石棒は、３点だけである。使用される石材は、全て粗粒輝石安山岩によるものである。１・２は頭部であり、３は胴部で両端部が欠損している。



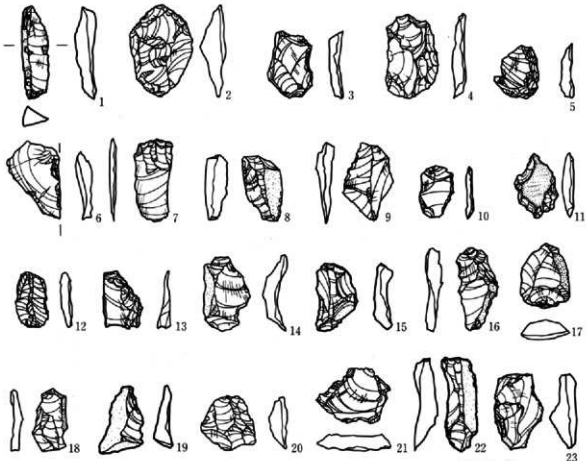
石鏃　S＝4／5



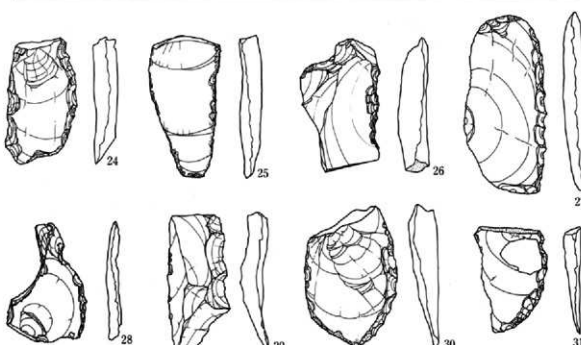
石錐　S＝4／5

石匙　S＝1／2

第88図　遺構外出土石器(1)

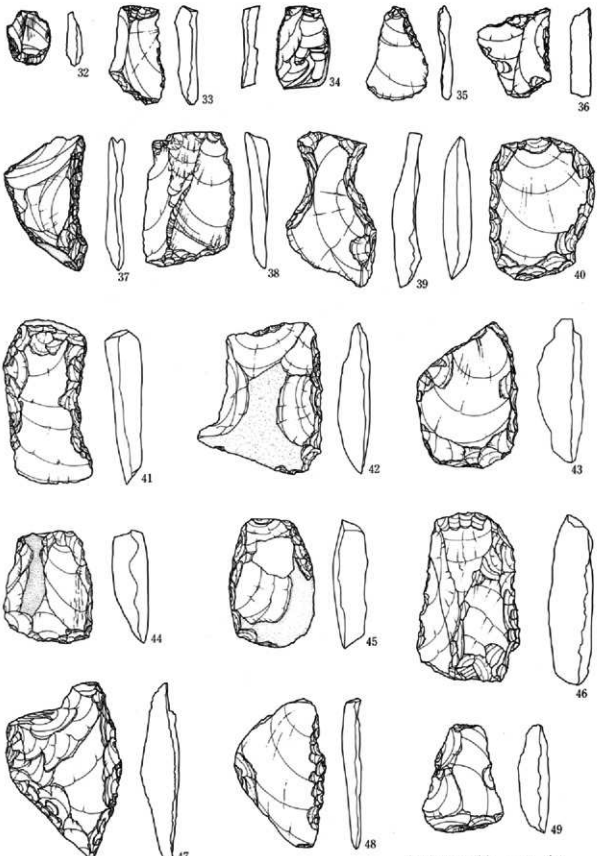


S＝4／5



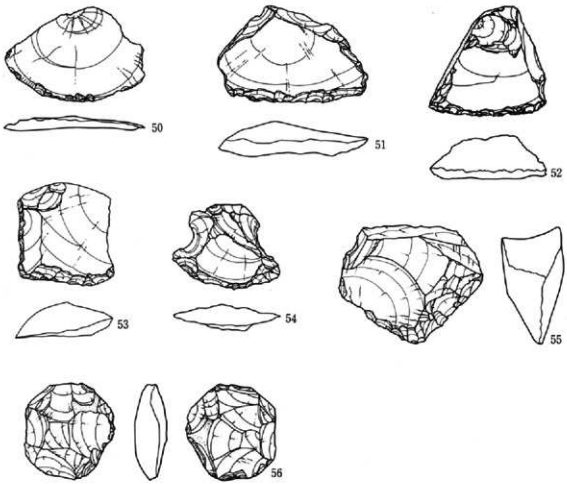
スクレイパー(1)　　S＝1／2

第89図　遺構外出土石器(2)

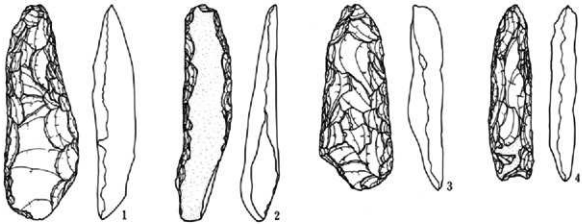


スクレイパー(2)　S＝1／2

第90図　遺構外出土石器(3)

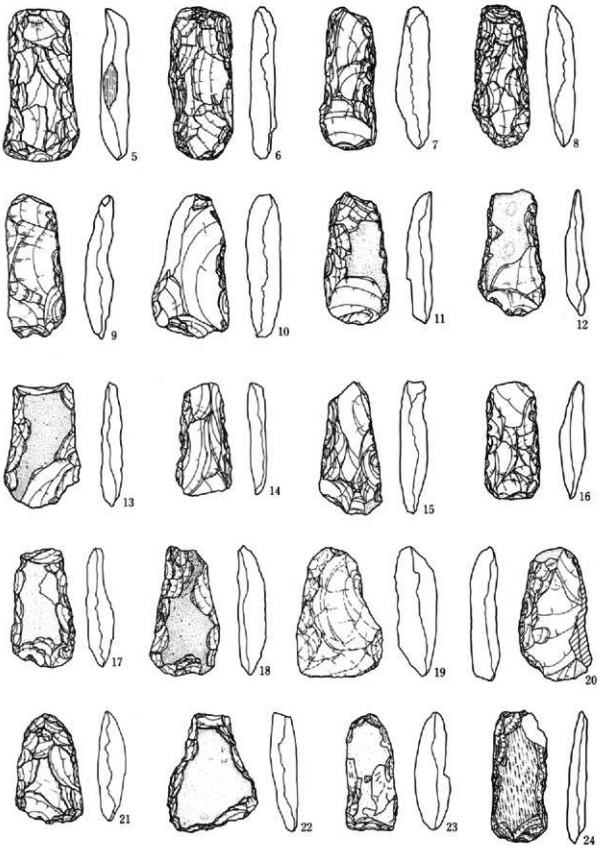


スクレイパー(3)　S＝1／2



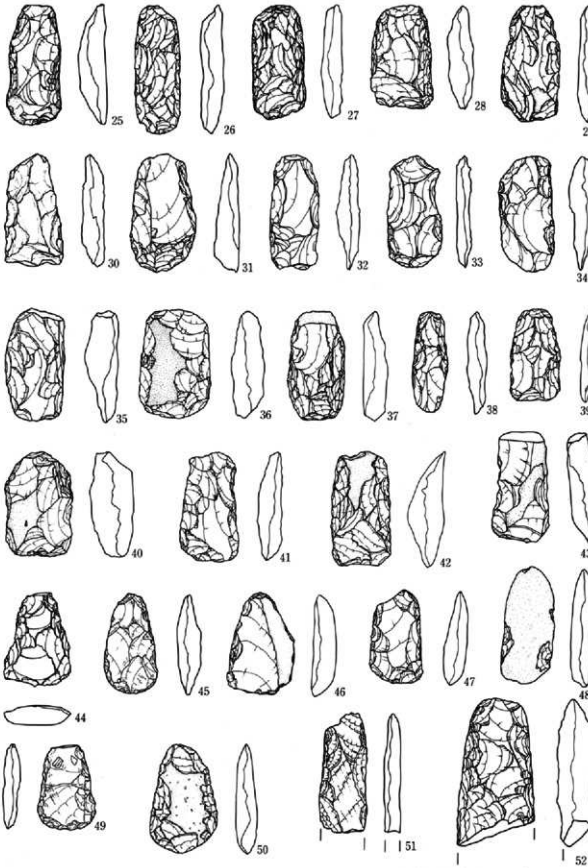
打製石斧(1)　S＝1／3

第91図　遺構外出土石器(4)



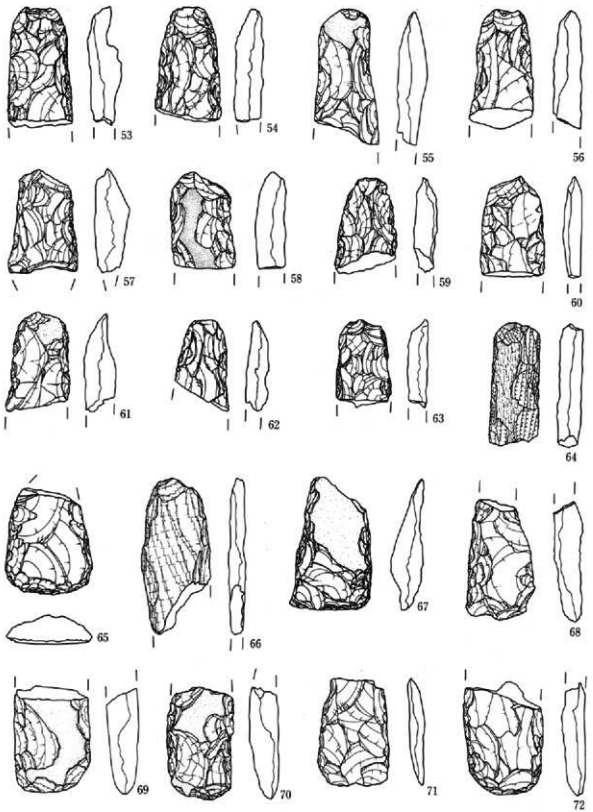
打製石斧(2)　S＝1／3

第92図　遺構外出土石器(5)



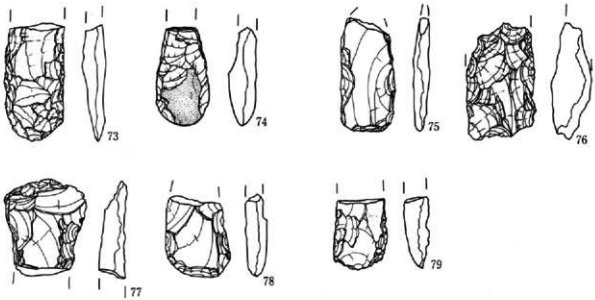
打製石斧(3)　S＝1／3

第93図　遺構外出土石器(6)

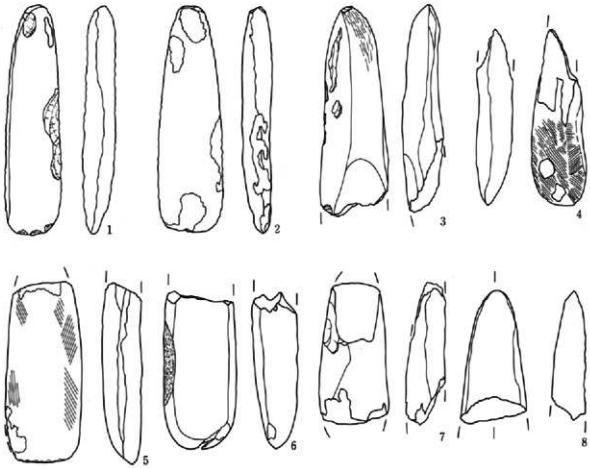


打製石斧(4)　S＝1／3

第94図　遺構外出土石器(7)

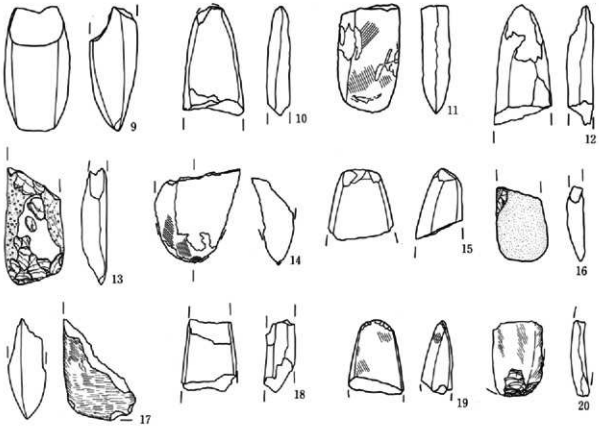


打製石斧(5)　S＝1／3

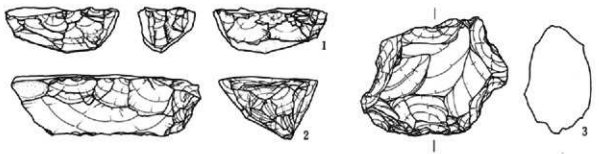


磨製石斧(1)　S＝1／3

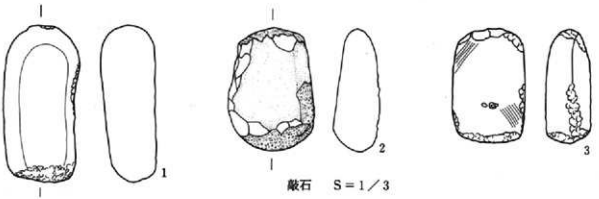
第95図　遺構外出土石器(8)



磨製石斧(2)　S＝1／3

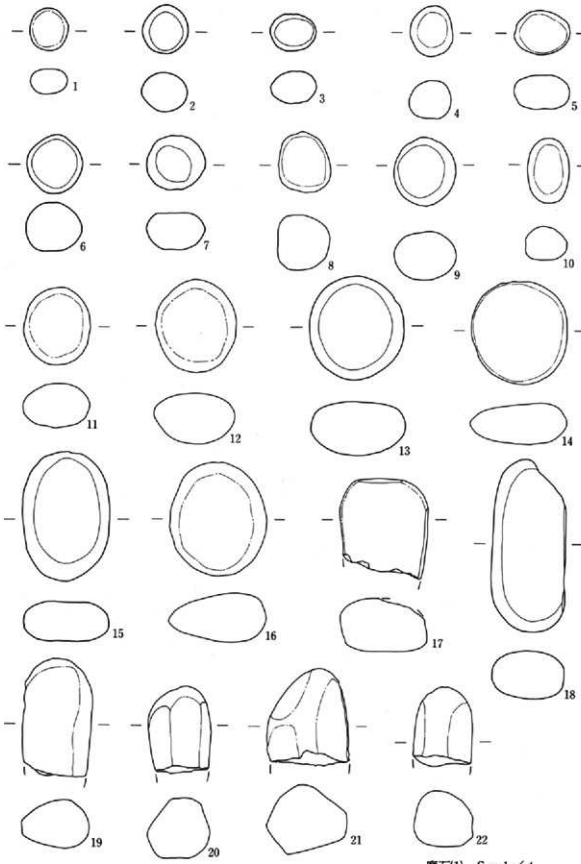


石核　S＝1／3



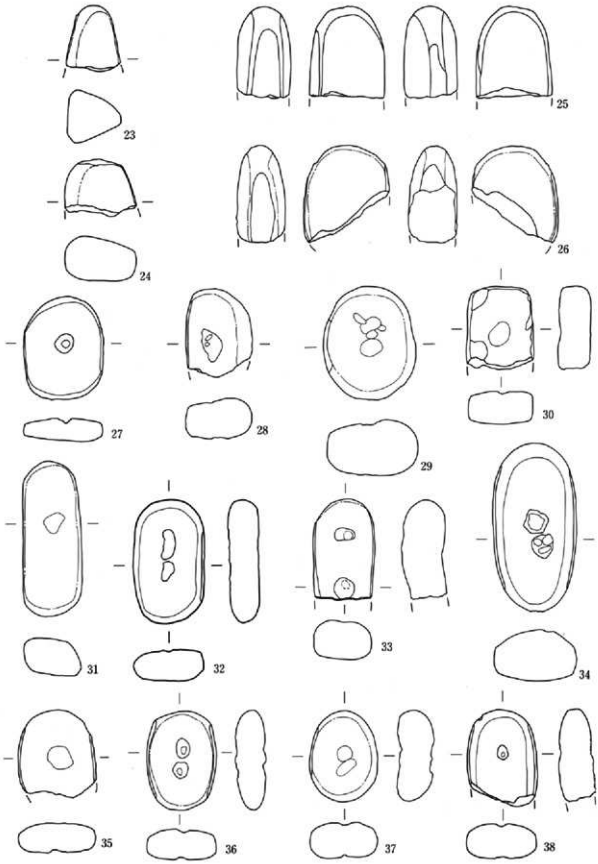
敲石　S＝1／3

第96図　遺構外出土石器(9)



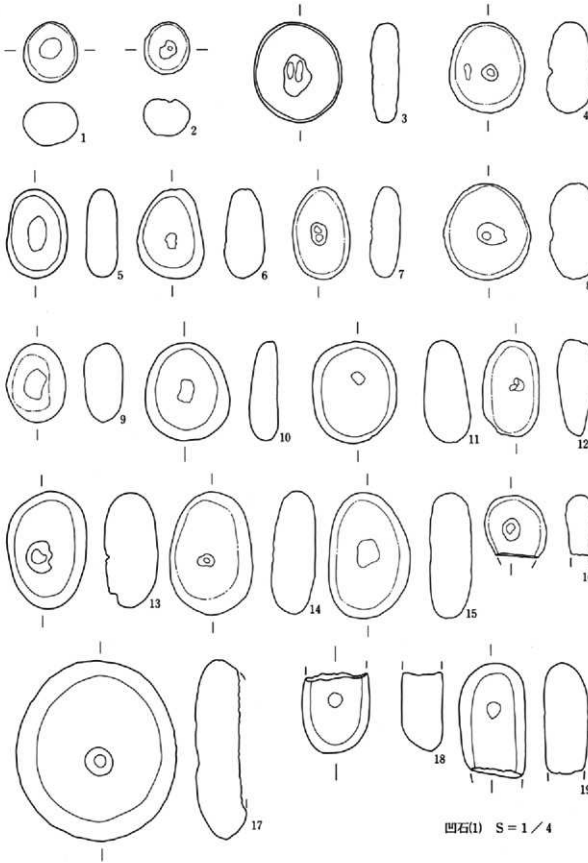
磨石(1)　S＝1／4

第97図　遺構外出土石器(1)

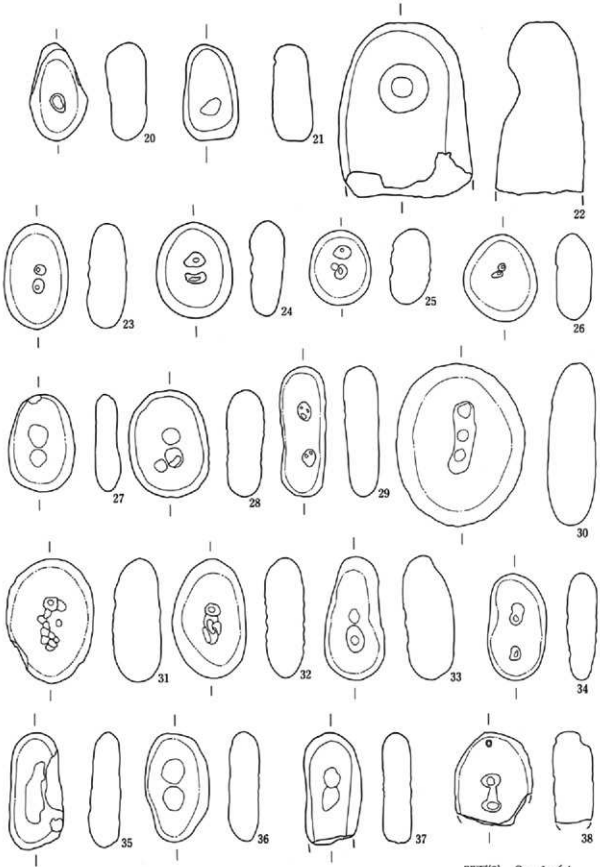


磨石(2)　S＝1／4

第98図　遺構外出土石器(11)

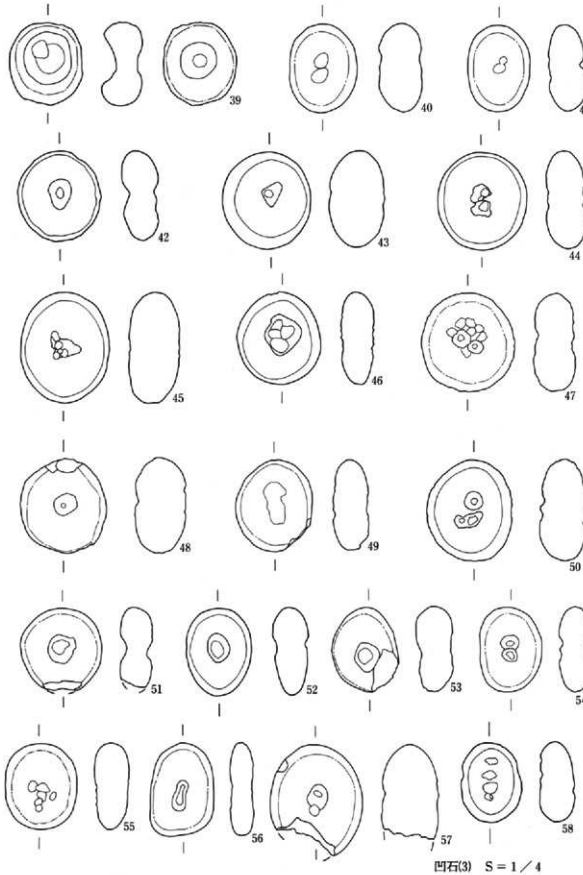


第99図　遺構外出土石器(12)



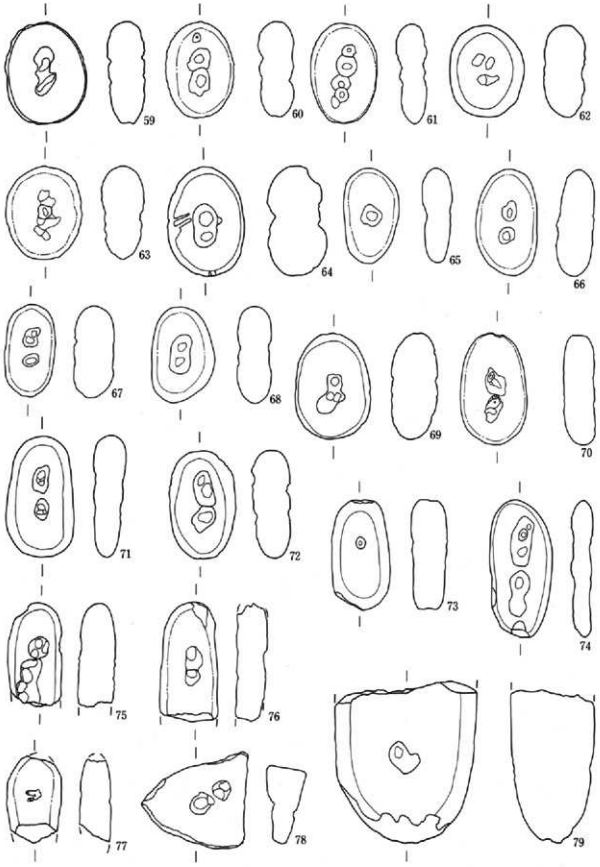
凹石(2)　S＝1／4

第100図　遺構外出土石器(13)



凹石(3)　S＝１／４

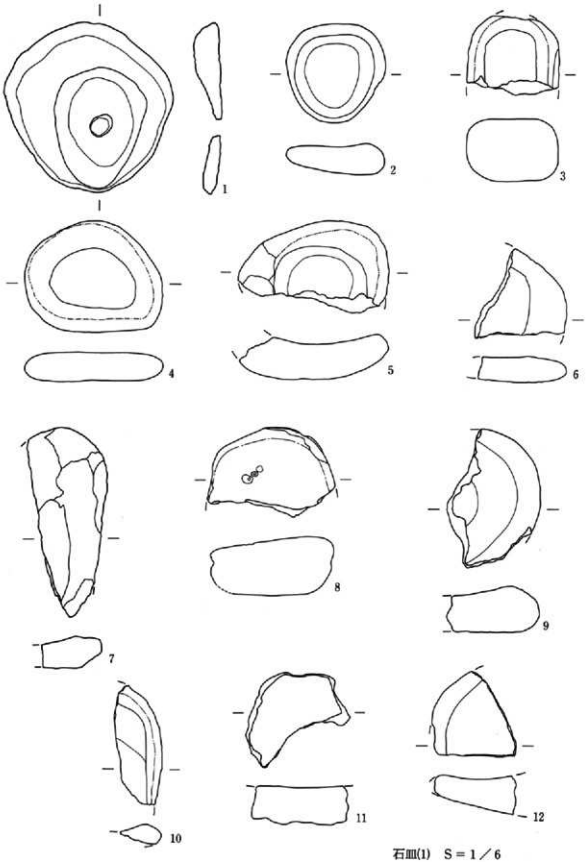
第101図　遺構外出土石器(4)



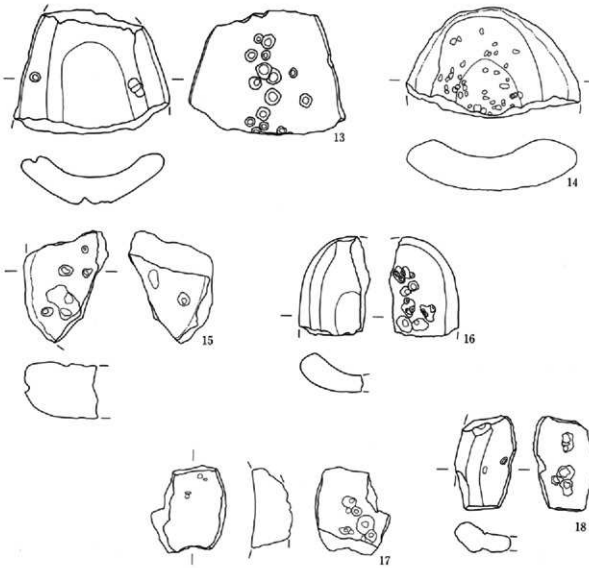
凹石(4)　S＝1／4

第102図　遺構外出土石器(15)

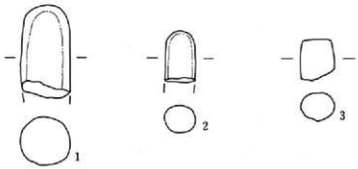
第103図　遺構外出土石器(4)



第104図　遺構外出土石器(17)

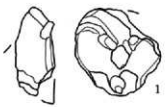


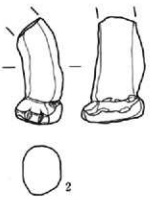
石皿(2)　S＝1／6



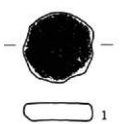
石棒　S＝1／6

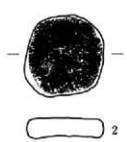
第105図　遺構外出土石器(10)

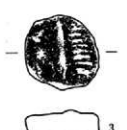




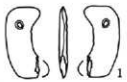
土偶

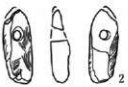




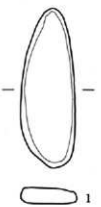


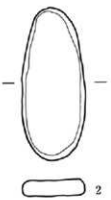
土製円盤

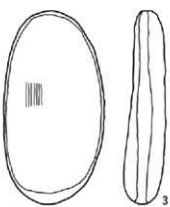


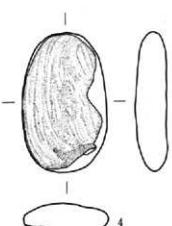


垂飾り









石製品

S＝1／2

第106図　遺構外出土　土・石製品

表23　遺構外出土石器計測表（石鏃）

遺物No	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	黒曜石	2.2	1.6	0.3	0.6
2	チャート	2.4	1.4	0.4	1.1
3	黒曜石	(1.7)	1.4	0.3	0.4
4	黒曜石	(1.8)	1.4	0.4	0.4
5	黒曜石	(1.9)	1.8	0.2	0.5
6	黒曜石	(1.6)	(1.4)	0.2	0.2
7	黒曜石	1.6	1.6	0.4	1.0
8	黒曜石	1.6	1.8	0.3	1.0
9	黒曜石	(1.4)	1.7	0.3	0.5
10	黒曜石	1.5	1.3	0.4	0.6
11	黒曜石	1.7	1.3	0.4	0.8
12	黒曜石	(1.9)	1.6	0.7	1.5
13	黒曜石	(1.7)	(1.1)	0.4	0.6
14	黒曜石	1.7	0.9	0.5	0.7
15	黒曜石	1.4	0.9	0.5	0.3
16	黒曜石	(1.6)	(1.2)	0.3	0.3
17	黒曜石	1.3	0.9	0.2	1.0
18	チャート	(1.7)	(0.9)	0.3	0.3
19	黒曜石	1.6	1.3	0.7	1.2
20	黒色安山岩	(2.4)	(1.1)	0.4	0.7
21	黒曜石	(1.1)	(1.5)	0.4	0.5
22	黒曜石	(1.0)	(1.0)	0.2	0.2
23	黒曜石	(2.2)	(2.1)	0.3	1.0
24	黒色頁岩	3.5	1.5	0.6	3.0

表24　遺構外出土石器計測表（石錐）

遺物No	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	黒曜石	3.1	0.8	0.5	1.3
2	黒曜石	(2.4)	1.3	0.3	2.3
3	チャート	(1.7)	(0.9)	(0.5)	0.6
4	黒曜石	2.7	4.5		5.1

表25　遺構外出土石器計測表(石匙)

遺物No	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	黒色頁岩	5.5	7.1	1.4	41.6
2	チャート	3.3	5.4	1.5	17.0
3	黒色頁岩	7.2	4.1	1.2	29.2

表26　遺構外出土石器計測表（スクレイパー）

遺物No	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	黒曜石	3.0	0.9	0.7	1.3
2	黒曜石	2.1	3.1	0.9	4.0
3	黒曜石	1.5	2.2	0.5	1.2
4	チャート	1.7	2.3	0.4	1.9
5	黒曜石	1.5	1.7	0.5	1.0
6	黒曜石	1.7	2.6	0.5	1.3
7	黒曜石	1.3	2.7	0.3	1.0
8	黒曜石	2.1	1.3	0.7	1.5
9	黒曜石	2.6	1.7	0.6	1.4
10	黒曜石	1.7	1.1	0.2	0.5
11	黒曜石	1.4	2.1	0.4	1.0
12	黒曜石	1.8	1.1	0.4	0.7
13	黒曜石	1.3	1.9	0.4	1.0
14	黒曜石	1.5	2.5	0.8	1.5
15	黒曜石	1.3	2.2	0.6	1.3
16	黒曜石	2.7	1.3	0.6	1.0
17	黒曜石	2.1	1.7	0.6	3.0
18	黒曜石	1.2	2.0	0.4	1.0
19	黒曜石	2.2	1.5	0.6	1.1
20	黒曜石	1.8	1.8	0.6	3.0
21	黒曜石	1.9	2.5	0.6	2.0
22	黒曜石	3.1	1.2	0.8	1.7
23	黒曜石	1.6	2.5	0.9	2.4
24	黒色頁岩	6.7	3.8	1.3	39.0
25	黒色頁岩	7.5	3.9	1.1	28.3
26	黒色頁岩	4.2	7.0	1.6	46.0
27	黒色頁岩	4.4	9.5	1.2	58.0
28	黒色頁岩	6.2	4.1	0.7	15.2
29	珪質頁岩	7.2	3.3	1.6	25.6
30	黒色頁岩	7.5	4.8	1.6	52.0
31	珪質頁岩	5.6	3.9	0.9	17.0
32	黒曜石	2.8	2.3	0.9	4.5
33	珪質頁岩	5.1	2.9	1.3	12.0
34	珪質頁岩	4.3	2.8	0.8	11.1
35	珪質頁岩	5.0	3.2	0.8	8.4
36	黒色頁岩	3.7	4.4	1.1	22.5
37	珪質頁岩	4.2	7.2	0.9	23.0
38	硬質泥岩	7.1	4.8	1.3	44.0
39	珪質頁岩	8.2	4.8	1.6	57.0
40	輝緑岩	5.6	7.6	1.4	79.6
41	硬質泥岩	8.6	4.8	2.0	80.0
42	硬質泥岩	6.7	8.0	1.7	88.5
43	黒色頁岩	5.4	7.7	2.4	95.3
44	黒色頁岩	5.9	4.7	1.9	61.0
45	硬質泥岩	6.8	4.6	1.8	70.0
46	黒色安山岩	8.9	5.4	2.3	130.1
47	黒色頁岩	6.0	9.4	2.0	106.6
48	黒色頁岩	4.8	7.9	1.0	39.0
49	硬質泥岩	5.7	4.3	1.6	35.0
50	硬質泥岩	5.0	7.5	0.8	22.0
51	硬質泥岩	5.1	8.0	1.9	61.0
52	硬質泥岩	5.7	6.1	2.3	73.1
53	黒色頁岩	5.4	5.2	1.8	44.2
54	硬質泥岩	4.4	5.7	1.4	23.3
55	硬質泥岩	7.5	6.2	3.2	154.3
56	硬質泥岩	5.1	4.7	1.7	43.4

表27　遺構外出土石器計測表（打製石斧）

遺物No.	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	変玄武岩	16.9	5.9	3.4	416.0
2	変玄武岩	(17.0)	(4.4)	(3.1)	210.0
3	粗粒輝石安山岩	14.6	5.8	2.7	262.0
4	変玄武岩	13.9	3.6	2.1	144.0
5	硬質泥岩	12.0	6.0	2.4	201.0
6	変玄武岩	12.0	5.1	2.1	179.0
7	細粒輝石安山岩	11.2	4.6	2.7	166.0
8	硬質泥岩	11.1	4.6	2.3	132.0
9	硬質泥岩	19.2	4.5	2.3	131.0
10	変玄武岩	11.3	6.1	2.8	233.0
11	珪質変質岩	10.3	5.2	2.0	130.0
12	硬質泥岩	9.9	5.2	1.9	77.0
13	硬質泥岩	9.9	6.0	1.7	115.2
14	珪質頁岩	8.9	4.5	1.4	57.6
15	ホルンフェルス	10.6	5.0	2.2	121.0
16	珪質頁岩	9.2	4.4	2.1	89.0
17	硬質泥岩	9.4	5.1	2.2	111.6
18	粗粒輝石安山岩	10.3	5.5	2.2	130.1
19	粗粒輝石安山岩	10.2	6.9	3.4	248.0
20	硬質泥岩	10.6	5.8	2.2	163.0
21	硬質泥岩	8.7	5.3	2.2	112.0
22	硬質泥岩	9.4	7.2	2.1	151.0
23	硬質泥岩	9.1	4.1	2.8	135.0
24	変玄武岩	10.5	4.4	1.4	108.0
25	硬質泥岩	9.4	4.3	2.4	109.0
26	硬質泥岩	10.2	3.6	1.8	86.4
27	硬質泥岩	9.0	4.2	1.7	86.0
28	粗粒輝石安山岩	8.2	5.1	2.2	92.0
29	硬質泥岩	9.1	4.6	1.4	72.0
30	硬質泥岩	8.9	4.5	1.9	92.3
31	黒色頁岩	9.4	5.2	2.0	101.2
32	硬質泥岩	9.1	3.9	1.9	71.5
33	硬質泥岩	8.8	4.2	1.3	40.0
34	ホルンフェルス	9.1	4.3	2.0	96.0
35	硬質泥岩	8.9	4.6	2.6	124.1
36	硬質泥岩	8.5	5.7	2.6	168.0
37	硬質泥岩	8.6	4.6	1.9	94.0
38	黒色頁岩	8.1	2.8	1.6	41.6
39	硬質泥岩	7.3	4.0	1.0	37.0
40	硬質泥岩	8.2	5.3	3.5	178.0
41	硬質泥岩	8.7	4.6	1.9	87.0
42	硬質泥岩	9.1	4.6	2.9	136.5
43	硬質泥岩	(8.8)	4.5	2.0	81.0
44	黒色頁岩	7.2	5.2	1.5	69.0
45	珪質頁岩	7.9	4.3	1.9	55.0
46	硬質泥岩	8.0	5.3	1.9	101.0
47	黒色頁岩	7.4	4.4	1.8	66.0
48	角閃石片岩	9.3	4.0	1.7	94.5
49	黒色頁岩	6.6	4.6	1.4	49.0
50	粗粒輝石安山岩	8.6	5.3	1.7	90.0
51	黒色片岩	(9.4)	3.7	1.3	67.0
52	硬質泥岩	11.7	6.0	2.9	222.7
53	硬質泥岩	(9.5)	5.1	2.6	134.9
54	粗粒輝石安山岩	(9.0)	5.2	2.3	137.9
55	砂岩	(10.6)	5.2	2.3	119.0
56	変玄武岩	(9.2)	5.1	2.3	141.9
57	硬質泥岩	(8.2)	5.1	2.9	126.4
58	硬質泥岩	(7.6)	5.2	2.4	125.0
59	硬質泥岩	(7.5)	4.9	1.9	69.4
60	細粒輝石安山岩	(8.0)	5.2	1.5	80.0
61	硬質泥岩	(7.9)	5.1	2.5	103.4
62	粗粒輝石安山岩	(6.5)	4.0	1.8	54.3
63	硬質泥岩	(7.0)	4.4	1.6	58.9
64	雲母石英片岩	9.7	3.8	2.0	105.9
65	砂岩	(8.1)	6.8	2.3	139.9
66	雲母石英片岩	(12.3)	5.5	1.4	117.0
67	珪質頁岩	10.4	6.1	2.5	147.5
68	粗粒輝石安山岩	(9.5)	5.5	2.4	118.5
69	変玄武岩	(8.4)	6.1	2.5	211.9
70	珪質頁岩	(8.9)	(5.3)	2.3	108.2
71	珪質頁岩	8.5	5.7	1.3	72.6
72	硬質泥岩	(9.0)	6.2	1.9	125.7
73	硬質泥岩	(9.3)	4.7	1.8	89.7
74	泥岩	(7.7)	4.2	2.2	85.8
75	粗粒輝石安山岩	(9.0)	4.3	1.4	64.6
76	粗粒輝石安山岩	(9.1)	(5.5)	3.2	156.3
77	硬質泥岩	(7.7)	6.6	2.1	108.8
78	細粒輝石安山岩	(6.5)	5.2	1.7	72.8
79	硬質泥岩	(5.6)	4.3	2.0	61.0

表28　遺構外出土石器計測表（磨製石斧）

遺物No.	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	変玄武岩	19.0	4.4	2.5	340.0
2	変玄武岩	17.8	5.2	2.4	355.0
3	変玄武岩	(16.5)	5.4	3.3	424.2
4	変玄武岩	(13.8)	(4.4)	2.9	247.0
5	変玄武岩	(14.2)	6.0	3.2	501.0
6	変玄武岩	(12.4)	5.7	3.7	457.0
7	変玄武岩	(11.2)	5.6	3.2	286.2
8	変玄武岩	(10.2)	(5.1)	2.6	211.1
9	変ハンレイ岩	(9.9)	5.2	3.8	269.9
10	変玄武岩	(8.7)	4.8	1.8	109.0
11	変玄武岩	(8.5)	4.9	2.3	157.0
12	変玄武岩	(9.4)	(4.5)	2.1	132.0
13	変玄武岩	(9.2)	4.7	2.0	129.3
14	変玄武岩	(6.7)	(6.1)	(2.4)	165.0
15	変玄武岩	(5.5)	(5.2)	3.7	126.8
16	変玄武岩	(5.9)	4.0	1.4	47.0
17	変玄武岩	(8.0)	(5.7)	3.0	97.0
18	硬質泥岩	(5.7)	4.4	2.4	75.0
19	変玄武岩	(5.8)	(4.4)	(2.5)	80.0
20	変玄武岩	(6.0)	(4.0)	(1.3)	43.3

表29　遺構外出土石器計測表（石核）

遺物No.	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	硬質泥岩	4.5	9.1	3.6	147.8
2	硬質泥岩	4.1	15.0	7.9	627.0
3	硬質泥岩	9.5	11.6	5.3	651.0

表30　遺構外出土石器計測表（敲石）

遺物No.	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	粗粒輝石安山岩	12.4	6.1	4.4	565.0
2	変輝緑岩	9.7	6.8	3.7	374.8
3	変玄武岩	8.9	5.8	3.6	325.0

表31　遺構外出土石器計測表（磨石）

遺物No.	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	砂岩	4.4	4.0	2.6	60.0
2	粗粒輝石安山岩	5.2	4.8	4.1	133.0
3	粗粒輝石安山岩	5.0	3.8	3.4	70.0
4	粗粒輝石安山岩	5.4	4.5	4.0	150.0
5	粗粒輝石安山岩	6.0	4.7	3.6	120.0
6	粗粒輝石安山岩	6.2	5.9	5.1	235.0
7	輝緑岩	6.0	5.7	3.9	220.0
8	粗粒輝石安山岩	6.4	5.5	5.8	280.0
9	粗粒輝石安山岩	7.2	6.6	5.1	315.0
10	粗粒輝石安山岩	6.8	4.5	3.6	130.0
11	粗粒輝石安山岩	8.2	7.1	4.6	323.0
12	粗粒輝石安山岩	9.9	8.6	5.3	627.0
13	粗粒輝石安山岩	10.9	10.0	5.7	760.0
14	粗粒輝石安山岩	10.9	10.2	4.4	750.0
15	粗粒輝石安山岩	13.6	9.2	4.2	900.0
16	粗粒輝石安山岩	12.0	10.2	5.1	867.0
17	粗粒輝石安山岩	(10.5)	9.4	5.6	862.0
18	粗粒輝石安山岩	18.2	7.7	5.0	1220.0
19	粗粒輝石安山岩	(12.4)	7.4	5.1	660.0
20	粗粒輝石安山岩	(9.0)	6.7	6.3	590.0
21	粗粒輝石安山岩	(10.2)	8.7	7.3	856.0
22	粗粒輝石安山岩	(8.3)	6.3	5.9	440.0
23	粗粒輝石安山岩	(7.0)	5.7	5.6	275.0
24	粗粒輝石安山岩	6.1	7.6	4.7	316.0
25	粗粒輝石安山岩	9.6	8.1	5.7	721.0
26	粗粒輝石安山岩	(10.2)	9.0	5.2	532.0
27	牛伏砂岩	10.8	8.5	2.3	286.0
28	粗粒輝石安山岩	(9.2)	7.2	4.3	390.0
29	粗粒輝石安山岩	12.0	9.7	5.9	950.0
30	粗粒輝石安山岩	(8.7)	7.0	3.4	330.0
31	粗粒輝石安山岩	16.3	6.3	4.0	730.0
32	粗粒輝石安山岩	13.1	7.4	3.3	580.0
33	粗粒輝石安山岩	(10.6)	6.6	4.4	600.0
34	粗粒輝石安山岩	17.7	8.8	5.4	1302.0
35	粗粒輝石安山岩	(9.2)	8.2	3.1	310.0
36	粗粒輝石安山岩	10.4	7.4	3.3	411.0
37	粗粒輝石安山岩	9.6	7.2	3.9	390.0
38	粗粒輝石安山岩	(10.2)	7.5	3.6	448.0

表32　遺構外出土石器計測表（凹石）

遺物No.	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	粗粒輝石安山岩	6.4	5.7	4.6	220.0
2	粗粒輝石安山岩	5.5	4.8	3.8	130.0
3	粗粒輝石安山岩	10.6	9.3	3.0	370.0
4	粗粒輝石安山岩	9.5	8.0	4.8	456.0
5	粗粒輝石安山岩	9.4	6.3	3.3	327.0
6	粗粒輝石安山岩	9.5	7.0	4.2	390.0
7	粗粒輝石安山岩	9.8	6.1	3.2	282.0
8	粗粒輝石安山岩	10.1	9.2	4.9	610.0
9	粗粒輝石安山岩	8.2	6.3	4.1	312.0
10	粗粒輝石安山岩	10.3	8.8	3.1	461.0
11	粗粒輝石安山岩	10.7	9.0	4.8	720.0
12	粗粒輝石安山岩	10.1	6.0	3.8	354.0
13	粗粒輝石安山岩	12.4	8.4	5.6	777.0
14	粗粒輝石安山岩	12.9	8.8	4.8	805.0
15	粗粒輝石安山岩	13.2	8.7	4.5	830.0
16	砂岩	(6.6)	6.6	3.0	182.0
17	粗粒輝石安山岩	19.0	16.9	(5.3)	2164.0
18	粗粒輝石安山岩	(8.3)	7.2	4.3	460.0
19	粗粒輝石安山岩	(12.1)	7.0	4.6	674.0
20	砂岩	10.3	6.2	4.3	349.0
21	粗粒輝石安山岩	10.1	5.9	4.3	403.0
22	粗粒輝石安山岩	(18.4)	14.1	9.1	3150.0
23	粗粒輝石安山岩	11.1	6.9	4.2	483.0
24	粗粒輝石安山岩	10.0	8.1	3.7	412.0
25	粗粒輝石安山岩	7.9	6.6	4.3	299.0
26	粗粒輝石安山岩	9.1	7.8	3.9	360.0
27	粗粒輝石安山岩	10.2	7.0	2.7	320.0
28	粗粒輝石安山岩	11.3	8.4	4.0	560.0
29	粗粒輝石安山岩	13.8	5.0	3.7	380.0
30	粗粒輝石安山岩	17.2	13.6	5.1	1600.0
31	粗粒輝石安山岩	13.1	9.2	5.1	837.0
32	粗粒輝石安山岩	12.5	7.9	4.2	589.0
33	粗粒輝石安山岩	13.1	6.4	5.4	646.0
34	粗粒輝石安山岩	11.2	6.3	3.2	307.0
35	粗粒輝石安山岩	12.3	5.8	3.4	310.0
36	粗粒輝石安山岩	11.4	6.8	3.4	440.0
37	粗粒輝石安山岩	(11.7)	6.1	3.0	360.0
38	粗粒輝石安山岩	(9.9)	8.3	4.2	475.0
39	粗粒輝石安山岩	8.8	7.6	4.4	340.0
40	粗粒輝石安山岩	9.3	7.2	4.6	400.0
41	粗粒輝石安山岩	9.1	6.7	4.1	350.0
42	粗粒輝石安山岩	9.5	8.9	3.9	380.0
43	粗粒輝石安山岩	10.1	9.4	5.9	763.0
44	粗粒輝石安山岩	10.3	9.5	4.3	541.0
45	粗粒輝石安山岩	11.6	9.4	5.4	778.0
46	粗粒輝石安山岩	9.7	8.9	3.4	450.0
47	粗粒輝石安山岩	10.4	9.9	4.5	610.0
48	粗粒輝石安山岩	10.0	9.2	5.3	730.0
49	粗粒輝石安山岩	9.7	8.2	3.8	380.0
50	粗粒輝石安山岩	10.6	9.0	5.1	560.0
51	粗粒輝石安山岩	(8.6)	8.6	3.5	320.0
52	粗粒輝石安山岩	9.2	6.8	3.8	337.0
53	粗粒輝石安山岩	8.9	7.1	3.9	280.0
54	粗粒輝石安山岩	9.0	6.6	3.1	320.0
55	粗粒輝石安山岩	9.1	7.7	3.6	343.0
56	粗粒輝石安山岩	9.8	6.8	2.5	271.0
57	粗粒輝石安山岩	(11.7)	9.9	6.0	825.0
58	粗粒輝石安山岩	8.4	6.4	3.7	282.0
59	粗粒輝石安山岩	10.7	8.6	4.0	440.0
60	粗粒輝石安山岩	10.1	7.2	3.8	358.0
61	粗粒輝石安山岩	10.5	7.1	3.2	281.0
62	粗粒輝石安山岩	9.6	7.9	4.3	482.0
63	粗粒輝石安山岩	9.8	8.1	4.5	465.0
64	粗粒輝石安山岩	11.6	8.2	6.2	610.0
65	粗粒輝石安山岩	9.9	6.0	3.2	240.0
66	粗粒輝石安山岩	11.2	6.5	4.0	438.0
67	粗粒輝石安山岩	9.8	5.3	4.2	329.0

表35　遺構外出土石器計測表（石棒）

遺物No	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	粗粒輝石安山岩	(14.9)	8.0	7.5	1590.0
2	粗粒輝石安山岩	(8.2)	5.0	4.2	310.0
3	粗粒輝石安山岩	(6.6)	5.5	4.5	250.0

表36　遺構外出土石器計測表（垂飾り）

遺物No	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	変質蛇紋岩	3.7	1.7	0.3	3.9
2	滑石	(3.8)	1.5	1.0	8.6

表37　遺構外出土石器計測表（石製品）

遺物No	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	緑色片岩	8.5	2.9	0.8	39.0
2	砂岩	8.0	3.4	0.9	37.0
3	砂岩	10.3	5.4	2.2	157.4
4	黒色片岩	7.3	4.5	1.7	87.0
5	粗粒輝石安山岩	12.4	2.9		114.9

表33　遺構外出土石器計測表（多孔石）

遺物No	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	粗粒輝石安山岩	35.2	15.0	11.3	7900.0
2	粗粒輝石安山岩	(22.2)	(14.9)	7.8	2330.0
3	粗粒輝石安山岩	(20.3)	(19.6)	12.4	6500.0
4	粗粒輝石安山岩	(13.0)	(10.6)	7.8	1470.0
5	粗粒輝石安山岩	(16.5)	(14.8)	10.5	3750.0
6	粗粒輝石安山岩	(15.1)	(13.3)	(10.6)	2320.0

表34　遺構外出土石器計測表（石皿）

遺物No	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	緑色片岩	27.1	27.0	4.6	4200.0
2	粗粒輝石安山岩	15.7	16.0	4.9	1816.0
3	粗粒輝石安山岩	(12.7)	14.9	10.0	2580.0
4	粗粒輝石安山岩	22.1	17.7	4.6	2770.0
5	粗粒輝石安山岩	(12.2)	(24.1)	(7.2)	2640.0
6	粗粒輝石安山岩	(13.8)	(14.6)	4.1	933.0
7	緑色片岩	30.1	12.8	5.0	2900.0
8	粗粒輝石安山岩	20.7	14.2	9.2	3600.0
9	粗粒輝石安山岩	(15.1)	(22.1)	7.3	3060.0
10	緑色片岩	19.0	(7.6)	(3.0)	632.0
11	粗粒輝石安山岩	(15.3)	(16.7)	(6.2)	1830.0
12	粗粒輝石安山岩	(13.4)	(13.0)	6.1	1390.0
13	粗粒輝石安山岩	(19.8)	25.0	8.0	3060.0
14	粗粒輝石安山岩	(17.7)	(27.3)	8.2	3750.0
15	粗粒輝石安山岩	(17.9)	(13.6)	9.0	2520.0
16	粗粒輝石安山岩	(15.8)	(11.2)	6.0	1160.0
17	粗粒輝石安山岩	(14.1)	(12.0)	6.5	1220.0
18	粗粒輝石安山岩	(15.1)	(9.7)	(4.8)	530.0

土・石製品（第106図、表36・37）

出土した土製品には、土偶と土製円盤の２種類があり、石製品には垂れ飾りや形状を整えた製品等がみられる。これらの遺物の時期の特定はできないが、大方のものは前期ないし中期の所産による遺物と考えられる。

土偶

出土した土偶は、２点だけである。１は頭部で、胴部以下を欠く。残存する頭部は、高さ4.5cm、幅4.5cmを測る。顔面には、眉と鼻の表現に隆帯を貼付し、目と口の表現に刺突を加えている。２は左脚部で、高さ5.5cmを測る。脚部は、ややがに股となり、足先には指を表現したと思われる沈線が刻まれている。１と２は、同時期の遺物と考えられるが、同一個体ではない。

土製円盤

出土した土製円盤は、３点だけである。いづれの円盤も、側縁部がしっかりと磨られているもので、土器片を利用したものである。３の円盤の表面には土器文様が残されており、隆帯と押し引き沈線が施されていることから、中期中葉の土器である。

垂れ飾り

出土した垂れ飾りは、２点だけである。１は玦状耳飾りから転用したものであり、石材に変質蛇紋岩が使用されている。孔は一方の端部に穿かれ、全体にかなり薄く、丁寧な研磨が施されている。２は縄文中期の土器を主体とする面から出土したものである。石材には滑石が使用され、縦長な素材の上方に孔が穿かれている。作りは、研磨面が残っており、やや粗い感じである。

石製品

出土した形状を整えた製品は、５点である。１～４の楕円形状となるものと、５の棒状の形状をとる２種類がある。同種の石製品は、住居跡からも出土しているが、その時期については判然としない。１は緑色片岩を石材とし、楕円形状となるもので、長さ8.5cm、重さ39ｇを測り、側縁を含めた全体に丁寧な研磨が施されている。２は砂岩を石材とし、楕円形状となるもので、長さ8.0cm、重さ39ｇを測り、側縁を含めた全体に丁寧な研磨が施されている。この１・２の大きさに比べ、一回り大きいのが３である。３は砂岩を石材とし、先と同様に楕円形状となるもので、長さ10.3cm、重さ157.4ｇを測り、全体にやや粗い研磨が施されている。４も楕円形状となるもので黒色片岩を石材とし、長さ7.3cm、重さ87.0ｇを測り、全体にやや粗い研磨が施されている。５は棒状の形状となるものであり、石材に粗粒輝石安山岩が使用されている。長さ12.4cm、重さ114.9ｇを測り、断面形は円形をなす。全体に研磨が施されており、石棒のミニチュアとも考えられる。

3．弥生時代の遺構と遺物

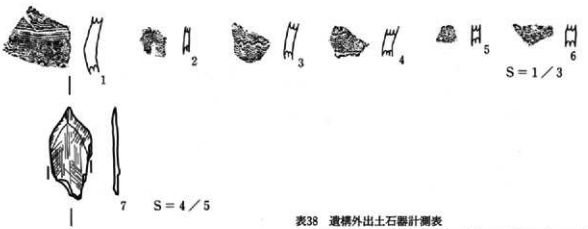
今調査では、弥生時代の住居跡等の遺構は検出されていないが、包含層中より土器および石器が少量出土している。このことから、今回の調査区外に弥生時代の遺構が存在する可能性が高い。特に、調査区の北側に続く台地の先端部には、広い平坦面が広がっている。

周辺では、本遺跡の北側に位置する少林山台遺跡の調査では、28軒の竪穴住居跡や礫床墓、多くの遺物が検出されている。

遺構外出土遺物　(第107図、表38)

弥生時代の遺物として特定できたのは、第107図に示したものだけである。1は頸部から胴部の破片で、頸部に櫛歯状工具による平行な沈線を巡らせ、その上下に波状文を描くもの。2～6は頸部ないし胴部に、櫛歯状工具による波状文を描くものである。これらの土器は、いづれも弥生時代後期の所産の土器と考えられる。

7は磨製石鏃で、石材に珪質凝片岩が使用されている。両側縁部と基部を欠損しており、依存状態は悪い。



第107図　遺構外出土遺物

表38　遺構外出土石器計測表

遺物No	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)
7	磨製石鏃	珪質凝片岩	3.0	1.4	0.9

４．古墳時代の遺構と遺物

今調査では、調査区の北側に位置する東京電力高崎開閉所の建設に伴う際に古墳の調査が行われていることや、調査区周辺にも古墳が点在していること等から、調査区内でも古墳時代の遺構が検出されることが予測されていた。調査の結果、古墳時代の遺構として住居跡の検出はなかったが、方形周溝墓が２基検出された。２基共に、台地の西緩斜面中央部から西寄りに検出され、１号方形周溝墓は全体の南半分が調査区外にあり、北側半分の調査となった。２号方形周溝墓については、ほぼ全体の調査となったが、斜面地のためかコ字状を呈するものであった。

本遺跡と同じ丘陵上では、西側に隣接する中原遺跡、東側に隣接する坂上遺跡でも古墳が点在し、本遺跡の北方に位置する少林山台遺跡、西方に位置する根岸古墳群、東方に位置する御部入古墳群等、多くの古墳が知られている。

また、本遺跡の西方に位置する大平台遺跡（現、県立みやま養護学校）では、県内の方形周溝墓調査の先駆けとも言える方形周溝墓の調査が行われている。

１号方形周溝墓

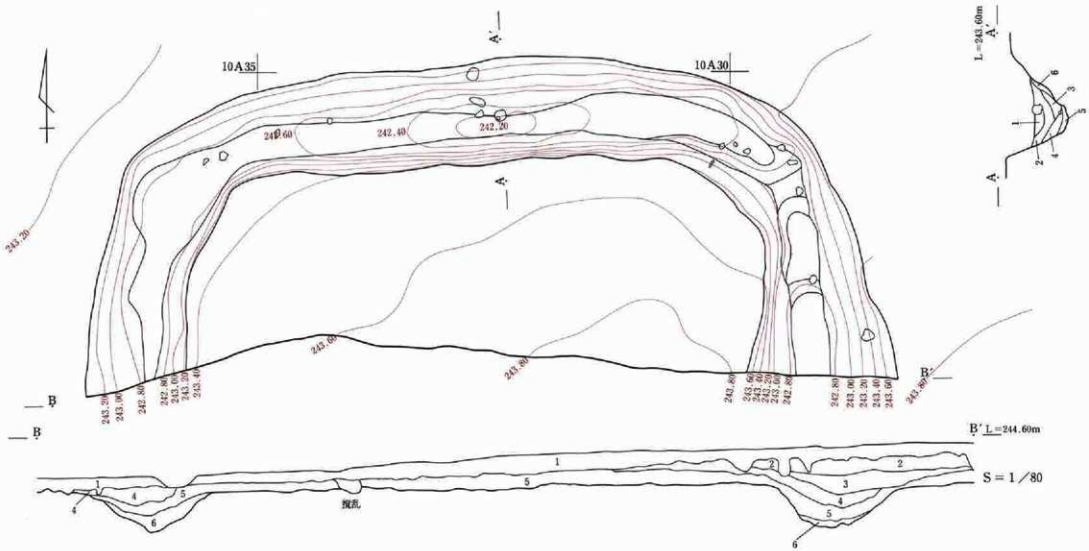
位置　周溝墓は、台地の西緩斜面中央部からやや西寄りにあり、７～９Ａ28～36グリッドに位置する。本周溝墓の北西隅には、２号方形周溝墓が隣接している。

概要　本周溝墓の存在は、歴史時代の遺構確認面で平面プランの検出が成されていた。ただし、このプラン確認の時点では古墳の周溝として認識され、その後の調査の進展の中で、古墳の周溝ではなく方形周溝墓として認知された経緯がある。周溝墓は調査区の南側に半分ほど検出され、調査区外に残りの半分が続いているものと予測される。７層とした縄文包含層の上面から掘り込まれ、周溝の深さは90cm前後と深く、遺構全体を５層の褐色土で覆われている。この５層は、基本土層の４層と同じ土層である。遺構の依存状態は、かなり良好である。隣接する２号方形周溝墓に比べると、本周溝墓の方が大きく、依存状態も良い。

構造　調査区外に続く未調査部分については不明であるが、斜面山側に当たる東側の周溝がより深く掘り込まれ、周溝の上幅も他に比べやや広い。周溝の底面幅は全体的に広くはないが、やはり東側がやや広く造られている。底面の状態は、各辺の中央部付近が均一的にあるが、各隅部分では高目でややあまい。周溝の壁は、外側に比べ内側の方が急となっている。

規模　東西方向では、周溝の外側で約17m、内側で12.4mを測る。南北方向での調査区外を除いた最大長は、周溝の外側で約６m、内側で４mを測ることができる。周溝の上幅は、東辺で最幅2.6m、北辺で２m、西辺で２mを測り、底面幅は東辺で１m前後、北辺で60cm、西辺で50cm前後を測る。

遺物　周溝内から出土した遺物は極めて少なく、覆土中より出土した甕の完形品の１点のみである。

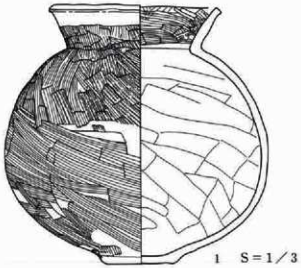


1号方形周溝墓土層

1　暗褐色土　耕作土。As-A軽石を多く含む。
2　暗褐色土　白色軽石を混入。
3　黒褐色土　白色軽石を混入し、粘質気味。
4　黒褐色土　白色軽石を混入し、粘質。
5　褐色土　白色軽石を少量混入し、やや粘質。
6　明褐色土　ローム粒を含み、黄色軽石を少量混入。

周溝土層

1　暗黒褐色土　白色軽石・ローム粒を含み、粘質気味。
2　暗褐色土　1層に近似するが、やや明るい。
3　暗黒褐色土　白色軽石を少量含む。
4　黒褐色土　ローム粒を多く含む。
5　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。粘質。
6　暗褐色土　縄文の包含層。



第108図　1号方形周溝墓平面図・出土遺物

表39　1号方形周溝墓出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	部位 (残存)	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師器 甕	完形	周溝 覆土	口 13.4 高 20.0 底 5.6	①やや粗、砂粒を含む ②酸化焔、良好 ③黄褐色	口縁は外反し、頸部は屈曲する。胴部は球胴形を呈する。口端部は撫で。頸部は縦位の刷毛目。胴部には斜位の刷毛目を施す。口縁内面は横位の刷毛目。

2号方形周溝墓

位置　周溝墓は、台地の西緩斜面中央部から西寄りにあり、9～12A35～39グリッドに位置する。本周溝墓の東南隅には、1号方形周溝墓が隣接している。

概要　本周溝墓は、基本土層の4層を除去した縄文時代の遺構確認の際に検出された。調査区の北側に寄ってはいるが、北辺の一部を除くほぼ全体を調査することができた。周溝は西辺を欠く、コ字状を呈している。これは、斜面地であるため検出できなかった可能性もある。周溝内の堆積土は、基本土層の4層とした褐色土である。遺構の依存状況は、周溝の壁高も浅く、先の1号方形周溝墓に比べると良いとは言えない。

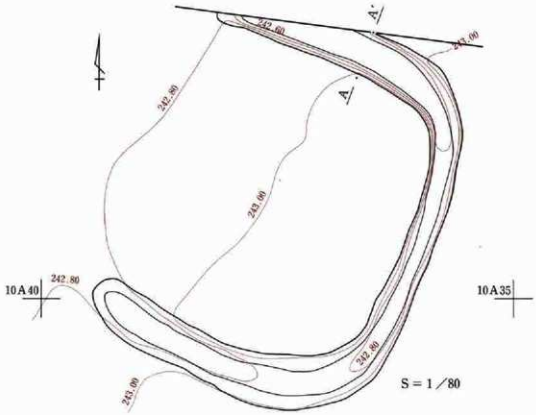
構造　残存する各辺の周溝は、ローム層まで掘り込みが達している。斜面の山側に当たる東辺が良好な状態であるのに対し、北・南辺は西側端で不明となる。斜面谷川に位置する西辺は、検出されていない。周溝幅は、北・南辺に比べて東辺がやや狭く、底面幅も同様である。

規模　先の1号方形周溝墓に比べ、小型である。南北方向では、周溝の外側で8.2m、内側で6.2mを測る。東西方向では、現存する北・南辺より東辺周溝の外側まで6.2m、内側まで5.6mを測ることができる。周溝の上幅は、東辺で60cm、北・南辺でそれぞれ1m、底面幅は全体に40cm前後を測るが北・南辺がやや広い。

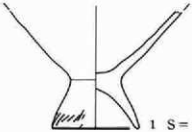
遺物　周溝内より出土した遺物は極めて少ない。図示した台付甕の脚部と、磨製石斧の2点だけである。

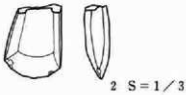
表40　2号方形周溝墓出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	部位 (残存)	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師器 台付甕	底部から脚部	周溝 覆土	口 — 高 (12.3) 底 9.3	①やや密、砂粒を含む ②酸化焔、良好 ③灰褐色	口縁から胴部上半を欠く。器表面には刷毛目はほとんど残されていない。脚部に一部に、刷毛目の痕跡が残る。
2	磨製石斧		周溝 覆土	長 (5.8) 幅 4.5 重 83.3g	石材 変質蛇紋岩	頭部を欠損。丁寧に研磨されている。



周溝土層
1　暗褐色土　白色軽石を混入。ロームブロックを多量に含む。





第109図　２号方形周溝墓平面図・出土遺物

5．奈良時代の遺構と遺物

本調査で検出された歴史時代の遺構は、奈良時代の住居跡が13軒ある。この内の11軒は、台地の鞍部から西への緩斜面に存在し、西側の沢を隔てた西台地の東斜面に２軒検出された。この２軒（９・10号住居跡）は、当初の調査予定地に含まれていない場所であったが、その後の調査の状況を踏まえた中で再度の確認調査の結果、住居の存在が確認されたことにより調査が行われた経緯をもつ。なお、12・13号住居については、調査時に１・２号竪穴として調査が進められた住居跡である。

１号住居跡

位置　本住居跡は、西緩斜面の最西にあり、９A41・42グリッドに位置する。本住居跡の北側には、２号住居跡が隣接する。

概要　斜面地に構築された住居であるため、遺構確認面から床面までの深さが東壁側では70cm、西壁側では25cmほどと、その高低差はあるが全体的には残りの良好な住居である。カマドについても、東壁に位置することから残りは良好である。なお、床下土坑を有する。

構造　床面はローム面を堅く踏みしめてあり、特にカマド前が良好に硬化している。柱穴は検出されていない。貯蔵穴はカマドの右側にあり、円形の擂り鉢状を呈する。壁際に壁周溝が検出されている。周溝は幅15cm前後を測るが全周せず、北・西壁際で良好に確認できた。床下土坑は住居中央の北側に大小の２基が検出され、その上面にはローム土を主体とする張り床が施されていた。

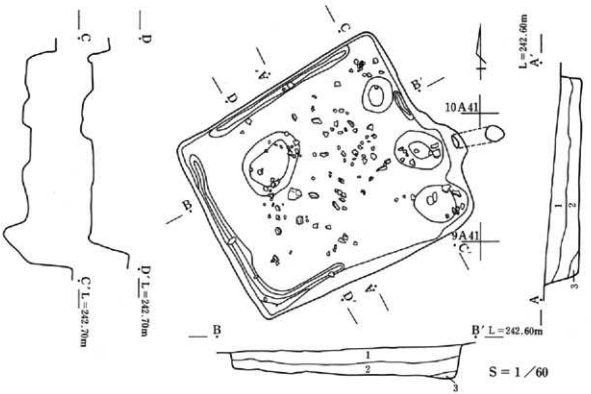
規模　住居跡は東西3.7m、南北3.4mを測り、主軸方向にやや長い正方形を呈する。壁高は残りの良い東壁側で70cm、西壁側で25cmを測る。貯蔵穴は径60cm、深さ30cmの円形で、擂り鉢状を呈する。床下土坑は長軸１m、短軸80cm、深さ15～20cmの不整楕円形を呈するものと、径50cm、深さ15cmの円形を呈する２基である。

カマド　住居東壁中央よりやや右寄りに位置する。燃焼部の一部は東壁を少し掘り込んで造られ、煙道は崩落せず良好に残存していた。袖と燃焼部は床面上に位置するが、右袖の一部と燃焼部の浅い掘り込みを残すのみで、大半が残っていない。煙道部は燃焼部奥壁のロームを東方向に80cmほど掘り抜いて造られ、煙道部天井のローム土は崩落せずに残っていた。

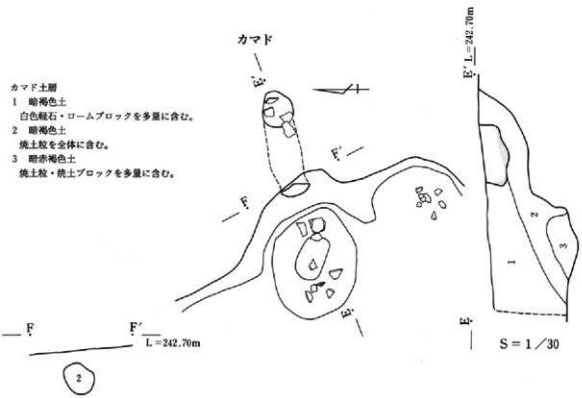
遺物　覆土中より多くの土器が出土しており、坏・蓋・甕類がある。

表41　１号住居跡出土遺物観察表

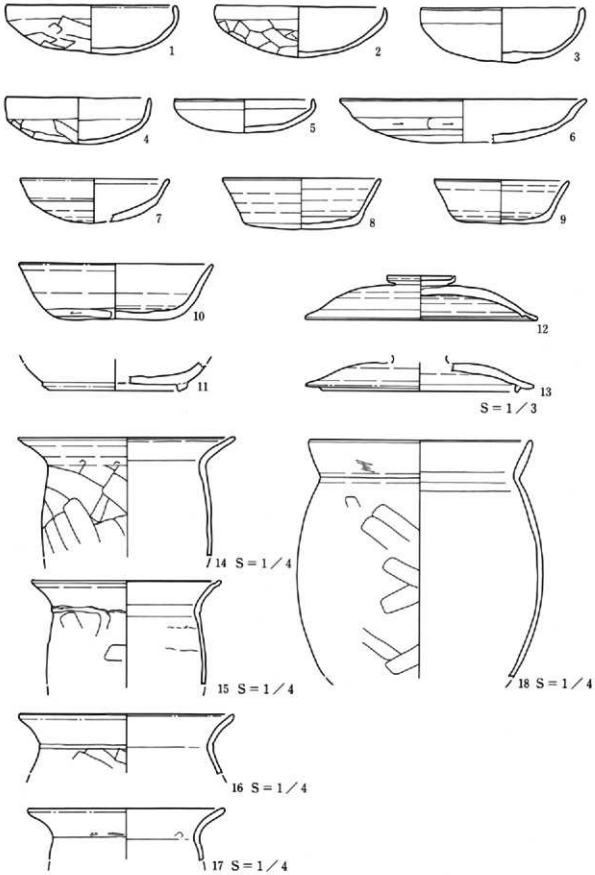
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	部位 (残存)	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師器 坏	完形	覆土	口 13.4 高 3.4 底 丸底	①粗、砂粒を多量に含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底部にかけて篦削り。 内面は撫で。器表面は粗いが、内外面に塗布痕あり。
2	土師器 坏	ほぼ完形	覆土	口 13.4 高 4.0 底 丸底	①粗、砂粒を多量に含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底部にかけて篦削り。 内面は撫で。器表面は粗。
3	土師器 坏	口縁から底部1/2	床直	口 13.0 高 4.1 底 丸底	①粗、砂粒を多量に含む ②酸化焔、良 ③内面は橙色	口縁は横撫で。体部から底部にかけて篦削り。削り痕は不明瞭。器表面は粗く、外面は二次焼成により黒色化し、一部剥落。



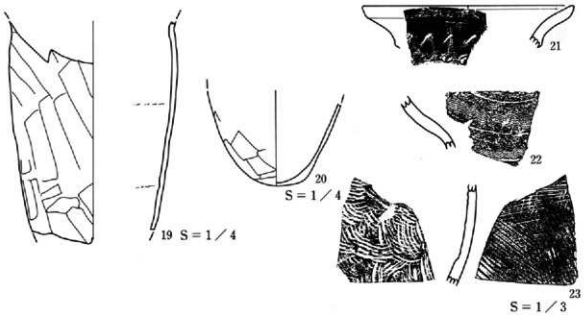
住居土層
1　暗褐色土　1～2㎜の白色軽石を全体に混入。ロームブロックを多量に含む。
2　暗褐色土　1～2㎜の白色軽石を極少量混入。ロームブロックを多量に含む。
3　黒褐色土　混入物が少ない。



第110図　１号住居跡平面図



第111図　1号住居跡出土遺物(1)



第112図　1号住居跡出土遺物(2)

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残存)	出土 位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
4	土師器 坏	ほぼ完形	覆土	口 11.4 高 3.7 底 丸底	①やや密、砂粒を含む ②酸化焔、良好 ③橙色から灰色	口縁は横撫で。体部から底部にかけて箆削り。内面は撫で。器表面は密。
5	土師器 坏	口縁から底部1/2	覆土	口 11.1 高 2.6 底 丸底	①やや粗、砂粒を含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底部にかけて箆削り。削り痕は不明瞭。内面は撫で。器表面はやや粗。
6	土師器 坏	口縁から体部1/4	覆土	口 19.6 高 2.9 底 丸底	①やや粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底部にかけて箆削り。内面は撫で。器表面はやや粗。
7	須恵器 坏	口縁から体部1/6	覆土	口 11.8 高 3.4 底 丸底	①密、砂粒を含む ②還元焔、良好 ③暗灰色	口縁は回転撫で。体部から底部にかけては回転箆削り。内面は撫で。器表面は密。
8	須恵器 坏	口縁から底部1/2	覆土	口 11.7 高 4.0 底 9.0	①密、細砂を含む ②還元焔、不良 ③白色系	ロクロ成形。底部は回転箆切り離し後、箆撫でにより調整。器表面は密。同図9と同質で、色調も同じ。
9	須恵器 坏	口縁から底部1/2	覆土	口 10.6 高 3.4 底 7.6	①密、細砂を含む ②還元焔、不良 ③白色系	ロクロ成形。底部は回転箆切り離し後、箆撫でにより調整。器表面は密。同図8と同質で、色調も同じ。
10	須恵器 坏	口縁から底部1/3	覆土	口 15.2 高 4.4 底 9.5	①密、細砂を含む ②還元焔、良 ③暗灰色	ロクロ成形。底部は回転箆切り離し後、箆撫でにより調整。器表面は密。
11	須恵器 椀	底部	覆土	口 — 高 (2.3) 底 (11.4)	①密、細砂を含む ②還元焔、良好 ③灰色	ロクロ成形。底部は回転箆切り離し後、付け高台を有する。全体に丁寧な作り。
12	須恵器 蓋	天井部から口縁1/6	覆土	摘径 (5.4) 高 3.5 口径 (18.8)	①密、細砂を含む ②還元焔、良好 ③灰色	器外面に自然釉が付着しているため、天井部箆削りは不明。摘みは大きく、端部を折る。カエリは低いが、丁寧に作り出している。
13	須恵器 蓋	天井部から口縁1/5	覆土	摘径 — 高 2.2 口径 (18.1)	①密、細砂を含む ②還元焔、良好 ③灰色	天井部は回転箆削り。カエリは口縁下端より下方へ出ている。全体的に丁寧な作り。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	部位 (残存)	出土 位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
14	土師器 甕	口縁から胴部 1/5	カマド	口 (23.0) 高 (12.5) 底 —	①やや粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③橙色、褐・黒色	口縁から頸部は横撫で。頸部以下の胴部は荒削り。 内面胴部は縦位の荒撫で。器表面はやや粗。
15	土師器 甕	口縁から胴部 1/6	覆土	口 (20.0) 高 (10.8) 底 —	①粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③鈍い橙色	口縁から頸部は横撫で。頸部以下の胴部は荒削り。削り痕は不明瞭。器表面は粗。
16	土師器 甕	口縁から頸部 1/5	覆土	口 (22.8) 高 (6.2) 底 —	①粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③鈍い橙色	口縁から頸部は横撫で。頸部以下の胴部は荒削り。 器表面は粗。
17	土師器 甕	口縁から頸部 1/4	覆土	口 (20.0) 高 (3.5) 底 —	①粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③鈍い橙色	口縁から頸部は横撫で。頸部以下の胴部は荒削りと思われる。頸部に箆圧痕が残る。
18	土師器 甕	口縁から胴部	覆土	口 (23.7) 高 (25.0) 底 —	①やや粗、砂粒を含む ②酸化焔、良 ③鈍い橙色	口縁よりも胴が張る器形を呈する。口縁から頸部は横撫で。胴部は荒削り後、撫でか。削り痕は不明瞭。 内面は撫で。器表面は密。
19	土師器 甕	頸部から胴部 1/3	カマド	口 — 高 (22.0) 底 —	①やや粗、砂粒を多量に含む ②酸化焔、良 ③褐橙色	頸部までは横撫で。頸部以下の胴部は斜位方向の荒削り。砂の移動が顕著。内面は縦位の荒撫で。
20	土師器 甕	底部 2/3	床直	口 — 高 (10.0) 底 5.2	①やや粗、細砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③黒褐色、橙色	胴部下半から底部にかけて荒削り。 底面は削りが粗く、直立しない。
21	須恵器 甕	口縁片	覆土	口 — 高 — 底 —	①密、砂粒を含む ②還元焔、良好 ③灰色	口縁が大きく開き、頸部に波状文を巡らせる。
22	須恵器 甕	肩部片	覆土	口 — 高 — 底 —	①密、砂粒を含む ②還元焔、良好 ③灰色	頸部から胴部にかかる肩部に、波状文を２段巡らせる。
23	須恵器 甕	胴部片	覆土	口 — 高 — 底 —	①密、砂粒を含む ②還元焔、良好 ③灰色	大型甕の胴部で、内外面に叩き・あて目をもつ。 外面、平行叩き目。内面、同心円状あて目。

2号住居跡

位置　本住居跡は、西緩斜面の最西に1号住居跡と共にあり、12A41グリッドに位置する。本住居跡の南側には1号住居跡、東側には8号住居跡が隣接する。

概要　斜面地に構築された住居で、遺構確認面から床面までの深さが東南隅では50cm、北西隅付近では15cmほどを測るが、比較的残りは良い。カマドは北壁に位置するため、残りは悪い状況である。本住居跡の北西隅は、4号土坑と重複するが、土層の堆積状況より本住居跡の方が新しい。

構造　床面はローム面を堅く踏みしめてあり、特にカマド前から住居中央にかけて硬化面が良好である。柱穴は検出されていない。貯蔵穴はカマドの右側にあり、円形を呈する。この貯蔵穴の周囲には、幅20cmほどの土手状の高まりが巡っていた。壁周溝および床下土坑は、検出されていない。

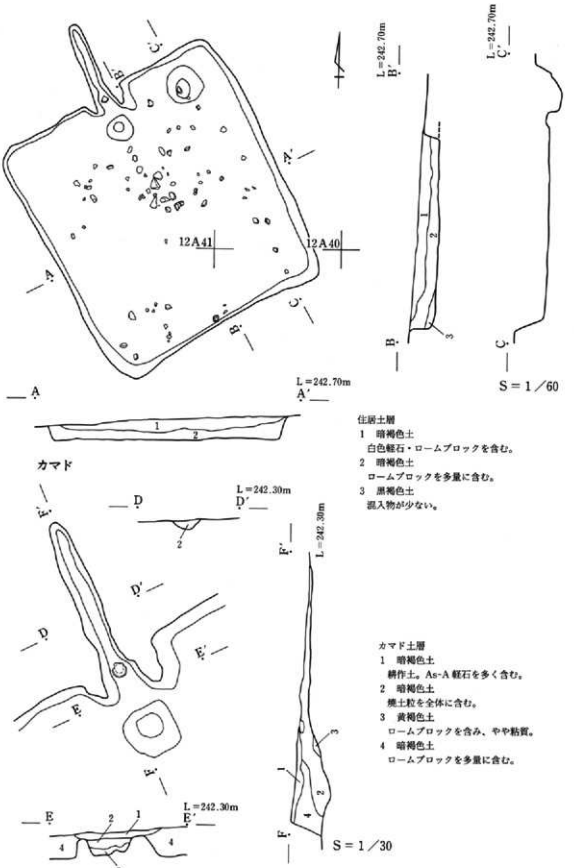
規模　住居跡は東西4.0m、南北4.0mを測る正方形を呈する。壁高は、最も高い東南隅で50cm、低い北西隅では15cmを測る。貯蔵穴は径60cm、深さ20cmの円形を呈する。

カマド　住居の北壁中央に位置し、煙道が長く北側へ延びている。袖と燃焼部は床面上に位置するが、左右の袖の一部と焚き口部付近の浅い掘り込みを残すのみで、大半が残っていない。煙道部は北壁より北側へ長く延び、1.3mを測る。

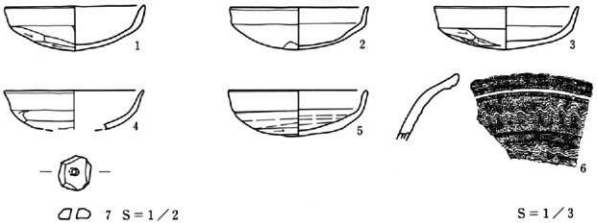
遺物　覆土中より出土したものが中心で、坏が多く、甕は破片のみである。 なお、玉が1点出土している。

表42　2号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	部位 (残存)	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師器 坏	ほぼ完形	カマド	口 11.0 高 3.5 底 丸底	①やや粗、大粒の砂粒を含む ②酸化焔、良 ③鈍い褐橙色	口縁は横撫で。体部から底面は箆削り痕が残る。 内面は横撫で。器表面は摩耗のため箆削りは不明瞭。
2	土師器 坏	ほぼ完形	覆土	口 10.9 高 3.3 底 丸底	①密、砂粒を少量含む ②酸化焔、良好 ③橙色、黒色	口縁は横撫で。体部から底面は箆削り後撫でているためか、不明瞭な削り痕が残る。 内面は撫で。器表面は密。
3	土師器 坏	口縁から底部1/2	覆土	口 11.4 高 3.3 底 丸底	①密、砂粒を少量含む ②酸化焔、良好 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底面は箆削り後撫でているためか、一部に不明瞭な削り痕が残る。 内面は撫で。器表面は密。
4	土師器 坏	口縁から体部1/4	覆土	口 (11.0) 高 (3.0) 底 丸底	①やや粗、細砂粒を含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部には箆削り痕が残る。 内面は横撫で。器表面は摩耗のため箆削りは不明瞭。
5	須恵器 坏	ほぼ完形	床直	口 11.0 高 3.6 底 丸底	①密、細砂粒を少量含む ②還元焔、良好 ③灰色	体部は回転箆削り。底面は回転箆切り。切り離し後、全体に回転撫で調整を施す。 器体は少し歪んでいる。器表面は密。
6	須恵器 甕	口縁片	覆土	口 — 高 — 底 —	①密、細砂粒を少量含む ②還元焔、良 ③灰色	口縁下に波状文を数段施している。丁寧な作り。
7	石製品 玉	完形	覆土	径 1.8 厚 0.5 重 2.6g	石材　滑石	



第113図　2号住居跡平面図



第114図　２号住居跡出土遺物

３号住居跡

位置　本住居跡は、西緩斜面のほぼ中央にあり、９Ａ26・27グリッドに位置する。本住居跡の東側には12号住居跡が隣接する。

概要　黒色土中を掘り込んだ住居であり、床面の検出は難しかったが、遺構確認面から床面まで40cm前後と比較的に残りの良好な住居である。カマドは東壁に位置し、良好に残っていた。貯蔵穴は円形を呈する。床下土坑等は、検出されていない。

構造　床面は黒色土面を堅く踏みしめてあり、カマド前から住居中央にかけて硬化が著しい。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は円形を呈し、カマドの右側に位置する。壁周溝等は検出されていない。

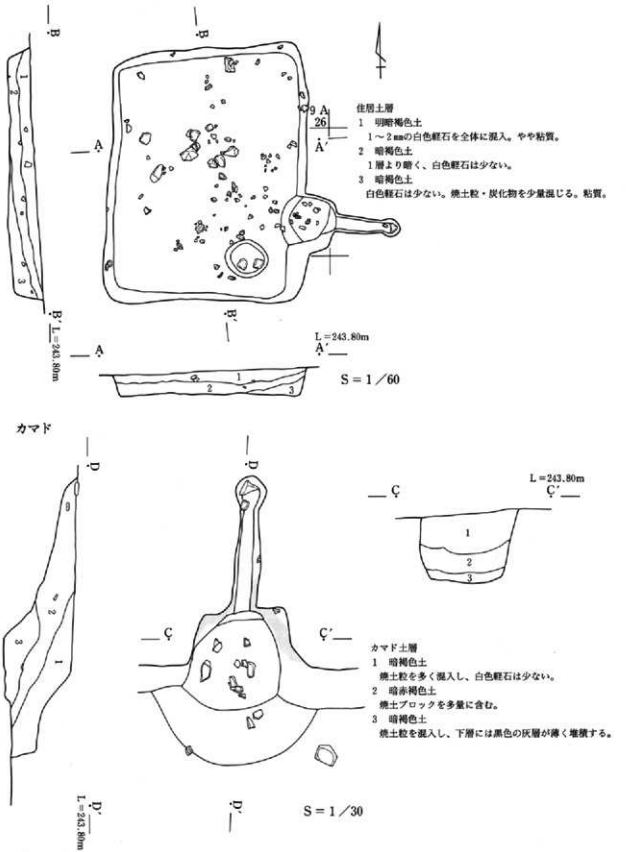
規模　住居跡は東西3.1m、南北4.0mを測り、南北方向に長軸を持つ長方形を呈する。壁高は50～40cmを測る。貯蔵穴は円形を呈し、径60cm、深さ20cmを測る。

カマド　住居の東壁中央より右寄りに位置する。燃焼部は東壁をコ字状に大きく掘り込んで造られ、煙道はさらに東へ長く延びる。袖の先端が床面上に位置すると考えられるが、残っていない。燃焼部は東壁の外部へ突き出るように位置し、焚き口部から燃焼部にかけての底面が緩やかに落ち込む。煙道は燃焼部の奥壁から東へ長く延び、１mを測る。

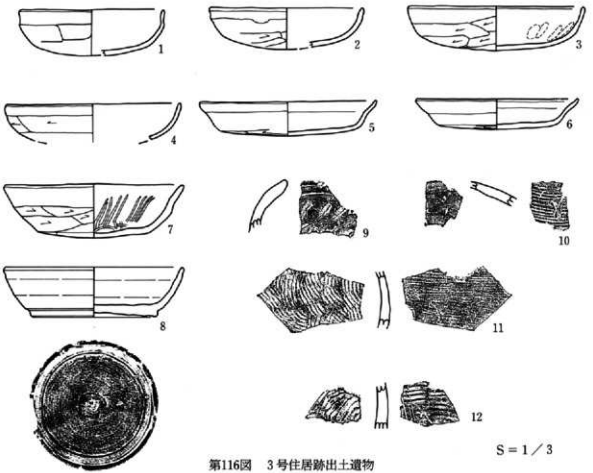
遺物　覆土中より多くの土器が出土しているが、図示できたものは坏類のみである。これらの坏には、他住居から出土していない器形のものや、内外面に塗彩されたもの、暗文（放射・螺旋）をもつものがあり、中にはカマド内出土の土器も含まれる。

表43　３号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器 器種	器種別	部位 （残存）	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師	坏	器	口縁から底部1/2	カマド	口 (11.5) 高 (3.6) 底 丸底	①やや粗、細砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底面にかけては箆削り。不明瞭な刷り痕が残る。 内面は撫で。器表面はやや粗。
2	土師	坏	器	口縁から底部1/4	カマド	口 (12.2) 高 (3.1) 底 丸底	①やや粗、細砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底面にかけては箆削り。 内面は撫で。器表面はやや粗。



第115図　3号住居跡平面図



第116図　3号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残存)	出土 位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
3	土師器 坏	口縁から底部 1/4	覆土	口　(12.2) 高　3.5 底　丸底	①やや粗、細砂粒を多く含む ②酸化焔、良好 ③純い橙色	口縁は横撫で。体部から底面にかけては箆削り。 内面は撫で、指圧痕あり。器表面はやや粗。
4	土師器 坏	口縁から体部 2/5	覆土	口　(12.2) 高　(3.1) 底　—	①やや粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良好 ③純い橙色	口縁は横撫で。体部から底面にかけては箆削り。摩耗のため削り痕は不明瞭。 内面は撫で。器表面は粗。
5	土師器 坏	口縁から底部 1/3	覆土	口　(14.0) 高　2.7 底　丸底	①やや粗、細砂粒を含む ②酸化焔、良好 ③橙色	同図6と同様な皿状の器形を呈する。口縁から体部にかけては横撫で。底部は箆削り。 内面は撫で。器表面はやや粗。内外面に塗布痕あり。
6	土師器 坏	口縁から底部 1/4	覆土	口　(12.9) 高　2.4 底　丸底	①やや粗、細砂粒を含む ②酸化焔、良好 ③橙色	同図5と同様な皿状の器形を呈する。口縁から体部にかけては横撫で。底部は箆削り。内面は撫で。器表面はやや粗。内外面に塗布痕あり。全体に歪む。
7	土師器 坏	口縁から底部 3/4	カマド	口　14.2 高　4.2 底　丸底	①密、細砂粒を含む ②酸化焔、良好 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底面にかけては箆削り。 内面は横撫でで、放射・螺旋状の暗紋を有する。 器表面は密。
8	須恵器 鍋	口縁から底部 3/4	カマド	口　14.3 高　3.9 底　10.1	①密、細砂粒を含む ②還元焔、良好 ③灰白色	ロクロ成形。底部は回転箆切り離し。底面は回転撫で調整後、箆削り出しによる高台を有する。器表面は密。全体に丁寧な作り。

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残存)	出土 位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
9	須恵器 甕	口縁片	覆土	口　— 高　— 底　—	①密、細砂粒を含む ②還元焔、良 ③灰色	口縁下の頸部に、櫛歯状工具による列点文を数段有する。
10	須恵器 甕	肩部片	覆土	口　— 高　— 底　—	①密、細砂粒を含む ②還元焔、良 ③灰色	肩部の外面に、かき目を有する。
11	須恵器 甕	胴部片	覆土	口　— 高　— 底　—	①密、細砂粒を含む ②還元焔、良 ③暗灰色	外面に平行叩き目あり。 内面に青海波文のあて目あり。
12	須恵器 甕	胴部片	覆土	口　— 高　— 底　—	①密、細砂粒を含む ②還元焔、良 ③灰色	外面に平行叩き目あり。 内面に青海波文のあて目あり。

4号住居跡

位置　本住居跡は、台地の最も高い鞍部にあり、10・11A10グリッドに位置する。本住居跡の北側には13号住居跡が隣接する。

概要　住居はロームを掘り込み、遺構確認面から床面までの深さが45cm前後と深く、残りの良好な住居である。カマドは東壁に位置し、残りは良い。

構造　床面はローム面を堅く踏みしめてあり、特にカマド前の硬化が著しい。住居の中央と東南隅付近に、径30cm前後のピットが2基検出されているが、柱穴とは考え難い。壁際に検出された壁周溝は、カマド部分を除き、幅20cm前後で全周する。また、周溝内には小ピットが点在することも確認されている。貯蔵穴および床下土坑は検出されていない。

規模　住居跡は東西2.9m、南北3.3mを測り、南北方向に長軸を持つ長方形を呈する。壁高は50～40cmを測る。

カマド　住居の東壁中央よりやや右寄りに位置する。燃焼部は東壁を掘り込んで造られ、煙道はさらに東へ短く付く。袖の先端は床面上に位置するものと考えられるが、残っていない。燃焼部は東壁の外部へ突き出るように位置し、焚き口部から燃焼部にかけての底面が緩やかに落ち込む。燃焼部内の側壁は、強く焼土化している。

遺物　出土した遺物は極めて少なく、坏・甕の破片が7点のみで、図示できなかった。

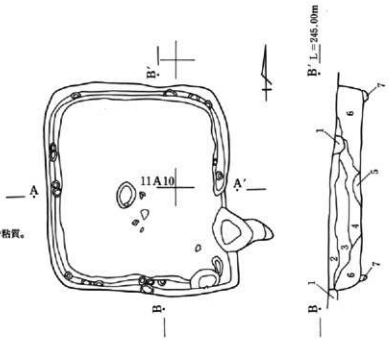
5号住居跡

位置　本住居跡は、西緩斜面の中央でやや平坦な場所にあり、11A30・31グリッドに位置する。1号方形周溝墓の北側に隣接し、3号住居跡の北西約6mほどの所にある。

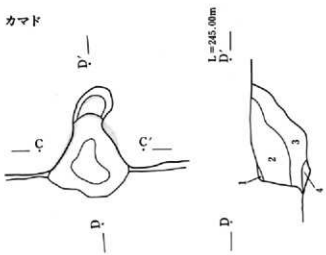
概要　住居跡は調査区の北側に寄って位置するため、住居の北東隅が調査区外へ延びることから、この部分を除いた調査となった。黒色土中を掘り込んだ住居であり、床面の検出は難しかったが、遺構確認面から床面まで30cm前後と比較的に残りの良好な住居である。カマドは東壁に位置し、良好に残っていた。貯蔵穴は楕円形を呈する。床下土坑等は、検出されていない。

構造　床面は黒色土面を堅く踏みしめてあり、カマド前から住居中央にかけて硬化が著しい。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は円形を呈し、カマドの右側に位置する。壁周溝等は検出されていない。

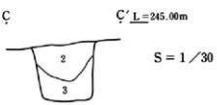
住居土層
1　暗褐色土
耕作土。As-A 軽石を多量に含む。
2　暗褐色土
白色軽石を多量に含む。
3　黄褐色土
小粒のロームブロックを多量に含む。
4　暗褐色土
ロームブロックを少量に含む。
やや粘質。
5　黄褐色土
大粒のロームブロックを多量に含む。やや粘質。
6　黄褐色土
ロームブロックを主体とする。
粘質。
7　暗褐色土
ローム粒を少量混入する。



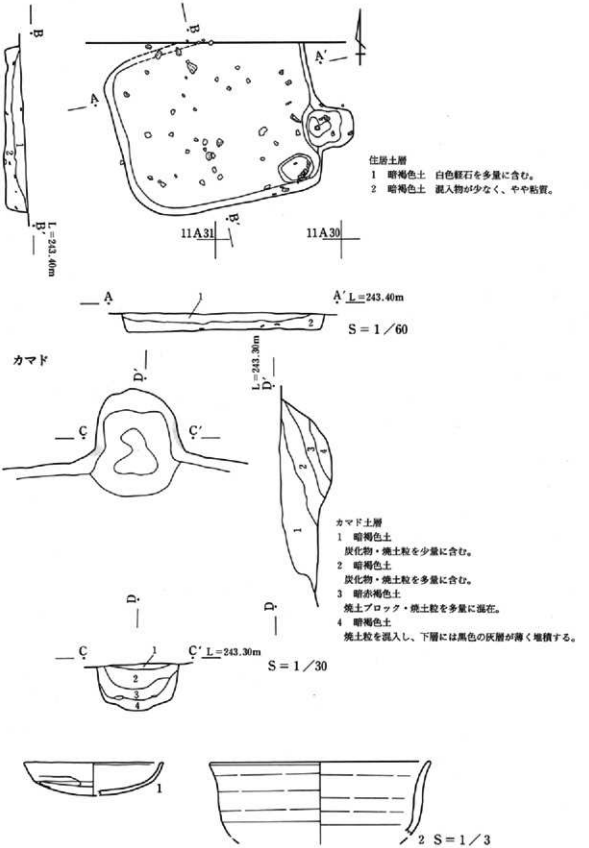
カマド



カマド土層
1　暗褐色土
耕作土。As-A 軽石を多量に含む。
2　暗褐色土
白色軽石を多量に含む。
3　暗褐色土
白色軽石・焼土ブロックを多量に含む。
4　暗黄褐色土
白色軽石・焼土ブロック・ローム粒を多量に含む。



第117図　4号住居跡平面図



第118図　5号住居跡平面図・出土遺物

規模　住居跡は東西3.2m、南北2.7mを測り、主軸方向にやや長い長方形を呈する。壁高は35～25cmを測り、南壁がやや高い。貯蔵穴は長軸55cm、短軸40cmを測り、深さ20cmと浅く、楕円形を呈している。

カマド　住居の東壁中央よりやや右寄りに位置する。燃焼部は東壁を大きく掘り込んで造られ、煙道はさらに東へ延びると考えられるが検出できなかった。袖の一部が床面上に位置するものと考えられるが、残っていない。燃焼部は東壁の外部へ突き出るように位置し、焚き口部から燃焼部にかけての底面が緩やかに落ち込む。燃焼部内の側壁は、焼土化が著しい。

遺物　覆土、床直上の土器が点在する。坏・甕類の破片が多く、図示できたものは坏の2点だけである。

表44　5号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	部位 (残存)	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師器 坏	口縁から底部 1/4	覆土	口 (11.0) 高 (2.6) 底 丸底	①密、細砂粒を含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底面にかけては荒削り。摩耗のため削り痕は不明瞭。 内面は撫で。
2	須恵器 坏	口縁から体部 1/5	覆土	口 (17.4) 高 (5.8) 底 —	①密、細砂粒を含む ②還元焔、良好 ③灰色	口縁から体部にかけて回転撫で調整。

6号住居跡

位置　本住居跡は、西緩斜面の中央よりやや高位にあり、調査区の北側で13A17・18グリッドに位置する。本住居跡の南西には7号住居跡が隣接する。

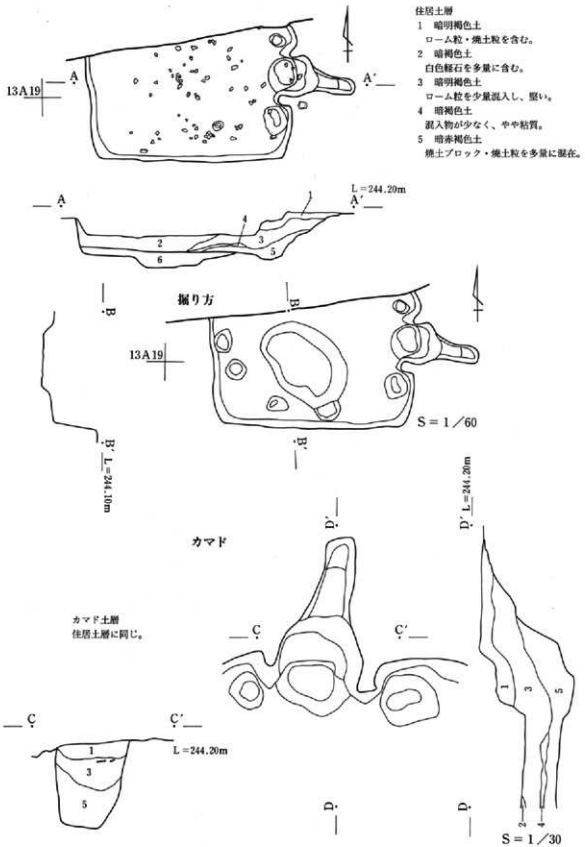
概要　住居の北側半分を調査区外とし、カマドを含む南側の半分が調査の対象となった。住居は黒色土を掘り込み、掘り方面はローム土中に達する。遺構確認面から床面まで50～60cmと深く、残りの良好な住居である。カマドは東壁に位置し、良好に残っていた。掘り方を持つ。

構造　床面は掘り方覆土と同様の粘質な黒褐色土を堅く踏みしめてあり、カマド前を中心に硬化が著しい。東壁際のカマド左側に、径20cmのピットを検出したが、柱穴とは考え難い。貯蔵穴はカマドの右側に位置し、楕円形を呈する。壁周溝は、検出されていない。床面下には掘り方を有し、掘り方面で床下土坑およびピットを4基検出することができた。なお、掘り方面は、西側ほど掘削が深く及んでいる。

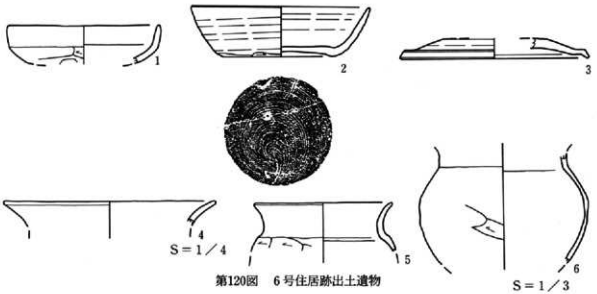
規模　住居跡は東西3.2mを測り、南北方向では最長2.1mを測ることができる。形状は方形を呈するものと考えられるが、長軸方向は不明。壁高は床面までを50～60cmを測り、掘り方面までは60～70cmを測ることができる。貯蔵穴は長軸45cm、短軸35cm、深さ20cmを測り、楕円形を呈する。掘り方面での床下土坑は、長軸1.5m、短軸1.1m、深さ20cmを測る楕円形を呈する。ピットはいづれも径30cm前後を測る。

カマド　住居の東壁に位置する。東壁を掘り込んで造られ、煙道はさらに東へ延びる。袖と燃焼部は床面上に位置する。両袖が残存し、焚き口部から燃焼部にかけての底面が浅く落ち込む。煙道部は東へ延び、奥壁より60cmを測る。なお、カマドの主軸方向が、住居の辺よりやや歪んでいる観がある。

遺物　住居の中央部に多く出土し、床直上の遺物も多い。遺物には、坏・蓋・甕・小型甕等が出土している。



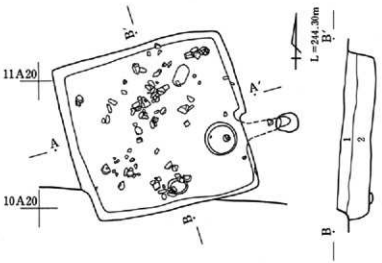
第119図　6号住居跡平面図



第120図　6号住居跡出土遺物

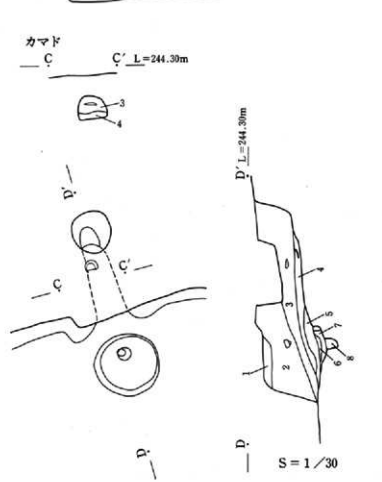
表45　6号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	部位 (残存)	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師器 坏	口縁から体部 1/5	掘り方	口 (12.2) 高 (3.0) 底 —	①やや粗、細砂粒を含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部は篦削り。 内面は撫で。器表面は密。
2	須恵器 坏	ほぼ完形	床直	口 14.2 高 4.0 底 8.2	①やや粗、砂粒を多く含む ②還元焔、良 ③暗灰色	ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後、横位の篦削り。底面は無調整で、糸切り痕が残存する。
3	須恵器 蓋	天井から口縁 1/5	覆土	摘径 — 高 (1.6) 口径 (15.0)	①密、砂粒を含む ②還元焔、良 ③灰色	ロクロ成形。摘部・天井部は欠損のため不明。 口縁部は折りで、短い。
4	土師器 甕	口縁片 1/4	覆土	口 (22.4) 高 (2.6) 底 —	①やや粗、細砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③純い橙色	口縁の内外面共に横撫で。器表面はやや粗。
5	土師器 小型甕	口縁片 1/4	覆土	口 (22.4) 高 (2.6) 底 —	①やや粗、細砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③明赤褐色	口縁から頸部は横撫で。胴部は篦削りで、頸部との境に段を持つ。器表面はやや粗。
6	土師器 小型甕	胴部 1/4	覆土	口 — 高 (2.6) 底 —	①やや粗、細砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③純い橙色	頸部は横撫で。胴部は篦削り後に撫で調整。一部に篦削り痕が残る。器厚は薄く、器表面はやや粗。



住居土層
1　明黄褐色土
白色軽石を少量に含む。
2　暗褐色土
白色軽石を多量に含む。
やや粘質気味。

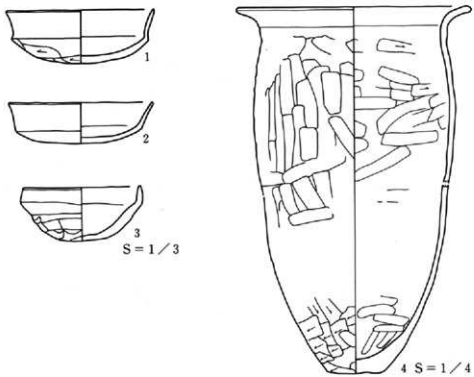
S＝1／60



カマド土層
1　暗褐色土
白色軽石を少量に含む。
2　暗褐色土
白色軽石を多量に含む。やや粘質気味。
3　暗褐色土
白色軽石・焼土粒を少量に混在。
4　暗褐色土
焼土粒を多量に含む。
5　暗褐色土
白灰色土粒を少量含む。
6　暗白灰色土
暗白灰色の灰層である。
7　暗褐色土
焼土粒を多量に含む。
8　暗赤褐色土
炭化物を含み、焼土ブロックを多量に混在。

S＝1／30

第121図　7号住居跡平面図



第122図　７号住居跡出土遺物

表46　７号住居跡出土遺物観察表

掲図番号 図版番号	土器種別 器種	部位 (残存)	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師器 坏	口縁から底部 1/2	床下土坑	口 11.7 高 4.2 底 丸底	①密、２mm前後の赤色粒を含む ②酸化焔、良好 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底部は篦削り。 内面は撫で。器表面は密。
2	土師器 坏	口縁から底部 1/2	覆土	口 11.5 高 3.2 底 丸底	①やや密、細砂粒を含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底部は篦削りによるが、削り痕は不明瞭。内面は撫で。器表面は密。
3	須恵器 坏	口縁から底部 2/3	覆土	口 9.1 高 4.2 底 丸底	①密、細砂粒を含む ②還元焔、良 ③灰白色系	器体全体を横撫で後、篦削りを施す。口縁は横撫で。 体部から底部は粗い篦削り。 内面は撫で。全体に歪んでいる。
4	土師器 甕	口縁から底部 2/3	覆土	口 25.0 高 38.6 底 6.0	①やや粗、細砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③純い橙色	口縁は横撫で。頸部下は横位の篦削りで、胴部は縦位の篦削り。内面口縁は横撫で。内面胴部は篦撫でによる。

７号住居跡

位置　本住居跡は、西緩斜面の中央よりやや高位にあり、10A18・19グリッドに位置する。本住居跡の北東には、先の６号住居跡が隣接する。また、西側には、やや離れて12号住居跡がある。

概要　黒色土中を掘り込んだ住居であり、床面の検出は難しかったが、遺構確認面から床面まで30～40cmと比較的に残りの良好な住居である。カマドは東壁に位置し、良好に残っていた。貯蔵穴・床下土坑等

は、検出されていない。覆土中の遺物量が多い。住居の南壁付近は、遺跡確認調査時の試掘トレンチの掘削を受けている。

構造　床面は黒色土面を堅く踏みしめてあり、カマド前から住居中央にかけて硬化が著しい。南壁の中央付近に径30cmほどのピットが検出されているが、柱穴とは考え難い。壁周溝等は検出されていない。

規模　住居跡は東西2.9m、南北2.7mを測り、主軸方向にやや長い正方形を呈する。壁高は30～40cmを測り、東壁が高い。

カマド　住居の東壁中央よりやや右寄りに位置し、煙道は長く東側へ延びている。袖と燃焼部は床面上に位置するが、左右の袖の一部と焚き口部から燃焼部付近の浅い掘り込みを残すのみで、大半が残っていない。煙道部は東壁より東側へ延び、80cmを測る。なお、煙道部天井は崩落せずに残存していた。

遺物　覆土中より出土した遺物は多いが、そのほとんどは破片であり、図示できたものは坏・甕の4点のみである。また、覆土中からは、多くの石を出土させているが、大半は自然礫ないしは縄文時代の石器である。

8号住居跡

位置　本住居跡は、西緩斜面の最西付近にあり、13A38・39グリッドに位置する。本住居跡の西側には2号住居跡が隣接する。

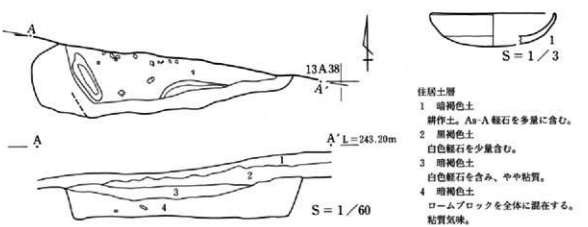
概要　住居の大半を調査区外とし、住居の南片側の一部が調査の対象となった。住居はロームを掘り込み、遺構確認面から床面まで50cm前後と深く、残りの良好な住居である。カマドは調査区外に存在するものと考えられるが、不明。本住居跡の西壁は土坑と重複するが、土層の堆積状況より本住居跡の方が新しい。

構造　床面はローム面を堅く踏みしめてある。柱穴・貯蔵穴等は不明。壁際に壁周溝が検出されている。周溝は幅15cm前後を測る。

規模　住居跡は南壁で最長3.2mを測り、西壁付近では最長0.5mを測ることができる。形状は方形を呈するものと考えられるが、詳細は不明。壁高は床面までを50cm前後を測ることができる。

カマド　調査区外に存在すると考えられるが、詳細は不明。

遺物　覆土中より少量出土しているが、図示できたのは坏の1点のみである。



第123図　8号住居跡平面図・出土遺物

表47　８号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残存)	出土 位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師器 坏	口縁から体部 1/4	覆土	口　(10.0) 高　(2.4) 底　丸底	①やや密、細砂粒を含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底部は篦削りによるが、削り痕は不明瞭。内面は撫で。器表面は密。

９号住居跡

位置　本住居跡は西緩斜面から谷地部を隔てた西側台地の東斜面にあり、６・７Ｂ17・18グリッドに位置する。本住居跡の北側には、10号住居跡が隣接する。

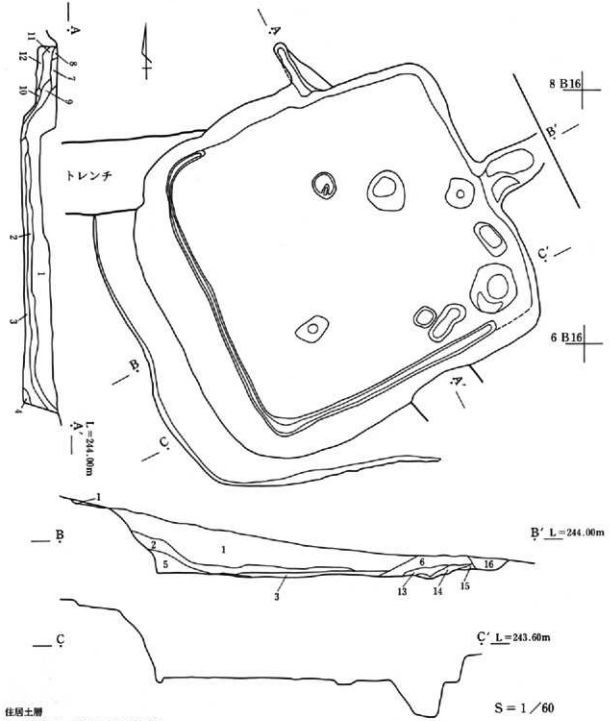
概要　住居は急な東斜面に造られたためか、住居の山側に当たる西・南側にはテラス状の段を有する。遺構確認面から床面まで100～25cmと深く、比較的に残りの良い住居である。カマドは東壁と、北壁の２カ所に存在するが、煙道部のみで残りは悪い。貯蔵穴は１基検出されている。ピットも数基検出されているが、柱穴とは考え難い。また、壁周溝が一部で確認されている。

構造　住居の周囲に当たる西壁側から南壁にかけて、幅50cm前後のテラス状の平坦面が存在する。壁は地形に左右されるためか、西壁が高く、朝顔状に掘削されている。床面はローム面を堅く踏みしめてある。特に両カマド前から住居の中央にかけて、硬化が著しい。ピットは６基検出されているが、性格は不明。貯蔵穴は東壁に付くカマドに付随するもので、カマドの右側、東南の隅に存在する。壁周溝は西壁から南壁の際に巡らされ、カマドを持つ辺には検出されなかった。

規模　住居跡はテラス部分を含めると東西6.3m、南北6.0mを測り、テラスを除く壁上場では東西5.6m、南北5.3mを測り、床面上では東西4.6m、南北4.6mを測る。床面上からの形状は、ほぼ正方形を呈するものと考えられるが、斜面地であることから上屋構造が正方形になるかは疑問である。テラスは住居の山側に当たる西壁側から南壁にかけて、50cm前後の幅で巡る。壁高は西壁で１mを測り、東壁の最も低い部分で25cmを測る。貯蔵穴は長軸80cm、短軸70cm、深さ50cmを測り、円形に近い楕円形を呈する。ピットはいづれも径が30～50cm前後を測る。周溝は幅15cm前後で、西壁側際から南壁際にかけて巡る。

カマド　東壁のほぼ中央に位置する東カマドと、北壁中央よりやや右側に位置する北カマドの両者がある。東カマドについては、袖と燃焼部は床面上に位置すると考えられ、焚き口部から燃焼部付近の浅い掘り込みを残すのみで、大半が残っていない。煙道部は東壁より東側へ延びるが、その長さは下り斜面であるため不明。北カマドについては、東カマドと同様の構造と考えられるが、袖等のカマド本体は残っていなかった。残存しているのは煙道のみで、壁の北側へ90cm延びている。なお、この煙道の壁は赤く焼土化している。

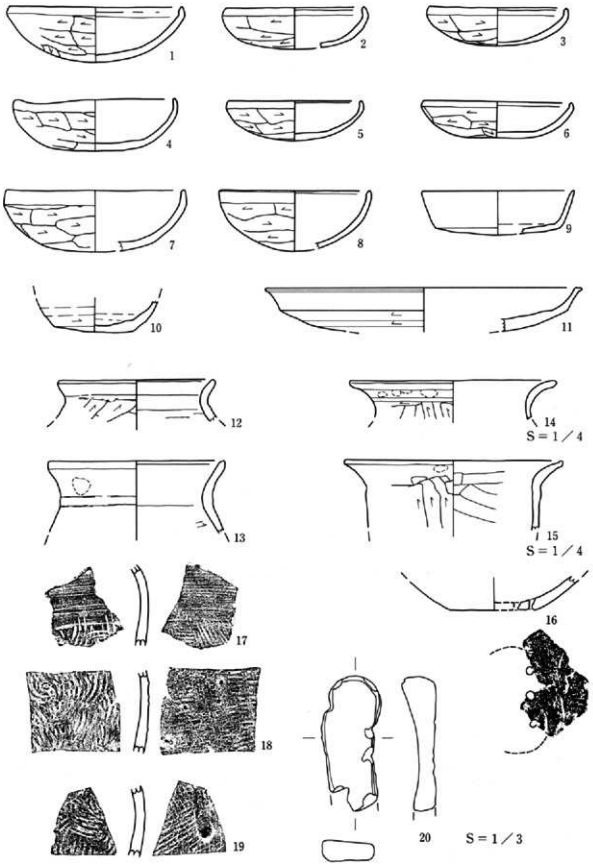
遺物　覆土中より、多くの遺物が出土している。坏・高坏・小型甕・甕・甑等の土器の他に、砥石が１点出土している。



住居土層

1　暗褐色土　白色軽石を全体に含む。
2　暗褐色土　白色軽石・ロームブロックを混在し、粘質気味。
3　黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量に混在し、粘質。
4　暗褐色土　混入物が少なく、粘質。
5　黄褐色土　ロームを主体とする層。
6　暗褐色土　焼土粒を全体に含む。
7　赤褐色土　焼土。カマドの煙道部天井。
8　暗褐色土　ローム粒・焼土粒を含む。
9　暗褐色土　焼土粒を少量含む。
10　褐色土　ローム粒・焼土粒を多量に含む。
11　暗褐色土　焼土粒を多量に含む。
12　暗褐色土　焼土粒を少量含む。やや粘質気味。
13　暗褐色土　焼土ブロック・ローム粒を多量に含む。
14　黄褐色土　ローム土を主に、焼土粒を少量含む。
15　暗褐色土　ローム粒を僅かに含む。混入物少ない。
16　暗褐色土　15層に近似するが薄らかく、後世の攪乱の可能性あり。

第124図　9号住居跡平面図



第125図　９号住居跡出土遺物

表48　9号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残存)	出土 位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師器 坏	口縁から底部 1/2	覆土	口　13.6 高　4.4 底　丸底	①やや密、細砂粒を含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底部は荒削り。 内面は撫で、器表面は密。
2	土師器 坏	口縁から底部 1/2	覆土	口　11.6 高　3.1 底　丸底	①やや粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③鈍い橙色	口縁は横撫で。体部から底部は荒削り。 内面は撫で。器表面はやや粗。器体は少し歪む。
3	土師器 坏	口縁から底部 1/2	覆土	口　11.2 高　3.0 底　丸底	①やや密、細砂粒を含む ②酸化焔、良 ③鈍い橙色	口縁は横撫で。体部から底部は荒削り。 内面は撫で。器表面は密。器体は少し歪む。
4	土師器 坏	口縁から底部 1/4	覆土	口　(12.6) 高　4.0 底　丸底	①やや粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底部は荒削り。 内面は撫で。器表面はやや粗。器体は全体に歪む。
5	土師器 坏	ほぼ完形	覆土	口　10.9 高　3.1 底　丸底	①やや粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良好 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底部は荒削り。 内面は撫で。器表面はやや粗。
6	土師器 坏	口縁から底部 1/2	覆土	口　(12.0) 高　2.8 底　丸底	①やや粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良好 ③鈍い橙色	口縁は横撫で。体部から底部は荒削り。 内面は撫で。器表面はやや粗。器体はやや歪む。
7	土師器 坏	口縁から底部 1/4	覆土	口　(14.4) 高　4.7 底　丸底	①やや密、砂粒を含む ②酸化焔、良好 ③鈍い褐橙色	口縁は横撫で。体部から底部は荒削り。削り痕は明瞭。 内面は撫で。器表面はやや密。
8	土師器 坏	口縁から底部 1/4	覆土	口　(12.0) 高　(4.6) 底　丸底	①やや密、砂粒を含む ②酸化焔、良好 ③鈍い橙色	口縁は横撫で。体部から底部は荒削り。 内面は撫で。器表面はやや密。
9	須恵器 坏	口縁から底部 1/4	覆土	口　(12.0) 高　(3.4) 底　(9.7)	①密、砂粒を含む ②還元焔、良好 ③暗灰色	口縁から体部にかけては回転撫で。底面は回転糸切り離し後、荒削り。内面は回転撫で。器表面は密。
10	須恵器 坏	体部から底部 1/3	覆土	口　— 高　(2.5) 底　(6.4)	①密、砂粒を含む ②還元焔、良好 ③灰白色	体部は回転撫で。底面は回転糸切り離し後、荒削り。 内面は回転撫で。器表面は密。
11	須恵器 高　坏	口縁から体部 1/3	覆土	口　(24.8) 高　(3.4) 底　—	①密、2mm前後の砂粒を含む ②還元焔、良好 ③暗灰色	口縁下に明瞭な稜を持つ。体部は回転撫で。 内面は撫で。器表面は密。器体は大きく歪む。脚部は欠損のため不明。
12	土師器 小型壺	口縁片	覆土	口　(12.4) 高　(3.4) 底　—	①やや粗、2mm前後の砂粒を含む ②酸化焔、良 ③赤褐色	口縁は横撫で。頸部下は荒削り。頸部には置のあて痕が顕著。内面は横撫で。輪積み痕が見られる。器表面は密。
13	土師器 小型甕	口縁片	覆土	口　(14.0) 高　(5.5) 底　—	①粗、2mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③赤褐色	口縁は横撫で。頸部に指頭痕が残る。頸部以下は置削りと考えられるが不明瞭。内面は撫で。器表面はやや粗。
14	土師器 甕	口縁片	覆土	口　(22.0) 高　(4.2) 底　—	①粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③褐色	口縁は横撫で。頸部に指頭痕が残る。頸部以下の胴部は縦位の置削り。内面は横撫で。器表面はやや粗。
15	土師器 甕	口縁から胴部 1/6	覆土	口　(23.1) 高　(7.1) 底　—	①やや粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③赤褐色	口縁は横撫で。頸部に指頭痕が残る。頸部以下の胴部は縦位の置削り。内面は横位の置撫で。器表面はやや密。
16	土師器 甕	底部片	覆土	口　— 高　(2.3) 底　(6.8)	①やや粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③褐色	底面に径5mm程の孔がいくつも空けられている。
17	須恵器 甕	胴部片	覆土	口　— 高　— 底　—	①密、砂粒を含む ②還元焔、良好 ③暗灰色	外面に平行叩き目あり。 内面に青海波文のあて目あり。

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残存)	出土 位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
18	須恵器 甕	胴部片	覆土	口　— 高　— 底　—	①密、砂粒を含む ②還元焔、良好 ③灰色	外面に平行叩き目あり。 内面に青海波文のあて目あり。
19	須恵器 甕	胴部片	覆土	口　— 高　— 底　—	①密、砂粒を含む ②還元焔、良 ③灰色	外面に平行叩き目あり。 内面に青海波文のあて目あり。
20	砥　石	2/3	覆土	長　(14.2) 幅　5.5 重　280g	石材　砥沢石	表面が大きく凹状に、側面が磨面として使用されている。

10号住居跡

位置　本住居跡は西緩斜面から谷地部を隔てた西側台地の東斜面に９号住居跡と共にあり、８・９B19・20グリッドに位置する。本住居跡の南側には、９号住居跡が隣接する。

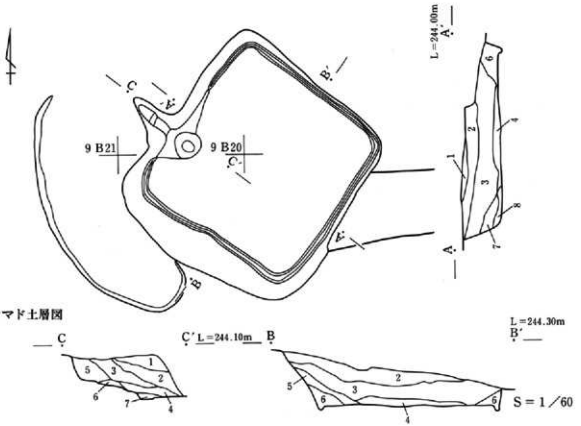
概要　住居は急な東斜面に造られたためか、住居の山側に当たる西側にはテラス状の段を有する。遺構確認面から床面まで90～35cmと深く、比較的に残りの良い住居である。カマドは北西壁に存在するが、煙道部のみで残りは悪い。柱穴および貯蔵穴は検出されてない。また、壁際には壁周溝が検出されている。

構造　住居の山側に当たる西側には、幅1.2m前後のテラス状の平坦面が存在する。壁は地形に左右されるためか、西壁が高く、朝顔状に掘削されている。床面はローム面を堅く踏みしめてある。特にカマド前から住居の中央にかけて、硬化が認められる。壁周溝は北西壁に付くカマド部分を除く、壁際に巡らされて検出されている。

規模　住居跡はテラスを除く壁上場では主軸方向3.3m×3.5mを測り、床面上では2.9m×2.9mを測る。床面上からの形状は、ほぼ正方形を呈するものと考えられる。テラスは住居の山側に当たる西側に、西隅を取り巻くように1.2m前後の幅で存在する。壁高は西壁で90cmを測り、東隅の最も低い部分で35cmを測る。周溝は幅10cm前後で、カマド部分を除き全周する。

カマド　北西壁の中央より左側の西寄りに位置する。袖と燃焼部は床面上に位置すると考えられ、焚き口部から燃焼部付近の浅い掘り込みを残すのみで、大半が残っていない。煙道部は壁より北西方向に延び、その長さは80cmを測る。

遺物　出土遺物は極めて少なく、坏・甕類の小破片のみで、図示できたのは１点だけである。



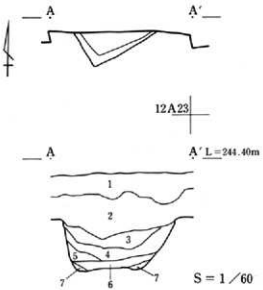
カマド土層
1　暗褐色土　白色軽石を全体に少量含む。
2　褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量に混在する。
3　暗褐色土　焼土粒を僅かに含む。
4　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。
5　黄褐色土　ロームブロックを多量に混在する。粘質。
6　黄褐色土　ローム粒・焼土粒を多量に含む。
7　赤褐色土　焼土ブロック・焼土粒を多量に混在する。

住居土層
1　黒褐色土　白色軽石を全体に少量含む。やや粘質。
2　暗褐色土　白色軽石を少量含み、ローム粒を僅かに含む。
3　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量に混在し、粘質。
4　暗褐色土　白色軽石を僅かに含むが、混入物少ない。
5　暗褐色土　4層に近似するが、粘質である。
6　暗褐色土　ロームブロックを混在する。
7　暗褐色土　ローム粒を僅かに含む。混入物少ない。
8　暗褐色土　焼土粒を多量に含む。

第126図　10号住居跡平面図・出土遺物

表49　10号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	部位 (残存)	出土 位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師器 甕	口縁片	覆土	口 (20.2) 高 (2.7) 底 —	①やや粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③褐色	口縁は横撫で。 内面は横撫で。器表面はやや粗。



住居土層
1　暗褐色土　耕作土。As-A軽石を多量に含む。
2　暗褐色土　白色軽石を少量含む。
3　黒褐色土　２層に近似するが、黒く、白色軽石が多い。
4　暗褐色土　粘質な褐色土ブロックを含む。
5　暗褐色土　炭化物を多量に含む。
6　暗褐色土　炭化粒を全体に含む。
7　明褐色土　ロームブロックを多量に混在する。粘質。

第127図　11号住居跡平面図

11号住居跡

位置　本住居跡は、西緩斜面の中央付近にあり、調査区の北側で12Ａ23グリッドに位置する。本住居跡の南西には３・12号住居跡がある。

概要　住居の大半を調査区外とし、住居の南西隅の一部が調査の対象となった。住居は黒色土を掘り込み、遺構確認面から床面まで70cm前後と深く、残りの良好な住居である。カマドは調査区外に存在するものと考えられるが、不明。その他の施設についても不明である。

構造　床面はローム面に達している。

規模　検出されたのは南壁が1.2m、西壁70cmだけである。壁高は70cmを測る。

カマド　調査区外に存在すると考えられるが、詳細は不明。

遺物　出土遺物はない。

12号住居跡

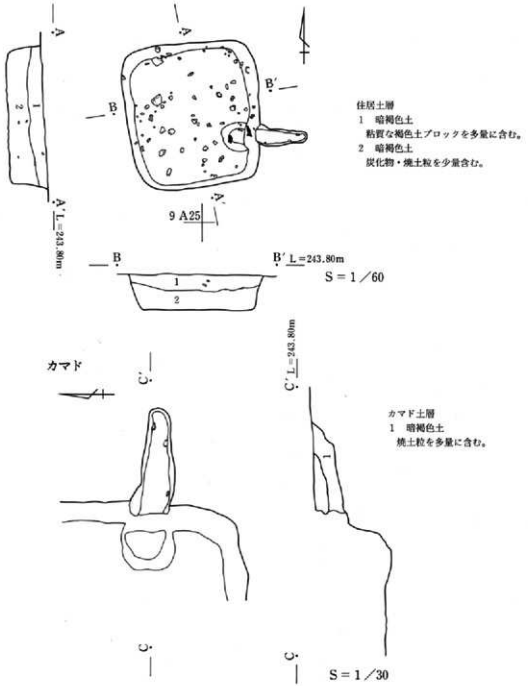
調査当初の段階で、カマドの位置確認ができなかったために１号竪穴として調査が進められた。このことにより、本住居跡の資料の記載・注記は全て１号竪穴として記されている。しかし、整理段階では、本遺構を12号住居跡として報告する。

位置　本住居跡は、西緩斜面のほぼ中央にあり、９・10Ａ24・25グリッドに位置する。本住居跡の西側には３号住居跡が隣接する。

概要　黒色土中を掘り込んだ住居であり、床面の検出は難しかったが、遺構確認面から床面まで50cm前後と比較的に残りの良好な住居である。カマドは東壁に位置するが、残りは悪い。貯蔵穴・床下土坑等は、検出されていない。

構造　床面は黒色土面を堅く踏みしめてあり、カマド前から住居中央にかけて硬化が著しい。柱穴は検出されていない。

規模　住居跡は東西2.1m、南北2.3mを測り、南北方向にやや長い正方形に近い形状を呈する。壁高は50cmを測る。



第128図　12号住居跡平面図

カマド　住居の東壁中央よりやや右寄りに位置する。袖および燃焼部は床面上に位置すると考えられるが、残っていない。焚き口部から燃焼部にかけての底面が緩やかに落ち込む。煙道は燃焼部の奥壁(東壁)から東へ長く延び、80cmを測る。なお、煙道部の天井は崩落していなかった。

遺物　出土遺物は少なく、そのほとんどが小破片であるため、図示することはできなかった。

13号住居跡

調査当初の段階で、カマドの位置確認ができなかったために2号竪穴として調査が進められた。このことにより、本住居跡の資料の記載・注記は全て2号竪穴として記されている。しかし、整理段階では、本遺構を13号住居跡として報告する。

位置　本住居跡は、台地の最も高い鞍部にあり、12A 9グリッドに位置する。本住居跡の南側には4号住居跡が隣接する。

概要　住居はロームを掘り込み、遺構確認面から床面までの深さが60～35cmと深く、残りの良好な住居である。カマドは東壁に位置し、残りは良い。貯蔵穴が検出されている。なお、本住居の覆土は極めてローム土に近く、覆土の中間位置からは多くの大形礫が廃棄された状態で詰められていた。

構造　床面はローム面を堅く踏みしめてあり、特にカマド前の硬化が著しい。柱穴および壁周溝等は検出されていない。貯蔵穴はカマドの右側で、南壁に接するようにある。

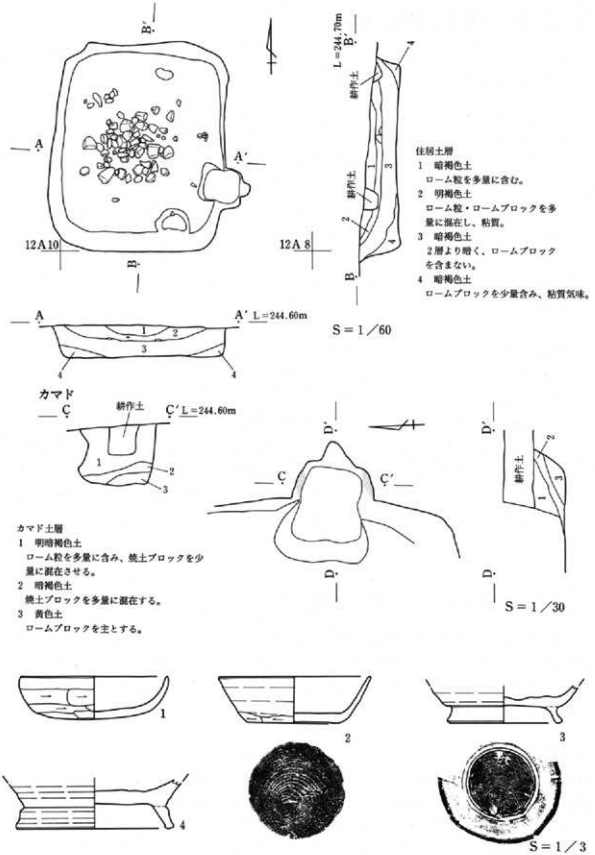
規模　住居跡は東西2.7m、南北3.3mを測り、南北方向に長軸を持つ長方形を呈する。壁高は60～35cmを測る。貯蔵穴は径50cmの円形を呈する。

カマド　住居の東壁中央よりやや右寄りに位置する。燃焼部は東壁を掘り込んで造られ、煙道はさらに東へ短く付く。袖の先端は床面上に位置するものと考えられるが、残っていない。燃焼部は東壁の外部へ突き出るように位置し、焚き口部から燃焼部にかけての底面が緩やかに落ち込む。燃焼部内の側壁は、強く焼土化している。

遺物　出土した遺物は極めて少ない。大形礫に紛れて坏・椀・壺類の破片が出土している。

表50　13号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	部位 (残存)	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師器 坏	口縁から底部 2/3	覆土	口 11.5 高 3.3 底 丸底	①やや粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良好 ③鈍い橙色	口縁は横撫で。体部から底部にかけて篦削り後、撫で。内面は撫で。器表面はやや密。
2	須恵器 坏	完形	覆土	口 12.1 高 3.6 底 7.4	①やや粗、細砂粒を多く含む ②還元焔、良 ③灰白色	ロクロ成形。底部近くは篦削り。底部は回転糸切り離し後、一部に篦撫でを施すが糸切り痕を残す。
3	須恵器 椀	底部	覆土	口 — 高 (2.7) 底 9.0	①やや粗、細砂粒を多く含む ②還元焔、良 ③灰白色	ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後、付け高台を持つ。底面の糸切り痕を残す。内面にはロクロ成形痕が顕著。
4	須恵器 長頸壺	底部	覆土	口 — 高 (3.5) 底 12.5	①やや粗、細砂粒を多く含む ②還元焔、良 ③灰色	ロクロ成形。底部には高台を持つ。底面は撫でによる調整。



第129図　13号住居跡平面図・出土遺物

第４章　乗附中原遺跡

１．遺跡の概要

中原遺跡は、高崎市乗附町字中原に所在する遺跡である。本遺跡は、高崎市教育委員会による高崎市文化財調査報告書第80集「観音山丘陵遺跡分布図遺跡一覧表－観音山丘陵遺跡詳細分布調査報告－」(1987) に記載された遺跡№61・62であり、遺跡名称を中原遺跡として登録されている。先述した長坂遺跡の西側に位置する台地上が本遺跡であり、台地上には古墳が点在している。

調査範囲は、現県道が大きくカーブする部分を高崎方面から長坂遺跡を経て本遺跡内で現県道に接続する新規道路部分と、現県道と接続した地点以西は現道拡幅となることから、新規道路部分と現道拡幅部分が調査の対象となった。新規道路と現県道の接する位置には、調査区に隣接して古墳が存在していることから、その関連遺構の存在が予測され、新規道路部分は全面調査の対象とされた。また、現道拡幅部分については、県教育委員会による試掘調査の結果から、現県道の北側で中原遺跡の中でも最も平坦な面の拡幅箇所が調査の対象とされた。

調査の結果、新規道路部分は台地の東斜面に当たり、表土下20～30cm前後でローム面となる状況で、黒色土の堆積が極めて薄い。予測された古墳に関連する遺構は検出されず、検出された遺構には台地の鞍部付近で平安時代の住居跡が１軒だけであった。

現県道の拡幅部分では、新規道路部分から続きで台地の平坦面から緩やかに西側へ傾斜を持つ面であり、一部に近世以降の盛り土部分が確認されている。検出された遺構は、拡幅部分の西側となる西緩斜面から平坦になった当たりで、奈良時代の住居跡が２軒、ピットが数基確認された。

なお、調査範囲内はローム台地であることから、旧石器時代の遺構・遺物の確認のための試掘調査を行った。試掘調査は、２×２ｍを基本とした。その結果、旧石器時代の遺構・遺物は検出されず、調査を終了させた。

２．奈良・平安時代の遺構と遺物

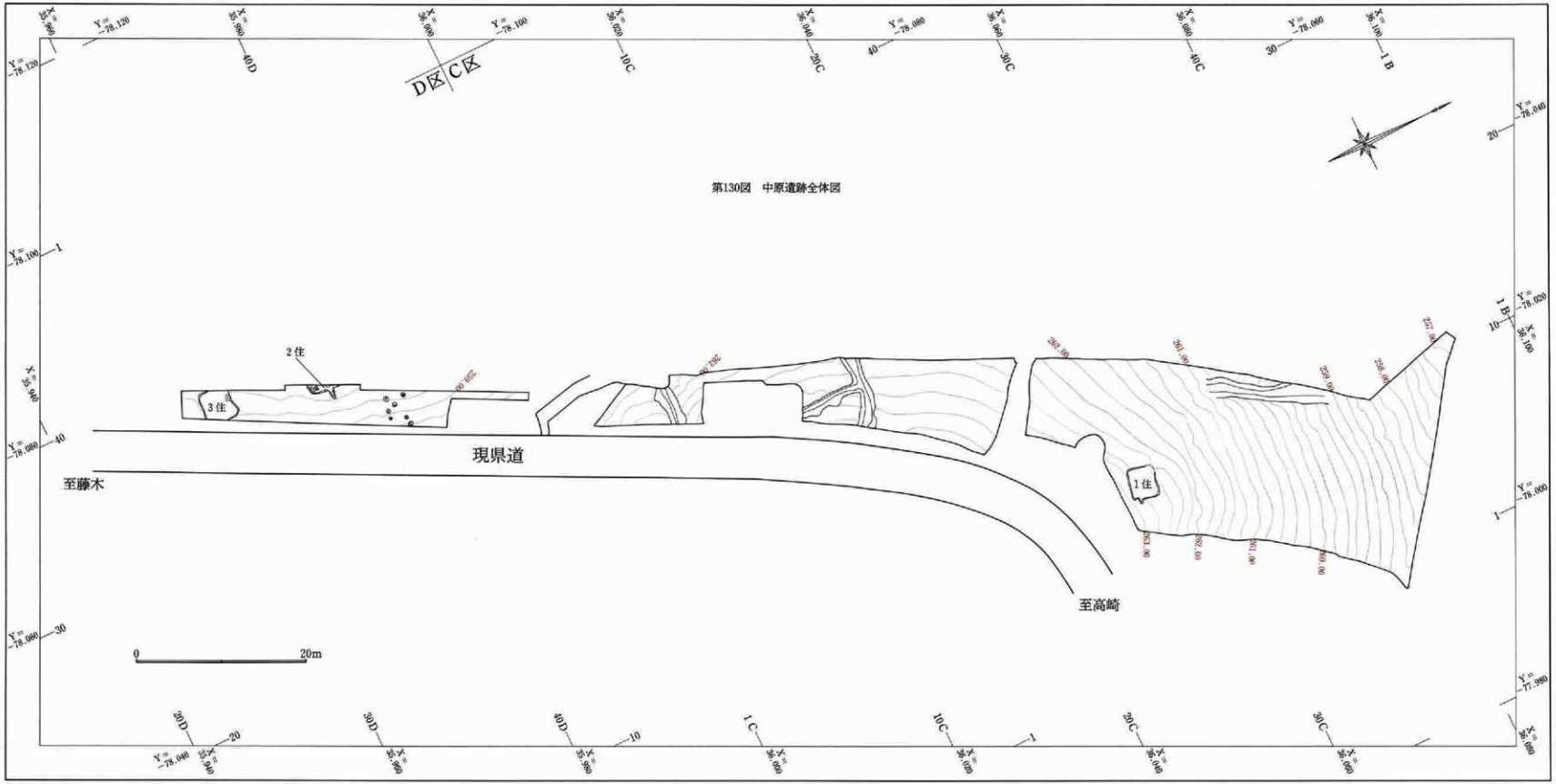
本調査で検出された歴史時代の遺構は、奈良・平安時代の住居跡が３軒である。この内の１軒は、台地の鞍部付近の高位に存在する平安時代の住居跡である。奈良時代の住居跡は２軒検出され、いづれも台地の西側の平坦面に検出された。また、この近くでピットが数基検出されていることから、掘立柱建物跡が存在する可能性をもっている。

１号住居跡

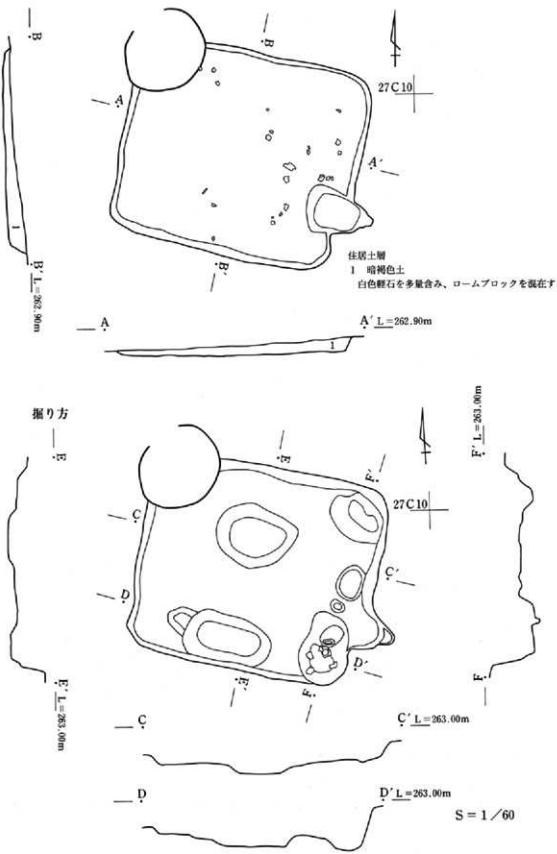
位置　本住居跡は、台地の鞍部付近の高位にあり、26Ｃ20グリッドに位置する。

概要　住居の北西隅には、大きく攪乱を受けている。遺構確認面から床面までの深さは10～30cmと浅いが、比較的残りの良い住居である。カマドは東壁に位置するが残りは悪い。なお、掘り方を持ち、床下土坑を有する。

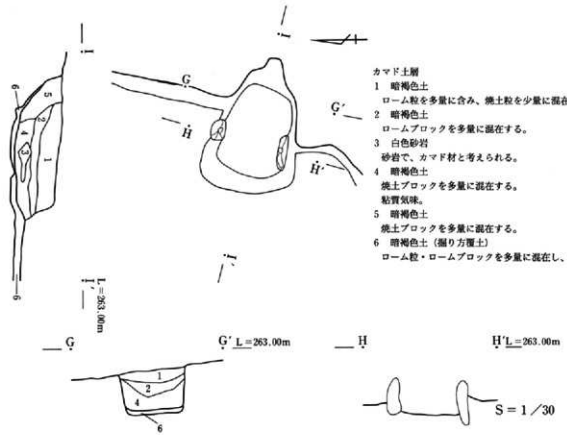
構造　床面は掘り方覆土と同様な褐色系のロームブロックを多量に含む土を堅く踏みしめてあり、特にカマ



第130図　中原遺跡全体図



第131図　1号住居跡平面図



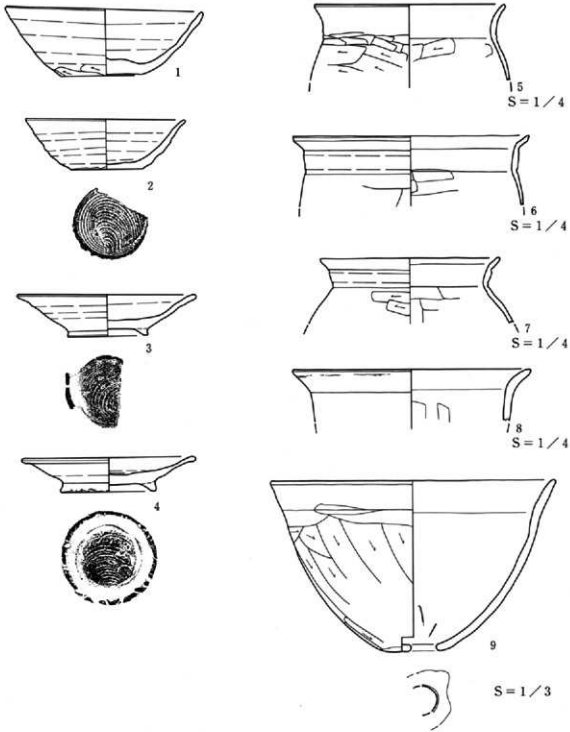
第132図　１号住居跡カマド平面図

ド前が良好に硬化している。柱穴は検出されていない。貯蔵穴はカマドの右側にあり、円形の擂り鉢状を呈する。床面下には掘り方を有し、掘り方面で床下土坑を検出することができた。床下土坑は住居中央の北側、北東隅、南壁の中央部付近の３基である。

規模　住居跡は東西3.8m、南北3.2mを測り、主軸方向にやや長い正方形を呈する。壁高は残りの良い南壁側で30cm、北壁側で10cmを測る。貯蔵穴は径70cm、深さ20cmの円形で、擂り鉢状を呈する。掘り方面の深さは、全体に床面下10cmほどである。住居中央の床下土坑は長軸1.3m、短軸１m、深さ15cmの楕円形を呈する。北東隅の土坑では、径80cm、深さ25cmの円形を呈する。南壁中央の土坑は、長軸1.4m、短軸70cm、深さ25cmの長楕円形を呈している。

カマド　住居の東壁中央よりやや右寄りに位置する。燃焼部は東壁をコ字状に大きく掘り込んで造られ、煙道はさらに東へ短く延びる。袖石が残存していたことから、袖の先端が床面上に位置すると考えられ、燃焼部は東壁の外部へ突き出るように位置し、焚き口部から燃焼部にかけての底面が緩やかに落ち込む。

遺物　覆土中より、多くの遺物が出土している。坏・高坏・小型甕・甕・甑等の土器の他に、砥石が１点出土している。



第133図　1号住居跡出土遺物

表51　１号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 (残存)	出土 位置	法量(cm)		①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	須恵器 坏	ほぼ完 形	貯蔵穴	口 高 底	15.7 5.3 6.4	①密、砂粒を僅かに含む ②還元焔、良 ③薄い橙色	ロクロ成形。底部および底面は篦削り。 内面は黒色処理が施され、全体に丁寧な作り。
2	須恵器 坏	口縁から底部 1/2	床下土坑	口 高 底	12.7 3.9 5.8	①やや粗、細砂粒を多く含む ②還元焔、良 ③灰白色	ロクロ成形。底面には回転糸切り離しによる糸切り痕が残存。内外面ともに成形痕が顕著。器表面は密。
3	須恵器 皿	口縁から底部 2/3	床下土坑	口 高 底	14.2 3.3 6.4	①やや粗、砂粒を多く含む ②還元焔、不良 ③褐灰色	ロクロ成形。底部には回転糸切り離し後、付け高台。 底面には糸切り痕が残存。器表面は粗。
4	須恵器 皿	口縁から底部 1/2	貯蔵穴	口 高 底	13.8 2.7 7.6	①密、砂粒を含む ②還元焔、良好 ③灰白色	ロクロ成形。底部には回転糸切り離し後、付け高台。 底面には糸切り痕が残存。高台部に篦状の工具等の圧痕がある。器表面は密。
5	土師器 甕	口縁から胴部 1/4	覆土	口 高 底	(20.4) (8.0) —	①密、細砂粒を含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。頸部以下の胴部は横・斜位の篦削り。 内面口縁は横撫で。頸部下は篦撫でで篦痕が残る。器表面は密。
6	土師器 甕	口縁から胴部 1/4	貯蔵穴	口 高 底	(25.0) (7.4) —	①密、細砂粒を含む ②酸化焔、良 ③橙色	コ字口縁で、口縁は横撫で。頸部以下の胴部は横位の篦削り。内面口縁は横撫で。胴部は篦撫で。器表面は密。
7	土師器 甕	口縁から胴部 1/4	床下土坑	口 高 底	(19.0) (6.9) —	①密、砂粒を含む ②酸化焔、良 ③橙色	コ字口縁で、口縁は横撫で。頸部以下の胴部は横位の篦削り。内面口縁は横撫で。胴部は篦撫で。器表面は密。
8	土師器 甕	口縁から胴部 1/4	覆土	口 高 底	(25.4) (5.5) —	①やや粗、２～３mmの砂粒を含む ②酸化焔、良 ③赤褐色	口縁は横撫で。胴部は縦位の篦削りと考えられるが不明瞭。内面口縁は横撫で。胴部は縦位の篦撫で。
9	土師器 甑	口縁から底部 1/3	覆土	口 高 底	22.6 13.4 5.0	①やや粗、砂粒を多量に含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。胴部および底面は篦削り。 内面上半は横撫で。下半は縦位の篦撫で。一部に篦痕が残る。底面の孔は中心よりずれる。

２号住居跡

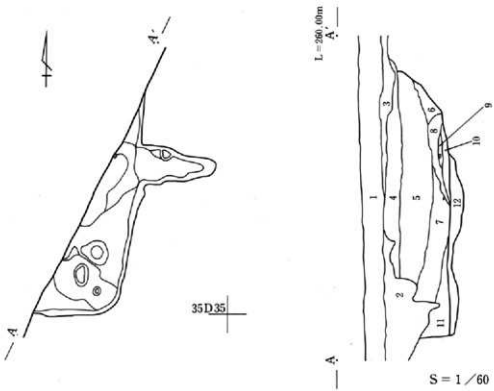
位置　本住居跡は、現県道拡幅部分の調査区北側にあり、35D36グリッドに位置する。本住居跡の東側にはピット群があり、西方には３号住居跡がある。

概要　住居の大半を調査区外とし、カマドを含む住居の東壁側の一部が調査の対象となった。住居は黒色土を掘り込み、床面はローム面まで達する。遺構確認面から床面までの深さは50cmと深く、残りの良好な住居である。カマドは東壁に位置し、残りは良好である。なお、掘り方を有する。

構造　床面は掘り方覆土と同様な粘質な黒褐色土を堅く踏みしめてある。床面下には掘り方を有し、掘り方面でカマド前に床下土坑を検出することができた。その他の施設については、不明。

規模　住居跡は東壁で3.5mを測り、南壁で1.2mを測る。調査できたのは一部分であるため、その詳細は不明であるが、方形を呈する住居と考えられる。壁高は１mを測る。これは遺構確認面からではなく、土層堆積からみた際に確認されている。掘り方面の深さは、全体に床面下10cmほどである。カマド前の床下土坑は不整な楕円形を呈すると思われるが、詳細は不明。東南隅にも土坑が検出されているが、貯蔵穴であるかどうかは不明。径１mほどの円形を呈する。

カマド　住居の東壁に位置する。燃焼部は東壁をコ字状に大きく掘り込んで造られ、煙道はさらに東へ延びる。袖の先端が床面上に位置すると考えられるが、詳細は不明。燃焼部から煙道にかけて、焼土化が顕著であった。



住居土層

1　暗褐色土　　耕作土。As-A軽石を多量に含む。
2　暗灰色土　　盛り土。As-A軽石・ロームブロック・砂石を混在する。
3　暗褐色土　　旧耕作土。As-A軽石を多量に含む。
4　黒褐色土　　白色軽石を少量含む。
5　黒褐色土　　黄色軽石を僅かに含み、やや粘質気味。
6　暗褐色土　　焼土粒を少量混在させる。
7　黒褐色土　　黄色軽石を多く含み、やや粘質気味。
8　褐色土　　ロームブロック・黄色軽石を多く含み、焼土粒を僅かに混在させる。
9　赤褐色土　　焼土ブロック・焼土粒を多量に混在する。
10　暗赤褐色土　　焼土粒を多量に含み、下層には黒色の灰層が薄く堆積する。
11　黒褐色土　　黄色軽石を僅かに含むが、混入物は少ない。
12　暗褐色土　　ローム粒・ロームブロックを多量に混在し、粘質で堅く締まっている。

第134図　2号住居跡平面図・出土遺物

遺物　覆土中より出土した遺物は少ない。図示できたのは坏の１点のみである。

表52　２号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	部　位 （残存）	出土 位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師器 坏	口縁から底部 1/4	覆　土	口　11.5 高　2.8 底　丸底	①やや粗、細砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底部にかけては篦削り。 内面は撫で。器表面はやや粗。

３号住居跡

位置　本住居跡は、現県道拡幅部分の調査区西端の中央にあり、29・30D37グリッドに位置する。本住居跡の東方には２号住居跡がある。

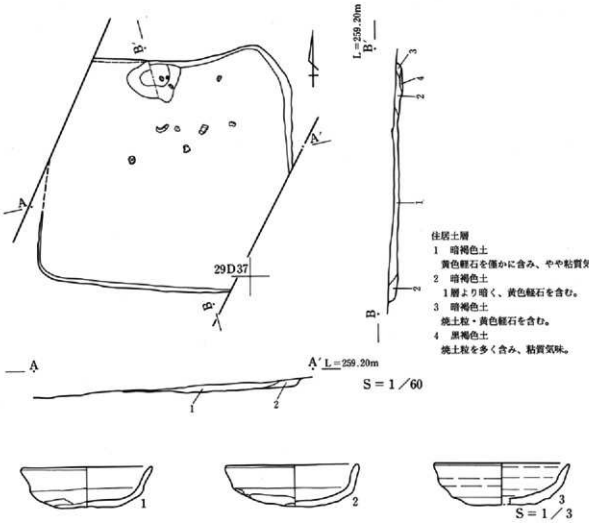
概要　住居の東南側を調査区外（現県道）とし、北西側は遺構確認面で削ってしまったため不明である。住居は黒色土を掘り込み、遺構確認面から床面までの深さは、残りの良い南・東壁で10cm前後と残存状態の悪い住居である。カマドは東壁に位置するとすれば調査区外にあるものと考えられるが、北壁中央部に浅い掘り込みが検出されており、カマドであった可能性もある。

構造　床面は黒褐色土を堅く踏みしめてある。柱穴・貯蔵穴等の施設は検出されていない。

規模　住居跡は東西3.9m、南北3.6mを測り、東西方向にやや長い正方形を呈している。壁高は最も残りの良い南・東壁で10cmを測る。

カマド　住居の東壁に位置するとすれば、調査区外にあるものと考えられる。しかし、北壁中央部に浅い掘り込みを有し、その周辺から床直上の遺物が点在して出土している点や、この辺りの床面が硬化している点から北カマドである可能性が高く、北壁中央の浅い掘り込みが焚き口部の掘り込みであるとも考えられる。なお、この掘り込み以外の施設については、不明。

遺物　出土した遺物は少ないが、住居中央より北側に床直上の遺物が点在する。図示できたのは坏の３点のみである。



第135図　3号住居跡平面図・出土遺物

表53　3号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	部位 (残存)	出土位置	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形の特徴
1	土師器 坏	口縁から底部 1/2	床直	口 10.3 高 3.2 底 丸底	①密、細砂粒を含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底部にかけては篦削り。削り痕は不明瞭。内面は撫で。器表面は密。器体は歪んでいる。
2	土師器 坏	ほぼ完形	床直	口 10.3 高 3.3 底 丸底	①粗、砂粒を多く含む ②酸化焔、良 ③橙色	口縁は横撫で。体部から底部にかけては篦削り。削り痕は不明瞭。内面は撫で。器表面は粗。
3	須恵器 坏	口縁から底部 1/2	床直	口 10.7 高 3.3 底 丸底	①密、細砂粒を含む ②還元焔、良好 ③灰色	口縁は回転撫で。体部から底部は回転篦削り。底面は回転糸切り離し。内面は回転撫で。器表面は密。

第5章　まとめ

乗附長坂遺跡・乗附中原遺跡における今調査で出土した資料については、先の第3章および第4章で述べてきた通りである。ここでは、先述した資料をとうしての所見を述べることで、調査のまとめとする。

旧石器時代

今調査では、両遺跡共に旧石器時代の遺構・遺物の検出はみなかった。しかし、「観音山丘陵遺跡分布図、遺跡一覧表－観音山丘陵遺跡詳細分布調査報告－」(高崎市教育委員会1987)によると、中原遺跡の中に先土器時代の記載が報じられている。ただし、今調査とは異なる地点のようであり、その詳細につては不明。同地域における今後の調査に、期待したい。

縄文時代

今調査では、乗附長坂遺跡から前・中期の住居跡や土坑等の遺構が検出され、包含層より早期から後期前半までの遺物が出土した。同丘陵上で以前に調査された大平台遺跡（現、県立みやま養護学校）では、中期中葉から後半にかけた住居跡を主体に、包含層からは後期前半までの遺物が出土している。また、隣接する安中市の中野谷遺跡群では早期の押し型文の住居跡が、同市中野谷松原遺跡では前期の諸磯式の大集落跡の他に後期堀之内式の柄鏡形住居跡も検出されている。周辺遺跡の状況からすれば、本遺跡地での早期の遺構が検出される可能性もあり、また後期についても大集落とは成らずとも集落跡が存在することは予測できよう。

主体となった前期中葉の遺物をみると、いくつかの問題点がある。ここでは、縄文地文に、主文様を描く土器について若干触れたい。

ここで言う「縄文地文に、主文様を描く土器」とは、第18図8、第28図64～66、第47図4、第67図22号土坑2、第75図64・70・71の土器であり、地文に縄文を施した上に、口縁部文様としての鋸歯状や菱形の文様を沈線で描く一群である。この種の土器は、有尾式土器や黒浜式土器と共に、各地に散見する土器である。

群馬県内では、南蛇井増光寺遺跡184号住居、清水Ⅰ遺跡Ｊ１号住居、糸井宮前遺跡78・111・135号住居、中棚遺跡12号住居、芳賀東部団地遺跡群Ｊ12号住居、賀茂遺跡２号住居、瀬戸ケ原遺跡Ｊ１号住居等に出土している。埼玉県では、薬師堂遺跡Ａ区９号住居、三ケ尻林遺跡９号住居、山根遺跡14号住居等にみられる。また、茨城県高崎遺跡25号住居、千葉県若葉台遺跡009・011号住居、東京都御殿前遺跡ＳＩ010・ＳＩ012、神奈川県折本西原遺跡35号住居等にもみることができる。各遺跡から出土している量は、さほど多くはない。むしろ、少ない。施文される文様の手法では、糸井宮前遺跡135号住居出土の土器が爪形刺突をもつ平行沈線によるものであり、それ以外の土器は平行沈線で施文されている。

大木２ａ式土器を主体とする福島県にも、こうした土器が出土している。もちろん、その数は僅かであるが、宇輪台遺跡４号住居、桜川遺跡、弘源寺貝塚にみることができる。いずれの遺跡の土器も、大木２ａ式土器と共に出土しているが、施文される文様は大木２ａ式とは明らかに異なる文様であり、異系統の土器としてみることができよう。

本来、有尾式土器の施文は、第23図・第24図３の様に、菱形となる主文様の描かれる口縁部は無文地であることが基本となっている。このことからすると、縄文地文の上に主文様を描くという施文は、同様の構成

をとる主文様を描きながらも、その母胎となる土器が異なる可能性が考えられる。

これらの土器は、施文される文様の特徴から、3分類することができる。

a類（菱形文を描く土器）

波状口縁と平口縁の両者が存在する。波状口縁の土器では、波頂下に大きく4単位の菱形文を描き、有尾式土器の文様施文と同一な施文法をとる。瀬戸ケ原遺跡出土の土器は、波頂下に小さな菱形文を描く例である。平口縁の土器では、文様帯幅が狭くなることから菱形文が小さくなり、その分、文様の単位が波状口縁の場合の文様単位数より多くなる。また、施文される文様手法には、爪形刺突をもつ平行沈線によるものが極僅かにあるが、大方は平行沈線のみで施文する土器で占められている。このa類とした土器は、地文に縄文をもつものの、基本的には有尾式の文様描出を忠実に守っている土器と言えよう。

b類（鋸歯の連続によって菱形構成を作る土器）

緩やかな波状口縁と平口縁の両者が存在する。緩やかな波状口縁の土器でも、口縁形状に合わせるように文様帯の上下幅が均等に近く、平口縁の文様帯幅と差が少ない。施文される文様は、鋸歯文（山形文）を基本とし、鋸歯と鋸歯の間にさらなる鋸歯を交差させる様に、或いは鋸歯を重畳させる様に描くことで、菱状の文様がいくつも連続的に描出されている。また、これらの文様は、平行沈線によるものだけのようである。a類と比較すると、菱形が描出されるという点では同じであるが、その手法には大きな差がみられる。

c類（鋸歯文を描く土器）

平口縁となるものが多いようである。文様帯の幅は狭く、口縁下以外に胴部にも文様帯をもつ土器がある。また、文様帯は1段だけではなく、2段となる例もある。いずれの土器も、整然とした鋸歯文が平行沈線で描かれるものであり、菱形を構成させない点等、a・b類とは明らかに異なる。

以上の分類から、a類は有尾式土器の菱形文様をセオリー通りに施文する土器であり、b類は鋸歯の連続・重畳という描出手法の異なる土器、c類では鋸歯文のみといった有尾式土器の菱形文とは全く異なる土器ということが理解できよう。

有尾式土器に特徴的に施文される菱形文様については、これまでに有尾式土器の成立と絡めて論議されてきた経緯がある。筆者もその当事者の一人であり、神ノ木式土器からの直接的な系統下にある土器として論じてきた。その神ノ木式土器にあっても、地文に縄文をもって口縁部に主文様を描く土器はなく、その伝統が有尾式土器にも受け継がれているものと考えている。

では、地文縄文の上に主文様を描く土器は、どこから生じてくるのであろうか。神ノ木式土器に併行型式とされる関山II式土器を見ると、明らかに地文縄文（組み紐等）の上に、「の」字状や鋸歯状等の主文様が描出される土器が存在する。単純に考えれば、この関山II式の伝統上に、ここで問題としている土器群が生じてくる可能性がかなり高いと言えよう。また、c類とした鋸歯文も、関山II式土器に系譜を追うことができる文様と考えられ、関山II式に後続する段階（黒浜式土器としても、比較的古い段階）に位置付けられよう。さて、b類とした鋸歯の重畳という手法は、有尾式土器にはみられない手法であり、近い手法で文様を描出する土器に関山II式が上げられよう。或いは、c類とした鋸歯文の崩れ、ないし鋸歯文と菱形文の折衷的文様としてみることもできる。そう考えるならば、有尾式の範疇から外れる可能性も大きい。当然、複数の型式要素を合わせ持つ土器を、どう扱うかという問題はある。

群馬県とその周辺地域の前期中葉期では、その多くの遺跡で有尾式土器が「主」となり、黒浜式土器が「従」となる様相を示している。見方を変えると、主文様をもつ土器が有尾式土器で、主文様をもたない土器が黒浜式土器ともみることができ、双方が保管関係にあって一時期を形成していると感じる面も窺える。本当に、

そうなのであろうか。黒浜式土器に、主文様をもつ土器が欠落しているのであろうか。もちろん、有尾式土器が主文様をもつ土器だけで構成されているわけではない。縄文のみが施文される土器が存在することは、周知のことである。黒浜式土器の研究は古くから進められているが、未だにその内容が判然としていないのが現状であり、今後の研究の進展に期待は大きい。

弥生時代

今調査では、乗附長坂遺跡で僅かに出土している。本遺跡の北側に位置する少林山台遺跡の調査では、弥生時代後期の住居跡や墓等が検出されており、同様の集落跡が本遺跡周辺に存在する可能性をもっている。今後の調査に期待するところである。

古墳時代

今調査では、乗附長坂遺跡で古墳時代初頭に位置付けられる方形周溝墓が2基検出された。方形周溝墓は同丘陵上の大平台遺跡でも検出されており、今後の調査で増加する可能性が高い。また、古墳の点在する一帯でもあり、その集落跡も含めて今後の調査に期待したい。

歴史時代

今調査では、乗附長坂遺跡で13軒、乗附中原遺跡で3軒の計16軒の住居跡が検出された。この軒数は決して多い数ではないが、乗附長坂遺跡での調査面積からすれば、かなりの密度と言えよう。これらの住居の時期は、その大方が7世紀中頃から8世紀前半にかかるものであり、中原遺跡1号住居跡の1軒のみが9世紀後半（古い時期の遺物を混入する）の住居跡である。乗附長坂遺跡3号住居跡出土の土器をみると、その出土量は多くないが、第116図7の暗文をもつ坏や、5・6とした皿状となる坏を出土させており、他の住居跡出土の土器とはその内容を違えている。また、7世紀中頃から8世紀前半にかかる住居跡が、今調査地の周辺に拡大して存在することは明らかであり、全体的にはかなりのまとまった軒数が存在したであろうことが推測できる。

一方、先の「第2章2．周辺遺跡の分布」でも触れたように、本遺跡地の東方に位置する高崎市片岡町は、『和名類聚抄』にみる古代の郡郷である「片岡郡」（加太乎加）に由来する地名とされている。この「片岡郡」の中には、「若田」、「多胡」、「高渠」、「佐没」、「長野」の郷名があり、現存する地名からすれば八幡丘陵上にある高崎市若田町付近が「若田」（和加太）であろうかとも推考される。

さらに、本遺跡地の東方には、乗附廃寺の存在も知られている。しかし、その全貌は明らかとなっていない。『高崎市史　第1巻』（昭和44年）の尾崎喜左雄によると、かなりの広さをもった平らな畑が段々になり、その中のもっとも広いところに大石が3個点在し、付近には古瓦片が散布しているという。瓦の文様から、奈良時代のものであり、下っても平安時代初期と推察されている。

以上の点からすれば、本遺跡地は律令期以降には「片岡郡」の一角をなす地として想定することは堅く、今後の調査等によってさらに詳しく解明されていくものと期待したい。

追録　向荒久1号墳

1　周囲の地形と立地

当古墳は高崎市乗附町字向荒久3061に所在する。古墳の占地場所は浸食谷に東面する尾根中腹のテラス状の狭い緩斜面で、古墳の面する浸食谷は観音山丘陵を切り開らき、東流する碓氷川に向かって開く。谷の開口部は河岸段丘上に形成された耕地、現況住宅地となっている。また古墳の所在する丘陵斜面は比較的急峻で植林杉の林と灌木に覆われるが、谷底部から比高80m程の丘陵頂部は緩い斜面が開け現況は桑園が広がっている。

2　調査の方法

発掘調査では盛土工事の及ぶ範囲内を記録保存することとし調査区を設定した。調査前の古墳の外観は南に低くなる緩傾斜地に残存する墳丘の高まりが認められ、この高まり部分には石室の部材らしい石群がみられた。盛土工事の範囲は地表の高まりに一部かかるが石群には達していなかったので、古墳周堀までをカバーできる範囲を見込んで、東西9m、南北4.3mの調査区を設定した。

3　外部施設

(1)　墳丘　調査区南辺に検出された弧状の葺石の根石列の内側には、表土層下の浅間B軽石主体層の下位に厚さ40cm程の粘質ローム主体層が認められた。この層が古墳の墳丘封土と思われる。封土の堆積状況は均質で、葺石の根石内側でのみ確認された。

(2)　葺石　調査区の南辺において、大小13個の石列が弧状に検出された。石は長径20～30cmの大きさで大方小口を外側に向けローム面上に配列されている。2～3カ所で2段目の葺石らしい石の重なりも観察されるが、その他の部分では覆土中に葺石の可能性のある転石をも見ることはできなかった。根石列の上位層は浅間B軽石主体層である。検出された石列は葺石としては極めて簡素であるが、後世の破壊を考慮しても築造時の状況と現状は大きく変わらないと思われる。古墳正面観の視点から、検出部分は古墳の北側で、しかも占地する斜面の上方側であり、古墳裏側の造作として理解するのが妥当ではないだろうか。

(3)　周堀　周堀を構成する浅い溝が葺石の根石の外側を取り巻く状態で検出された。幅2.5m、北側でブリッジ状に切れ、西側では不明瞭になる。ブリッジの東側溝が幅1.6m、ローム面からの深さ12cm。周堀の覆土中には浅間B層の介在はなく浅間B軽石の降下時期にはすでに埋没していたと判断できる。

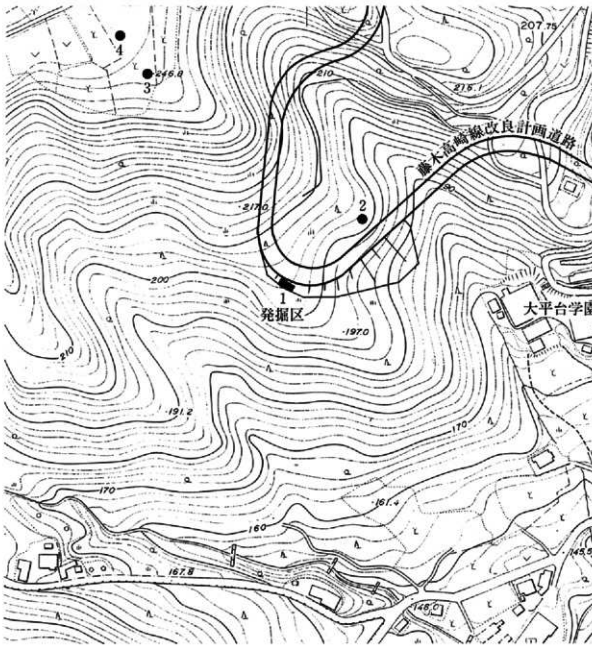
(4)　古墳の形状規模　発掘調査では古墳の北側の葺石の根石列と周堀の一部を検出できたが、部分的であるため古墳の全体像を推定するためには調査区の南の表土の高まり等の地形観察もあわせ考慮しなければならない。調査区内の根石と周堀の円弧の延長復元に基づき推定される規模は根石廻りで径6.6m、周堀外郭径で11mの円墳と推定できる。ただし、調査区域外の地形は推定封土範囲の北半部で東西7m、南北3m、高さ40cmの地表の高まりを見ることができるが、南半部は自然地形に従って下り傾斜となっている。これは築造後封土が流れたことによると考えられるが、今回の調査ではこれを確かめることはできなかった。

4　主体部

調査区域外南側の封土の高まり部分から南側傾斜部にかけて最大50cm程の自然石が数個不規則横たわっている状態が見られた。これらの石は石室部材と思われるが、今回の調査ではこれを確認できなかった。

5　近隣の古墳

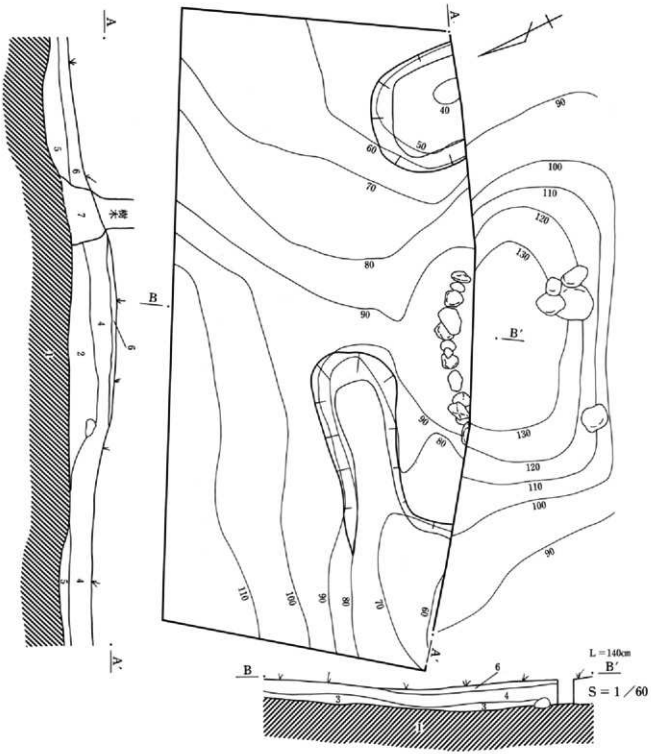
当古墳の近隣丘陵地には丘陵頂部や当古墳と同様尾根中腹、あるいは谷部傾斜地に小古墳が点在する。古



第136図 向荒久1号墳の立地　　縮尺 1：2,500

1 向荒久1号墳　2 総覧高崎市65号　3 総覧高崎市68号　4 総覧高崎市67号

墳群の現況は、既に消失して現状では確認できないものも少なくないが、昭和10年の調査状況をまとめた上毛古墳総覧によれば、当古墳の70m東の尾根中腹には横穴式石室円墳、総覧高崎市65号墳があり、当古墳を尾根に沿って40m程登った丘陵頂部には2基の円墳、総覧高崎市67号墳、高崎市68号墳がある。それぞれに現況マウンドと石室部材が確認できる。また谷底部の緩斜面には総覧高崎市47号～62号墳の16基の円墳が総覧に登載されている、古墳群中に横穴式石室の記載もみられるが現在古墳は残っていない。



1　暗褐色、粘質、ローム質、地山。
2　褐色、やや粘質、ローム質、封土。
3　灰褐色、やや粘質。
4　灰褐色、軽石主体。
5　黒色、粘質、周堀覆土。
6　灰黒色、腐食土。
7　樹木の根。

※標高は図中100cmが約204mに相当。
等高線間隔10cm。

第137図　向荒久１号墳平面図

発掘報告書抄録

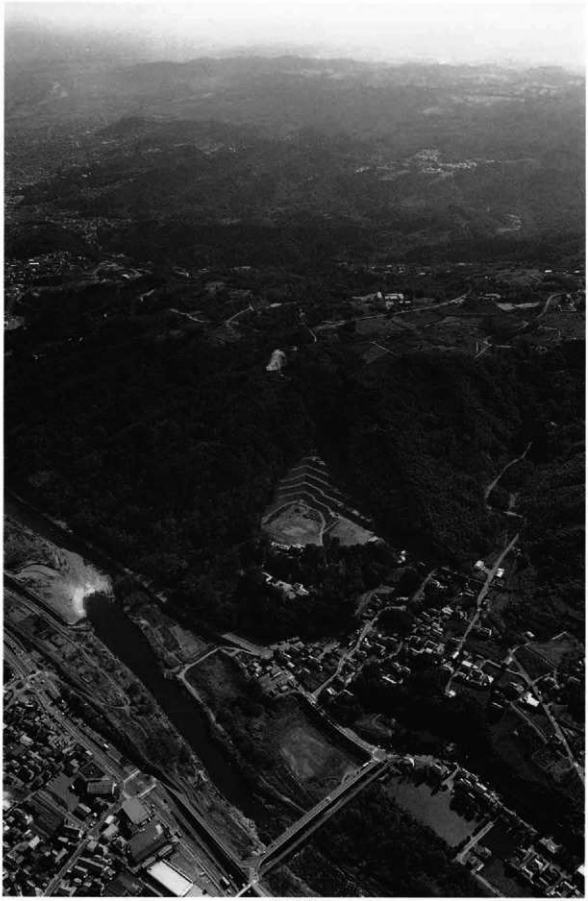
フリガナ	ノツケナガサカイセキ、ノツケナカハライセキ
書名	乗附長坂遺跡、乗附中原遺跡
副書名	主要地方道藤木高崎線単独特別道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第267集
編著者名	谷藤保彦
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377－8555　群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784－2
発行年月日	西暦2000年3月24日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
乗附長坂 (ノツケナガサカ)	高崎市乗附町字長坂 (タカサキシ ノツケマチアザ ナガサカ)	10202	10005-00527	361920	1385757	19990615-19991130	1,900	道路建設
乗附中原 (ノツケナカハラ)	高崎市乗附町字中原 (タカサキシ ノツケマチアザ ナカハラ)	10202	10005-00525	361918	1385750	19990615-19991130	2,555	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
乗附長坂	集落	縄文時代 古墳時代 奈良時代	竪穴住居跡 土坑 方形周溝墓	縄文土器・石器 弥生土器・石器 土師器甕・坏 須恵器甕・坏	縄文時代前期から中期の多量の出土遺物。古墳時代初頭の墳墓、奈良時代の集落。
乗附中原	集落	奈良・平安時代	竪穴住居跡	土師器甕・坏 須恵器坏	奈良・平安時代の集落

長坂附図版

乗写真



遺跡遠景

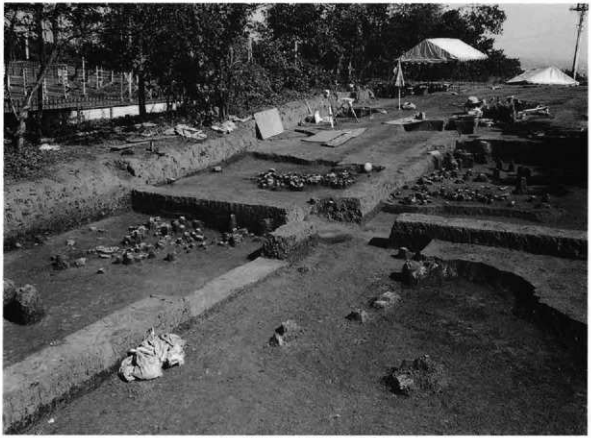
遺跡遠景

遺跡遠景

乗附長坂遺跡歴史時代全景

乗附長坂遺跡縄文時代全景

乗附長坂遺跡縄文時代全景



J 1・3・4号住居跡遺物出土状態全景

Ｊ１号住居跡全景

Ｊ１号住居跡遺物出土状態全景

Ｊ１号住居跡遺物出土状態

Ｊ２号住居跡全景

Ｊ２号住居跡遺物出土状態

Ｊ２号住居跡遺物出土状態

Ｊ３号住居跡全景

Ｊ３号住居跡遺物出土状態全景

J３号住居跡遺物出土状態

J３号住居跡遺物出土状態

J１･３･４号住居跡遺物出土状態全景

J４号住居跡遺物出土状態全景

J５号住居跡遺物出土状態全景

J６号住居跡全景

J６号住居跡遺物出土状態全景

J９号住居跡全景

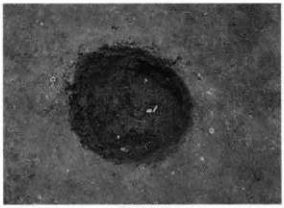
埋甕出土状態

埋甕出土状態

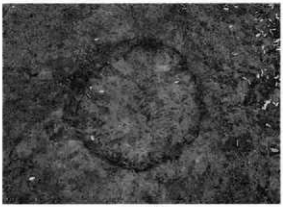
2号土坑

3号土坑

4号土坑



5号土坑



6号土坑

7号土坑

PL.8

8号土坑

9号土坑

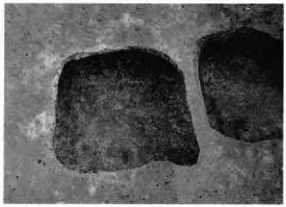
10号土坑

11号土坑

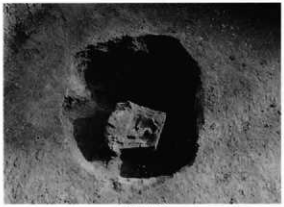
12·38号土坑

13号土坑

14号土坑



15号土坑



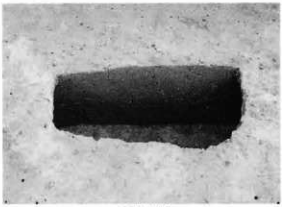
16号土坑

17号土坑

17号土坑

18号土坑

19号土坑



20号土坑

21号土坑

22号土坑

23号土坑

24号土坑

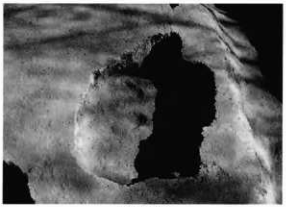
25号土坑

26号土坑

28号土坑

29号土坑

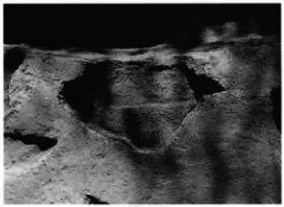
29号土坑



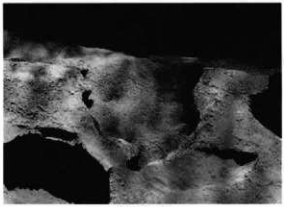
30号土坑

31号土坑

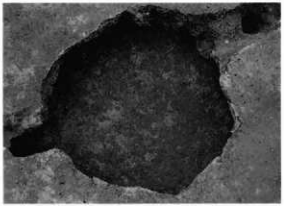
33号土坑



34号土坑



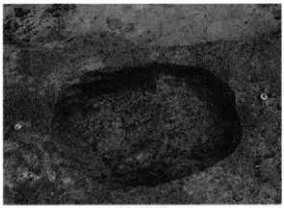
35号土坑



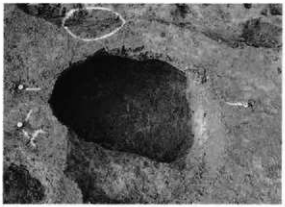
36号土坑

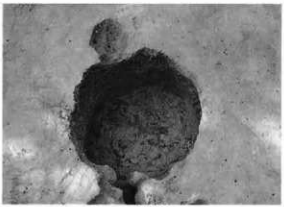
37号土坑

40号土坑



41号土坑


42号土坑


43号土坑

44号土坑

45号土坑

1号方形周溝墓全景

1号方形周溝墓土層断面

2号方形周溝墓全景

1号住居跡全景

1号住居跡遺物出土状態全景

1号住居跡カマド

1号住居跡カマド遺物出土状態

2号住居跡全景

2号住居跡遺物出土状態全景

2号住居跡カマド遺物出土状態

3号住居跡全景

3号住居跡遺物出土状態全景

3号住居跡カマド

4号住居跡全景

4号住居跡カマド

5号住居跡全景

5号住居跡遺物出土状態全景

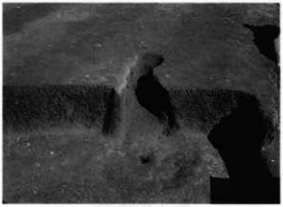
6号住居跡全景

6号住居跡遺物出土状態全景

6号住居跡カマド

7号住居跡全景

7号住居跡遺物出土状態全景



7号住居跡カマド

8号住居跡遺物出土状態全景

9号住居跡全景

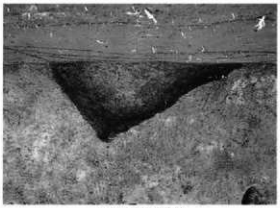
9号住居跡東カマド

9号住居跡北カマド

10号住居跡全景

10号住居跡全景

10号住居跡カマド


11号住居跡全景

12号住居跡全景

12号住居跡遺物出土状態全景

13号住居跡全景

13号住居跡遺物出土状態全景

13号住居跡カマド

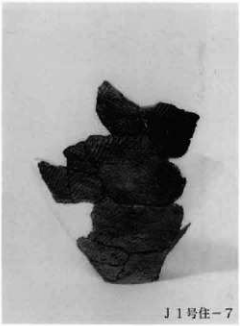
J１号住－３

J１号住－５

J１号住－８

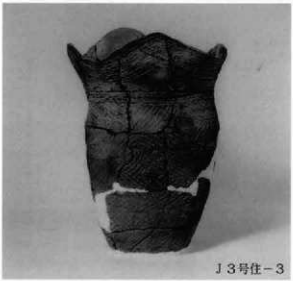
J１号住－４

J１号住－６


J１号住－７

J２号住－１

J３号住－１


J３号住－３

J３号住－２

PL.18

J3号住－147

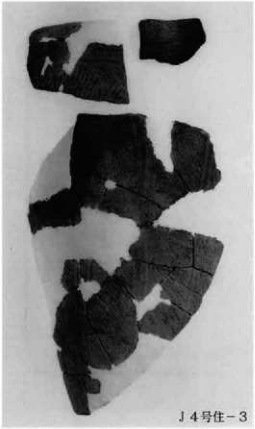
J3号住－6

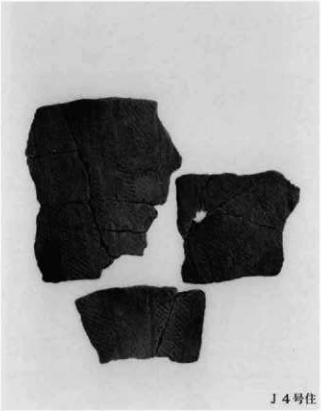
J3号住－9

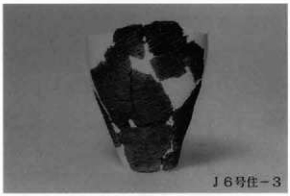
J3号住－4

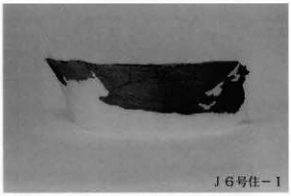
J4号住－2

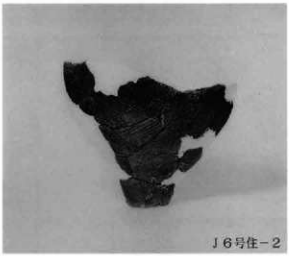
J4号住－1

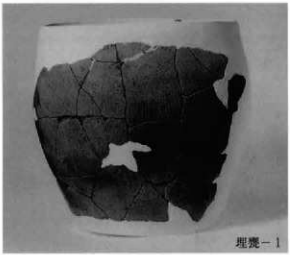

J4号住－3

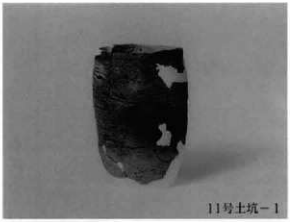

J4号住

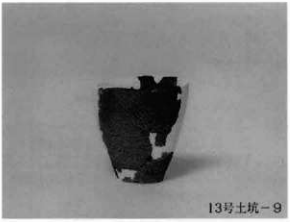

J6号住－3

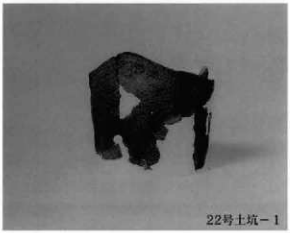

J6号住－1


J6号住－2

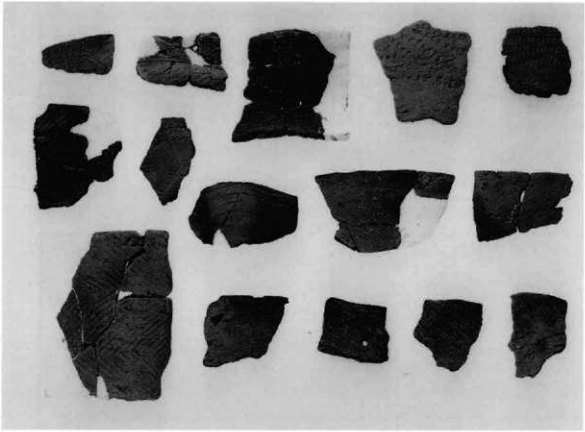

埋甕－1


11号土坑－1

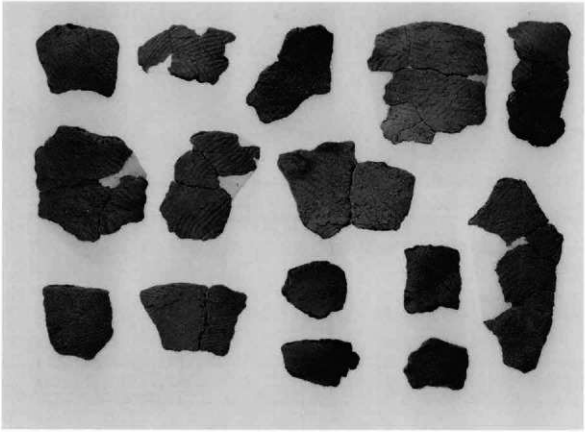

13号土坑－9


22号土坑－1

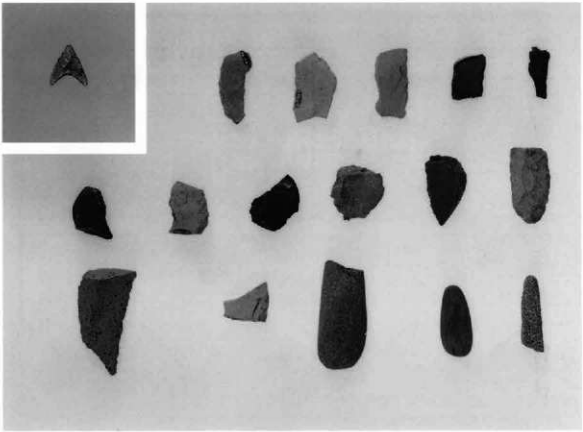
29号土坑－1



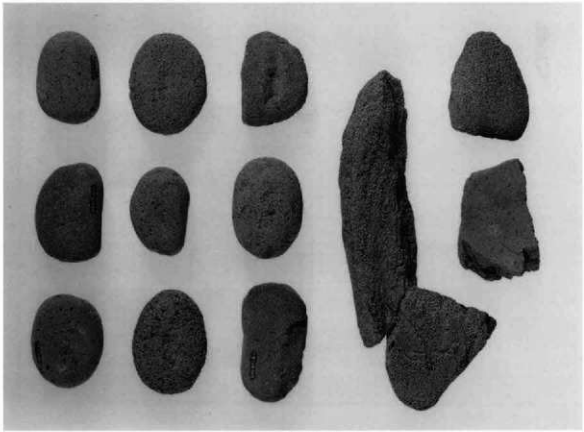
J 1 号住居跡出土土器



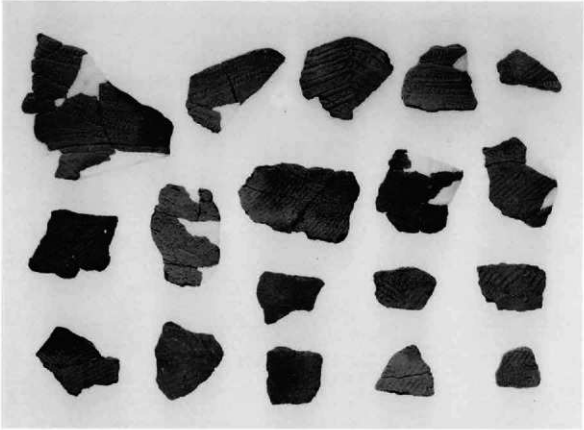
J 1 号住居跡出土土器



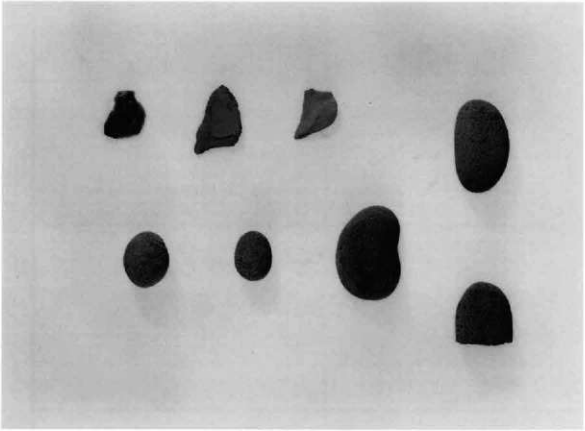
J 1号住居跡出土石器



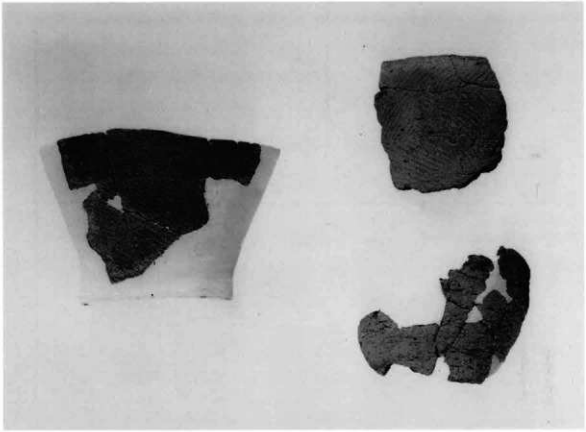
J 1号住居跡出土石器



J２号住居跡出土土器



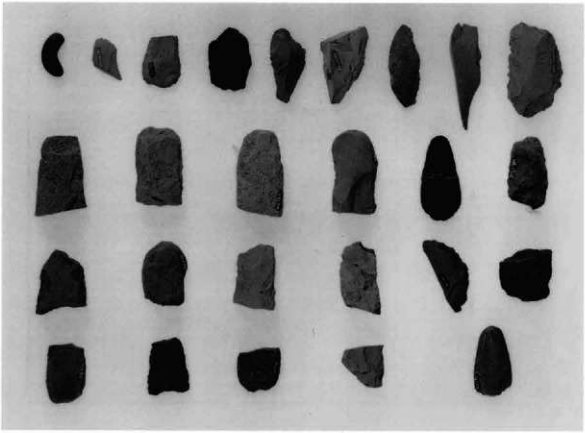
J２号住居跡出土石器



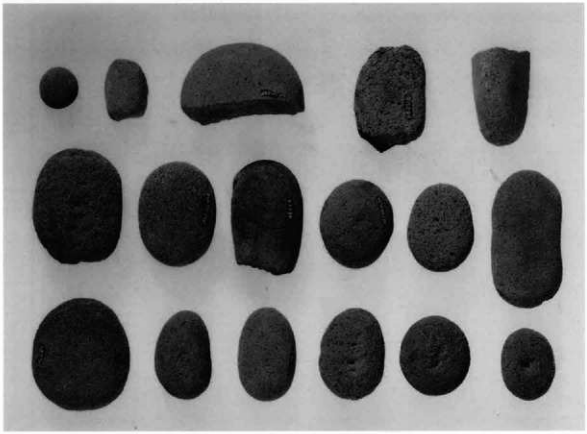
J３号住居跡出土土器

J３号住居跡出土土器

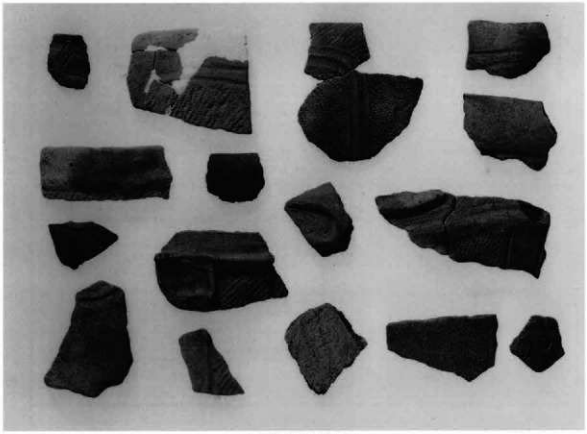
J３号住居跡出土土器



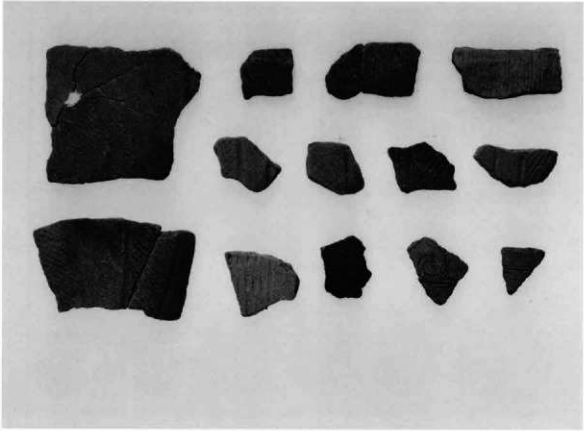
J３号住居跡出土石器



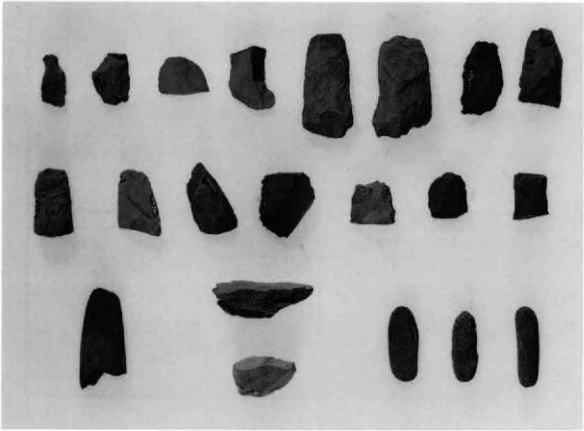
J３号住居跡出土石器



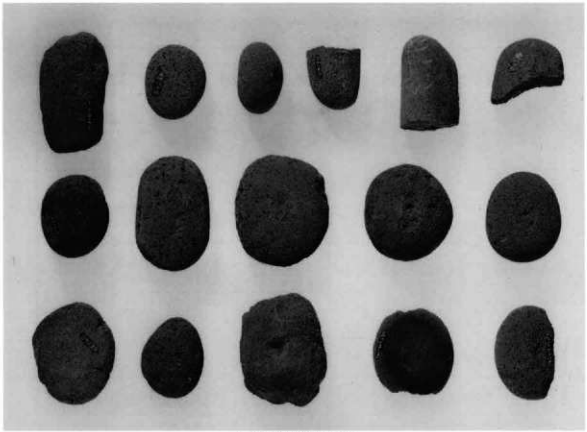
J４号住居跡出土土器



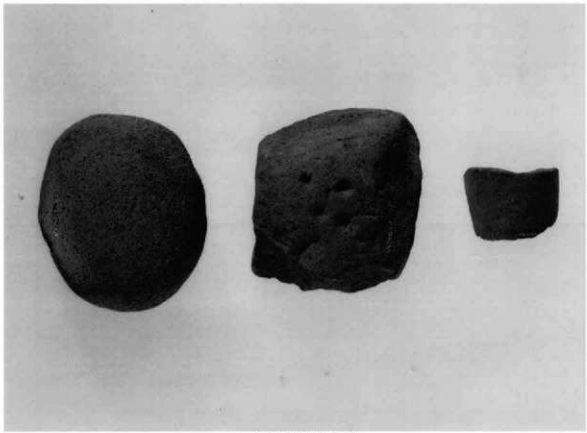
J 4号住居跡出土土器



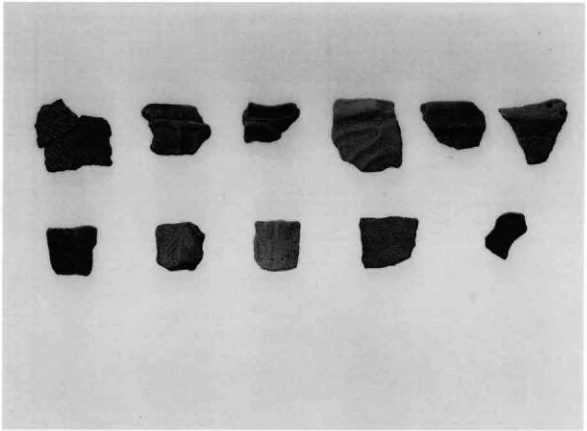
J 4号住居跡出土石器



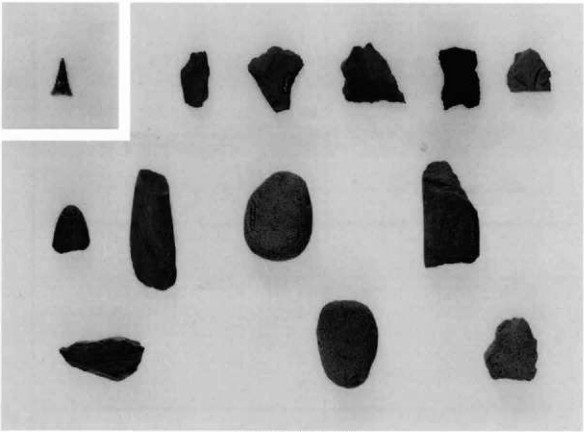
J４号住居跡出土石器



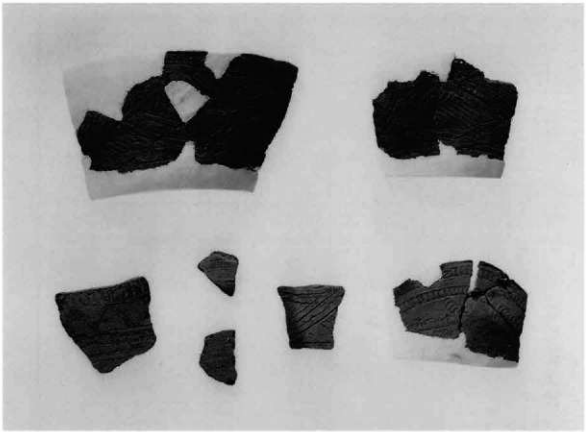
J４号住居跡出土石器



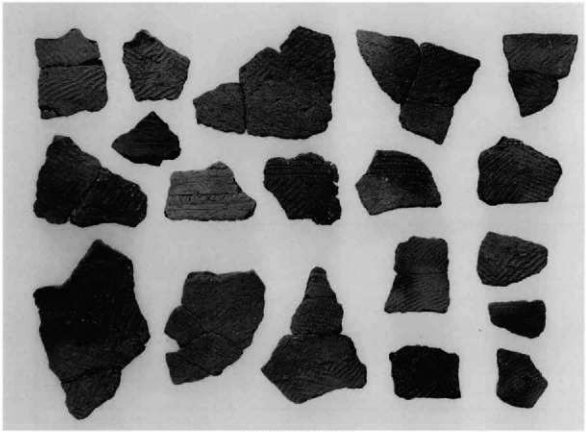
J５号住居跡出土土器



J５号住居跡出土石器

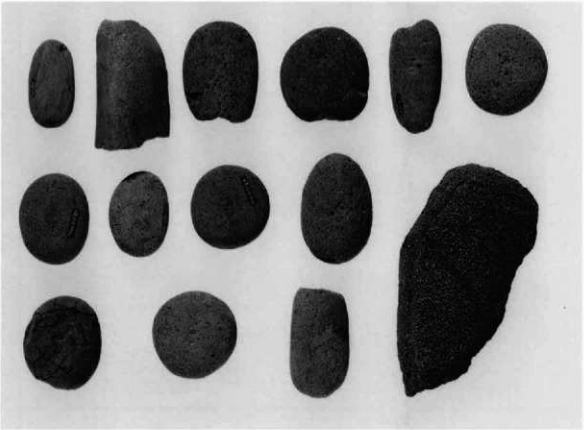


J６号住居跡出土土器



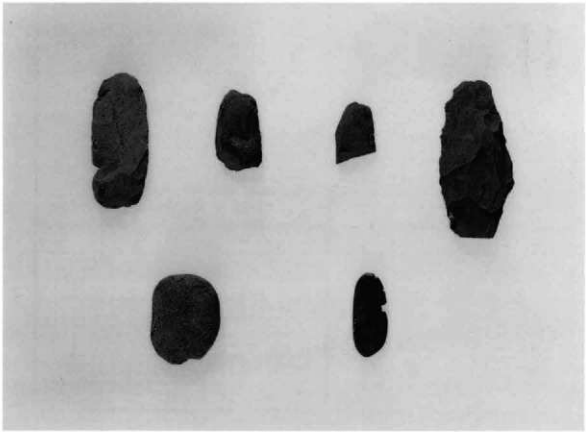
J６号住居跡出土土器

J６号住居跡出土石器



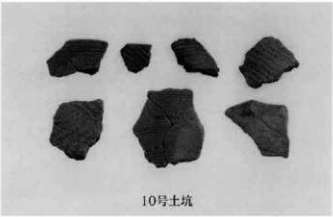
J６号住居跡出土石器

J９号住居跡出土土器

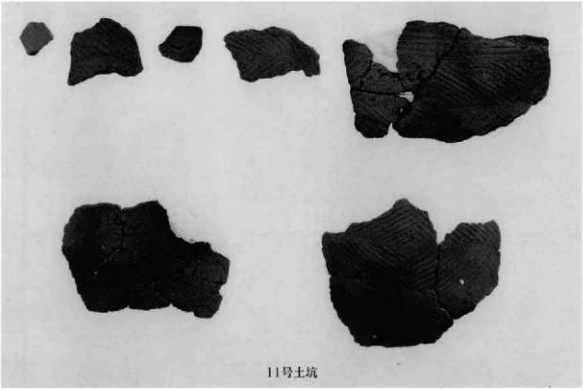


J９号住居跡出土石器

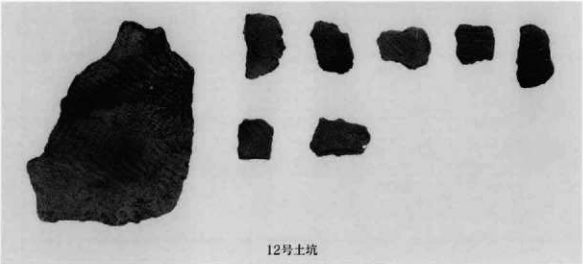
8号土坑



10号土坑

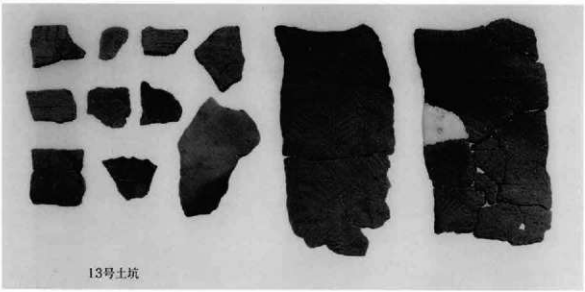


11号土坑



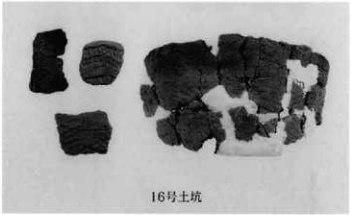
12号土坑

土坑出土土器



13号土坑

15号土坑



16号土坑

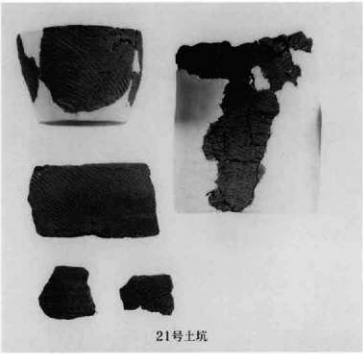
17号土坑

18号土坑

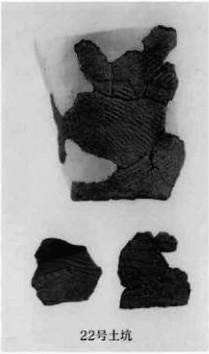
20号土坑

19号土坑

土坑出土土器



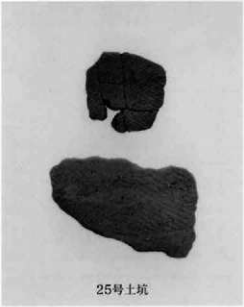
21号土坑



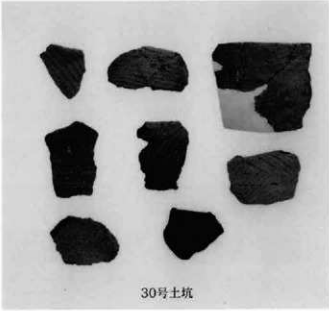
22号土坑

23号土坑

24号土坑



25号土坑



30号土坑

土坑出土土器

31号土坑

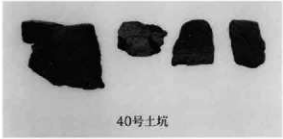
33号土坑

34号土坑

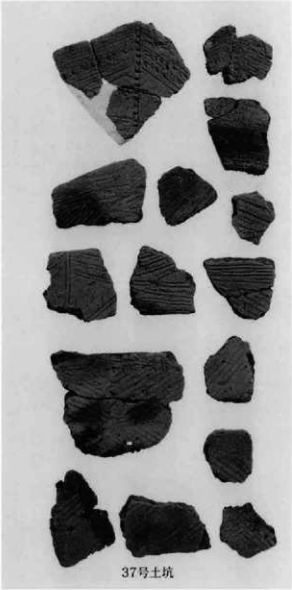
36号土坑

43号土坑

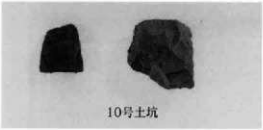
35号土坑


40号土坑

42号土坑

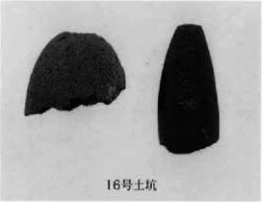

37号土坑

土坑出土土器



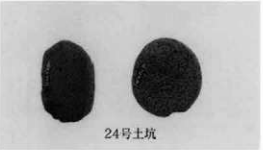
10号土坑

12号土坑

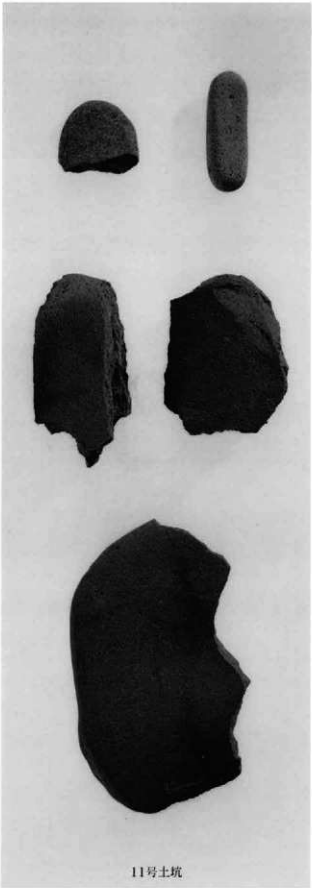


16号土坑

23号土坑

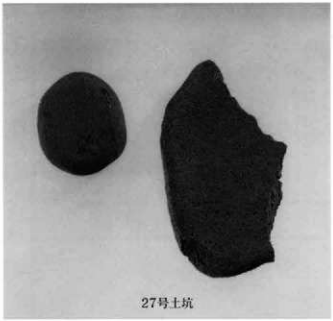


24号土坑



11号土坑

土坑出土石器



27号土坑

29号土坑

30号土坑

31号土坑

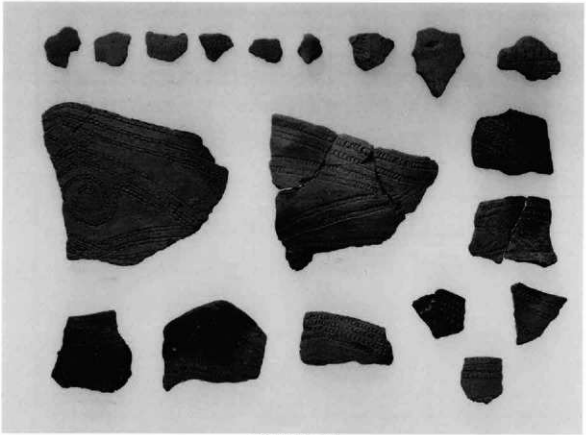
33号土坑

34号土坑

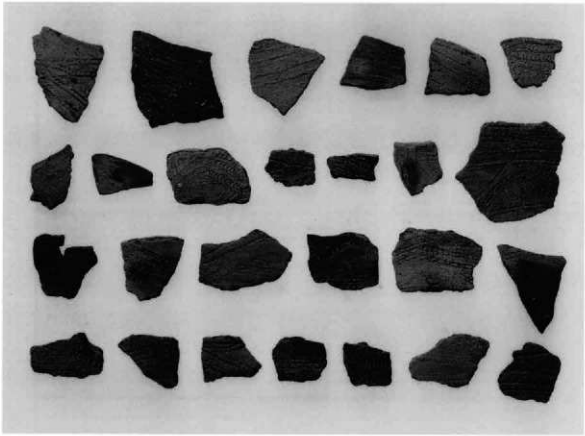
40号土坑

42号土坑

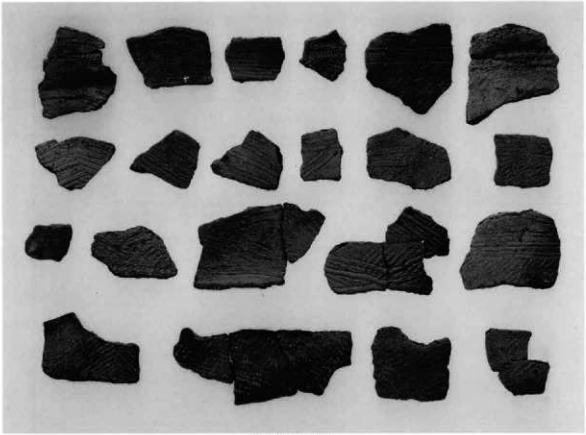
土坑出土石器



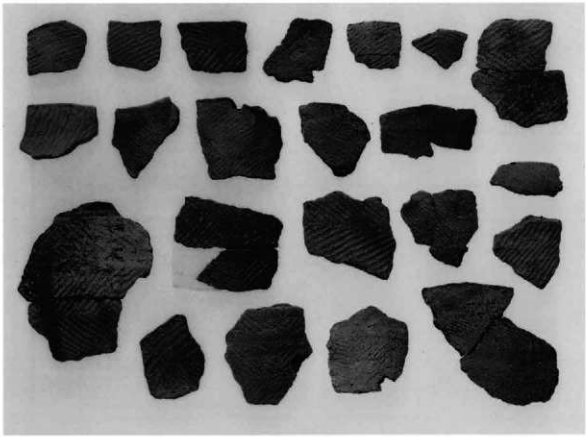
遺構外出土土器



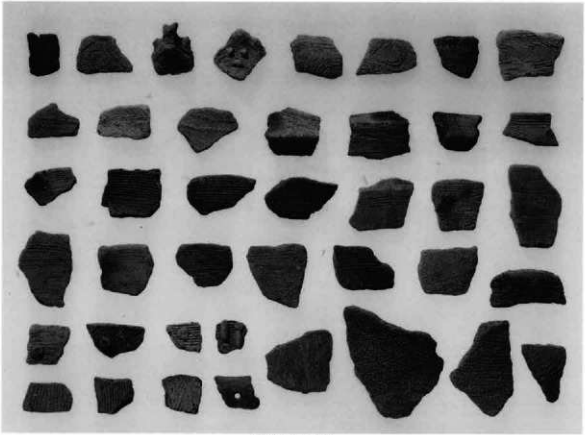
遺構外出土土器



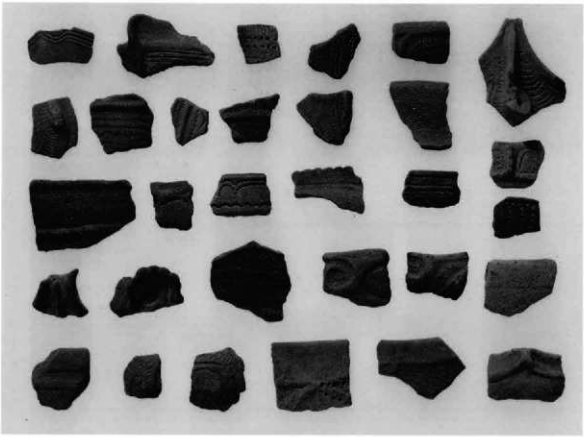
遺構外出土土器



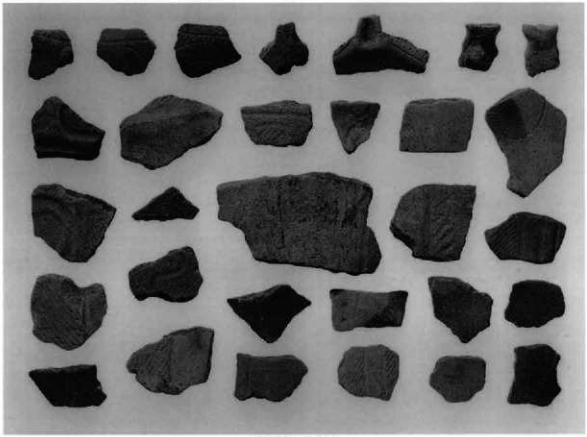
遺構外出土土器



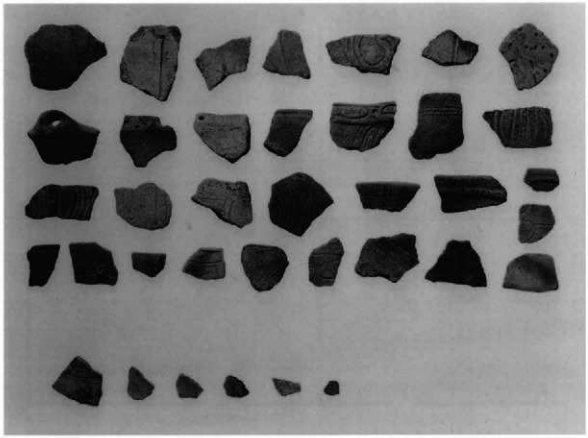
遺構外出土土器



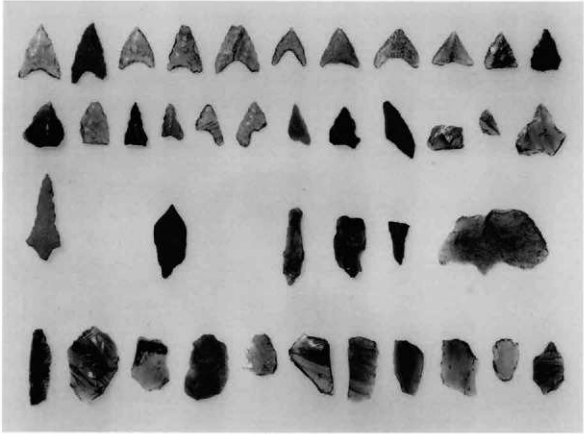
遺構外出土土器



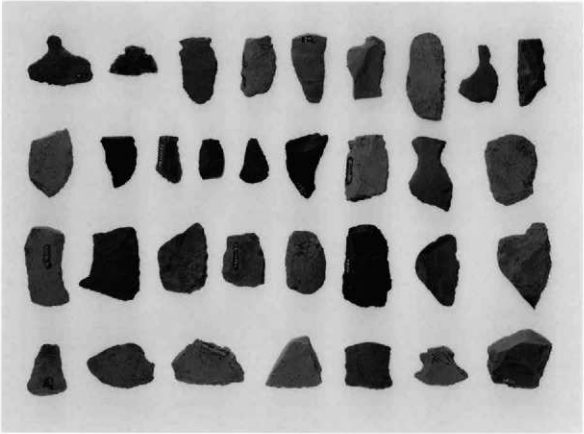
遺構外出土土器



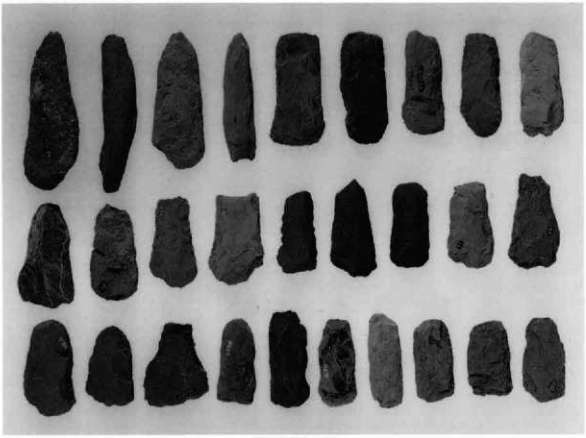
遺構外出土土器



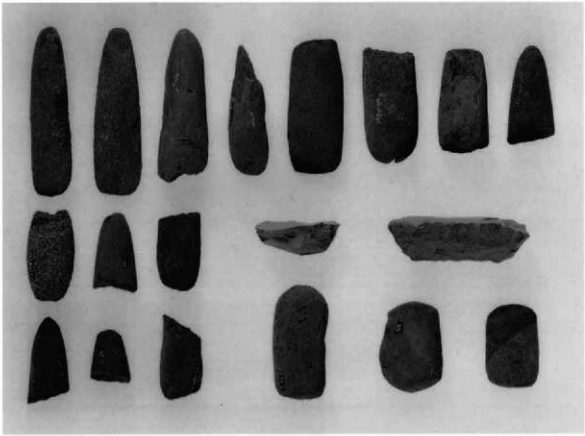
遺構外出土石器



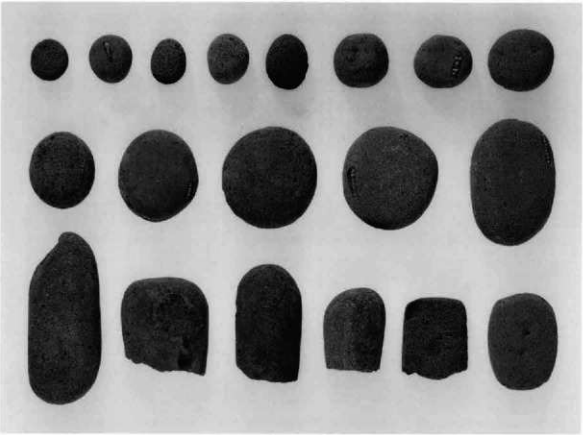
遺構外出土石器



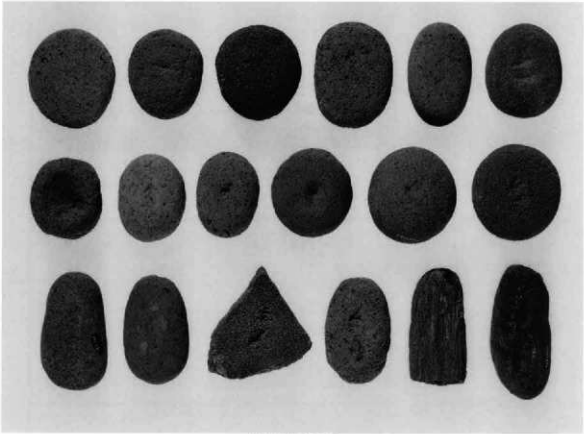
遺構外出土石器



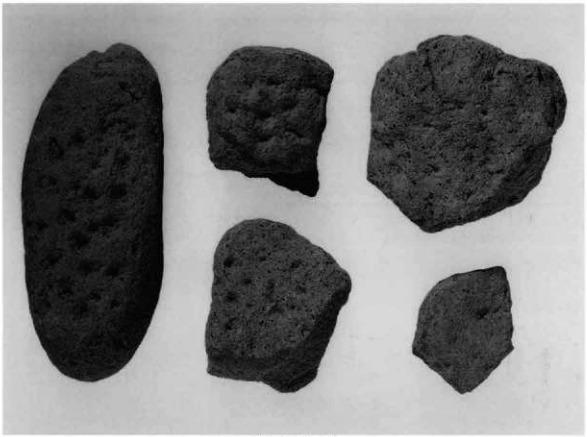
遺構外出土石器



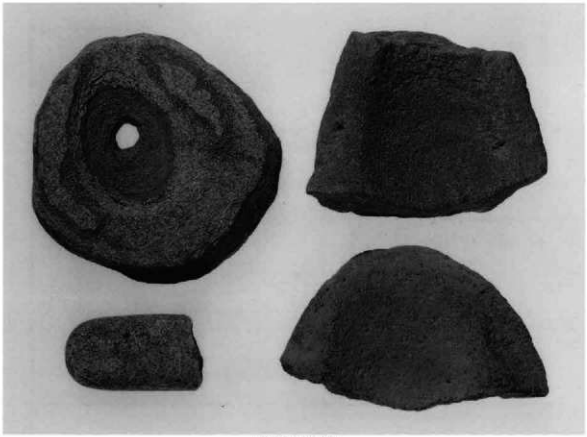
遺構外出土石器



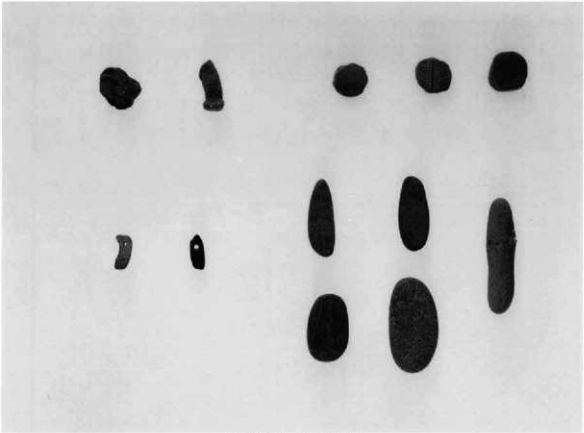
遺構外出土石器



遺構外出土石器



遺構外出土石器

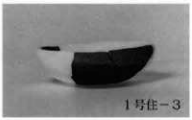


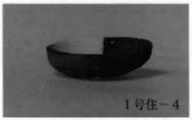
遺構外出土　土・石製品

1号方形周溝墓出土土器

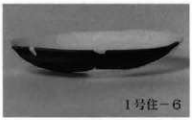
1号住－1

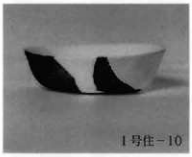
1号住－2

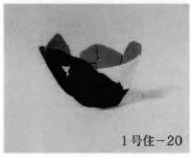

1号住－3


1号住－4

1号住－5


1号住－6


1号住－10


1号住－20

1号住－14

1号住－18

1号住－19

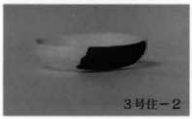
2号住－1

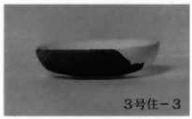
2号住－2

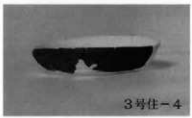
2号住－3

2号住－5

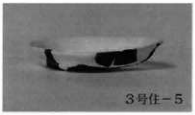
3号住－1


3号住－2


3号住－3


3号住－4

PL.48


3号住－5

3号住－6

3号住－7

3号住－8

6号住－2

7号住－1

7号住－2

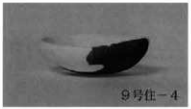
7号住－3

7号住－4

9号住－1

9号住－2

9号住－3

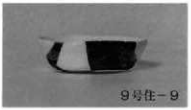

9号住－4

9号住－5

9号住－6

9号住－7

9号住－8


9号住－9

9号住－10

13号住－1

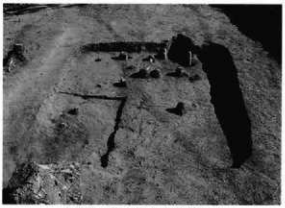
13号住－2

13号住－3

原版中図附真写乗

乗附中原遺跡全景

乗附中原遺跡現県道拡幅部



1号住居跡遺物出土状態全景

1号住居跡カマド

1号住居跡全景

2号住居跡全景

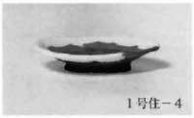
3号住居跡遺物出土状態全景

ピット群全景

1号住－1

1号住－2

1号住－3


1号住－4

1号住－9

2号住－1

3号住－1

3号住－2

3号住－3

向荒久１号墳　東より

向荒久１号墳　北より

向荒久１号墳　葺石根石

向荒久１号墳　葺石根石

財群馬県埋蔵文化財調査事業団
調 査 報 告 第 267 集

乗附長坂遺跡
乗附中原遺跡

主要地方道藤木高崎線単独別道路
改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成12年3月20日　印刷
平成12年3月25日　発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555　勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52－2511（代表）

発行／群馬県考古資料普及会
〒377-8555　勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52－2511（代表）

印刷／朝日印刷工業株式会社